THE CENTRAL REVIEW

中央公論

二月號

第三十年第二號　第三百四十號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

印度タゴール著、三浦關造先生譯

最新刊

森林哲學 生の實現

四六判上製 全一册 正價金八十錢 郵税金十錢

近頃丸善書店で何部取り寄せても、直ぐに羽のはえた様に飛んで往く英書がある。それは歐米の識者をして**『今後はタゴールの時代也』**とまで驚歎せしめ、爲めに最近世界的榮譽の月桂冠たる**ノベル賞金**を贈られたる印度人タゴールの書いた本書て、今三浦先生の明快流麗なる其全譯が出たのである。云ふ迄もなくタゴールは現代東洋第一の神秘的宗教的の文豪て、本書は實に東洋精神の美妙雄大なる詩的表現、**西洋文明の根本的批判、東洋思想勝利の熱烈なる大文字**である。オイケン、ベルグソンの未成品と異り、渾然たる眞理の奥底より出づる新しき生の叫びである。其思想に**天涯無窮の平和**があり、**人類の永遠な秘義**が解決されてある。文學、倫理、宗教に心ある人、新生に憧がるる人の熱讀を要する經典はこれである。

版元 東京市本郷區西片町十番地 **玄黄社** 電話下谷一三九番 振替東京七九九五番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◉大正名著文庫は讀書界の鍵なり

四六判特製美裝

紙數各冊四百頁內外

大正名

第一編

帝大教授法學博士和田垣謙三先生著

兎糞錄

▲挿畫 川村淸雄畫伯 齋藤松州畫伯 三色版二葉 木版三葉

三拾壹版

好評湧出天下無比批評一斑

◉東京朝日新聞曰く、（折に觸れ時に應じ興來り情湧く每にポツリポツリポロリポロリ飛び出したるもの即ち是れ）とこれ兎糞錄の名ある所以也所謂和田垣一流の洒落狂歌を亂發し得意の英語を應用し詩歌俳諧を自由に雜へて意表外の落を取る等人をして覺えず哄笑を禁ずる能はざらしむ◉萬朝報曰く、時に應じ折に觸れ二ッ三ッ宛飛び〳〵に讀んで見やうと思ひしに一氣呵成に讀んで了ひぬ著者が得意のウイットとユーモアの人を魅するものあればなり◉時事新報曰く、博士の氣焰錄吐噴錄にして例の縱橫自在なる滑稽と皮肉はいかなる人をも噴飯せしめ感服せしめずんば止まず其豐富なる學識と遠慮なく吐噴する處博士ならでは見られぬ所也◉二六曰く、洒脫滑稽顚を解くもあれば諷刺辛辣骨に徹するもあり就中英文棄見行一篇は純文學として妙技神に入る近來の一大快著◉實業之世界曰く、收むる所百卅餘悉く金玉の響きあらざるはなし博士例の輕妙洒脫飄逸奇拔奇想落天外の構想により噴出したるもの一讀再讀三讀尙且つ飽くを知らざらしむ兎に角如何のものにやと一度手にして先づ電車裡に之を讀む然るに我知らずフフンと噴き出して向側の乘容に怪しまる、こと屢也宅に持ち歸りて讀む又しても家人の怪しむ所となり遂に書中の說明を爲せば一時に笑聲起りてフフン所に非ずキヤッキヤッと叫ぶ評者は腮を解き腹を抱へ又泣かされたり實に滑稽の奧に涙を藏し諸記の底に人生の眞理を寓す世を啓發し人を誘導し無限の活教訓を含む今古獨步なり

◉大正出版界を震動せる破天荒の快著！

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局三六六六番 振替東京一七四四番

信用なき店舗及ひ卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

智識修養の大寶庫為めに開かる可し

著文庫

定價各冊 金壹圓廿錢

◎送料内地各冊金八錢

第二編

人の運

大町桂月先生著

◎人生の一大福音！

◎處世活動の指針！

貳拾貳版

◎時事新報曰、著者の觀察と文辭とによりて不動の眞理を作れるもの言々句々著者の人格て反映して痛快の見玲瓏の文辭皆味ふべく讀者にして反覆玩味せば其の人處世上に稗益を受くる甚大

開運座右の寶典

毎月一回必ず讀め

内容目次一斑

◎運は運世運轉する也◎獨斷の人を去つて果斷の人に來る◎頑固の人を去つて自信ある人に來る◎酒に溺るゝ人を去つて酒に狂はぬ人に來る◎女に迷ふ人を去つて女に優しき人に來る◎屈理窟云ふ人を去つて才智の動く人に來る◎己に寛大なる人を去つて人に寛大なる人に來る◎自暴を起す人を去つて憤を發する人に來る◎人を怨む人を去つて人を愛する人に來る◎肩先の勇氣の人を去つて腹底の勇氣の人に來る◎自ら悔る人を去つて分を守る人に來る◎慾の多き人を去つて慾の大なる人に來る◎傍觀する人を去つて奮鬪する人に來る◎顧慮する人を去つて熟慮する人に來る◎厭き易き人を去つて見切の善き人に來る◎小事に拘泥する人を去つて小事を忽にせざる人に來る◎人を恐るる人を去つて天を恐るゝ人に來る◎過去を思ふ人を去つて現在を思ふ人に來る◎現在を思ふ人を去つて未來を思ふ人に來る：：◎餘論には人相陶宮九星八卦御圖判斷相性等在來世俗の疑視せる所をも洩らさず警拔人の意表に出づ▲請ふ何人も一本を座右に備へて開運の眞理を自覺あれ

◎大日本茗溪會に於て普通教育振興の為大正三年二月本書を**全國青年**の讀み物として近來の**傑作**として審査選定せらる

（前付の三）

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局長三六六六番 振替東京一七四四番

●公明なる各新聞雜誌は擧つて

四六判 特製美裝

紙數各冊 四百頁内外

大正名

第五篇

法學博士 和田垣謙三先生著

吐雲録

▲挿畫 川村、徳永、齋藤三書伯數葉

重版亦重版

世評一斑

◉東京朝日新聞曰く、著者前に兎糞録を出して其の滑稽突梯に人の頤を解かしめしが本書は之が姉妹篇とも見做すべきもの就中英語の洒落に至りてはまことに著者の獨得と云ふべし…………

◉時事新報曰く、機智詼謔は其の人の天才にして作らんとして作り得ず吐かんとして吐き得ず隨時隨所に發現する者博士の滑稽突梯を以て江湖の第一人たるは已に世評あり況んや學識の豐富多方面を加ふるに於て眞に鬼に金棒の觀あり本書は兎糞録以後の藻を集めたる者諷刺警語例によつて秋霜よりも鋭く氣焰の五彩滿紙に燎爛何れにしても痛快淋漓三斗の溜飲一時に下るを覺ゆ…………

◉實業之世界曰く、博士一流の隨筆録なり古今東西の佳話逸話寓話感話格言金言等手當り次第に取り來つて自家獨得の俎上に調理するもの二百篇に近きの多數に及び才氣横溢して五彩の怪雲將に襲來せんとするの概あり然かも其の間博士一家の把持貫徹して諧謔戯談の裡に時代の弊風を剔抉して完膚なし……

◉日本新聞曰く、本書の如きは明治から大正へかけての隨筆ものとして後代に必ず興味を持たせるものに違ひない……

●大日本茗溪會に於て普通教育振興の爲め大正三年十月本書を全國中學上級生相當の讀物として審査選定せらる

發兌 東京日本橋區本石町一丁目 至誠堂 電話本局長三六六六番 振替東京一七四四番

本文庫内容の優秀傑出せるを證明す

若文庫

定價各冊 金壹圓廿錢

◉送料内地各冊金八錢

第六編 第七編

浪六先生著

元祿四十七士

上編 下編 全二冊

重版亦重版

そもく勅使下向より筆を起して殿中の刃傷内匠頭の最後赤穂の開城一黨の苦心慘憺吉良家討入に到るまでの顚末を盡して其間に最精確なる四十七士の列傳を加へ全編これ史實と趣味との結晶せるもの他に類を許さゞる浪六先生一流の痛快なる筆法は千古の忠肝義膽を描き出して餘蘊なし正に是れ義士傳中の白眉

世評一斑

◉東京日々新聞曰く浪六氏は年來熱心なる義士崇拜家なるが、其の才筆を揮つて考證に流れず、小説に墮せざる眞の義士傳を平易に叙述せるもの本書なり、浪六氏の男性的筆致は最も義人の面目を傳ふるに適す◉二六新聞曰く　何度讀んで見ても面白きは義士傳なり、蓋し彼等の行爲精神に千古人を動かすに足る義氣の存すればなり、この義士傳を行るに著者の筆を以てす、記述は勅使下向より始まりて大石良雄の東下りに及び一轉して義士列傳に入る、流石に老功な浪六氏の筆だけあつて手に入つたものなり、◉大阪持事新報曰く枯淡老熟力めて引締めて書いた所に精彩を放つた色合が見える……緊張した文字で讀者をして血湧き肉躍らしむるは有繫に著者である◉國民新聞曰く獨得の筆致讀者をして俯仰扼腕擧に卷を措く能はざらしむ◉時事新報曰く　未だ本書の如く義士の面目を描き得たるは無し讀み行く間に骨鳴り血迸るを覺ゆ武士道の精華を後代に傳ふるは本書……………………―

◉大日本茗溪會に於て普通教育振興の爲め大正三年十一月本書を全國青年讀物の上乘として審査選定せらる

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 **至誠堂** 電話本局長三六六六番 振替東京一七四四番

本文庫を讀まずんば書物を説く勿れ●

▲定價各冊 ▲金壹圓廿錢

著文庫

郵送料内地 各冊金八錢

第九編

竹越三叉先生著 ▲装幀 川村清雄畫伯

三叉文存

華麗の文荘重の辭高邁の見識社會萬般の方面に木鐸となる昔今の世何人も竹
拔の識常に俗界に先じて進み越三叉先生を推すべして
の編生の文の粹を拔けり教訓あり批評あり譬喩あり篇々皆得易からざるの大文字

重版亦重版

◎世評一斑

◉時事新報曰く、警拔の識見を清新俊逸なる筆致に載せて社會萬般の方面に指導激勵を怠らざる著者の如きは蓋し寡かるべし本書は著者が折に觸れ時に隨ひて物せる感想文を蒐む篇々皆得易からざるの大文字々々珠玉の如く觸るゝ所鏘然として聲あり花に濺ぐの涙は直に時を憂ふる志士の思ひと和し政境と時勢を指示する時代の好指針たるのみならず一誦人を三嘆せしむる文章の好模範

◉國民新聞曰く、長短いろ〳〵一百篇或は時事に觸れたる膠州灣占領問題を説くあり現代婦人問題論あり教育を論じ軍備を談じ哲學文學さては人物月旦花卉品評等に亙り多趣味多方面を極めて居る其の文章に於ては自づから一家を成せるもの或は典雅優婉或は清新洒脫朗誦又甚だ快なるものがある三叉文粹として傳ふべきが適當である

◉やまと新聞曰く、竹越三叉の文既に世定評あり輕舸の江を下るが如く水勢の趨くが儘に或は右し或は左し兩岸の風光〻常に興を添ふ筆路暢達にして紆餘多變なる方今三叉子に及ぶものなし

◉太陽曰く、三叉氏の文清勁明徹鮮麗の趣に富むは猶ほ清潭に花影の映じ高秋に明月の懸るが如きものあり殊に最も俗惡なるべき筈の政治問題社會問題を提へて之を醇化し美化するの點に至ては正に著者の獨壇場也本書の如きは此意義に於て著者の從來の著書中にありても優に一頭地を拔くものと云ふべし著者は夫れ我現代の蘇東坡なるか

●軍國の志士必ず一讀せざる可らず平和を愛する者亦之を繙かざるべけんや

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局長三六六番 振替東京一七一四〃番

●經國の大業不朽の盛事と

大正名

四六判特製美装

第拾編

活修養

文學博士 前田慧雲先生著

▲装幀 川村清雄畫伯

重版亦重版

世評一斑

◉萬朝報曰く、深奥なる佛教の知識と該博なる先賢の事蹟を引きて吾人の日常生活に必要なる通俗道德を説けり……………………

◉讀賣新聞曰く、一章又一篇靜に讀み終つては卷頭なる博士の肖像に對するに其の高遠なる思想その淸純なる感情の一層鮮明に讀後腦裡に浸透して卓上燈下心身愈よ澄徹じ博士が高潔なる人格の前に默然として端座するが如し これ記者が昨夜の實感なり 一度之を繙くもの亦記者と相語つてこの新著の眞價を讀嘆せずんばあらざるべし深邃なる佛教思想を基本として社會百般の事象に穩健なる批判を加へ座談平語の中我が國民性の歸趣を明かにす……………………

◉時事新報曰く、世人何人と雖も或る人世觀或る處世觀を有せざる人とては無かるべし 然れども其れを傳へて以て他人の修養に資するは超人の所業にあらざれば甲斐なし 著者は單に學識の上に於ても一代の師表と仰がるべき人にして其の自ら修養を積みたる佛陀の思想は物に觸れ折に觸れて穩健質實なる言葉の裡に發露し五十五頂一の閑文字なし世の父兄たるもの子弟の爲めに一本を薦めば其の想像外のもの有るべし……

◉國民新聞曰く、宗教界の耆宿たる著者の學德一代に高きことは言ふ必要がない 本書に載する五十五篇皆新時代の國民が修養工夫の道を講説したるもの而して古來佛教が我國民性に浸潤することの深く廣きものなることを思ふ時著者の如き人を得て初めて完全なる教化指導の人を見出したと言つて好いのである 後進子弟は之に依りて赴くべき方面に迷ふことなきを得る……

◉やまと新聞曰く、新時代には新解釋を要す博士が玆に着眼して新教訓を新國民に提示せるは多とすべし敢て江湖に薦む……………………

(前付の十)

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局長三六 振替東京一七

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新春劈頭の偉觀

最新刊忽再版

大町桂月先生著

桂月文選

▲著者肖像寫眞版挿入

◉袖珍特製天金箱入

◉紙數壹千頁全一冊

定價壹圓卅錢

郵稅 内地金八錢 清鮮各廿錢

天下苟くも文字を知れる人にして知らざるは無き文豪大町桂月先生、時流に高く一頭地を拔いて文壇に濶歩すること既に廿餘年、文を作す數千萬章、著書等身も啻ならず。今や先生自ら其の中より最も會心の傑作一百四十餘篇を拔きて、紀行・抒情・議論・書簡・敍事・雜の六門に分つ。先生が半生の心血この一書に凝れり。絢爛花の如きあり。凛烈秋霜の如きあり。豪放に洒脫に雍容に悲壯に、剛柔を兼ね諸體を包含し、筆力縱横氣韻躍動、實に一代の壯觀を極む。大正の文壇本書出で丶始めて光彩を生ず。天下好文の士、請ふ速に一本を座右に具へ給へ。

一大奇書

浪六先生著

我五十年

▲口繪 著者自書コロタイプ珍品十數葉

◉四六判特製箱入

◉紙數四百五十頁全

定價壹圓五十錢

郵稅 内地金八錢 清鮮各廿錢

浪六の自叙傳

事實は小說よりも奇なりと云ふ語を始めて先生の「我五十年」に證明せらる生れて今日に至るまで人生の波瀾曲折を極めし先生の一代記を最も大膽に最も露骨に告白せるもの机上の筆を以て書きしに非ず現在の身を以て著せる五十年間の生證文にして所謂文士なる者の自叙傳に非ず其一例を擧ぐれば滿天下の讀書界を風靡せし五人男の如きも各その本名と實際の事實とを現はせり全篇苟も一字一句の架空文字なく多年浪六先生の小說を讀みしもの必ず本書を讀まざるべからず

發兌 東京日本橋區本石町三丁目 至誠堂 電話本局長三六六六番 振替東京一七四四番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告は掲載謝絶す

…告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の九十以上を[illegible]約者に分配す

一 當會社の保險料拂込方法は保險證劵訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

古河家經營

博愛生命

社長 男爵 中島久萬吉
專務取締役 小原元美
專務取締役 鈴木市之助
常任監査役 安達仁造

本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
電話長本局一八五六、五一五〇、二三八七番
振替貯金口座東京一七一七番

支店 大阪市東區本町一ノ一二三(電話長本局二三二一番

一 當會社は低利なる金融機關の設あり

一 當會社は被保險者の年齡範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり

…用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



中央公論第三十年二月號目次

▼公論

▼說苑




12
1
2
3
4
5
7
8
9
10
11
營業品概目
○懷中時計　各種
○掛置時計　各種
○ダイヤモンド　並ニ各寶石
○指環手釦　並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話長新橋　一一〇三　一一〇四
振替口座　七八〇七

GIA COMETTI



Materi.ity

中央公論



二月號
第三十年第二號
第三百四十號

歐洲戰局と我日本

（一）戰局の現狀

歐洲大戰爭の局面は已に半歲の久きに及ふも、其前途の預見すべからざるや今日は猶ほ三箇月以前の如く、佛國大統領ポアンカーレ氏は新年の詞として本年中を以て正義と名譽を以て戰局を收め得べきを敢て預言すと云はれしも、是寧ろ戰局の樞機を握れる最有力なる一人の常識ある希望として重きを置くべく、未た以て神詑の言として之を聽くべからず、他の一方には英の陸相キチネル將軍は初より三箇年を期して戰爭に從事するの必要を說けりしが、長期戰爭の止むべからさるは今も尙ほ半歲以前の如しと

謂はざるべからず、現に英國にては百五十數万の新募兵を訓練しつゝありて、彼等が愈々精兵となりて大陸の戰線に立つまでには尙ほ幾多の日子を要すべく、且つ獨逸の四十二珊砲に類似せる最重砲の今製作中にありとの公表ありし爲に大に望を囑せられ居るが如きも、斯る重砲の製作竣工するは前後約十二箇月を要すと云ふを以て察すれば、精兵の增援、最重砲の製造等成就して今の行悩める戰局に一大進轉を與ふるに至るは早くも來る秋期を待つの外あるべからず、露國側に在りても兵員餘あれども精兵の不足を感し又た重砲の數、効力に於て獨逸に遜色あるものゝ如く、其缺點短所を補ひ得て大に攻勢を執るに至らんことは同しく來秋を期せざるべからずとの說ありと云ふに於て吾人は愈々前途遼遠の感を催ほさざる能はず。

元來今次の戰爭は英佛露の三强を以て獨墺の二强に對することとなれは、之を人口の多寡、富力の强弱より見れは二强は勿論三强の敵に非ず、然るに尙且つ開戰後半歲の今日二强が五分以上の利を占めて三强と相對峙するを得る所以のものは果して兵の强きが爲なりやと云ふに、佛兵の精銳素より優に獨兵に匹敵すべく、英兵の勇敢なる露兵の頑强なる決して獨人と相對し遜色あらず、但たし三國が開戰當初より着々不利の脚地に立たざるを得ざりし所以のものは首として獨墺の爲めに戰機の先を制せられしに由れり、獨逸は流石に『血と鐵』を以て築き立てられし國家だけありて、多年一日も開戰準備を怠らず、兵力を以て起りし國は兵力を以て守らざるべからず、否な之を守らんとせは之を擴大にせざるべからずと

の獨墺伊の三國同盟に加ふるに瑞西、白耳義、和蘭、丁抹、那威、瑞典を以てして歐洲中央大同盟を形成せんとは獨逸多年の宿望たりしなり、此大目的を遂せんが爲めには英佛露を敵として戰ひ雌雄を一擧に決せんと欲するや已でに久しく、殊に一九一一年摩洛哥問題に關し英佛の爲め其計劃の敗れし以來軍備に、財政に、來るべき決戰の準備秋毫の遺算なきを期せしは、近來の奇書として頻りに歐米に珍重せらるゝベルンハーヂ將軍著『獨逸及次の戰爭』を一讀せば何人も會得するを得べき所なり、然るに此書は一九一一年に初版を出だせしを以て、其教訓に從ひ英佛は鋭意直ちに來るべき大戰爭の準備に取懸るべかりし筈なるに、出版當時該書は一の興味ある奇書として迎へられしのみにして識者間に深く信を置かれざりしか如きは豈奇怪ならずや、想ふに其著者が獨逸の陸軍に籍を有する堂々たる將軍にして、其論する所あまりに露骨にして解放的なれば世人は却て其言論を全然眞面目に受け取るを躊躇せしに非ざるなきか、例せば將軍は最も無遠慮に三國同盟の一國たる伊太利が來らんとする大戰爭に際し遂に同盟を脱退して中立を守るべく、伊國は其地形環海にして且近時トリポリを領有して更に防禦方面を加へたるが故に到底英佛聯合艦隊を敵として戰ふ能ふべからざるべきを云ひ、結局獨は唯た墺國を味方とするのみにして英佛露と戰ふの不利に立つべきことを豫言して憚らさりしなり、其外獨逸の内線作戰のこと又は白耳義の中立を蹈破して北佛に殺到すべきことの如き直接又は間接に讀者の會得する所たりしなり、然るに英佛露は遂に開戰準備に遺算少なからずして、東西方面とゝに當初着々獨墺に機先を制せられ預期せられざる白耳義の頑強なる抵抗に由り數週間の猶豫を得て僅かに北佛の防線を張るを得たり、何れ

より之を觀るも一大油斷たるを免れず、蓋しベルンハーチ將軍か其眞面目にして露骨なる告白により英佛露の識者をして方向に迷はしめしは比公慣用の外交方略に學ぶ處ありしに由るか。

斯くて聯合軍は着々獨墺に機先を制せられ、東方に於ては西部波蘭は疾くに敵軍の占據に委せられ、西方に於ては佛、英軍は初め獨軍の殺到を防止する能はず退却に次ぐに退却を以てし、巴里危くして佛國政府はボルドウに移され、聯合軍は一時その最後の戰陣を巴里、アイヌ河、ウエルヅンの線に張るの止むを得ざるに至り、東北一圓の地擧げて敵騎の蹂躙に委せられしも、九月中旬に至り形勢劇かに一變して聯合軍漸く攻勢を執るに至り次第に其失へる地歩を恢復し、今や東北二三州の外佛國内亦た獨兵の片影を止めざるに至り白耳義に於ても西フランドルの一部を回復し得たり、東方の戰線に於ても亦た開戰以來一張一弛形勢變化を極めしも、一千哩に亘る戰線に於て露軍は東部普魯西に侵入し、ワルソウの西面に堅く獨軍を防止し、而してガリシヤ一圓は略ぼ其有に歸せり、單に現勢に付て云へば聯合軍は未だ東普魯西の東南一角及びアルサースの一方の外は寸地をも獨境内に踏入ること能はず却て獨軍をして白耳義を初め波蘭に北佛に尙ほ防陣を張ることを得しむるもの、六分の勝は敵にありて我聯合軍は尙ほ敗者の位地に立つに似たり、然れとも畢竟是れ當初に機先を敵に制せられ非常の不利に陷りしに由る、其不利を挽回して今日の比較的有利の形勢に達するを得たるは聯合軍側に取りては多大の成功ならずとせず、今や敵を其國境に壓迫し攻勢を逞ふするを得ざらしめ、白耳義は獨逸の手にあるも露はガリシヤ

要するに戰期の長短は別問題とするも概して聯合軍の勝利に歸せんとするは疑ふべからず、試みに土國方面を觀れば高加索の土軍は一大敗績の爲め、露をして漸く後顧の憂を免れしめ、ゴエーベン・ブレスラウ二艦の擊破は黑海の制海權を露の專有に歸せしめ、土軍の埃及襲擊の如き其聲のみ徒らに大にして未だ寸効の見るべきものなく、凡回敎的勃興の豫期も終に全然空想に歸せりと斷するを妨げず、却て土京に於ける反獨逸の運動は漸く勢力を得て、事每に獨人の命を聽かんとする現政府の顚覆を見んも亦た知るべからざるに似たり、此等の形勢は中原の戰局に直接の影響なしと雖も、一方露英をして邊境に對する防備を寬ふして中原に勢力を集注するの便を得しむるものあるべく、又た希臘、勃牙利、羅馬尼等巴爾幹諸邦の向背を決定せしむるに多大の効果あるべきこと自ら明かなり、殊に土耳古方面のこの形勢は遂に伊太利をして斷然聯合軍に味方すべく最後の決心をなさしむるに與りて力あるべし、斯くて伊國を初め巴爾幹諸國が終に干戈を執り聯合軍に應戰することとならは獨墺の勢力を中原より殺くの功尠少ならざるべきは睹易きの道理なり、此形勢に顧りみ、且つ聯合軍側に於ける精兵增加の豫期を打算すれば、獨墺側の殆んと兵員を募集し盡せるの事實に對照して勝敗の數自ら明なるものあるに似たり、更に尙現在戰局の狀態より前途を察すれば、最終の勝利は根氣較への結果に在りと謂ふべく、英佛露は其地形上及び其國情より察し獨墺よりも糧食兵器の供給、兵員の補充等に關し概して耐久力に富めりとせは、最後の勝利は必ずや英佛露の有たるべきは論理の動かすべからざるものありと謂ふべし。

〔二〕最後勝利の程度如何

聯合軍が最後に勝利を得べきは疑なしとするも其勝利の程度如何は最も關心の問題たらずんばあらず、即ち五分引分けと殆んど擇ぶ處なき六分の勝利たるべきか、七分八分の勝利たるべきか、又は九分十分の全勝を贏ち得て開戰の目的を十分に達するを得べきかは、是れ唯だ當局者たる歐洲列強に取りて重大問題たるのみならず、我日本に取りても亦た實に重大問題たらずとせず、何となれは聯合軍の最終の勝利如何によりては我邦の受くべき影響の最も憂心すべきものあらんとすればなり、例せは万一にも僅々六分の勝利を以て局を結はざるを得ざるが如き場合に到着せんか、是れ戰後の平和に非ずして一時の休戰たるに外ならずして、英佛露は必ずや戰後直ちに獨墺の再擧に備ふるの準備に忙殺されざるを得ざるべく、我日本は果して首尾よく膠州灣の處分を了し得べきや否や最も疑なきこと能はず、若しも我邦にして青島租借地、山東鐵道、濟南及順徳豫定線等を無條件にて名實共に支那に返還するに於ては獨逸も異議を挾むべき餘地なかるべきも、彼は直に北京政府に對し租借復活を提議して或は成功すべく、我日本は終に何等の實際上の利權をも保有せず勞して寸功なく、徒らに獨の怨みを買ひ支那人の嘲笑を博するに終らんのみ、若夫れ獨逸の覇權を極東より一掃し、更に一種の極東モンロウ主義を樹立せんとするか如き、唯だ獨逸が十分の敗戰を自認して降を聯合諸國の軍門に請ふの場合に於ける外、容易に成功を望む可らず、聯合軍が僅かに六分の勝利を以て局を結ぶ場合の如き、若しも何かの方法に由り僅かに

膠州灣征討に對する我戰費の賠償を贏ち得れば則ち多大の僥倖となさゞるべからず、蓋し右云ふ如き場合に於て開戰の目的を遂し得ざるは獨り我邦のみならず、英國は遂に獨の軍國主義を破壞するに至らず、却て益々之を挑發激增せしむるの結果を見るべく、佛蘭西は半世紀の間夢寐にも忘れざるアルサース・ロレーンの恢復を現實にするを得ず、白耳義竟に其領土の一部を削らるゝの不幸を見るべく、露國は或はガリシヤの一部を墺より割取するを得べきも却て其波蘭の一部を獨に奪はるゝの危險なきに非ず、直接の關係ある諸國已に斯の如しとせば、我日本のみ獨り靑島征討の目的を達すべからざるは自ら明なり、是れ我々日本人も亦た歐洲戰局の前途に對し聯合諸國と利害堅く纒綿して離るべからず國家の興廢存亡を共にせざるを得ざるに至れる所以なり。

世間一派の論者あり吾人に告げて曰く聯合諸國間に於ては長期戰爭の說行なはると雖も、此度の戰爭を繼續することに就て何國が何物を贏ち得べきかは一大疑問なり、試みに之を過去半歲の經過に稽ふるに交戰者各々其心事齟齬し其志を得ざるの感を懷かざるはなきなり、英國人中には獨逸の軍國主義を打破するまで戰を已むべからずと爲すもの多しと云ふも、是れ交戰者の敵愾心より迸出するの言語として尤も千萬なるも此一國民の軍國主義を排除すと云ふが如きは到底行はるべからず、英國人に長期戰爭論多きは畢竟其本土人民が戰爭の慘禍の外に立得るか爲めなり、然るに今やドウアー海峽、東北沿岸皆な危險區域となり英國人亦た恐怖の念なき能はずと傳ふるものあり、乃ち戰爭は必ずしも其主一要求を滿たす能はざる耳ならず、其繼續中に意外の危險と損失とを招致することあるを知らば、遲きに長期戰爭

說を爲すもの亦た遂に短期論を爲すに至らんかと。

即ち論者の意を忖度するに現在歐洲交戰國は互に開戰の目的を遂する爲めには長期戰爭を辭せずと云ふも、戰爭の目的として聯合軍側に於ては獨逸の軍國主義を撲滅すと云ふが如き遂に實行し得べきものに非ず、英國の如きも今後親しく戰爭の慘禍を其國内に嘗むるに從ひ戰爭短期論を唱ふるに至るべく、各國は遂に開戰の目的を達せず中途にして姑息なる講和を見るに至るべしと云ふに在らん、蓋し是れ亦た一種の觀測なり、英佛露が開戰の當初に於て三國共同して媾和を議すべく、其中一國のみ他に先んじて和を議するを得ずと相約したるは事實なるも、人世の變態は何人も豫見すべからず、故に吾人は論者が斯の如き觀測を下だすを不思議なりとはせざるも、吾人を以て之を觀れば是れ頗る皮相淺薄の見にして論者は果して相當なる論據に立てるやを疑はざるを得ず、又た論者輩が斯の如き姑息の平和より我邦が蒙らんとする危害の甚大なるに考及せざるが如きは吾人の頗る奇異とする所たらずとせず、論者は果して之に考へ及ばざるか、考へ及ふも尙ほ且つ平然冷然たりとせば必ずや禍を轉じ福と爲すの策なかるべからず、其策なるもの果して戰後獨逸に疏し其怨仇を解き國際關係の一轉化を策せんとするにあらざるなきか、吾人は論者が速かに其案を發表して世人の惑を解かんことを希望す。

（三）英佛露は長期戰を辭せず

巡洋艦の砲撃に遭ふ等より戰爭の慘禍を直接に嘗むるに至らば短期說に變すべしと云ひ、其開戰の目的を忘れて客易に姑息の媾和を行ふべしと云ふが如きは頗る我同盟國民の心事を見くびり過ぎたるの言なりと思ふ、抑も英國が比公以來の獨逸の巧妙なる外交の魔酔より覺醒して以來、佛國と百年の葛藤を解きて親善の基を築き、露と終天の怨を掃ふて協商を成し遂げたるもの必ずや深く覺悟する處なくんばあらず、キチネル陸相が初より三年戰爭を說けるもの決して一時の大言に非ず自ら國民の覺悟自信を表言するものたらずとせず、即ち英國にして果して國力蕩盡し一歩も進む能はざるに至らば止む然らざるに於て少しく戰爭の慘憫を目撃したればとて中途に媾和に贊同するが如きことあらんか、大英國民の威信聲望なるもの果して地に墜ちざるを得るか、佛國をして隣强の不斷の威迫より免かるゝの位地に復せしめ、白耳義をして其の有形無形の損害を償ふの法を得しめ、自家の制海權を永久安全にするの保障を握るまでは英國たるもの意地にも媾和を說くべからざるなり、佛國に至りては今次の戰爭は實に千載一遇の機會にして、此時に於て五十年前の屈辱を雪ぐことを爲さゞれば將た復た何の時にか復讎を期せんや、況んや影響の及ぶ所復讎心の滿足と云ふが如きに止まらず、實に一流强國として佛國の死活存亡に關するあるをや、試みに之を獨逸の脚地より論せんか、英國が制海權を掌握して宇内に跋扈するは尙ほ忍ぶべしとするも佛國が復讎心に驅られて毎に獨逸の側面を伺ふは忍ぶ可らずと爲し、獨逸の世界政策を樹立するの第一歩は佛國の復讎力を全然破壞するに在りとは獨帝の寸刻も忘れざる決心なりとす、ベルンハーデ將軍曰く、

我獨逸をして其の世界政策を實行するに障礙なからしめんとせは吾人は何かの方法に由り佛國と雌雄を決せざる可らず、是れ實に健全なる獨逸の政策を行ふに要する第一にして首要の要件なり、蓋し平和手段を以てしては到底佛蘭西の敵對を一掃すること能はざるべきを以て遂に干戈に訴ふるの外に採るべきの道ある可らず、而して佛國は復た再び我獨逸の前途を遮きる能はざるまでに之を破滅せざるべからずと、

獨逸の決心已に斯の如しとせば佛蘭西たるもの今日の機會に萊因河まで國疆を擴大し人口八百萬の増加を得るか左もなくば少なくともアルサース・ローレーンを回復せざるべからず、若しも後者すら回復する能はず戰爭の慘禍に恐怖して姑息の媾和を爲さんとするが如きことあらんか是れ佛國自ら大國民としての自滅を表白するのみ、吾人は倩々開戰以後の佛國人民の態度、其の先覺者の行動を察し、祖先の意氣尚ほ鬱勃として其間に有するを思ひ、佛蘭西が遂に世界同情者の期待に背くことなきを信ぜざるを得ず。

露國に至りては開戰當初より一種憫むべき國情ある墺匈聯合國と多く接戰して已に我北海道に比敵すべき面積あるガリシヤを略有し、且つ巴爾幹方面より墺匈國の勢力を驅逐する難からざる狀況にあるを以て察すれば、中途に媾和を結ぶことゝあるも比較的に得る所多しと爲さゞるべからず、然れども長期戰爭の爲め苦痛を感ずることも露國は比較的に輕微なるべきを以て、强ひて約に悖りて單獨媾和の擧に出づるの必要を見ざるべし、一說あり獨帝の狡猾なる或は天下二分案を以て露帝を誘ふに於ては露國遂に單獨媾和をなすに至ることなきを保せずと、二分案とは宛も那勃烈大帝が露帝アレキサンダルを誘ひし

力を佛國方面に傾注して其勢力を根帶より覆へすべしと云ふに在り、然れども露國は果して茲に於て左程容易に佛國と分離し得べきや、又た左なくとも自ら其勢圏に歸すべき巴爾幹小亞細亞の分配を佛國の最も有利なる同盟と交換するほど價値ありとすべきや、蓋し其然らざるは識者を待たずして知るべし、之を要するに英佛露は既に規約せるごとく必ず協同して相當の時機を待ち媾和の擧に出づべく、之を分離せしめ利益せんとする獨の狡謀姦計は遂に功を奏すべからず、故に吾人は聯合諸國が終局に至るまで必ず協同商作を執るべきを疑ふの必要なきを思ふと同時に、最後の勝利なるものゝ程度如何に就ては尙ほ頗る關心なきこと能はざるなり。

(四) 我對支國是の樹立

我日本は何の爲めに青島征討の擧に出でしや、日英同盟の情誼に因れりと云へば一言にして蔽ふに似たれども、別語之を解說せば極東に於ける一種のモンロウ主義を實施せんが爲めなりと云ふを至當とせん、即ち曩に日露戰爭の結果として遼東半島より露國の軍國主義を一掃し今次更に山東方面に於ける獨逸の甲裝的占領地を顚覆せし等の事跡に顧みて前途を察せば我日本は不言にして一種のモンロウ主義を樹立せんとするものに非ずや、他なし既成事實は論する限りに非ずとして、亞細亞以外より如何なる國にても其軍國主義を極東に樹立すべき方略を執ることに極力反對せんとすることは是れなり、支那の領土を保全し、經濟上其門戸を開放し、遺利富源の開發を謀るは世界列國共通の利益に屬し、毫も我日本

の專有せんと欲する處に非ざるも、我國は極東の天地に再び第二の膠洲租借地の現出せんことに絕對に反對す、其は單に獨逸の再起と云ふに止まらず何國の手を以てするも反對するものなり、支那の保全、平和を保ち之をして永く世界の幸福なる大市場たらしめんことは我帝國の死活に關する利益なる耳ならず亦た實に我が名譽信用に關する大問題たらずんばあらず、吾人は今次戰爭の終局と共に此の方針の確定を期待するものなり。

然れども此の我が對支國是たるや列國の承認を得る耳を以て足れりとすべからず之を實施せんと欲せば大に列國の財政的協力を得ざる可らず、即ち支那內地を開發すべき必要條件たる鐵道港灣の建築を初めとして、鑛業、開墾、製造業等一として巨大の資本に待つものにあらざるはなし、列國單獨に着手すべきものは別として、我日本の分擔に屬するものに關しては是非とも英佛資本の助力に待たざるを得ず、殊に佛國は世界一の資本國たるに關はらず從來未だ曾て多く我邦と財力の共通なかりしは吾人の久しく遺憾とせし處、玆に吾人は平和克復後に於ては佛國資本の多々益々我邦の仲介を以て支那開發の爲めに投下せらるゝに至らんことを大に希望せずんばあらず、思ふに今の對支策を立つるもの多くは日支關係の政治的問題を主として論するに止まり、經濟的開發の策を講ぜざるは彼等が偶々識者の輕侮を招く所以に非ざるなきか、支那問題の解決とは支那開發に要する資本の供給問題をも含むことを記憶せざるべからず。

（五） 歐洲出兵論の得失

極東モンロウ主義の樹立も外資供給の問題も畢竟するに歐洲戰局の終結如何に聯關する處多し、聯合軍にして果して九分十分の勝利を占め遂に獨逸の死命を制することを得るに至らば我日本の主張も必ずや容易に列强の承認する處たるべきこと疑を容れざるも、萬一にも聯合軍は辛ふじて六分七分の勝利を以て姑息の平和を媾成し得たりと假定せんに、恐らくは列國は各々自國の爲めに善後を謀るに急にして復た極東の友邦を深く顧念するの遑なかるべく、若しも獨逸が頑として我が主張を拒絶するに於ては我日本は乍ち至大の難局に遭遇するに至らんこと火を睹るよりも明なり、是則ち歐洲の戰局の前途に對して吾々日本人が到底超然たること能はざる所以なり、青島陷落の價値は歐洲戰局の結末如何に由り有ともなり無ともなるべければなり、而して此間の事情よりして歐洲出兵論は問題となりて現出し來る。

吾人は歐洲出兵論を以て一派の出兵論者と共に義俠國民の當然果たすべき義務にして、其實行には一の危險をも伴ひ居らずと信ずるものに非ず、更に又た吾人は歐洲出兵論を以て一大愚論なりと罵倒し以て問題となすの價値なしとする一派の論者にも與みする能はず、吾人を以て之を觀れば歐洲出兵論は其實行上多大の困難と危險あるべきも、同時に最も重要なる國家問題たるを失なはずして、其解決如何は國家の消長休戚に影響する處實に深大なるものあり、既でに佛國に於ては上下一致して我が出兵を熱望し英露の輿論亦た之に賛同し、且つ戰局の現狀は益々一大新鋭の援助を必要とするものあるを思へば、

歐洲出兵論は恐らく近き將來に於て一の具體的成案として我朝野の解決を待つに至らんことを期待すべきに似たり。

日英同盟規約に由れば我邦が英國を援くる爲め歐洲まで出兵するの必要なきは論ずるまでもなし、然れども我邦が已に膠洲灣に向つて出兵したる以上、其目的を貫徹する爲めの必要ありとせば歐洲出兵亦た主義に於て排斥すべきに非ず、但だし具體的問題としては素より輕々に決定し得べきものに非ず、國家休戚の繫がる所至大なるものあるだけに之を解決する最も愼重の考量を要すればなり、殊に斯る重要問題は我が國論の殆んど一致して支持するに非ざるよりは如何なる内閣も之を解決し得べからず、從つて其局に當り之を決行する内閣も亦た擧國一致の信頼ある内閣たらざるべからざるは論を待たず。

曰く出兵の費用は果して我邦の負擔に歸せず而かも我の體面を傷づけざる方法に由り供給の途ある乎、曰く出兵の條件として英佛露は果して我支那政策を是認し我主義を貫徹せしむべく盡力することを承諾すべき乎、曰く從來或る一派の白人間に差別的取扱を受くることある我日本人が歐洲まで援兵を出す以上向後人種的差別の觀念は主義に於て存在し能はざる道理なり、英佛露は世界各方面に於て我日本人の受けつゝある侮辱を一掃するに大に盡力する處あらんとする乎、大凡此等の疑問は出兵問題に聯關し是非とも滿足の解決を要すべきものたるべし、加ふるに我數十萬の精鋭を歐洲迄派遣するは國防上寧ろ後顧の憂なきや、更に歐洲の地形、風土、人情、言語と沒交渉の我軍隊が歐洲戰に參加し果して豫期

國に至るべき乎、若しも後の方法を取るとせば運送船の準備果して容易なるべき乎、凡て是等の問題は軍事専門家の意見に基きて最後の斷案を下さゞるべからず。

之を要するに歐洲の戰爭は聯合軍側と獨墺側と其勢力略ぼ匹敵し五分の取組を現し、英露尙ほ兵力の餘裕あり佛國は堅忍不拔の決心を以て局に對するが故に來秋にも入らば大に進境を見るべく、最後の勝利は疑ふべからずとするも、其勝利の程度は如何、我々日本人として果して晏如として其出來榮を待つを得べきや否や、然れども出兵の事は實に容易のことにあらず、吾人は好んで出兵を國民に勸說せんと欲するものにあらず、但だ此の問題の複雜なる關係を指示し、其近き將來に於て或は具體的成案として提起されんとする傾向あるを警告し、國民をして最も愼重の態度を持し之が解決を誤るなからしめんと欲するのみ。

議會解散の意義を發揮せよ

我邦憲政實施せられて以來衆議院の解散を行ふこと既に數回の多きに及ぶも、孰れも皆な超然主義なる內閣の下に行なはれしものにして、多くは議會が帝室內閣を信用せざる懲罰の意味に於て行はれ、最も明白なる政策問題即ち地租增徵の期限を延長するの可否に付き行はれし明治三十五年に於ける桂內閣の解散の如きも選擧後の結末は遂に不得要領に終り世人をして遺憾の念を催ほさしめき、獨り今次の解

散に至りては增師案の可否を主題として現大隈内閣の信任を問ふの意味を含むや明白なり、從來の解散に對照し稍々立憲的解散に近きものと謂ふべし、蓋し大隈首相が多年立憲主義を標榜して閥族主義と爭抗し來りし因緣に顧りみ、其閣僚及同志の某々等が屢々言明せる處に因て察すれば總選擧の結果に對し現内閣は必ずや立憲的責任を明かにするに於て吝ならざるべし、吾人は刮目して其總選擧後に於ける態度の公明正大ならんことを觀んと欲す。

世間說を爲すものあり、曰く大隈内閣は來るべき總選擧の結果、若し同志會、中正會、又は大隈黨を標榜する一派の議員數を合計して絕對多數を得ること能はざる場合にも辭職せざるべく、又は政友會國黨を合算して百九十人以上を得たる場合に於ても辭職せざるべく、寧ろ國民黨は表面增師案のみに付て政府に反案し大體に不信任を表せるものに非ざるを理由とし、臨時議會に增師案を提出せず、中立團の比較的に多かるべきを利用し本年末の議會までに極力懷柔を試み、兎にも角にも御大禮の濟むまで辭職の方法を講すべしと、此種の疑問に對して吾人は絕對に耳を傾けざらんと欲すと雖も、不幸にして多少疑問の因を爲すものと思はれざる理由なきにあらず、例せば過日犬養毅氏が關西旅行の途次になせし談話なるものに由れば、氏は總選擧後假令政府黨明かに少數ならんも現内閣は辭職せざるべしとの說を吐けりと報せらる、氏は最も能く老隈伯の心理を解するものなれば氏にして果して誤報せられたりと云ふに非ざる以上は其意見は多少世人の疑惑を助くるものと云はざるべからず、又た大石正巳氏は從來現内

き、其心理作用に關し種々の臆説ありと雖も少なくとも現内閣の前途に對し大に悲觀し之を助くる能はずと觀念せしに由ることは恐らく疑を容れず、其の悲觀の理由の一としては現内閣が遂に非立憲的態度に出でんとするを推念したるに在りと斷すべき節なきに非ず、是れ亦た世人の疑を助くるの一因たらずとせず、其他多年超然主義を奉じて戰ひ來りし大浦子が遂に内務の椅子に倚るに至れる、加藤、若槻、一木諸氏の官僚趣味に富める、尾崎氏の不幸にして閥僚間に重きを爲さゞる、彼是れ總合して考ふれば大石氏ならざるも前途頗る悲觀せざる可らざるに似たり、然れども疑はんと欲すれば限りある可らず、吾人は寧ろ大隈老伯の年來の主張に鑑み、加藤男の英國流尊信に顧りみ、現閣が必ず必要に臨みて立憲的態度を執るを忘るなからんことを信ぜんと欲す、

　總選擧の結果如何に關して何人も知らんと欲して推測に苦しむ所なり、試みに政府黨に利益ありと云ふ點より觀れば、大浦子の如き味方に忠實にして且警察的政治に老練なる内相の下に總選擧を爲す是れ第一の利なり、政府黨は比較的運動費の潤澤なるべきこと是れ第二の利なり、大隈伯の地方に於ける多大の人望を利用するを得べき是れ第三の利なり、大隈伯後援會の盡力に待つことを得る是れ第四の利なり、此の四種の利に對し、反對黨の利とすべき處を擧ぐれば、政府黨の稍もすれば不統一に流れんとするに對し選擧運動上絶對に統一あること是れ第一なり、地方に於ける政黨的地盤の概して大に鞏固なること是れ第二なり、運動費の潤澤なることは遙かに政府黨に及はずとするも、其使用上必ず比較的に活用の見込みあること是れ第三なり、傳染病研究所及水産講習所の移管問題、外交の失態、增師案等政府

政擊の材料比較的に少なからざること是れ第四なり、彼の四利に對するに此の四害あり、勝敗の數容易に逆賭すべからず、

吾人は朝黨たると野黨たるとに對し毫も恩怨あらず、若しも今次の總選擧に於て政府も猥りに官權を弄することなく、在野黨亦た其主張を明かにして公明の態度を失はず、兩々相對して國民最後の判斷に服從するの覺悟を爲し、總選擧後の態度に付ても双方誓つて立憲主義に背馳することと無らんことを欲せば、庶幾は以て憲政一段の進步を見るを得んか、吾人は切に其然らんことを希望するものなり、

公論

選擧競爭論

京都帝國大學法科大學教授法學博士　佐藤丑次郎

曩に衆議院解散せられて議員の總選擧近く行はれんとす、當局者は頻りに取締法規の勵行を聲明し言論界は盛んに選擧人に對して選擧權行使の公正を要望す、共に選擧の弊害を最少限度に止めんと欲するに出づ、余輩も亦其の本旨に於て全く所感を同うし取締法規の勵行を望み選擧權行使の公正を希ふ。然れども熟ら選擧競爭を觀察して我が國の現情を顧みれば、期待する所徒に過大にして希望の水泡に歸せんことを憂へざる能はず、若し眞に選擧界を廓淸せんと欲せば更に劃策する所なかるべからざるを思ふ。是れ此の論を草する所以なり。

第一

選擧競爭は一種の闘爭なり、之に勝ちたる者は選に當り之に敗れたる者は選に落つ。而して選擧法は得票數の比較的に多き者を以て當選者となすが故に勝敗は全く得票の多少に依りて定まり、投票は一定數の選擧人平等に之を有するを以て議員候補者の運命は專ら其の向背に依りて之を決す。從て各候補者は一切の手段を盡して選擧人の意を迎へんと努め、全力を傾注して投票の爭奪を行ふ。其の際各候補者の用ゐる手段は固より千差萬別なりと雖も、猶之を大別して三種となすことを得べし、純理的手段、實用的手段並に折衷的手

段即ち是れなり。

一　純理的手段　とは實用に適するや否やは敢て之を問はず專ら理論に合するを旨とする手段を謂ふ。詳言すれば候補者は嚴正なる理論に據りて反對候補者の政見を辯駁し眞實なる事實に基きて其の行動及び人物を批評するものにして、選擧人が理性の命ずる所に從ひ論理の示す所に應じて自ら彼れを去りて己に來らんことを期待し、而かも選擧人の態度が此の期待に背くや否やは毫も念頭に置かざるなり。從て此の手段は單に演說並に文書に依りて辯說を公表するに止まり、選擧人を以て悉く公平なる第三者と看做し論理上より其の理性に訴ふるものにして、直接に選擧人の心理に影響を及ぼすことなく、辯說の是非曲直は全く選擧人の自由に判定する所に任かす。故に此の手段にして普く行はれんか、自己の權威に立て其の品位を保持して選擧界に馳驅し得るのみならず、最少額の費用を以て競爭に從事し得べきに由り、一國の優良分子は奮て議員候補者たるに至るべく。各候補者は互に人格の高低と競ひ政見の優劣を爭ふを以て、當選したる議員は一國の選良として足らざる所なかるべく、議院は眞に選良の集會にして善政の競爭場となり立憲政治は圓滑に行はれて其の美果は殆ど之を收むることを得ん。是れを以て此の手段は選擧競爭の最良手段にして學者の等しく理想とする所なりと雖も、未だ各國に普く行はるゝに至らず略ぼ之を普及し得たるは唯英國あるのみ、而して是れ實に英國の社會が名刺上なる國會議員の記號(M、P)に對して特に敬意を拂ふ所以にして、同時に同國の憲政が最も圓滑に行はるゝ一大原因なり。

二　實用的手段　とは理論に合するや否やは敢て之を問はず專ら實用に適するを旨とする手段を謂ふ。詳言すれば候補者は殆ど自他の政見並に辯說に重きを置かずして只管選擧人の態度に懸念し、各種の情實に依りて其の私情を動かさんと努め、選擧人が感情の赴く所に從ひ利欲の向ふ所に應じて自ら彼れを捨てゝ己れを取らんことを期待し、而かも運動の善惡正否の如き

理作用を利用し其の感情若くは利慾に訴へて之を牽引するものにして、選擧人の異なるに從ひ機に臨み變に應じて格別的に之を行ひ、或は積極的に財貨を投じて選擧人に私恩を賣り、盛宴を張りて其の歡心を買ひ、諂言を呈し憐を乞ひて其の同情を求め、或は消極的に公然選擧人を威嚇し、事を構へて之を脅迫するに訴追を以てし、甚しきに至りては暗に運動員を教唆して之に暴行を加へ、以て强制的に投票を自己に入れしむるが如き、其の態容千轉萬化を極む。故に此の手段にして普く行はれんか、選擧界に馳驅するに當り自己の權威に立ちて品位を保持し得ざるのみならず、競爭に從事せんが爲に頗る多額の費用を要すべきに由り、一國の優良分子は殆ど議員候補者たるに躊躇すべく、候補者に立つ者多くは財產を蕩盡して虛榮心を滿たすの愚者に非ずんば、即ち議員の地位を濫用して私利を營む奸佞の徒にして、不正不良の運動に依りて社會道德の腐敗を助長すること著しきのみならず。議院は全く醜惡の集會となりて惡政の競爭場と化し、立憲政治は圓滑に之を行ふに由なく、多數政治の弊害は終に之を防止し得ざるに至らん。是れを以て此の手段は選擧競爭の最惡手段にして識者の極力排斥する所なりと雖も、實際に效を奏すること多きを以て未だ其の跡を絕つに至らず、却て之を行ふ所現今猶少なからざるを見る。

三　折衷的手段　とは外形上に於て能く理論に合すると同時に實質上に於ては專ら實用に適するを旨とする手段を謂ふ。詳言すれば候補者は曲論謬說を立てて反對候補者の政見を辯駁し虛僞の事實を傳へて其の行動及び人物を誹譏し以て形式的に論理を貫徹するものにして、選擧人が之に依りて心理上に影響を受け其の判斷を誤りて自ら彼れを斥けて己れを採るに至らんことを期待し、而かも議論の曲直若くは事實の眞僞の如き殆ど之を問はざるなり。從て此の手段は純理的手段と等しく辯說を以て唯一の武器となすと雖も、其の辯說は嚴正なる理論に據り眞實なる事實に基くに非ず、機に臨み變に應じて詭辯、虛言、詐僞、誑惑、瞞着、誹謗、諂諛、僞善其の他苟も聽衆若くは讀者をして反

對候補者より分離せしめ之を己れに誘引し得る一切の方法を盡して專ら勝利を博せんと努む。故に此の手段にして普く行はれんか、選擧の競爭に際して啻に名譽信用を毀損せらるゝ虞あるのみならず、徒らに世人一部の憎惡嫌忌を受くべきを以て廉直達識の士は多く候補者たるを避くるに至るべく、選擧界に馳驅する者は主として職業的政治家にして目的の爲に手段を擇ばざるが故に社會公衆を惑はして輿論の針路を誤り、議院は殆ど大小頭目の集會となりて詭計奸策の競爭場と化し、立憲政治は圓滑に之を行ふこと能はずして終に小人政治の實情を呈するに至らん。是れを以て此の手段も亦選擧競爭の不良手段にして具眼者の大に非難する所なりと雖も、高遠なる論議は俚耳に入り易からず凡人は寧ろ卑俗なる言論を歡ぶが故に却て實效を擧ぐるに適し、現今猶各國に多く行はれつゝあり、是れ實に米國、佛國、伊國其の他に於て識者が所謂政治家を蔑視する所以にして、同時に議會政治の改善に汲々たる一大原因たり。

選擧競爭の形式に二種あり其の一は候補者が選擧人をして自己に投票せしめんとするものにして其の二は選擧人の投票を無價値ならしめんと努むるもの是れなり。蓋一候補者が一票を得るときは同時に他の候補者は一票を失ふが故に其の得票に於て二票の差數を生ず、從て各候補者は主として第一の形式を採り、投票の期日に際しては有望なる選擧人に對して盛んに所謂狩出しを行ふ。然れども第一の形式に於て選擧人を動かすこと能はざるときは、其の投票を無價値ならしめて反對候補者の一票を得るを遮止し依て其の得票に於て一票の差數を生ずるを以て、或は之を誘惑して當選の虞なき第三候補者若くは候補者以外に投票せしめ、或は之に所謂足止めを加へて全然投票を放棄せしめんと努む。而して純理的手段普く行はるるときは競爭は專ら第一の形式に依り、一般に折衷的手段を用ゐる場合に於ても第二の形式を採ること殆ど稀なり、何んとなれば其の際辯說を以て唯一の武器とし一般普遍的に鬪爭するの[illegible]

的手段を行ふときは第二の形式に依ること決して少からず、此の場合に於ては格別個人的に周到なる運動を試むるが故に苟も自己に有利なることあらば之を敢てせずして已むことなければなり。投票の放棄は既に立憲治下の臣民として恥づべき行爲なり、況んや策を弄して投票を放棄せしむるに於てをや、當選の虞なき第三候補者若くは候補者以外に投票せしむるは其の外形に於て合理なるが如しと雖も、其の實質に於ては等しく投票を無價値ならしむるものにして足止めと大差あることなし、是れ亦實用的手段の大に非難すべき一點たり。

第二

選擧競爭の手段は選擧人の數幷に質と密接なる關係を有す。一般に之を云はば選擧人少數なるときは實用的手段行はれ易く、選擧人多數なりと雖も一般に無識なるときは多くは折衷的手段を採るべく、而して純理的手段は選擧人多數にして且其の多くが有識なる場合に於て初めて完全に施さるべし。蓋選擧人少數にして議員候補者が個人運動を敢てし得るときは、各個人に就きて格別的に之を遊說勸誘すること專ら勝利を博する捷徑なるが故に自ら實用的手段の普く行はるゝに至るは事理の當然なり。英國に於ても選擧人少數なりし時代に在りては實用的手段一般に行はれて選擧界の腐敗其の極に達し、例へば一八〇七年の選擧に際しウェストバリーに於ては二個の議席を獲得せんが爲に十萬圓を提供し而かも少額に失するの故を以て拒否せられたる事實あり、ヨークシャイアに於ては候補者ロード・ミルトン及びラッセルス兩人の競爭費用を合して二百萬圓以上に達せりと傳ふ。而して英國が能く斯くの如き弊風を矯正し得たるは、主として前後三回の選擧權擴張に依りて著しく選擧人を增加したるに基因す、民衆の政治思想比較的に進歩したる英國に於て猶且然りとせば他は推して知るべきのみ。則ち實用的手段の使用を防ぎて選擧界の腐敗を除かんと欲せば、著しく選擧人を增加して個人運動を試むること能はざらしむるの外なし、直接に個人を遊說勸誘することなくんば自

己の良心を欺きて選擧權を濫用すること稀なるべきを以てなり。

選擧人頗る多くして實用的手段を用ゐること能はざるときは、各侯補者は乃ち辯說に依りて一般普遍的に運動するに至らん、而かも其の際選擧人多く無識なるときは折衷的手段普く行れんも純理的手段は之を施すに由なかるべし。蓋選擧人が政治上の常識を缺き政治界の現情に通ぜず短見にして且輕信なるときは、高遠深慮の論議は其の耳に入ること難く卑俗危嬌の辯說は却て之を動かし易きを以て、曲論詭辯を弄し謬說誤報を傳へて之を誑惑瞞着し去ること寧ろ人心を選擧界に收むるの捷徑たり、從て折衷的手段の一般に採用せらるるは固より當然の事理なりと謂はざるべからず。唯選擧人が多く政治上の常識を備へて政治界の現情を了解するときは、相當に之を考慮して多少の確信を有するに至るべきを以て、折衷的手段に依りて心理的に影響せらるること少なく、理性に從ひ論理に基きて論議辯說を判定し得べきが故に純理的手段は玆に初めて實行せらるべし。而して選擧人が一般に能く斯くの如きを得るは一に衆民に對する政治教育に俟つ、若し政治教育衆民の間に普及せんか選擧人は多く政治上の常識を得ると同時に自ら其の地位を自覺すべくして政治界の現象に注意して其の實情を了解するに努め、之に考慮を加へて多少の確信を有するに至らん。然らば則ち折衷的手段の使用を防ぎて純理的手段を善く行はんと欲せば、必ず政治教育の普及に努力せざるべからざるなり。

顧て從來の我が選擧界を見るに實用的手段一般に行はる、偶ま辯說を主とするものなきに非ずと雖も猶折衷的手段たるに止まり純理的手段は殆ど之を用ゐる者なきが如し。其の原因の一は選擧權取得の條件高く選擧人猶少數にして僅に實用的手段を行ひ得るに在り。之を列强諸國に見るに各國殆ど普通選擧主義を採用するに一致し、例へば佛國に在りては選擧人の數全人口百に對して二七人、獨逸帝國に於ては二二人、而して英國に在りても尚一七人に

然として制限選擧主義を守り直接國稅年額十圓を以て有權資格となすが故に其の數僅に三人に過ざるなり、其の差違豈大ならずや。或は我が選擧法が原則として大選擧區制を採るが故に選擧人の數敢て少からずと說くも、市部に於ては極端なる小選擧區制に依るのみならず、郡部に於ても亦候補者が一定數以上の得票あるときは確實に當選し得べきを以て各々一地域に割據して其の地盤となし宛然小選擧區制の實情を呈するが故に猶實用的手段を以て格別的に運動することを得るなり。或は我が選擧法が絕對に無記名投票制を行ふが故に個人運動を無効に歸せしむること多しと云ふも、素樸なる選擧人は猶然諾を重んじて其の候補者に投票すべく、狡猾なる選擧人は投票者の不明なるを利用して各候補者より盛んに金品を收受すべく、而して所謂運動員幷に投票仲買人は其の機に乘じて大に暴利を貪るに至る、選擧界の腐敗を助長すること夫れ幾何ぞや。或は選擧取締の法規あるを以て之を勵行せば全く個人運動の弊風を一掃し得べしと論ずるも、是れ取締法規を評價して高きに失するものなり、蓋取締法規は直接の犯行を罰するに止まりて間接の非行は敢て之を問はず、且選擧の前後一定の期間を隔つるときは同一の犯行をなすも不問に付するを常とす、縱令選擧に際して直接の犯行ありたりとするも明白なる證憑あるに非ざれば之を罰することを得ず、而して選擧法は同一犯行に就きて候補者、運動者幷に選擧人を罰するを以て互に相庇護して證據を滅し罪跡を蔽ふが故に悉く之を檢擧するは決して容易の業に非ざるなり、取締法規を勵行するは固より可なり而かも其の萬能を期待し得ざるが故に、我が選擧界に實用的手段を行ふの餘地猶存するは疑ふべからざる事實とす。之を要するに我が選擧界より個人運動の弊風を一掃せんと欲せば斷然選擧權を擴張して選擧人の員數を增加し以て實用的手段を用ゐること能はざらしむるの外なし、余輩は本來普通選擧主義を主張する者なりと雖も、急激なる改革は之を避くるを可とするが故に、我が國現時の事態に鑑み選擧權取得の條件を低下して之を公民權と同一ならしめ

んことを提議す、之に依りて選擧人を増加すること多大なると同時に選擧事務の簡捷を圖るに於て便宜とする所少からざるを信ずればなり。

選擧競爭の弊害を防ぎて其の惡果を除かんと欲せば選擧權を擴張するを以て足れりとせず、更に政治教育を衆民の間に普及せしめて之に政治的常識を與へざるべからず、若し我が國現時の狀態に於て單に選擧權を擴張するに止まらんか必ずや折衷的手段普く行はれて其の害惡に耐へざるに至らん。蓋我が國の民衆は永く專制政治の下に在りて受動的地位に立ちしが故に未だ屈從的慣習を脫するに至らず、法治政治の下に在ること久しからざるが故に個人の權利を尊重し社會の秩序を遵奉するの念甚だ强からず、偶ま主動的に活動せんとする者あらば往々にして粗暴に流れ過激に陷らんとす、是れを以て現今猶寡人政治の遺習全く跡を絕たずして多數政治の弊害漸く蔓延しつゝあり、此の實情の下に單に選擧權を擴張するに止まらしめば其の結果はを感ずると同時に一層痛切に政治教育の普及の一大急務なるを主張せんと欲す、殊に自治體は學者の所謂小規模の國家にして自治行政は人民を馴致して憲政運用の素養を與ふるものなりと雖も、我が國現時の自治行政は果して其の期待に背かざるや否や、自治政の紊亂甚だしくして醜聞外に漏るる所少からざるは事實なり、斯くの如きは人民を馴致して却て憲政を害すべき素質を養ふものと謂ふべし、而して是れ等しく人民多くは政治的常識を缺きて自ら治むること能はざるに基因す、然らば則ち衆民に對して政治教育を授くるは小にしては自治行政の改善を圖ると同時に大にしては立憲政治の完美を期する所以なるを知らん、純理的手段は人民が多く政治的常識を備ふるを俟ちて初めて普く行はるゝものなればなり。而して政治的衆民教育の細目に就きては後日卑見を述べて識者の批判を乞はんと欲す。

首相としての大隈伯

文學博士　三宅雪嶺

首相としての大隈伯というて、素より長所もあれば短所もある。日本で内閣制の定まつてから、色々の人が首相の職に就いたが、何れも一得一失である中にも、一般に首相らしく受取られたのは伊藤公山縣公及び大隈伯である。黒田伯は重望に於て之に劣らなかつたけれど、斯かることに馴れないせいであつたか不手際であつた。松方侯は二度まで職に就いたが共に一層不手際であつた。手際の好い所からすれば初め重望の無い方が却て可く、即ち桂公の如き無事に務める上で最も巧みであつて、これ程在職期間の永いものは無く一時長州三尊を一身に集めたかに思はれたが、再び首相となつて前よりも拙、三度首相となつて極めて拙、斯く迄拙であつて如何に初め内閣を維持し剰へ大事を決行したかを疑はれるやうになつた。或は病氣で何うかしたるかとも言はれた。初め重望無くして割合に職を果し終せたのは此外に西園寺侯がある。然し殊に手際好かつたとは言はれない。他に重望を具へて首相の職に就かなんだのは井上侯であるが、曾て首相代理となつて議會でまごつき方一通りでなく、後藤伯が廊下で其の眞似して大笑ひしたことがある。後ち首相とならなんだのは自ら知るの明あるといへる。同じく首相の重望を具へて職に就かず、就いたならば頗る巧みなるを得たであらうと思はれるのは西郷侯であつたけれども、其職を引受けるに餘りに賢くあつたらしい。伊藤山縣二公は首相として手際好いものでなく、いらざる反對を招きはしたが、何分にも元老格で上下に通りがよかつた。大隈伯は元老の優遇を蒙らぬにしても、夙に二公と同格の位置に上り、寧ろ其上に位し自後對面

を崩すことがなかつたが爲め何時も互格であつて、首相となつたとて誰も不思議に思はず重望を具へて居つたことは慥かに首相と爲るに一の强みである。前に憲政黨內閣の首相として甚だしく不手際であつたが、場合が場合、誰でも其場合に安全なるを得なんだらうと思はれ、不手際の割合に手創を負ふこと少なかつた。首相として最早絶望と思はれても重望は失はなんだ。

先輩は漸く後輩に讓り、伊藤は西園寺に讓り、山縣は桂に讓り、最早や後進の世の中となつて、桂の後に寺內伯が出ぬので、山本伯が出で、その失敗してより淸浦子を持出しなどした揚句、適當の人が無いといふので、先輩中比較的最も元氣ありと見えた大隈伯を擔ぎ出すことになつた。

古稀の年で首相となつたので、聊異樣に感ずるものもあつたが、善くも惡くも、重みと言はうか、人氣と言はうか、首相といふ置物に適すると見えた。淸浦といへば嘲笑ふところをば大隈といへば年寄りの冷水と

容が如何にあるにしても何處か面白味を覺えさせる。伯が適當であるかないかは決するに六ヶ敷いが兎も角大政黨を基礎とした內閣が倒れ、其大政黨を向ふに廻して小數黨で內閣を組織し、或期間之を維持し得るは一寸伯の外にあるまい。他人ならば三度も臨時議會を開き十二月の始めに常會を召集するは思ひも寄らぬことであつて、之を敢てし得たは流石に大隈の大隈たる所であらう。早稻田の老人の腕は表はれたのである。

けれども恁る事を取除いて何の賞すべき事があるか。大隈といふものは現內閣に缺くべからざるに相違ないが、大隈自ら政治を行つてをるのかどうか。大隈の價値は看板に在ること恰も何本家何元祖と云ふが如きではないか、伯が民間に在つて屢々意見を發表し、甲に對すると乙に對すると違ひ、內に對して更に違ふので、何れが眞意であるか明かでないにしても、廣く世間に認められてをつたところでは、內閣以外に元老を認めず、增師に反對するやうな所があつた。他にも

實際內閣を組織した上では遲きに主張した處を實行する處幾何もない。外交の事は加藤男に一任し、內務の事は事實に於て大浦農相をして當らしてをる。地方長官を更迭したのは果斷と言へば果斷であつても、伯自ら何程人物を知つての事であつたか。殆と悉く大浦の言ひなり次第になつたのではないか。伯に方針無いと言へばそれ迄であるが、何か方針ありとすれば、いかなる方針であるかが人之を知るに惑ふ。約り大隈內閣は大隈の看板の下に長州官僚が政治を行ひ、三菱が間接に與つてをるといふ關係になつてをりはせぬか。議會を解散するかせぬかは一の疑問であるが、解散して能く政友會を切崩し自ら大政黨を統率するに至るであらうか。政黨を一變するを得たならば、方針が有つても無くつても、力だけは十分に認める事が出來る。然しそれは結果を觀ての後ならでは解らぬ。伊藤なり、山縣なりは勢の不可なるを見れば早く退くことにしてをつた。腰が弱いといふも再び出づるの餘地を殘して逃げ出すのであつた。大隈は之に比して頑强であり、到底支ゆべからざるに至る迄抵抗する傾きがある。堅く守るの主義が無いにせよ。行き懸かりに於て瘦我慢を推し通さうとし、抵抗して屈せざるに於て何人にも優る。黑田內閣の外相として飽く迄條約改正を斷行せうとしたのもさうである。憲政黨內閣の首相として自由黨一派の分離を怖れなんだのもそれである。今度も井上侯は人に語つて言ふた。「他人が愛相を盡かしてをつても大隈はとんと氣着かず、平氣で居るのに恐入る」と。大隈伯は己れの立場に於て事が何とか成らうと信じて居つて、其點に於て樂天此上もない。倒れれば倒れろであるが、倒れる迄何とかなると思つてゐる。少しでも維持して行ける間は逃げようとせぬ。其平氣なところ先きが見えぬのか、勇氣であるのか、勇氣でないのか、何にしても他の者の眞似し難いところがある。その一種人を人とも思はぬ我慢强さところが是れ迄勢力を維持し來つてをること尠くない。百二十五歳說もさうである。百二十五歳まで生きぬ事は定つてをる。定つてをつて自分も之を知つて居りながら、平氣で之

を公言し、自ら之を滑稽ともせぬ。少數黨を以て大政黨と對抗し、解散後に少數黨を大政黨に成し得るとも思つてをるであらう。さう行かぬとも思はぬではなからうが、愈々の場合まで相手をするの意氣込がある。此點に於て閣員が意を强くする。大抵の事は閣員の言ふがまゝであつて、首相自らの意見は何程も無い、けれど、容易に逃出させぬといふだけは確である。加藤が安心してをれば、大浦も安心してをる、尾崎は尙更である。仕方無くなるまで奮鬪するだけの事は信じて間違はぬ。それだけ大隈の力が見えるが、仕方無くなつて倒れた後に之を援けた者は隨分慘な目になる事がある。條約改正案の破れた後の改進黨はさうであつた。政黨も機關新聞も隨分困つたことがある。今度同志會は如何になるであらうか。全力を盡して奮鬪するだけ敗けたが最後慘な目になる。然し伯は奮鬪するだけの事はある、伯の力は其れで認められる。長州出身は事困難になれば早く引上げ、薩州出身は頑强に爭ふ形が巧みである。どうせ伯は今度職を罷めたならば又と內閣を組織する事はなからうし、力の揮へるだけ揮へばそれだけ大隈なるのも、印象を歷史に貽すこととなる。伯自らとしても晩年に首相となり、飽く迄奮鬪するのは得策である。けれども是れが爲め政治界に何の利益を與へるかは急に言ひ難い。

伯が七十八になつて尙割合に頭腦が衰へず、人の言ふことが相應に解り、記憶も好く、首相として甚だしい失策をせぬのは政治家として一つ珍らしい例とすべきである。議場に於ける答辯は稍滑稽の氣味あるも、年齡より見れば嗤ふどころの事でない。若い者でその眞似の出來ぬのがいくらもある。老人が政治の衝に當るのは必ずしも賞すべきでないが、人間が何れ程力を揮ひ得るかを示すのは無益の事でない。老年政治家たるの點に於て未だパーマーストン及びグラドストンに及ばぬにしても殆ど之に頡抗する有樣である。多くの缺點を差引いて伯は偉人物たるを失はぬ。（十二月十

歐洲動亂史論（二）

吉野作造

墺洪國と塞國（上）

予は前號に於て、墺洪國皇儲殿下の暗殺は陰謀の結果であり、其の陰謀根源は塞比亞國に在る次第を説いた。而して此事はやがて七月二十三日墺國の最後通牒となり、二十八日遂に兩國の開戰宣言を見るに至つたのである。然らば問ふ、何故に塞國は一體墺洪國に對する兇惡なる陰謀の策源地となつたか。何故に墺洪國は此事に激して遂に干戈を執るに至つたか。皇儲殿下の暗殺といふこと其自身は固より重大なる事態たるを失はぬ。けれども之を機として兩國遂に戰端を開くといふに付いては兩國の間に從來久しく利害感情の相容れざる、否犬猿も啻ならざる反目の關係があつたが爲めであると云はねばならぬ。予は本號に於ては主として此兩國の反目の關係を歴史的に研究して見やうと思ふ。

皇儲殿下の暗殺と云ふことを中心として、墺塞兩國の反目關係を觀察するに、自ら二つの異つた方面があると思ふ。一つは此兩國が近世の外交史上屢衝突したる事實あり最近に至つては到底最早融和すべからざる程度までに反目して居つたといふ方面であつて、他の一つは皇儲殿下其人が特に塞國人から同國發展の希望

を絶滅せんとする唯一の人なりと視られて居つた方面である。世人往々皇儲殿下は單に塞國民族の排墺感情の犧牲とされるものなりと爲すものあれども、予の考ではモ少し深い意味があると思ふのである。塞國民族は只墺洪國を憎むの餘り、其國政界の大立物たる皇儲殿下を殺したといふばかりではなく、其外になほ、皇儲殿下其人の存在が實に塞國發展の爲めに大なる障害になると考へたものと信ずる。この點は本章の後半に於て特に詳に說かんと欲する所である。

墺塞兩國反目の原因

墺洪國と塞國とは由來非常に反目して居る。然し其反目の根本の原因は何か。又何時頃からこの反目の關係が始まつたか。

此の問題に對して、之等兩國民の反感は由來極めて遠い、根柢の深い〱歷史上の沿革があると說く者がある。我邦に於ても昨年十月一日號の外交時報に某氏の此說を述ぶるものを見たが、然し此說の最も明白なる主張者は恐らく英國のエリス・ベーカー氏であらう。外交時報所載の說も恐らくベ氏の論文に基くものであるまいかと想像する。さてベーカー氏は昨年八月號の隔週評論に於て「大公の暗殺」と題する論文を揭げ、其中に塞國前首相ゼオルゼヴイツチの說を拔いて墺塞兩民族の反目を歷史的に說明せんと企たのであるが、其中にこんなことを言つて居る。曰く、

西曆紀元一六九〇年、墺國皇帝レオポルドは、土國領內より二十萬人の塞國民族を招ぎて墺國領內に移住せしめ、以て土耳其帝國の侵入に對して同地方を防禦するの任務に當らしめた。其後一千七百三十八年及び一千七百八十八年にも大團集の移住があつた。斯くて塞民族は前後百六十年の間よく墺國の命に從ひ、忠實に其爲めに盡し、啻に土人に對する强固なる藩屛たりしのみならず、また南は伊太利、西はライン地方の戰爭にまでも從事したのである。然るに此功勞に對し墺國は啻に之に酬ゐざるのみならず、尙公約を無視して、宗教の自由、言語の自由を禁止し、[illegible]

迫害した爲めに多數の塞民族は失望の極或は露國に逃れ又土耳其にすら走つたものもあつた。斯くて塞人と墺人とは已に早くから歴史的に仲が惡い云々と。

然しながら予は、此説は必らずしも誤りではなからうけれども、塞墺兩民族の今日の反目を直接に説明するの説としては取るに足らぬと思ふ。假りに之が兩民族反目の遠い原因となつたとしても、墺國の招きに應じて其領内に移住したものはホンの一部分である。「塞民族の大多數は之に何等の關係が無い。而してこの無關係な大多數は、同族の壓迫に同情して一時墺國を憎んだとしても、それは決して根柢の深いものでは無い。現に彼等は後にも説くが如く、屢々墺國を援けて土耳古と戰爭をした事がある。例へば一七八八年から九〇年にかけて、墺のヨセフ二世、露のカタリナ二世が、土耳古のサルタンに戰を宣するや、塞人は土の羈絆を脱せんが爲めに墺を援けたのである。又今日の塞比亞獨立の基をなす所のゼオルチ・ペトロヴィチが一八〇四年土に對して叛旗を擧ぐるや、彼は救を墺に求めたのである。斯くの如く十九世紀の初めまでは塞人は動もすれば、墺に恃まんとせるの歴史に富んで居る。尤も塞人が墺に對して弓を引いた事も無いではない。例へば一七三八年より三九年にかけての戰爭で、塞人は當時自分逹を支配して居つたカール六世に弓を引いて墺國の主權を斥け、以て土の主權を再興せしめた事がある。然し之は一七一八年に塞民族の地方（今日の塞國地方）がボスニアの大部分と共に墺領に歸し、墺人が餘りに壓制をやつたから、それに反抗したのであつて、其外には特別の理由がない。要するに塞人は墺の壓制に苦んでは土に縋り、土の壓制を脱せんとしては墺に縋ると云ふ境遇にあつたので、一六九〇年當時の出來事を根に持つて常に墺を憎むと云ふことは、事實根據のない話である。ゼオルヴッチが斯かる説を唱へたのは、恐らくは爲めにする所あつてゞあらうと思ふ。何とすれば、彼は一方に於ては碩學の譽高く、他方には有數の政治家として一千八百九十七年より一千九百年に至る間首相の印綬を帶びた事もあるけれど

も、併し同時に彼は極端なる狂熱的愛國者にして偏狹なる大塞耳比亞主義者である。彼は例のナロードナ・オブラーナの有力なる發起人の一人であることも亦之を忘れてはならぬ。去れば彼は愚民を煽動する目的の爲めには故らに荒唐無稽の傳說を捉へて排墺熱煽動の具に供せぬとも限らぬ。要するにゼ氏の說は實に眉に唾して之を聞くべきであつて、其儘之を拔用するのは危險であると思ふ。尙ほ序に申すが、一體塞國の人民はそんな捏造的記事に依つて煽動せらるゝだらうかと云ふに、予は同國人民今日の狀態にては、まだ／＼煽動には乘るだらうと思ふ。同國人民の智見の程度の低さには實に驚くべきものがある。有名なるバルカン通アンドレ・セラダム氏が、昨年七月十日發行のル・コレスポンダン誌に寄せたる『新塞耳比亞』と題する論文中に、最近の徵兵檢査の際に調査したものだとて次の樣な表が載つて居つた。

徵募人員百人中次の事實を知れるものゝ人數

一三八九年コッソヴォの戰	一〇〇
ステフアン・ドウシヤン大帝	八〇
一八〇四年乃至一八一三年獨立運動幷に首領カラゼオルヂ	六二
ミロシユ第二革命運動幷に現塞國の建設	五九
現王の名	四二
現皇太子の名	二三
塞國以外に塞民族の多數存在するの事實	九八

以上の事實は後に塞國の發展の沿革を說く時に明にするが、何れも著名の歷史的事實であつて昔噺の樣に子供の時から聞いて知つて居るべき筈のものである。夫れすら知らぬものありとすれば、況してや國王や皇太子の名を知らぬ者の意外に多數なるは怪むに足らぬのである。斯う云ふ人民であるから、前首相にして名ある學者の云ふことあれば、すぐ信ずるといふのは當然である。之等の事情を考へ併せて、ゼ氏の說は恐らく爲めにする所あつて唱へた說ではあるまいかと疑ふのである。要するに墺塞兩民族の反目の關係といふものは、そんな遠い深い歷史的沿革のあるものではない、案外に新しい出來事であると予は考ふるのである。

然らば墺塞兩國は抑も何時頃から反目するに至つたかと云ふに、之は至つて新しい現象であると予は考ふるのである。この兩國の最近の反目の程度と云ふものは非常に激烈であるので、人動もすればこの反目は、頗る根抵の深い、遠い歴史上の沿革あるものなるかの如くに思ふものあれども、予はどうしても左うは考へぬのである。又人によりては兩國の衝突は汎日耳曼主義と汎スラヴ主義との衝突なりとなし、人種的の深い根抵あるかの如くに説くけれども、之も如何も正しい見解ではないやうである。ソコデ予の考は如何と云ふに、即ち墺洪國の南下政策と塞國膨脹の理想との衝突といふことで説明しやうと思ふのである。而して墺洪國の圖南の政策を決定したのは何もゼルマン民族の先鋒となつて此事に當るといふやうな考でやつたのではない。塞國とても同様であつて、彼が西の方に膨脹せんと志したのは是亦何もスラヴ民族のために氣焔を吐かんとの意識を以つてやつたのではない。今日の人間は中々同文同種などいふ空名では容易に動くものでない。例へば我日本人にしても、直接に我國の利害に關係のないやうな空漠たる問題についてこそ、同文同種といふやうな事を理由として隣邦支那の爲めにも大に盡さゞるべからずなどゝ云ふけれども、現實の利害關係の問題になると、必ずや人種的空名よりも、先づ現實の國家的利害を第一に打算する。之と同じく墺洪國にしても、塞國にしても、各膨脹發展の理想を實現せんとして相衝突するに至つたのは、何も全日耳曼人や全スラヴ人の利益のためにやつたのではない。少くとも彼等は彼此人種を異にするといふ意識に基いて爭つたのではないのである。故に予は兩國の衝突を以て人種的憎惡といふ遠い處に根據して居ると觀る説は採らぬのである。猶汎ゼルマン主義とか汎スラヴ主義とかいふ問題は、墺塞兩國の反目關係を說明するに適せぬ所以は、後にも少し詳しく述べやうと思ふ。

扨てこの墺塞兩國の衝突は、右述べた通り、啻に人種競爭といふやうな根抵あるものでないのみならず、又其來歴から云つても左う古いものではない。予の觀

る所では、近々十數年この方の事であると思ふ。具體的に兩國の公然爭論するやうになつたのは、實は一千九百八年の墺洪國のボ・ヘ二洲合併の時以來である。其以前は、暗鬪はあつたとしても、公然とは未だ喧嘩して居らぬのである。而かも其暗鬪にしても、其始りはソンナに古いものではなく、遠く遡つたところで一千八百七十八年の伯林條約位のものである。尤も兩者衝突の端を啓くといふか、又は其因を爲すと云ふか、其根本の源は、一千八百六十六年にあるともいへる。夫れ以上には如何しても遡れぬのである。去れば墺塞兩國の反目といふものは、稍々古いところに遡つたにした所が、今より五十年以上の昔には遡れぬのである。

然らば何故に今より五十年以前を期してこの兩國は相衝突するの端を開きしか。この點を明にするには、少しく詳に墺洪國の南下政策と塞國の膨脹發展との來歷を說述するの必要がある。

墺洪國の南下と塞國の西進

ハップスブルグ王家は、本來バルカン方面をば餘り顧みなかつた。尤も全く雲煙過眼視したといふのではない。今日のボスニヤ又は塞比亞、匈牙利の所謂巴爾幹上部の地を、土耳古と共に奪ひ合つた事はある。現に一千七百十八年七月二十一日のポシヤレワッツの條約に於ては、之等の地方を土國より割いて自己の支配の許に置いた事もある。併し乍ら第十八世紀の末より第十九世紀の始にかけては、歐洲の中原に佛國大革命の爆發し、次で大奈翁の跋扈するありて、墺國は其爲めに忙殺せられて到底東方を顧みることが出來なかつた。現に一千八百四年カラ・ジョルヂが今日の塞國地方に據りて土國に對して獨立の反旗を飜し、救を墺國に求めた時も、對佛事件に忙しくて遺憾ながら其需に應ずる事が出來なかつたのである。其後ナポレンが沒落して後も、墺國はメッテルニヒ宰配の下に、歐洲中原に於ける自由主義の撲滅を以つて最重要の事業となして、更に他を顧みるの餘裕がなかつた。而して彼の保守的高壓政策は、徒らに自由主義者を激して國內にも

動亂が絕へなかつたのみならず、洪牙利も亦起つて墺國に對抗し始めたから、第十九世紀上半期に於けるハップスブルグ宮廷は、內憂外患交々到りて、到底東方の經略などに立ち入ることが出來なかつたのである。從つて此時代には、假令塞國がドン〳〵西方に發展し來るとするも、餘力を割きて之に備ふるといふやうな事は到底出來なかつたのである。されば此時代には、巴爾幹半島は露西亞の跳梁に委し、英國の僅に土耳古を操縱して之を制せんとせるものありし位にて、墺國は全く此方面の事を顧みなかつたのである。從つて此時代に在つては墺國は何等塞國と衝突する緣因は無かつたのである。

然るに、墺國は第十九世紀の後半期の始め頃から漸く東方の經略に眼を着くる事となつた。何故に墺國は急に從來の態度を改めて東方に志すに至りしかといふに、之は全く一千八百六十六年の獨伊に於ける敗戰の結果である。其故は從來墺國は歐洲の舊國として中原に覇を稱して居つたのみならず、又自らゼルマン諸邦の盟主として、當時の强國たる佛國に對抗し、隱然として歐洲の中原を己が活動の舞臺として居つた。少くとも今日の獨乙帝國の大部分と今日の伊太利の北部をば自己の勢力範圍と信じて居つた。現に伊太利には墺國は多くの屬領地を有して居つたのである。而して之等の地方には段々自由獨立の氣勢が盛になつて來る。從つて墺國宮廷は之が處置に忙しかつたのである。然るに千八百六十六年は不幸にも墺國の勢力を獨逸諸邦からも伊太利からも驅逐した。詳く云へば伊太利の統一運動は着々効を收めて遂に墺國の勢力を北部伊太利より驅逐し、又普墺戰爭の大敗は墺國をして全く獨逸諸邦から手を引かざるを得ざるに至らしめた。斯くて墺國は最早西歐の本舞臺に志を遂ぐるの望み全く絕へたのである。於是彼は始めて方向を一轉して巴爾幹に向はざるを得ざることゝなつた。是れ墺國が第十九世紀後半期の始めての方、東方の經略に志を向けた所以である。

墺國をして巴爾幹經營に志さしめたのはビスマルク

の政略に出づと說く人もあるが、之は必しも左樣とばかりはいへぬ。ビスマルクは普墺戰爭の舊怨を忘れしむるため、墺を助けて東方經略に志さしめしは事實であらう。併し墺國の東方に向つたのは、西方に希望を絕たれた自然の結果であつて、ビスマルクの煽動を待たずとも、斯くならざるを得ない次第なのである。セオドル・フォン・ソスノスキーが『ハップスブルグ家の巴爾幹政策』と題して去年八月の現代評論(コンテムポラリー・レヴィー)に記する所に依れば六十六年の敗戰後間もなく墺國宰相アンドラシー伯は此事に意を注いだと說いてある。併し墺國のバルカン經營は、後ビスマルクの慫慂によりて一大進展をなした事は事實である。蓋し人も知る如く、ビスマルクは、一つには佛國を孤立せしめんがため、一つには新興帝國の保安を計るため、墺國と同盟せんことを企てた。其爲めには、一方には墺に恩を賣りて舊怨を忘れしむると共に、他方には墺をして進んで獨に恃らんとするやうに仕向くるのが必要である。而してビ公は此兩目的を併せ達するの手段として墺國にバルカン經營を勸めたのである。墺國のバルカン經營は、獨逸が背後を衝かぬといふ保障が無ければ安心してやれぬ、然るに獨逸は今や進んで墺の東進を助けるといふ。是れ恩を賣る所以である。墺國の東進はさらでだに着々と南下し來る露國の勢力と衝突せざるを得ぬ。墺國の東方に於ける積極的發展は、今や自ら露國を敵とせねばならぬ羽目となつた。於是墺は獨と結ぶの必要に迫られる。斯くてビスマルクの苦心は巧みに功を奏し、一千八百七十一年七月には墺洪國の外相ボイストとガスタインに會見して協約締結の基礎を作るに至つた。之等の點はなほ後に說く機會あるが、要するにビスマルクの策略は、正に圖星に當り、墺は即ち獨を賴りとして、此頃から東方巴爾幹方面に對して積極的態度を執ることゝなつたのである。而して之を切ッ掛に、獨墺は益親しみ、始めは露西亞をも加へて所謂三帝同盟の存立を見たけれども、間もなくビスマルクは露を斥けて强國なる獨墺同盟を訂し(一千八百七十九年十月十五日)、以て今日の三國同盟の基礎をなしたこ

とは人の既によく知る所である。

斯く墺國は段々と東方に志を向ける様になつたが、併し之を以て直に塞國と衝突したのではない。墺國東進の前路を遮りて先づ之と衝突したのは、實は塞國に非ずして土耳其である。之も其筈で、墺國と直接に境を接するものは塞に非ずして土であつたのである。而して其方面に於ける墺土の衝突こそ、實に古い歴史があるので、第十九世紀で前半の五六十年間こそ、墺は中歐の事端に忙しくて東を顧みなかつたのであるが、其以前は隨分と此兩國は爭つて居つたのであつた。今や墺國は志を西を失ひ、轉じて東方に眼をつけることゝなつて、茲に墺土の古い歴史的の衝突は再び現實の問題となつたのである。次に墺國が東方に發展せんとするに當りて衝突したのは、獨り土國ばかりではない、露國といふものもある。此頃露國は、勃や塞やの後楯となつて土國を壓して來た。バルカン半島に於て、露の勢力は今や最早之を無視することを許さぬ。是に於て墺の露と衝突するのは當然である。斯く說き來ると、墺國は久し振りで再び東方の經路に手を着け始めたのであるが、最初に衝突したのは土と露とであつて決して塞ではなかつたのである。

バルカンに於ける墺國の積極的活動の第一幕は、云ふまでもなく一千八百七十八年の事件である。從つて此事件はまた露墺衝突の第一幕である。この事は後に露墺關係を說くに方り、猶詳く述ぶる積りであるが、只簡單に筋道だけを云ふと、ボ・ヘ二州の動亂が事の起りで露土戰爭となり、其結末が一千八百七十八年三月三日のサン・ステフアノ條約となつた。此の條約に依れば、露西亞は餘りに我儘勝手にバルカンの處分を決めたものであるといふので、英と共に墺が激烈に抗議を申し出した。其結果が伯林に於ける列國會議に於て、サン・ステフアノ條約を再議に附するといふことになり、かくて七月十三日の伯林條約となつた。而してこの條約の結果、墺國は從前土耳其領たりしボ・ヘ二州を占領し且行政するの權と、サンジヤク・ノヴイバザールに駐兵せしむるの權とを得たことは今更詳述す

るを必要とせぬ。之より墺國は益々東方に發展するの足掛りを得て、今や露と相併んでバルカン半島上に於ける拔くべからざる一大勢力となつた。

伯林條約の結果、墺が一兵を動さずしてボ、ヘ州を取つたといふことが、將來に於ける露墺反目の原因をなしたといふことは疑を容れないが、之がまた同時に墺塞兩國の反目の最も近い原因であると說くのは如何なるものであるか。今當時の歷史を調べて見るに、ボ・ヘ二州を墺國が占領したといふ事其自身は、固より塞國の氣持よく思つた事ではないけれども、去りとてまた非常に憤慨したといふこともなかつたやうである。成る程ボ・ヘ二州の人民は、墺國に合併せらるゝことを厭ふて大に動亂した。而して陰に其動亂を援けたものは塞よりも寧ろ土であるといはれて居る。固よりボ・ヘ二州の民は、土の壓制には苦んで居る。去ればとて墺國の屬國になることも亦希望する所でない。ソコで人の煽動する者あるに乘つて起つて墺國に抗したのである。之を要するにボ・ヘ二州を墺が取つた當初は塞國は大體に於て冷靜であつたと云はねばならぬ。併し乍ら二州の人民其者は決して爾く冷靜ではなかつた。彼等は土に就くを欲せず、又墺の配下に屬するを厭ふの餘り、寧ろ同族の隣邦塞國に合併せんことを冀ふに至つた。於是塞國人民は始めて成る程と合點したのである。實は後に別に說くことであるが此頃より塞國には段々一つの國家的膨脹の理想があつた。之を我々は大塞比亞主義と唱ふるのであるが、ツマリ同族の國外に散在せるものを糾合して、猶一層廣大なる版圖を有する一大帝國をバルカン半島上に建設せんとの理想である。斯く云ふ考が起りかけて來てゐる所へ、西隣のボ・ヘ二州の人民が、墺に反抗して、進んで自分の方へ合併せんとの希望を表明して來たのである。塞國人民たるもの何ぞ心を動かさずに居られうか、一體ボ・ヘ二州は、先にも述べたる如く、大部分塞民族の棲息する所である。從つて民族主義の原則から云へば、寧ろ塞國に屬するのが自然で、墺國に屬するのが不自然であるともいへる。この事を今や塞國人民は自覺し始

めたのである。ソコデ墺國が二州を占領したといふ事實は、塞國人の眼には、既に墺國が本來塞國の勢力範圍たるべき二州を奪つたものといふ風に映じて來るやうになつた。猶其上に二州の占領に依りて墺塞兩國は新に境を接する間柄となるから、塞は即ち墺の東南發展の恰度進路に横はつて居ると云ふ譯になるので、自ら之を警戒し、又段々猜忌の眼を以て見るやうにゝなる。斯くて從來冷靜であつた塞國人民は自ら心中墺國に對して不安を感せざるを得ざるやうになつて來た。且つ此不安、此猜忌、又この憎怨の情は更にボ、ヘ二洲の人民其者が一八七八年の伯林條約の決定に不服であつて多少の動亂を起した。墺洪國は其反抗を壓迫する爲めに、種々の高壓手段を用ひたといふ事に依つて一層昂められた。斯くして兩國反目の關係は自ら、段々に明になつて來たのである。既にして三十年の歳月は過ぎて一九〇八年となつた。此年十月墺洪國の外相エーレンタール男は突如としてボ、ヘ二州の合併を宣言した事は人の知る所である。彼は一片の宣言を以て列國の決定に成れる伯林條約の定めたる形勢に獨斷で以て一大變更を加へんとしたのである。從つて此處置には少くとも獨逸を除ける關係諸國は一齊に反對の聲を擧げたのである。而して此際最も強く反對し、否、非常な勢を以て憤懣の聲を發したのは云ふ迄もなく塞國である。塞國は巴爾幹諸邦中最も文明の程度の低い國ではあるけれども、近年なか〳〵發達して居る。殊に一九〇三年オブレノヴイッチ家の最後の王アレキサンダーが暗殺されて、新たにカラゼオルヂエヴイッチ家の現王ピーター一世が位に即いてから、長足の進歩を遂げたと云はれて居る。塞國が進歩すればする丈け塞民族發展の希望の念が強烈になり、即ち大塞比亞主義實現の希望が益々盛んになる。而して大塞比亞主義の差當りの具體的の目標はボ・ヘ二州の合併である。然るに此二州は遺憾ながら千八百七十八年來墺洪國の占領には歸したが、併し此二州が名義上は兎も角も尙土耳古に屬して居るのであるから、全然墺洪國に取られて仕舞つた、從つて自國に合併するの希望が全然絶

へたと云ふ譯ではないと云ふので、一縷の望を繋いで居つた。されば一部の塞國人民はボ、ヘ二州内の同族を促して排墺熱の作興に努めて居つたものはあつたけれども、然し極端な手段に訴へてまで墺國の政策を妨げると云ふ程ではなかつた。然るに今や墺國は此二州を完全に占領して全然土耳古の主權と云ふものを排斥して仕舞つた。是に於て塞國の一縷の希望と云ふものは全く絶たれたのである。塞國の失望思ひ遣るべきである。而して此失望は軈て憤懣となり、塞國は小國ながら正に干戈を執つて墺國と戰はんとしたのである、この事は既に我々の知る所である。當時露國も、一八七八年の伯林條約以來此事については墺國を恨んで居るのであるから、塞國を助けて墺國に當らんとしたのであるが、獨逸皇帝の一喝に逢ひ、日露戰爭後瘡痍未だ癒えざるの時とて、殘念ながら手を退き爲に塞國も亦墺國に屈したと云ふ事も已に人の知る所である。而かも此時塞國は墺國に迫られて「最早や墺洪國の兩洲合併に對しては、將來に於て妨害を加へざるべし」と云ふ約束までを取られた(一千九百〇九年三月卅一日塞國公使の維納外務省に提出せる覺書)。紙の上では斯う云ふ約束をしたが、然し胸の中は全く納まらないので、之より彼等は積極的に大塞比亞主義の理想を實現すると云ふ事は絶望に歸したから、かの國家の甚しき壓迫に困む所の社會主義者が、往々にして無政府主義か虛無主義になるやうに、あらゆる手段を以て墺洪國の妨害をすると云ふ一種の破壞主義になつて了つた。一九〇九年以來南スラブ地方に於て幾多の暗殺事件が行はれたが、之れ皆一として塞國と關係しないものが無いと云ふ事を以て見ても如何に塞國人の墺國に對する考が、一九〇八年を以て一大轉化をなしたかと云ふ事が分る。斯う云ふ風に塞國の方で極端な手段を採つて墺國を妨げると云ふ事になると、墺國は益々塞國と云ふものを寛容すると云ふ事は出來ぬ。さらでだに墺洪國が尙も巴爾幹方面に發展せんとせば=墺國が對外的發展をなさんとせば此方面に發展するより外に途が無い=到底塞國と衝突することは免れない。故に外の事は

[illegible]地位に居る。然るに今や塞國は墺國に對して前述べたやうな關係にあるのであるから、墺國にとつては塞國と云ふものは最も危險な國柄であると云はねばならぬ。是れ近年墺國が極力塞國を苦め、極力其發展を苦めるといふ方針を採るに至つた所以である。

次に塞國西進の來歴を見やう。今日の塞比亞王國と云ふ者の發生したのは、一千八百七十八年であるが、抑も彼が獨立の體面を得たのは、一千八百三十年である。第十九世紀以前は、土耳其の領土であつて、隨分と土耳其の壓迫を受けて居つたのである。之等の沿革は猶後に說かう。要するに塞民族は、目下の塞國地方に居るものと其他に在る者とに論なく、均しく永く土耳其の支配を受けて居つたが、一千八百四年、始めて今日の塞國の地に在る者の間に獨立運動が起つたのである。之れも畢竟は第十九世紀初頭に諸方に勃興し來れる民族的覺醒の一つの現象である。この覺醒の結果としてバルカンの西北は大に動搖したのであるが、併[illegible]て、遠い墺國とは何の交渉も無かつたのである。去ればば第十九世紀の前半に於ては、墺國も西歐の事に忙しかつたし、又塞國も土國と爭ふに專心して西の方を顧みる遑はなかつたので、從つて墺塞の爭といふものは全く無かつたのである。

塞民族が西方の發展を志すに至つたのは、彼が獨立の目的を達し、內部も一ト通り片が付いてから後の事である。內治れは自ら外に向ふは當然の理である。塞民族は實は近年まで內部が能く治つたとはいへぬ。けれども內部の整頓が稍緒に就くや、彼等は特別の理由ありて、何時とはなしに西方への膨脹發展を唱ふるに至つたのである。所謂大塞比亞主義といふのは即是である。

一體大塞耳亞比主義といふ辭は、彼の汎スラブ主義とか、汎ゼルマン主義などゝ類似した辭であつて、一種の民族膨脹主義であると云ふ事は明かである。尤も細かい事を云へば、民族の名前に汎と云ふ字を冠する

所の文字は、いろ〳〵の意味に用ひらるゝ事がある。最も廣き意味に於ては、或一民族の文明を以て他の民族をも支配せんとするの主義と云ふ意味に用ひらるゝ。例へば今日獨逸の一部の人の間には、ゼルマン民族の文化を以て全世界を支配せんとするの抱負を有するものあるが、之を汎ゼルマン主義と云ふが如きは之れである。然し之は普通の意味ではない。普通には或一民族中の主たる部分が或獨立の一國を成し、而して其國が自國内に發達したる文化を以て、其國以外に散在して居る同一種族を精神的に又は法律的に支配せんとする場合に此辭を用ふるやうである。汎スラブ主義と云ふのは、若し露西亞が中心となつて巴爾幹諸邦の同族を精神的に或は法律的に支配せんとする意味に用ひらるゝならば即ち此第二の意義である。其中堅となる文明が、他の同族を全然其主權の中に包括するか、或は單に其勢力範圍の中に入れるに止むるかと云ふ事は深く問ふを要しない。又第三には各所に散在する同文

用ふる事もある。要するに斯の如き辭を云々する場合には、次の二つの事を豫想する。一つは或一民族の一部分が己に獨立の國家を成して居る事、及び第二は他の一部分が其國家以外に存して居ると云ふ事である。我が大塞耳比亞主義も亦之と同樣であつて、先づ第一には塞耳比亞民族の一部が己に獨立の國家を成して居るのである。そして他の一部分がまだ獨立の國家を成さずして他の第三國の羈絆の下に屈服して居るのである。塞民族にして獨立の國家を成して居るものは二つある。一つは云ふ迄もなく塞耳比亞で、他の一つは黒山國である。黒山國の事は今直接の關係が無いから茲には述べぬ。それから塞民族にして塞耳比亞以外に存するものは其の數頗多い。之は又後に說く。斯くて塞國民は自國以外にある同族を何とかして自國の勢力の下に包容せんことを希望して居る。又之は單に希望のみに止らずして今日では現實の運動となつて居る。斯う云ふ思想乃至運動を我々は大塞耳比亞主義と云ふの

塞國が獨立を完うしたにはしたが、其内部の整理が未だ十分につかぬのに、何故に早く對外發展の大抱負を懷くに至つたか。之には特別の理由があると思ふのである。最も近い理由は、すぐ自分の國の隣に、自分と人種宗教を同ふし、從つて思想感情を共通にし、而かも他國の羈絆に屈するを肯ぜずして自國に來り投ぜんと欲する民族の存在することである。之は云ふ迄もなくボ・ヘ二州の人民を意味する。ボ・ヘ二州の人民の過半は正教を奉ずる塞民族に屬し、塞國人民と最も近密の關係に在ることは嚮にも述べた。之等の人民は土領たりし時代には土國より離れ、墺領となりて後は亦墺國より離れ、以て塞國に合體せんとして居るのである。斯くては塞國民たるもの、如何して西方發展の考を抱かずに居られうか。單に之れ斗りではない一つ重大なる原因がある。それは云はゞ歷史的回顧の情といふものである。それは塞耳比亞は十九世紀の初めまでの長らくの間は、土耳古の領分であつたけれども、昔は一つの獨立の國家であつた事がある。いはゞ今日の塞耳比亞國は、昔の塞國が一旦土耳古の征服を受けて久しく其壓服の下に屈して居つたのであるが、それが十九世紀の初めに復活したものと見ることが出來るのである。而して昔盛大を極めて居つた其塞耳比亞國は、有名なステファン・ドウシャン大王(一三三一―一三五五年)の時には、或は戰爭により、或は同盟の關係により、殆んど巴爾幹半島全體を支配し、現に一三四六年には帝號を稱して威風堂々東歐を壓したと云ふ歷史がある。之が今日でも尙塞國人の間に傳唱されて、彼等は常に往時を回想して絕えず勇猛の精神を作興して居るのである。昔の塞耳比亞往時の領土は、最近多くは他國の領有に歸したが、十九世紀の半ば頃殘つて居る重なるものはボ・ヘ二州のみであつた。黑山と塞耳比亞は何れ早晚合併さるべき國柄である。そこで彼等は黑山國とボ・ヘ二州とを併せて他日塞耳比亞の大帝國を復興しやうと心掛けて居つたのである。之は單に一片の空想に止まらず、現實なる彼等の熱望であつたと云ふ事は多くの人の唱ふる所である。それが

最近墺國の沮止する所となり、殊に一九〇八年には殆んど絶望の淵に陷れられたのであるからして、そこで彼等は大いに憤慨して塞耳比亞帝國の光榮ある前途は墺國の不逞の慾望の爲めに妨げられたりとなして激しく排墺熱を煽るに至つたのである。

墺國の南下政策と塞國の西進政策とは、右述ぶる通り、之等兩國の歷史的發達の上から見ると、實は已むを得ぬに出づるものであつて、外に何とも致方が無いのである。從つて兩國はドーセ早晚衝突すべき運命に際會して居つたのである。けれども之等兩國が最近斯くも烈しく衝突するに至つたについては、他にモ少し深い原因があると思ふ。

今までに述べた所で見ると、墺塞兩國の關係に於て主として憤激したのは先づ塞國のみである。墺國は最初ボ・ヘ二州を塞の激怒を承知の上で取るには取つたが、別に此上塞國をイヂめやうとは思はなかつた。之が爲めに非常に怒つたのは塞國のみで、墺國は比較的

喧嘩には成り得なかつたのである。且墺國は最初飽くまで塞國を苦めやうといふ考は無かつたのみならず、寧ろ塞國を懷柔して我が用を爲さしめんとした事もあつたと思はるゝ。そは勃牙利を通して殺倒し來る露西亞の勢力に當らしめんとの魂膽であつたと察せらるゝ。勃の露に對すると同樣の關係を塞との間に結ばんと苦心したのである。然るに此等の企圖は何れも塞國の鼻息が荒いので畫餠に歸した。墺は斯くて塞國に對して匙を投げた。扨て匙を投げて見ると墺は今更ながら塞國より來る危險を新に感ずるやうになつた。塞國はボ・ヘ二州に於ける墺國の經營を妨害するといふことの外、更に如何なる危險の種を墺國に對して有するか。之には次の三つの種類がある。

(一)大塞耳比亞主義の運動は、自ら墺洪國南部沿岸地方に在住する南スラブ民族を動搖するの恐あること。

(二)塞國は海岸線を有せず、之を有せんとするは

に勢力を得んか、彼は直に進んでダルマシアの經略に取り掛るべし、是れ墺國の大に警戒するを要する所なりと認められしこと。

因に云ふ、ボ・ヘ二州は、海岸に近いけれども、殆んど全部ダルマチヤといふ細長き州に包まれて、海岸への出口がない僅に南方ヘルツエコヴイナが數哩の役にも立たぬ海岸を有するのみである。故にボ・ヘ二州の領有は、更にダルマチヤの領有を加へねば、何の役にも立たぬのである。

(三)塞國が西北に於てか又は西南に於てゞも、兎に角海岸線を得て大に國力の發展を來すときは、啻に從來より一層墺洪國に強く當るばかりでなく、風を望んで墺洪國内の南スラヴ民族の獨立心を煽るの恐あること。

因に云ふ。塞國は全く他國領土に包まるゝの結果、海外貿易上に於ては當時全然土耳其と墺洪國とに對し從屬の地位に居つたのである。

右の樣な理由で、墺國は國内の安寧の上から云つても何とか塞國を屈服せねばならぬ必要を認むることゝなつた。少くとも自國内の南スラヴ民族の目の前で、塞國の爲すべきを公示するの必要を感じた。況んや近年塞國は事毎に墺國に楯を突くに於ては、何の遠慮も要らぬのである。斯くて墺國は最近數年來塞國に對して斷然なる態度をとることゝなつたのである。是れ兩國が近年殊に反目の度を深うし、而して其自然の結果として塞をして露に接近せしめた所以である。

墺塞兩國の反目の最近の歴史

最近に於て、墺塞兩國の反目の最も著しい例は、バルカン戰爭中に於て兩三度現れた。此戰爭の經過中に於て、この兩國は、屢干戈を執つて戰場に見へんとするの危機に迫つたのである。抑も巴爾幹半島の戰爭は一千九百十二年十月に初つて、十三年の八月を以て一段落を告げたのである。無論其引續きとして、いろ〱未決の問題が殘つて、それは今度の戰爭の始まるまで引續いて居つた。又今後にも引續くであらうと思ふ。然し大體は一昨年の八月に結末がついたのである。而して此間約一ケ年間、塞國と墺國と、將さに戰端を開かんとする程に衝突をした事が少くとも三度はある。今この事を簡單に說明しやう。

一千九百十二年十月、數月來暗澹たりし巴爾幹の險雲は遂に雷電のすさまじさに形を變へて、土耳其に對する四國連合の戰爭が始まつた。戰爭の結果は、人々の豫想に反し土の連戰連敗に歸し、聯合軍は各々豫定

の如くマセドニア方面に兵を進めた。此時塞國は兼ての希望に從ひ、更に兵を西に向けてアルバニアに出て、以てアドリアチック海に進み出でんとしたのである。蓋し塞國が全然海岸線を缺き、其の爲めに非常な不利益な地位にあると云ふ事は今更ら云ふを俟たぬ。故に彼が海に出でんとするは多年の希望であり、巴爾幹戰爭に加はつた目的の最も主なる一つは、アルバニアを割取して以て海に出でんと欲した事にある。一體塞國本來の實利關係から云ふと、ボ、ヘ二州よりも寧ろアルバニアの方が欲しいのである。ボスニアは海に近いけれども、ダルマチアで全然海岸から隔てられて居る。ヘルツエゴヴイナも亦ダルマチアに圍まれて居るが、其南端に於て僅か二三哩丈け海に面して居るに過ぎず又港と云ふ程のものも殆んど無い。故に海として用をなさぬのである。只此地方は前にいつたやうな歷史的の關係から合併を希望するに止るのである。實際の利害關係から云へば之を捨てゝもアルバニア丈けは手に入れたいと云ふ希望を持つて居る。故に土耳古に對して戰を宣するに先つて、彼はブルガリア其他の諸邦と密約を結んで、いよ〳〵開戰をした曉には、自分はアルバニアを取ると云ふ事を約束した。されば一旦開戰して着々勝利を占め、土軍を南方に追ひ退くるや、マセドニアの要都ユスキツプを陷れ、十一月二日國王が花々しく此處に入城して、再び舊都を敵に返さぬと云ふ勢を示した。それから更に兵を西に進めんとする勢を現はした。すると墺國は之に大々的の抗議を申し込んだ。尤も初めは、即ち十一月三日には、只半官報をして一種の抗議を述べしめたに止る、即ちユスキツプ以西の地はアルバニア人の住する所だから、塞國人の之を占領する謂れがないと云ふやうな記事を以て警告した。然るに十一月十一日に至つては、公然塞國に對して、「我國は依然アルバニア人のアルバニアと云ふ主義を採つて居る。貴國がアドリアチック海に出るは、我國の斷然承認するを得ざる所なり」と云ふ警告を發したのである。之よりアルバニアの土地に關して塞國と墺國とが大いに爭ふと云ふ事になり、次いで此塞國の要求を露國が助けると云ふ事になつて、塞國と墺國との反目が一轉して露國と墺國との反目となつた。當時列强諸國の一般の意嚮では、塞國の此要求は當然だ、況んや戰勝の結果は之を認めない譯には行くまいと云ふやうな考であつたけれども、墺國は密かに獨逸の後援を賴んで、此點に關しては斷然何人の意見をも容れないと云ふ態度を示した。而してアルバニアは獨立の一國たるべしと云ふ事を主張した。斯う云ふやうな譯で、一方は墺國、一方は塞國、露國。此双方が相對して其關係が益々險惡となつた。十一月の央には塞軍の占領地域内で、墺國領事が塞國軍より侮辱を受けたとか云ふやうな出來事があつて、尙一層兩國民の間を遠ざけた。而して塞國は露國の後援があるものだからして、墺國の警告に拘らずドン〳〵兵を西の方に進めた。十一月の下旬にはアドリアチック海の一港を占領するに至つたので、そこで此兩國は益々緊張した關係となり、從つて墺露兩國も激しく反目する事になつた。其結果十一月の廿三日、此等の三國は各々其境上に動員し正に戰爭の開始を見んとしたのである。當時予は巴里に居つたが、新聞は屢々「墺露兩軍

[illegible]うな號外も現れた。露人墺人で露國の内命を受けて露國をまつたものも少からずあると云ふ事を耳にした。此時は幸に所謂倫敦大使會議の盡力によつて事無きを得たけれども、然し塞國の事に關して墺露開戰せんとせるの機會は巳に去年を俟たず、一昨々年の暮れにあらはれたのであつた。而かも反目の關係は三ケ月に亘り、墺露兩國が各々動員を解いたのは漸く一昨年の二月廿七日の事である。序に申して置くが、當時墺國は極力塞國の西進を沮止せんとして、アルバニアを獨立の一國とすべきの主張を固執したのみならず、更に全地方を自己の勢力の下に置かんが爲めに、アルバニアの豪族イスマイル・ケマル・ベイを使嗾して十二月廿九日を以て獨立の宣言を發せしめた。當時の表向きの報導によれば、彼は獨立の機運到來したと云ふ事を豫想して、宗教、種族の區別如何を問はず普く洲内各方面の代表者を招ぎ、所謂國民議會を開いて獨立の決議をなしたと云ふ事である。十二月の六日には、自ら首相となつて假政府を組織したのであるが、彼が此月の七日維納に赴むきて屢々要路の人と會見し、十八日漸く故郷に歸つて、廿九日獨立の宣言をしたと云ふ事を以て見ると、其背後に墺國があると云ふ事は蓋し事實の眞を得たものと云はなければならないと思ふ。而してアルバニアを列國共同保護の下に、獨立の君主國とすると云ふ事は、後十二月の廿日に、倫敦大使會議で決定されたのである。詰り墺國の說が勝を占めて、露國と塞國は其要求を撤回し、就中塞國は其多年の希望、殊に其經濟的發展に缺くべからざる[illegible]案の第一の衝突である。

第二には、一昨年六月卅日、勃牙利は先きの同盟國たる塞耳比亞、希臘を敵として戰つたのであるが、之にも亦墺太利が關係をして居ると云ふのである。一體聯合諸邦と土耳古との關係は、一昨年五月三十日の倫敦平和條約で決定した。此條約は土耳古がどれ丈けの土地を聯合軍に割讓するかと云ふ事を決めたので、其割讓を受けた土地を聯合軍の間で如何樣に分割するかと云ふ事は固より決めてない。之は聯合軍の間で、別に決むべき問題となつて居つた。然るに此占領地の分割の事に關して、勃牙利が塞、希兩國を敵として爭ふと云ふ事になつた。而して勃と塞とが此事について反目するに至つたのは五月の半ば頃であり、此爲めに露國皇帝が非常に斡旋せられたと云ふ事實もある。之より先き羅馬尼は巴爾幹戰爭に於て全然中立を守り、勃牙利をして後顧の憂なからしめたと云ふ事に對して、或要求をなした。此要求を勃牙利は拒絕した。其中に

勃と塞との關係が切迫したのであるが、其後に羅馬尼が、若し勃と塞との開戰を見んか、我國は今回は決して傍觀の態度を取らぬと云ふ事を宣言した。さうすると勃牙利は、一時に三國を敵とせねばならぬ事が初めから分つて居る。のみならず勃牙利が三國を敵として戰ふと云ふ事になれば、其虚に乘じて土耳古も亦少くともアドリアノープルを回復するの目的を以て、勃牙利に對して起つだらうと云ふ事も豫想せねばならぬ。斯く考ふると云ふと、勃牙利が塞、希兩國に對して戰爭をすると云ふ事は少くとも此等の兩國の外に羅馬尼、土耳古をも敵として起つ丈けの決心が無ければならぬ。勃牙利如何に勇猛なりとも、戰後疲弊の身を以て、新鋭の羅馬尼に更に三國を加へたる勢力に對抗して勝算のある譯がない。そして初めから全然見込の無い戰爭を徒らにやる譯が無いから、必ずや其背後に於て勃牙利を煽動したものが無ければならぬ。斯う云ふ者は少くとも塞耳比亞に於て盛んに起つた。斯くて塞耳比亞は、何者が勃牙利の背後にあるかと云ふ事を考へた。從來勃牙利の膨脹を援け、又勃牙利の膨脹に利害關係ありとして知られて居つたのは、露西亞と墺太利のみである。然るに今度は露西亞が決して此役目を勸めないと云ふ事は初めから分つて居る。何となれは彼は非常な決心を以て、調停を計り、其爲めに此等諸國の總理大臣を彼得堡に集めて此問題を決定せんとした位であるからである。して見ると勃牙利を援けたものは墺太利の外にない。然らば何故墺太利が勃牙利を援けたかと云ふに、塞耳比亞は之を解して、勃牙利の膨脹によつて塞耳比亞を抑へんとしたものに外ならぬとして居る。斯くて此第二次の巴爾幹同胞戰爭を機として、塞耳比亞は再び墺太利を憤るに至つた。單にそれ計りではない。いよ〳〵此戰爭が勃牙利の全敗に終り、七月の末に關係諸國の全權公使が羅馬尼の首府ブカレストに集つて平和談判を開くと云ふ事になり、其結果八月十日平和條約は調印せられ、勃牙利は著しく其取分を減ぜらるゝを見るや、墺太利は露西亞と共に此條約に對して修正權を留保すると云ふ事を言ひ出

した。一體巴爾幹半島上の問題は、兩歐列强の共同承認を得なければ、最終決定を見たと云ふ事は出來ぬ。切角出來上つた平和條約でも、巴爾幹半島諸國同志丈けでは未だ終局とは云ふ事が出來ぬ。之を確定的のものと見るべきや否やは一に列强の態度如何によつて之を決しなければならぬ。而して列强は大體に於ては此上文句を云ふ事は徒らに平和の回復を紛更するの虞があり、且つ又さらでだに動もすれば破れんとする列强の共同し歩調をも危うするの恐れがあるからといふので、大體に於て此平和條約を承認しようと云ふに傾いた。然るに露西亞と墺太利とは、初より此平和談判の進行には不同意であつて、現に條約の決定以前に卽ち露西亞は八月三日を以て、又墺太利は八月六日を以て平和會議の議長(羅馬尼總理大臣)に對して他日修正を提議することあるべき旨を通告した。之と同時に兩國の新聞は盛んに修正權留保の必要を唱へた。何故此等の二國が修正權の留保を唱へたかと云ふに、共に勃牙利の勢力の著しく减退することを欲しなかつたからである。何故勃牙利の勢力减退を欲しなかつたかと云ふ理由に至つては二國全く異つて居る。露西亞は勃牙利の發展其物を自國の爲めに利益とするのみならず、之によつて羅馬尼を抑へんと欲するのである。墺太利に至ては勃牙利の勢力の消長其物には何等の關係が無いけれども、只塞耳比亞を抑へんが爲めには、勃牙利をして成る丈け大なる勢力を保たしめ置かんと欲するのである、と塞耳比亞人は考へて居る。此點に於て亦塞國人は墺太利人を恨むのであつた。尙又墺太利は、此當時勃牙利の爲めにイーヂアン海上のカヴアラ港を得せしめんと非常に盡力した。カヴアラ港は巴爾幹戰爭の初めから希臘と勃牙利との爭點であつた。初めは勃牙利に屬する譯になつたのであるけれども、第二次の戰爭に於て希臘に歸して了つた。墺太利は之を再び勃牙利に回復せしめんとして大いに盡力をした。是に於て塞耳比亞は云ふ、勃牙利は己に黑海方面に海岸を持つて居る。それにも拘らず墺太利は勃牙利の爲めにイーヂアン海上に於ても亦一良港を得しめんと盡力して

居る。然るにも拘らず、彼は何故に初めより一寸一尺の海岸線をも有せざる我が塞耳比亞國の海上に發展せんとする當然の要求を、力を極めて沮むのであるかと。之れは當時の塞耳比亞人一般の考であつた。之によつて更に墺太利憎惡の念を深くしたのである。

第三に昨年の秋アルバニアに動亂が起つた。此事に關して塞耳比亞と墺太利と爭ふた事がある。八月より九月にかけて北部のアルバニア人の間に動亂が起つて、此等の動亂が漸次北の方に蔓衍して、塞耳比亞、黒山二國を侵すに至つた。是に於て九月二十三日塞耳比亞は内閣會議を開き二個師團に動員を命じ、アルバニア人を追ひ境界を超えて兵を南に進めた。黒山國も亦同樣の處置に出でたが、之は玆に直接の關係が無いから述べぬ。十月十日塞耳比亞は全くアルバニア人を屈し、アルバニア領内に於ける軍略上の要地を占領した。扨てさうなると、兼々塞耳比亞に對して神經過敏なる墺太利は、非常に心配になつて來た。塞耳比亞は此動亂を利用して豫ての領土擴張の野心を遂行するのではあるまいかと云ふ疑を抱いた。尤も此時塞耳比亞では、アルバニア人の暴動は墺太利の士官が現に之を指揮して居る。墺太利が塞耳比亞をいぢめる爲めにやつた仕事だと云ふ風説が普く行はれて居つたからして、多少必要以上に塞耳比亞が兵を深く進めたと云ふ嫌ひもあつたらしい。其等の點からして墺太利は強い嫌疑の眼を以て塞耳比亞の行動を監視し、已に九月の二十七日には「貴國がアルバニア人の侵入を撃退せんとするに對しては、一向異議はない。けれども、只倫敦大使會議で決定した所の國境線＝アルバニア獨立國の國境は大使會議に於て之を定めた＝は之を紛更して貰つては困る」と云ふ事を云つた。十月一日に又之と同樣の警告を繰り返した。そこで塞耳比亞は「今度の行動の目的は全然自衛にあり、大使會議の決定は飽くまで之を尊重する」と答へた。けれども塞耳比亞が、いよ／＼十日を以てアルバニア領内の重要地點を占領するや、墺國朝野の人心は非常に激昂して、遂に十五日に至つて墺國は「塞國がアルバニア本部内に於て或

る地點を占領することは、其如何なる地點たるを問はず、我國は斷じて之を容認する能はず』と云ふ嚴重な聲言を發した。爲めに、塞耳比亞は半官報をして『政府は已に占領軍隊に對して現占領地帶より前進せざること、及び單にアルバニア人の攻擊に對し守勢を取るに止むべきことの二點を訓令した』と云ふ事を聲明せしめたけれども、墺太利は之を以て滿足せず、遂に十月十九日を以て最後通牒を送り、八日以内にアルバニアより撤兵するに非ずんば、我國は自由行動を執ると云つて塞耳比亞を脅かした。是に於て塞耳比亞は遂に墺太利の威嚇に屈して二十日撤兵を開始し、二十八日之を完了した。此墺太利の處置は列强協調を破るものとして英佛等の非難を受けたるも、兎も角も墺太利が塞耳比亞の西部に於ける發展に對しては、開戰を賭しても之を妨ぐると云ふ堅い決心のあるといふ事は之によつても明白である。

時局横議

福本日南

歐洲の大戰は何の時にか終熄せんとは世界一般の嘆聲である。此秋に當つて內外に頭を擡げたのが日本出兵論である。歐洲方面に於ても佛國乃至英國には其呼聲が最も高きやに受取られる。其中でも佛國の前外相ビション氏が之を唱導するが如きは左まで不思議もない。彼は由來日本兵の大信者である。彼は曾て北京公使として明治三十三年の拳匪の亂に同地に於て籠城した一人である。從つて日本軍の善戰善鬪を極めてよく

熟知して居る。彼が後日佛國外務大臣となつた日に日佛協約を締結したのも原はといへば以上の感情から來たのである。彼は比較的に坦懷な人と見えて日佛協約案を議會に提出し、之か說明演說をなすに當り、自分が本日此議院に上つて諸君の前に本案を提出することを得ると云ふのも畢竟日本兵のお蔭である。北京籠城の當時若しも日本兵の來りしことを微せば此ピション等が生命は其際拳匪の爲めに奪ひ去られたのであつたとまで云つて居る。其際の事を顧れば、救援軍は獨り日本兵のみならず英佛露獨皆之を派遣したのである。英露獨までは他人の事であるから眼中に置かずともよろしからうが、佛國の政治家を以てして自國の救援兵が出て居るのにも拘らず、單に日本兵を擧げて其恩賴を感謝した。此一事に見ても如何に彼が日本軍の價値を見拔いて居たかゞ追想される、それ丈け此人等の口によつて日本出兵論の唱導せらるゝのは左まで不思議もないが、今回大戰の初に當つては日本の活動を支那海に彼等が險しき時に神を賴まんと欲するかゞ見え透いて多少笑止な氣味もする。が、それは他人の褌で角力を取らんと欲するのであるから歐洲人としては一の得計であるかも知れぬ。左りながら我本國に於て同じく之を唱導するものあるに至つては沙汰の限りである。全體國防の目的の爲めに義務兵役を課して徵集したる國民を、國家の存立と何等の關係もなき事業に使用せられて堪まるものか。主張者の心計とかを傳へ聞けば、二十億の外債を英佛あたりに醵出さして而して三十萬の大兵を出す。之を用ゐて獨逸を叩き附けて、依て以て數億圓の償金を取る。すれば出兵の費用を如何に多く見積るとも二十億圓を超ゆるとはない。夫れ故之を差引いて尙手取りの二十億圓と云ふものがある。之を用ひて日露戰役以來の總ての外債を償却するに足ると云ふのであるさうな。談何ぞ容易なりや。それが旨く論者の工夫通りに參るならば一つ計算を試みて見よう。全體計算力にかけては日本人よりは歐洲人の方が甚だ

本人が三十萬の兵を出して四十億圓の償金が取れるなら英國とても十五萬内外の陸軍を大陸に派遣してゐる。されば三十萬人の四十億圓に對し、十五萬人の英國は二十億圓の償金を取らねばならぬ。此等は出兵數の少きものであるから其額未だ多きに上らねど、各々百五十萬人以上の兵を出した露佛兩國は、夫れ〳〵二百億圓以上を取らねばなるまい。之に白耳義、塞比亞各々十五萬以上の兵を出して居るとすれば之も亦夫れ〳〵二十億圓以上のものとなる。ザット之を合計すると五百億圓の償金に達する。獨逸が如何に中歐の大國かは知らねど、而かも其れが戰敗後に五百億圓の償金を如何にして出し得るか。カイゼルを倒さに吊るして其尻をひつ叩いても五百億は愚か五十億でも恐らく容易ではなからうと思ふ。多分之は暦が正月に入つたので寶舟の夢でも見損つたのであらう。

但し之に反對して用兵不可能論を唱導するものに至つては、又己れを知らず、兼て兵を知らぬものと云はねばならぬ。不可能論者に聞けば第一に日本人が歐洲の地理に暗い事を云ふ。從つて日本人が本國や乃至近傍の諸國で戰ふ程戰へぬと云ふ。斯くの如き徒輩は共に兵を論ずるに足らぬ。若しも遠隔にして其地理に暗いが故に戰へぬと云ふならば、カルタゴ人のハンニバルはアルプスを超えて羅馬に入ることを得ず、匈奴人の成吉思汗はウラルの山脈を渡つて東歐に突入することを得ざりしならん。考へて御覽なさい。千古の上に生れたハンニバルや成吉思汗と我々とは何れがより多く地理學者であるか。今頃當年のままでハンニバルや成吉思汗が出て來たなら我らは此等をテーブルの前に集めて天然地理や政治地理の講釋をして聞かしたい位のものである。戰は要するに Coup d'œil militaire（戰略眼）如何にある。それの無い位の奴なら百萬遍地理書を講じても物にはならぬ。それで地理的關係を以て戰へぬと云ふ論は取るに足らぬ。

次には氣候の關係を云ふものがある。極東の兵を極西に持つて行つたらば氣候の爲めに過半弱るであらうと云ふ杞憂を爲すのである。之も亦日本人を知らぬも

のと云はねばならぬ。彼の日露戰爭の初めに當つて露兵は何と云つてゐたか。日本人は暖國の奴であるから、此春夏の交こそよく戰へ、今に見ろ、祁寒隆冬が來たならば彼等は一溜りもすまいと云つてゐたのである。處がそれが抑々の大當て違ひであつたのであつた。と云ふのは如何にも吾人は溫帶の地に棲息する。去りながら吾人の生活は古のスパルタ人以上の生活である。只今此お話をする此席でも云ふ事が出來る。眼前には僅かに螢の如き炭火を火鉢にたゞへ、而して周圍は薄き紙一枚の障子を以て障へてゐるのである。室外の溫度と室內の溫度に幾何の差があるか。恰るで野外生活と一般の生活をなし來るものが即ち吾人日本人である。お負けに仲間の中のしやれ者に至つては伊達の薄着と唱へて寒中に襯衣一枚さへ着けぬものがあるではないか。之に反して露國人は國こそ寒國に棲息すれ、彼等は大概身には厚き毛皮を纏ひ、其住居としては煉瓦若くは巨材を組み合せて寸隙だもなき室の內に暖爐を焚いてゐるのである。されば日本人より寒氣に弱き生活をし來つてゐたのである。爲めに戰鬪は兩年に亘つて冬季を經過した。其冬季の戰ひに於ても亦日本人は彼等より、より多き活動を經續したのである。自分は今に記臆する。筑前の博多と云へば國中では先づ溫暖中の溫暖に屬する地方である。此處に送られ來つた露西亞の捕虜連中が、收容された一室に於て寒氣に堪へず、監督官に向て障子の紙を內外表裏から幾枚も澤山に張つて呉れろと申し出た事がある。之によつても日本人が寒氣に最もよく堪へ得る事が分る。且つ又今日出兵して戰ふべき地は獨佛白三國の中であらう。あの邊は世界中でも最も氣候の快適な所である。日本人は氣候に弱る處ではなく、之は愉快と働くであらう。

次に聞くのは食物の關係論である。之は獨り素人論のみならず先頃も或有力なる陸軍の中將某からも聞いた。日本人が歐洲に於て戰ふとすれば食物の關係上兎ても本國に於けるが如き健康を保つことが出來まいと云つてゐる。之は即ち日本人そのまゝの日本人に

ざるも亦甚しいものである。全體日本人の胃腑ほど世界的なるはなからうと思ふ。歐洲人に在つては其習慣食物以外には多く之を食ふことが出來ぬ。試みに彼等にプン／＼臭ひのする澤庵漬を差附けて之を食へと云つて御覽なさい。鼻を摘んで逃げ出すであらう。が、そこに至ると日本人はエライものである。味噌汁を旨いと食ひながらスープも結構、ポタージも至極妙とするのである。澤庵の代りにフロマージを差附けられても左までは辟易せぬ。獨り西洋食のみならず、支那に入れば支那料理は至極旨いと舌鼓を打ち、南洋に赴けばプラタナと米との混飯を食つても平氣である。昔の言葉に乾坤を呑吐すると云ふ事があるが、乾の方はイザ知らず坤の方面に於ては人類の食物と云ふ食物は皆呑吐し得る。否、呑吐するのではない、悉く健啖し得る。日本人が世界に擴大し得べき第一の要素は此胃腑と思ふ。生活の程度が程度丈け歐洲兵の平食は日本の夫れよりも優つてゐる。佛兵の用ふる黑パンなどは嚙つて見ればなか／＼旨い。お國に於ける一圓や五十錢の安西洋料理のパンなどに比すれば遙かに上等である。歐洲に出兵したからと云つて何で食物に弱るものか。

次に聞くのは士氣不揚論である。數千里の外に戰ふとなれば望鄉の情に堪へずして本國乃至近傍で戰ふやうに強くなからうと云ふのが又一つの論である。之も亦己れを知らざるの甚しきものと云はねばならぬ。近來段々日本人も横着にはなつた。去りながら國際に對しての日本人はまだ／＼初心である。眞面目である。海外一歩の地に其足を移せば如何なる匹夫匹婦と雖も國の名譽を傷けまいとする。況んや歐洲の大亂に當り列國が手古摺つてゐると云ふ獨逸に向ふに於てをや。若しも出兵したとすれば、吾人は其兵の士氣揚らざるを憂へずして餘りキバリ過ぎて死なぬでもよき處にドン／＼死ぬであらうと云ふ事を恐れるのである。善戰は我等日本人のお手のものである。海外に出て悄氣るのなんて、そんなケチな人間ではありません。然し之は戰はせれば天涯地角何れの地に於ても戰ひ得ると云

ふのである。が、國防の目的に反し、一國の干城を白人兵の掩蓋などに當てられて堪まるものではない。それで出兵は不可なりと云ふのである。

且つ又策としても出兵は決して國策でない。何となれば今歐洲の列强は敵も味方も疲困を極めて居る最中である。開戰當時に繰り出した精銳の兵は大概死傷して昨今に至ては何れも劣弱の兵を以て相對して居るのである。申さば弱虫同志の戰である。御覽なさい。佛白國境に戰ふ英佛對獨の兩軍は穴にばかし潜つて居るではないか。恰るで鼹鼠の喧嘩に似て居る。斯る有樣に落ちてゐる所に假りに我精銳三十萬を電發して其一角に當るとせんか、確かに形勢の上に一變化を與へるであらう。之を言ひ換ふれば此三十萬の兵力丈けで歐洲の大勢が變ると云ふ事は言ひ得ぬまでも、之が大勢一變の動機となるべきは殆んど疑を容れぬ。されば其効は偉大なるものであるから一時聯合軍側に喜ばれるに相違ない。然しながら思慮すべきは此處にある。喜

心を彼等歐洲の社會に傳播することが又請合である。比較して之を云へば、我軍の効績を喜ばれるのは三分にして、由つて以て日本人の恐れらるゝのは七分である。此七分の恐怖心を今日歐洲に播くと云ふ事は卽ち世界に播くと一般である。吾人の考慮せざるべからざるは此處にある。論より證據。此恐怖心の萠芽は日本出兵論の唱導せらるゝ其傍から頭を擡げつゝある。和蘭人はバタビア一帶を行く〳〵は奪はれんことを恐れ、出兵論の發頭人たる佛國すら、之で勝たれたら行く〳〵印度支那は我有であるまいと恐れつゝある。出兵せぬ以前から已に斯くの通りである。況んや之を實行するに於ておやである。且つ尙茲に考へねばならぬのは歐洲列强の狀態である。一方は獨墺、他方は英佛露、此双方が交戰の初めに當つては種々な希望を持つて居たのである。就中カイゼルの如きはシーザー、ナポレオンの夢を見てゐたのである。然るに一朝戰を交へて見ると其意の如くならざるは敵も味方も同樣であ

獨墺とで殆んど腕押しをして居るやうなものである。力は先づ相當つたるものといはねばならぬ。此上は單に氣根競べに過ぎぬ。其れより以外には智惠も分別もあつたものではない。是に到つて彼等はしみ〴〵と痛感する。磨き上げたる强國同志で互に相爭ふは百損あつて一得なしとの新格言を得たであらう。すれば此局面を一轉すれば彼等は歐洲の爭から出でゝ文化の程度の彼等よりも低き邦國に向つて何れも力を伸ばさんとする事は最早や疑を容れぬ。其地方は何處にある。南方は亞弗利加、東方は支那である。就中支那は其競爭の焦點となるべきは鏡にかけて見るが如しと云ふも過言で無い。

　此秋に當つて我日本は、日本未來の發展の第一條たる此大陸を歐洲列强の競爭に任かして見てゐる譯には行かぬではないか。日本の第一に力を用ふべきは此處にある。加之今一つ我國の前途に向つて避けんと欲して避け得べからざる國際的難題も横つて居る。それは即ち我より東方の一大富國の壓迫てある。之に對して由來十年我國は意を降し氣を屏けて平和を維持せんことを努めて來た。然しながら謙讓すれば謙讓する程、抑遜すれば抑遜する程相手は附け上る。結局今後十年間には恐らく之と干戈を交ふるの勢を必致するであらう。此場合の事も今より考へ置かねばならぬ。若し此一大富國と干戈相見るに到るとすれば今より、より多く歐洲の同情を我に繋留するの必要がある。それには日本の恐るべき國と云ふ恐怖心を成る丈け世界に播かざる事が肝要である。是に至つて端なく思ひ起すは獨逸當年の老宰相ビスマルクの政略である。彼は一八六六年普王ウイルヘルム一世を助けて先づ墺國を伐つたのである。幸に普國にはモルトゲの如き名將があつたので連戰連捷してダニウブの左岸まで押し附け、此流を一下すれば維納城下の盟を制すべき處まで至つたのである。それでウイルヘルム一世を初めとして此機に敵の死命を制しシレチア一帶の地を割かせ巨額の償金を取つて戰捷の大好果を收めようと希望されたのである。然るにビスマルクはサドワの戰勝後直ちに講話

の議を容れて僅かにハプスブルヒ家から獨逸皇帝の帝冠を奪ふを以て滿足したのである。之に對しては平生彼を信賴せる普王初め大反對であつた。國民は彼の馬車に石を投ずる程の不滿を抱いた。然しながら彼の力はよく普國の上下を制し、遂に墺國の面目を傷けざる講和をなしたのである。如何なればビスマルクは斯る謙抑の擧に出たかとなれば、其時代に於て墺國を制し附けた丈けではまだ／＼普國の志を成すに足らぬ。當時歐洲に覇を稱せん許りの勢を有した那翁三世を一度やりつけねば大事は集らぬ。そこで普佛の戰爭は到底避くべからざるものである。此戰爭を開くに到つて若しも墺國が前年戰敗の耻辱を憤り、佛國と聯合すれば普國の勝算は立たぬのである。夫れ故其際には少くとも墺國をして好意の中立をなさしめねばならぬ。それには豫め餘りひどく之を叩き附けて置くと云ふのは策の得たるものでない。ビスマルクは墺國と戰ひつゝ其間から已に此未來の長策を思ふたのである。果して彼の計畫は悉く圖に中つた。普佛戰爭に當つて墺國は中立し且つ遂には獨逸の唯一なる同盟國となり、次の世代たる廿世紀今日の大戰となつても墺國は獨逸に追從するのである。是に到つてビスマルクのビスマルクたる所以が見える。事こそ違へ、日本も前途に大事を控へてゐる。小忍ばざれば大謀を亂る。日本出兵論者に對して靜定の工夫を乞はんと欲する。

但し義勇軍は別問題である。之は國家の行爲と相關せず、個人的意志の發動である。而して其擧は往々國の前途に非常の好影響を與ふる。例へば亞米利加の獨立戰爭に當り佛國の將軍ラファイエットが一の義勇軍を提げて獨立戰爭に參加したるが如き、將來如何に永く米佛の兩國民を結び附けたるか、紐育の埠頭に佛國人が自由の女神の神像を建立したのも之に由り、巴里の橋頭に米國人が自由平等博愛の幻像を打ち建てたのも之に由るのである。今に至つても米佛人の感情は相互に相親んで居る。當年ラファイエットの義勇の擧に負ふものが實に少くない。又伊太利のガリバルヂー將軍が佛國危急の日に一軍を提げ來つて普軍の前に戰う

た。此等ヵ佛伊の親交上に非常な影響がある。近く今回の戰爭に於てもガリバルヂーの子か孫か小ガリバルヂー兄弟は又々來つて佛軍に力を與へつゝある。此擧が兩國の人心に影響するもの如何ぞやと思はれるのである。其他バイロンが一個の詩人を以てして希臘の獨立を助けたる擧の如き今尚希臘をして英國に憑るの意を强からしむるのである。全體同盟國といひ協約國と云ふも政府の同盟、國家の協約丈けでは其同盟なり協約なりの基礎は決して鞏固なりと云ふべからず、必ずや國民的同盟協約と相待たねばならぬ。それには國民の同情をして互に抱合せしむるより急なるものはない。友國の危急に際し義勇軍を起して之を援くる擧の如きは最も此抱合を密ならしむる力あるものである。若しも日本人の力を恐ろしくない程度に於て發揮することが出來るならば、義勇軍の擧の如きは最も之に適當であらう。日本人の、一つには能力を發揮し、二つには如何に正義を貴ぶ民族なるかを公けにし、三つには朋友に對し深厚なる同情を有するものたることをあらはすべきは卽ち是であると思ふ。故に國家出兵論はよろしく爭止すべきであるが、三萬か五萬の義勇軍丈けはやつて見たいものである。選擧野次りの壯士となつて路傍に叩き倒されんより世界人道の爲め並びに正義の爲めに歐洲の山野に屍を横へるは一快心の事ではないか。

更に此戰局に對する列强の行動を見るに我國が歐洲の大戰に參加したのは日英同盟條約の命ずる所とはいへ、一の强國を以て世界の禍亂に參與し得ざるやうでは强國の面目もなければ價値もない、昔は個人でさへも其大なるものは天地の化育に參すると云ふ。一大國民として天地の化育に參し得ずば、寧ろ國を爲さぬがよいと云はねばならぬ。日本が初めて世界の治亂に參與し來つた事は日本の爲め及び日本人の爲めに賀すべく慶すべきである。分量こそ小なれ、青島略取の如き吾人は國の一慶事と思ふ。之を取る初めに當り獨逸に最後通牒を與へて支那に還附するの目的を以て無償無條件にて日本官憲の手に交附すべしと求めたのに對し、近き議會に於て一議員の攻擊的質問となり、加藤外務

が之に答へて

「帝國政府が獨逸政府に最後通牒を移すに當つては日獨の關係は尙平和の狀態にある。平和の間に獨逸我要求に應ぜんか、帝國に於て膠州灣を占領するの理由なければ也。其無償無條件にて我官憲に交附すべしと求めたるは又豫め還附承諾の場合に備へしのみ」

と云つたのは簡にして其要を得て居る。此言にして忘られざれば將來平和克復の場合に當つて日本の權利と面目を保持するに遺憾なきを期すべきである。之に對する隣國の妄動の如きは暫く一笑に附し置いてもよからうと思ふ。坊間厄鬼の徒が燒きもき云ふやうにうろたへぬでもよろしからう。

去りながら若し我が當局外交の技をして茲に止らしむるものとすれば少々心細い感じがする。御覧なさい。英露の如きは何れも國力を傾倒して獨墺に當りつゝあるにも拘はず、此大戰中に取り得べきものは悉く取り、收め得べきものは片端から收めつゝあるではないか。英國について之を云はうか。彼は土國と開戰すれば先

イプラス島は一八七八年露土戰爭の際から英國の故宰相ヂスレリーが一詭計を用ひ之が監督權を收めたものである。從つて島と英國との關係は恰かも昨の墺洪國のボスニア、ヘルツエゴヴイナに於けると同一であつた。それを今回土國の開戰を機會に、斷じて主權まで併せて取つたのである、此島は人々の知れるが如く、其大は略ぼクリート島に匹敵し、小亞細亞とシリアの中間に位して對歐對亞の英國政略上喫緊なるものである。彼は由來事實に於て己に之を占有してゐたのであるから假令將來講和條約が如何に進行する共、此併合の宣言は必ず取消されず永く英國の處有に歸するであらう。之が彼の手に收めた戰果の一つである。

次には彼が彼斯灣に臨める小亞細亞のバソラ即ち英語の所謂バスラを占領した事である。之も人々の知れる通りユーフラツトとチグリスの兩大河の相合して波斯灣頭に落ちる河濱にあつて小亞細亞、亞剌比亞、波斯、印度との盛んなる商業地である。古のエデンの園

製出さるゝ薔薇の香水は世界の美人の愛用する處である。又我々は未だ食した事もなければども海棗樹の實即ちダットは之れ亦世界に搬出する。此地が商業上將來大必要なる場所たる事は何人も之を認めて疑はぬ。加之現獨　皇帝ウイルヘルムの苦心慘憺として收め得たるバクダット鐵道は、其線がバグダットに止つた丈けでは何にもならぬ。それこそ無用の長線である。必ずやバグダットより更に此バスラに出で、而して歐亞の大道を波斯灣に通じ、蘇士の海峽を閑却さして英國に鼻を明かすにあらざれば何の甲斐もないのである。此のバスラ、それを英國は土と開戰するや否や直らに海軍の陸戰隊を河口から進めて占領したのである。若しも之が永く英國の手に落ちるとすれば假令獨逸皇帝がバグダット鐵道を成功さしたとしてもそれは殆んど他人の爲めに嫁入衣裳を縫ふのと一般で、英國の利益となるのである。今の時に當つて獨逸の兵力が此地方にまで及ぶなら死力を出して之を爭ふであらうが相手は呆氣なオットマン先生と來てゐる。彼には此地方を占領された位は左程の痛痒を感ぜない。否な假令感ずるとしても北には高加索に於て露軍との對抗があり、南西には埃及方面に英國との戰爭を控へてゐるから到底バスラの方面までは手が廻らぬものと見える。そこで英國は海軍の小部隊なる陸戰隊を以て易々として之を占領したのである。恐らく之も講和の日まで彼は其占領は繼續し得るであらう。すれば彼は亞刺比亞の大半島を隔てゝ、西にはサイプラスを其手に收め、東にはバスラを又藥籠中のものとした。其收獲の大なる事多く之に及ぶものはなからう。

次には埃及に對する保護權の實行である。此地方は久しい間己に實權を占有し來つた所であるから今之に保護權を及ぼしたとて事實に於ては左まで變りはないが、それにしても今までは無名有實であるから、爭はんと欲すれば土國も之を爭ひ得べく、又列强の干涉をも招ぐべき恐れがあつた。それを今度土國との開戰を機會に一朝保護の下に置くと云ふ事に聲明したのである。而して彼の運爲も亦巧妙なり。先づ與國の佛國に

向ひ、貴國のモロッコに對する保護條約を尊敬するが故に我埃及保護權にも同意を願ふと求めて居る。佛國たるもの之に同意せざるを得ぬのである。斯くの如くして先づ埃及と至大の關係ある佛國の同意の承認を得た。佛國已に然りとすれば假令講和の日に至つても他の列强は敢て之を爭ふものはなからう。すれば此一大王國も亦英國戰果の一つとなつたのである、斯くの如くして彼は戰ひつゝ着々多大の收獲を收め來た。

更に露國を見れば之も亦西歐との戰爭を戰ひつゝあるに拘らず一面極東に至大の注意を拂ひ、今春の初めから西比利亞貫通鐵道のウエルフネチエンスクから庫倫の鐵道布設に着手すると云ふ事である。而して此竣工豫定は二箇年と云ふ事である。すれば向ふ二ヶ年の後には彼の勢力は正に外蒙古を掩はんとする。畢竟之は一九一〇年即ち明治四十三年の日露協約の結果を此際に收めんとするのである。加之彼は昨年の暮から委員を出して蒙古王活佛の委員及び支那民國の委員とキヤクタに會して三國協定を進めつゝある。今日までに聞えた所によれば最初支那の委員は左の條件を提出したらしい。

一、外蒙古は露支兩國の聲明せる文件並びに民國二年十一月五日の露支協約を承認す可き事
二、外蒙古は獨立の意思なき旨を聲明す可き事
三、外蒙古は帝號を廢止し舊に依りて哲布尊丹巴呼土克圖の名稱を用ゐる旨を聲明すべき事
四、外蒙古は共戴の年號を廢止し、國民の年・暦を適用することを承認す可き事

右の條件を提出した、が蒙古は已に獨立を宣言し來つた今日であるから直ちに之を峻拒し爲めに談判は不調となつて再び支蒙の兩國は問題を兵力にて決するより外なき場合に到らうとした。が露國委員ミユルレルは其間に周旋し大いに蒙古の活佛を諭し、其後の報導によれば十七ヶ條の問題中左の九ヶ條までは已に協定を經たと云ふ事である。即ちそれは

一、蒙古は帝國の國號を廢止する事
二、蒙古は活佛の帝號を廢止する事
三、蒙古は共戴の年號を廢止する事
四、蒙古は陽暦を採用する事
五、支那は蒙古の自治權を承認する事
六、支那は蒙古が隨意に外國と工業及其他(政事の關係を含まざるもの)の條約を締結するの權利を承認する事
七、支那は露・蒙間に締結したる協約を承認する事
八、支那は庫倫に民國代表官を駐在せしむる事
九、庫倫駐在の支那民國代表官並に露國領事官の爲に支・露兩國は各

々若干の護衛兵を北駐下に常屯せしむる事

已に以上の主要問題を協定した以上は殘る數ヶ條の議定せらるべきは近きにあらうと云ふ事である。之に對して多少の分解を加へねばならぬ。抑々露國は日露協約の後、外蒙古に向つて大發展を企てた。然るに支那の非常なる反對に逢着して容易に其志を遂うすることを得ぬ。そこで蒙古王活佛を使嗾して、イヤ使嗾しては與國に對して御無禮であるから、先づ援けてと云ふ位にして置から。兎も角も援けてそれを獨立せしめ、然る後所謂露蒙協約を之と締結して軍事なり鐵道なり商業なり鑛山なり其爲さんと欲する所を爲し得べく談判したのである。其結果が今回の三國協商とはなつた。が此協商に於て已に上文に見ゆる如く支那は蒙古が隨意に『外國と工業及び其他政事の意義を含まざるものの條約を締結するの權利を承認する事』及び『支那は露蒙間に締結したる協約を承認する事』との二條を贏ち得たのである。活佛が死之さへ得れば後は野となれ山となれである。活佛にならうが、獨立國が自治國にならうが、其邊はお構ひなし。而して支那と云ふ國は古來も今往も可笑しい程の體名好きな國である。彼は實權は何物をも收め得ぬとも、名分的に蒙古が支那の半屬國であり、活佛は帝と稱せず、全支那の正朔を奉ずると云へばそれ丈けで滿足するのである。現に露國は支那委員を助けて支那の要求に從はしたと云ふので、昨今北京の袁公は餘程露國に對して滿足らしい。が、其實蒙古の實權は依然露國の手に落ちたのである。恰かも保護條約前の佛國がモロッコに對し、英國が埃及に對すると同一な地位に立つたのである。其收獲や實に大なり。彼が戰後に極東に如何に發展し來るべきかは今より想像に難からぬのである。

例を擧ぐればザット斯の通りである。英露は決して戰を戰つてはゐない。戰ふ傍に着々として外交的收獲をなしつゝあるのである。此秋に當つて日本の外交が單に青島の處分は戰前戰後に於て同一でない位に滿足して其他に手を伸ばさぬとしたならば如何であらう。大道演説の外交攻擊は餘りに大時代過ぎて論にもならねど今や千載の一好機である。今少し踏込んで露支就中露國と共に極東の問題を親善的に協定して日本の當然收むべきものを收むる工夫はないものか。此邊の處霞ヶ關邊の輿論の消息を伺ひたいものである。

對支根本策の研究

△支那問題の根本解決論

松井柏軒

（一）

茲に對支問題の根本的解決と稱す、其の見地は、古史に傳はる英雄の勳業の如く、徒らに版圖を擴大するを名譽とするとなく、國民の生活、國家の存立を基礎とせざる可らず。

具體的にいへば、我が增殖する人口の配置を適當にし、之に對する食物の供給を十分ならしむべき必要より、玆に對外方針を立つるの外なきのみ。

國内の工業を盛んならしめて以て多くの人口を逸出せしめず、食物の不足は寧ろ之を海外の供給に待つべしといふも亦一策也、然れども國として食物の獨立を爲し得ざるは萬全の道に非ず、即ち海外に殖民すると實に已む可らざるのみ、而して對支問題の如き、また主として此の見地

（二）

支那を以て我が工業品の大市場と爲し、且其の一部分に我が人口を容るゝことは、是れ對支方策の最要なる基礎也、支那の領土を保全して其の平和を支持するも、亦畢竟此の大市場を攪亂せず、我が人口を容るべき邦土の康寧と秩序とを維持せん爲めのみ。

（三）

支那本部の一方哩當り人口數は、二百六十五人にして、日本の三百六十五人に比して、正さしく百人の不足也、故に支那十八省の面積百五十三萬二千四百二十方哩を以て、日本と同一の割合ならしめば、新たに一億五千萬人以上を收容し得べきも、假に一方哩に三百人平均とするも、尙ほ新たに五千三百六十三萬四千餘人を收容し得べし。

米國及び加奈陀、濠洲の如きは、新たに人口を收容すべき餘地廣大なるに拘らず、我が日本人の移住を恐怖し嫌惡すること甚だしく、動もすれば國交際を損ずる虞あり、故に眞に安全に我が日本人を移住せしむべき場所を求めんには、寧ろ支那を第一とすべし。

然れども支那の本部を開放して、外國人の雜居を許さしめんことは、

古の東部は、差當り我が善良なる移住地に充て得べき便宜多し、故に對支問題の解決と稱するも、差向き主として此の方面に在るべき乎。

（四）

我が日本の人口は、一方里（英哩に非ず）約二千八十七人宛の割合なるに、朝鮮は九百七十三人、而して南滿洲中の奉天省は、僅かに六百七十四人に過ぎず、吉林省の一部は思ふに之と相似たるべく、內蒙古の東部に至ては、更に甚だ少數なるべし、今假に一方里の人口二千人宛の割合を以て收容し得べしとせば、左表の如くならん。

	（方里）	收容し得る總人口	現住人口
朝鮮	一四、一二三	二八、三四六、〇〇〇	一四、五六六、七八三
奉天省	一五、一九一	三〇、五八二、〇〇〇	一〇、二三八、〇〇〇

即ち朝鮮には一千三百七十七萬九千二百十七人、奉天省には二千三十四萬四千人を收容し得べく、之に吉林省及び內蒙古東部を加へば、優に五千萬人を收容し得べし。

故に支那本部十八省を開放せしむる以前、先づ南滿洲及び內蒙古東部を開放せしむるを當然とす、少くも此の方面に於て、日本人の居住權、營業權、土地所有權を承認せしむべし、此の方面に於て我れ既に機會均等主義を執るを以て、歐米人が之に均霑すべきや勿論也。

我が關東都督府の實驗によれば、南滿洲は米作に適するが如し、凡そ米作に要するは、暑氣よりも日射にして、滿洲地方は大氣の乾燥著るしきのみならず。降雨數は一ケ年百日に滿たず、降雪は廿八日のみ、我が秋田縣の降雨二百三十日（東京は百六十七日）降雪百六日に比すれば、遙かに良く米作に適すべく、或は滿洲に於て五千萬石の米產額を獲べき見込ありといふ、滿洲が我が良好なる移住地たるや多言を要せずとす。

（五）

世には滿洲放棄論を唱ふる者あり、然れども我れ既に露國と國運を賭して戰ひ、十萬の生靈を殞し、十數億の巨資を糜したる以上、國家國民の精神に於て之を放棄すること能はず、欲するも欲せざるも、必らず之を支持せざる可らず、況んや朝鮮を併合したる以上、其の自衞のためにも滿蒙は之を閑却する能はざるをや。

殊に十年來の研究と實驗とに由りて、滿洲が我が良好なる移住地にして、而して其の地味の豐沃なる、能く食物の供給をも十二分ならしむること明確となれる以上、玆に我が國民の生活、國家の存立上より觀て、將來大に有餘るべき人口を增殖すべき基礎を確立すべし、即ち對支問題の根本的解決の一は、實に玆に在らざる可らざる也。

（六）

支那の本部は、日本宜しく英露佛米と齊しく之を保全して、以て其の平和秩序を支持すべし、日獨開戰して、獨逸の根據悉く殲滅したる以上他日媾和の結果、我れ獨逸の特權一切を繼承すべきこと勿論なりと雖ども、青島の如き本來軍事上より視るも、通商上より視るも、決して多く重きを置くべき所にあらず、我れは徒らに之に執着することなく、寧ろ支那政府をして、山東省の不割讓を我れに誓約せしめ、別に代償を他に

求むべきのみ。

且つ支那政府をして、沿岸及び島嶼の割讓又は租借を他に許さざることをも公約せしめ、以て領土保全の實を明らかにすべし。

（七）

支那の平和秩序を維持する爲め、我れは列强と共に現支那政府を援助すべし、彼の政府洵に誠意なく、事毎に我れに反對せば、我れは斷乎たる措置に出でざる可らずと雖も、苟くも然らざる限り、我れは彼の政府に對して努めて支持者の地位に立つべし、今日の支那に於て、其の伎倆聲望比較的に衆の上に出づるもの未だ之あらざれば也、彼の革命の志士の如き、國事犯者にして亡命し來るものは、我れ之を保護すべきを當然なりと雖も、彼等を助けて再擧を謀らしめ、日本をして恰かも彼等の策源地たらしむる如きことは、斷じて之を爲さゞるを當然とす。

斯くして支那の平和秩序を保ち、唯だ通商上の妨害となるべきものを排除して、以て我が對支貿易を進展せしむべし、また我が國民の智識を支那に輸入して以て支那の富源を開拓し、漸次支那內地を開放せしむべし。

列强をして支那を分割せしむるが如きは、是れ我が最良の大市場を破壞するものにして、又實に東洋の平和を蹂躙する也、我れは全力を擧て之を防止せざる可らず、我が海陸軍備は實に此の自衛のためのもの也。

△對支根本策とは何ぞ

田川大吉郎

對支根本策とは、畢竟、支那に對し、日本の勢力を、限なく植へつけるには、外交上、如何なる方針を採るべきかと謂ふ意であらう。

日本は、支那に對し、從來、如何に振舞はんとして居るか、僕の聞く所、所謂支那浪人の多くは、支那四百洲を併呑して、之を自由自在日本の言ひなり次第に驅使したく思ふて居る、これは、支那浪人のみならず概して、日本政治家の、支那に對する究竟の主張であらう。

僕は、此等の猛烈なる希望、計畫を、強ち惡いとは謂はない、去り乍ら、此等の希望を成功すべき方法手段如何と問へば、多くの論者は、極く軍國主義を唱へるが、僕は、明白に平和主義と答へたい、去り乍ら平和主義だけでは分らない。僕は、更に支那人と仲好くするに在ると答へたい。支那人と仲好くし、親しくし、本氣に結び合つて、口先ばかりの同文同種でなく、心底から同病相憐み、同情相親しむ間柄と爲るに在ると答へたい、而して多くの日本人の支那に對する態度は、之に反して居る、全く之に反して居る、だから可けない、此の如きは、猶ほ車の轅を西にして、東に往かんとする類である、到底目的を達する途で無いと謂ひたい。

曾て一軍人があつた、有名な政治家である、僕が、その軍人と、支那

問題を論ずる際、支那人と日本人は、不思議に相反目して居る、日本人は、口癖の如く、支那と日本は、同文同種の國、唇齒輔車の關係だといふけれど、支那人の日本人に對する感情は、全然隔絶し、日本人は殆んどその宿世の仇の如く、歐米人は、反つてその頼りある一味の舊友、知音の如く、地理的には、日本は支那に近いが、感情は遠い、西洋は之に反し、地理的には、支那に遠いが、その感情は頗る近い所があると言つたら、その軍人政治家は、それは、その筈さ、往く者も〳〵、間諜同然の者ばかしで、誰れ一人、支那の利益を思ひ、その將來の爲を案じ、しんみに、支那の世話をし、盡力をして居る者は無いのだから、支那人から觀たら、一人も油斷のならない日本人ばかりであらう、支那人の位地にも爲つて見るがよい、どうして、氣が許せるものか、疑るのも、怖がるのも、迷惑がるのも、皆、相當に理由のある事さと語つて居た、僕は默さず、此形勢は、抑も誰が馴致したのか、一般の感情を此極に馴致して置いて、而して唇齒輔車、同文同種、相頼り相扶けてと言ふのは、餘りに白々し過ぎるでは無いかと論じ、相對して一語なく、暫し同嘆に落ちたことがあつた、僕は、飾らず、告白するが、今も猶ほ當時の此感じを抱いて居るのである、どうだらう、諸君、此の如くにして、猶ほ所謂支那問題の根本解決が出來やうか。

そは兎もあれ、多くの日本の論者は、支那の問題を、支那で解決しやうとして居る、それも、一策に相違ないが、然し乍ら、それだけでは可けない、僕の思ふ所、今日の時勢に於ては、支那の問題も、之を歐洲に於て解決せねばならぬ、若くば、之を北米に於て解決せねばならぬ、而して之を歐洲乃至北米に於て解決するためには、又それ〳〵歐米の感情をも、希望をも斟酌せねばならぬ、此斟酌あり、一面に、支那の感情を捕へ、一面に歐米の感情を捕へ得た所に、支那問題の解決は出來る、所謂、支那問題を解決するの途は、恐らくは此一途であらう、心して此一途を歩まねばならぬ、然るに此一途に對する日本人の注意警戒の足らないのは、依然として一大缺事である。

尚、多くの論者は、北米のモンロー主義を藉り來つて、米人が、此主義を全米に主張する權利があるなら、同様の事情は、同様の結論を生む東洋の事は、東洋人だけにて、之を處理する責任もあり、權利もある筈なりといふ、尤も千萬の言ひ分ではあるが、然し乍ら歴史は沒すべからず、現に、東洋に於る形勢の、南米に於る形勢と、同日の比にあらざるを如何せん、北米人が、南米に向つて、左樣な言ひ前を駢べるから、日本も亦支那に向ひ、同様な言ひ前を主張すべしとするは、北米對南米の歴史的關係と、現勢を、日本對支那の歴史的關係と、現勢と、同一視するものである、これは、無理な見方と謂はねばならぬ、而して總ての外交的畫策は、その現實の資源より來る、僕は、今日に於て、所謂、東洋のモンロー主義に、遺憾ながら反對せざるを得ない。

更に、我が多くの論者は、日本が獨逸に戰ひを宣した所以、獨逸が世界の憎まれ者と爲り、廣き世界に、墺國の外、賴りにすべき一親友を得ず、較々孤立して、惡戰し、苦闘しつゝある狀況に就ても思はねばなら

ぬ、獨逸は何故に此窮地に陷ゐつたか、言ふ迄もなく、その軍國主義の結果である、細かに言へば、獨逸は必らずしも軍國主義一點張の國では無い、その科學は、確に世界獨步の位地を占めて居る、去り乍ら、今日の爭ひの原因を爲したものは、その軍國主義である、必らずしもその科學主義で無い、而して日本は、未だ獨逸の科學を有せずして、獨りその軍隊のみを有して居る。日本こそは、名實とも、軍國主義一點張の國である、乃ち、日本の支那に臨む所も、その優強を示すのは、獨り軍隊あるのみ、決してその產業では無い、又商業では無い、又學問では無い、又宗教では無い、又歷史では無い、又統治的手腕でもない、支那人から視たら、日本人は、概して見すぼらしい男である、資本の無い連中である、學問の無い手合である、而して、太だこすい、狡猾千萬な面々である。而して善く酒を飲み、善く女に耽り、善く遊び、善く喧嘩をする、戰ひだけが、その長所である、若し、獨逸が、世界から憎み嫉はるゝ現今の趨勢に、道理上の根據があるなら、日本が軈て世界の嫉ひを受けるにも亦相當の根據がありはせぬか、考ふべきである、現に、獨逸の軍國主義が滅ぼされた後の、世界一の軍國主義の國は、どこか、日本では無いか、而して我日本は、その獨逸の軍國主義を憎んで、今日の戰ひを起して居る、人の振り見て、我が振り直せ、今日の歐洲の戰ひは、日本の軍國主義の將來に就き、前車の覆へる、後車の戒めを垂れつゝあるのでは無いか、僕は、只、武力一點張で、支那に臨まんとする、或種の主張に、少は、支那問題の根本解決は出來ないと思ふ、所謂、對支政策の根本策とやらに、そのやうの手段方法を運らすことは、斷じて日本の不利である、僕は、不贊成である。

要するに、日本人は、その性急を矯めねばならぬ、大國を治むるは、小鮮を煮るが如しとは、流石は孔子さん、善く言ふた、自國を治むるすら然り、況や、他國に對するをや、僕は、自ら處するの途も、只忍耐に在りと信ずる、他人に對するの途は尙更である、僕は、日本人が先づその性急の癖を矯めんことを希望する、その無遠慮、無頓着、橫放、不謹愼の病を、根底から癒さんことを希望する、これが何より急である、對支根本策は、即ちこれである、對支問題の根本的解決も、只これであるやれ、勢力範圍だ、附庸國だ、屬國だ、保護國だと、いろ／＼の論は、要するに末の末である、根本の策は、寧ろ、日本人の性狀陶冶の問題に在りと信ずる、只性急、只身勝手、天分の聰明は即ち蔽はれて、世界の形勢が明白に見えず、支那の形勢すら殆んど見えなくなる、大いに興らんとする日本國は、先づその眼を五世界に配らねばならぬ、そのやうの必要がある。

△對支問題解決の好機

石河幹明

[illegible]の主義を事實上に鞏固ならしむる爲めに、三にはそれと同時に我國の支那に於ける地位をもつと安定ならしむる爲めに、この三つの目的を達する爲めに我軍は此際を期して對支問題の解決を圖るが最も適當であると思ふのである。

然しながら我輩は從來我國の對支論者が所謂根本的解決云々といふが如き無責任な言辭に贊するものではない。支那は飽迄も一個の獨立國である。其獨立を尊重し、其領土保全を圖るのが我國の採るべき態度であつて、苟も獨立國の尊嚴を冒すが如きことあつてはならない。今回我國が獨逸と交戰して其東洋の根據地たる青島を攻略したのも、要するに支那領土保全の主義の爲めに外ならない。戈を執つて山東の野に獨逸と相見えたといふのも、日英同盟の情誼に出ることは勿論であるけれども、日英同盟そのものの主要なる目的は東洋永遠の平和を確保することにあり、從つて支那領土の保全を必要とするのであつてみれば、我國は復たしても支那領土保全の爲めに戰つたことになるのである。若し我國が今回の戰爭に參加せずして東洋に於いて獨逸の爲すがまゝに放任しておいたならば、支那領土の上に如何なる影響を及ぼしたかも知れない。今回獨逸と戰うて青島を攻略し、其東洋の根據地を覆して彼の非望野心の根を絶ち、支那の領土を全からしめたのは實に十年以前、露軍を滿洲の野から驅逐して之を支那に還附せしめ支那領土の保全を得しめたと其精神に於いては同じである。露國の滿洲占領の遠因を爲したものは旅順大連[illegible]て何たほどの[illegible]ことが出來ないのである。實に今回の我國の戰爭は支那の爲めに其禍根を除き去つて遣つた[illegible]であつて、我國は最近十年間に前後二回までも支那領土保全の爲めに多大の犧牲を拂つたといふことも出來るのである。斯くまでに多大の犧牲を拂つたといふのも、固と東洋永遠の平和は我國立國の生命であつて、支那領土の保全は其平和を確保するの主要條件に外ならないからである。であるから今日尚未だ獨逸と我國との交戰狀態が終局を告げた譯では無いけれど、此處先づ一段落を告げて東洋方面の小康を得たのを幸ひに、ます／＼其主義を事實上に確立する必要があり、またそを確立するには最も都合の好い時機であらうと思ふ。

青島の處分に就いても、これは固より獨逸との交渉を經て確定すべき性質のものではあるけれども、歐洲平和の回復は未だ何れの日とも豫知することが出來ないから、差當り對獨交渉の條件を基礎として、先づ日支兩國間の關係を決定するのが機宜を得たるものであらう。

抑ゝ青島は我國の獨逸に發したる最後通牒に依つて見るも之を支那に還附するの目的であることは明かである。是れ我國が支那領土の保全の爲めに、延いては東洋の平和の爲めに其租借地を支那に還附せしむるを以て最も適當の處置と信じたが爲めである。然るに、不幸にして最後通牒が容れられずして獨逸と戰を交ふるに至たのであるから、今日となつては戰捷者としての當然の權利を我に收むべきであつて、他から何等の掬

束をも受くる謂れが無い。東洋永遠の平和を確保する上に於いて我國が必要と認むる處置を採つて差支ないのである。唯我國の主義は宣戰の詔勅に徴しても明白であるにも拘らず、動ともすれば支那人の間に我國の意向に就いて疑念を懷く者のあるのは甚だ慨かはしい次第で、斯くの如きは折角の我國の好意を無にするのみではなく、隣交上望ましからざる事であつて、我國が主義とする東洋永遠の平和を確保する上に於いて亦支障するものと謂はねばならぬ。であるから此際明かに我國の意志の在る所を示して、彼をして豫め同意を表せしめおく事は其誤解を防ぐ爲めにも必要の手段であらうと思ふ。我輩の觀る處を以てすれば、青島は他の國によつて侵略せられ、それが爲めに支那領土の保全を危うし、延いて東洋の平和を攪亂するが如きことさへなければ、之を我國に於いて預つておく必要はない、但だ支那にして其領土を自ら支配し得ない場合を慮るゝのみである。最初の目的通り直ちに之を支那に還附するが可いと思ふのである。其外他の方面に於いても支那の領土に對する他國の野心を豫め防止するの手段を講ずると同時に、我國のみが特殊の利益を獲得せんとするが如きを已めて機會均等の實を擧ぐる事に努めたならば、自ら支那人の誤解も氷釋して支那の領土は保全せられ、東洋の平和は得らるるに至るであらうと思ふ。

要するに對支政策の根本義は、東洋平和の確保上支那の領土保全が我國の最も緊切なる利害を感ずる所であり、之が爲めには一國を賭するも辭せないのであることを充分支那人に了解せしむることであらうと思ふのと

那人とても今日支那の領土保全は實際に於いて日本の實力に依つて保障されてをることは之を認めてをるであらうから、更に一歩進んで、支那の領土保全は日本が一國の運命に賭けても保障しなければならぬものであつて、支那が日本との關係を益々親密ならしむるは支那自らの獨立を完うする所以であることに氣附かしめたならば、支那は支那に於ける日本の地位利益を具體的に承認して之を保護するのが兩國の關係を益々親密ならしむる道であることに思至らざるを得ないのである。從來我國は支那の一地方に於て年來特殊の地位を有し、其貿易の如きも支那との通商國中最上位に在つて、政治上にも商業上にも優越なる地位を占めてをるのは事實なるにも拘らず、其地位利益が兎角安固たるを得ず、支那に於ける我國の各種の事業經營の如きも安心して行ふことの出來ない狀態にあるのは、未だ支那政府が此事實を確認するに至らずして、政治上の影響を受けたり、官吏の意嚮次第で事業上に變動を及ぼしたりする懸念あるが爲めである。日支兩國の感情が動もすれば疎隔されるのも亦之が爲めに外ならない。故に今に於て彼の政府をして是等の事實を具體的に承認せしめ其不安の懸念を除去するのは、單に我國人の利益であるのみでなく、日支兩國の關係を益々親密ならしむる道であつて、隣交の爲め東洋平和の爲め最も肝要の處置たるを信ずる。此種の問題は兩國の交誼の爲めに今迄も幾度か解決せんとして其機會を得なかつたのであるが、今や青島の處分は事實上に支那保全の主義を明かにし、益々其主義を確立するに

我輩は我國立國の生命たる東洋永遠の平和を確保せん爲めに對支問題の解決を謀るべき適當の機會であると信ずるのである。

△對支外交根本方針

小川平吉

我々が唱ふる對支外交根本政策といふことに就いて、世人は根本政策とは如何なるものか、具體的に之を示せと言つて迫るが、具體的政策を發表することは國交上に影響を及ぼす虞あり、加之我々の希望は之を實行するに在るのであるから、漫りに之を發表することは出來ない。歐洲戰爭の初まるに當つて、對支根本政策の必要が唱へられた時分にも、當局者は單に根本政策云々とのみでは解らない、空論を歇めて具體的案を示せと言つたので、私は當時其根本政策を實行する手段方法まで詳しく書面を以て内閣諸閣僚並に同志に配布したのであるが、今言つた通り之を公に發表することは出來ないから、今其主意だけを簡單に述べることにせうと思ふ。

外務大臣は對支外交根本政策といふ言葉を非常に神經に病んで、若し之が支那及歐米各國に聞えたならば、いかにも支那の領土を取る考の如く見られて困るといふやうなことを言ふけれど、我々の謂ふ根本政策とは決してそんな意味のものではない。根本政策とは讀んで字の如く、事の枝葉に亘るを避けて幹根を定むるを謂ふのである。孟子の「本に復れ」の意である。本を糺さずして、いくら末を詮議しても解決は着かない、本を糺し本を修めるは即ち支那領土保全の國是を眞實に徹底的に實行する方法を圖ることである。而して之を徹底的に解決するには、支那自身をして誠心誠意領土保全の必要を認めしめ其決心をさせるにある。凡そ今日の如く、支那自身が我國に反感を抱き、徒らに狡猾譎詐を以て其日を送り、歐米各國の勢力を借りて我國を排斥せんとするが如き狀態に在つては、是れ自ら招いて支那領土の保全を破壞するものであつて、斯くの如くんば到底支那領土保全の目的を達することが出來ない。抑我國が支那領土の保全を圖るは、恰も英國が白耳義の中立を維持するが如く、實に我國の生存上必要已むべからざるが故である。さればこそ從來我國は是れが爲めに如何なる犧牲をも拂ふことを敢て辭さなかつた次第である。今後とても我々は此主義方針を貫徹することに努めなければならぬ。若し支那にして此主義方針に背いた行動を採るならば、遠慮なく力を以て之を矯正しなければならぬ。歐米列強の所謂支那保全の如きは利害關係の上から即通商貿易等の利害損得の打算の上に立脚したものであつて、日本のそれとは性質に於ても程度に於ても非常な相違があるのである。若し支那領土が分割せられ、東洋の平和が攪亂された曉に、先づ第一に害を蒙るところのものは無論日本である。從つて東洋の平和を維持するの必要は亦最も日本に在る。其責任の重大なる今更論ずるまでもないのである。其責任の重いだけそれだけ、支那の誤れる現在の行動

を矯正し、之を導いて富强に至らしめ、俱に與に東洋の平和を維持する爲めに、日本が如何なる手段方法を採るもそれは自由でなければならない。言葉を換へて言へばそは日本の權利である。更に言葉を換へて言へば日本は歐米列强に比して、一層重き責任即存亡の問題に關して優越せる特權を有つてをるのである。故に今や歐洲列國が紛亂の巷に在りて東洋方面に手を延す餘地を有せず、日本帝國獨力にて東洋の平和を維持しつゝある場合を利して、支那をして根本の考に戾らしめ、將來領土保全主義の破壞を再びすることのないやうにするのが肝要である。之が爲めには支那の好むと好まざるとに拘らず、一種の約束を結んで、領土の保全、平和の維持に盡力することを誓はしめ、而して同時に之に伴ふ設備を爲して、將來支那が變心し、其盟約を破る場合があつても、日本帝國は獨力東洋の平和を維持するに足るだけの實力の保障を得、且其地步を占むる必要かあるのである。是れ即ち對支外交の根本政策に屬するものであつて、其手段方法に至つては玆に明言するの限りではない。而も之を古今東西の歷史に照して今日の狀態を深思熟慮するならば自ら釋然たるものがあるであらうと思ふのである。今にして此政策を實行せんか、日本帝國の大陸に於ける地步は確立し、滿洲蒙古の狀態も一層明白となり、支那は益々富强の度を加へて、結局或年限の後には他國の干渉を俟たずして自ら其領土の保全を遂行し東洋の平和を維持し得るに至るであらうと思ふ。幸にして其時代が到來したならば膠州灣の如き若くは旅順大連の如き、之を支那に返還して差支ないのみならず、最早何等干渉がましき事を言ふ必要も無きに至るであらう。唯其時代の到來までは、我國は我國生存の必要上、支那が自ら勝手氣儘な振舞をして自ら東洋の平和を破壞するを傍觀してをる譯にはゆかない。然るに今日の支那の狀態は何うか。實に言語道斷であつて、我國に對する恰も敵國に對するが如き態度を採り、自ら好んで東洋の平和を破壞しつゝあるが如き有樣である。斯くの如きに對して徒らに小智小巧を弄し、小政策を行ふもそは枝葉の事に屬し、單に無益であるのみならず、愈々彼の感情を害し、却つて我の本義に遠ざからしめるのみであるから、此際彼をして充分反省せしめ、百年平和の基礎を確立することにしたいと思ふのである。若し事態低くの如くにして、尙此際些細な利權問題などを提出したならば益々彼の感情を害し、之を威力を以て服せしむる能はずんば愈々彼を增長せしめ、遂に止まる處を知らず、歐洲大亂熄み、英獨佛露等の列强が再び力を支那に揮ふに至つたならば、支那は此等の國と提携して、斷乎として我日本に反抗し、我日本の大陸に於ける勢力は全然地を拂ふに至ること、かの日淸戰爭前朝鮮に於ける狀態の如くなるのは明白なことであらうと思ふ。であるから、今日尙未だ歐洲戰亂の歇まざる間に、日支兩國間に釀すべき根本的紛爭の根を絕ち、日本の大陸に於ける地步を確立し、東洋永遠の平和の基礎を定めたいといふのが吾々の希望であり、即對支外交の根本方針と謂ふところのものである。

◉蘆花 德富健次郎著

（定價壹圓 郵稅八錢）

訂正縮刷

みゝずのたはこと

五十五版

武藏野の霜の中から拔け出した白い大根や紅い甘藷が盛に都人士の口に入る季節となりました。新漬の澤庵に辛い舌鼓を打ち燒芋の甘いけぶりに頰を燒く方々は練馬大根や川越藷と同じく武藏野の土の產物なる『みゝずのたはこと』を身近に備へて時々其一二葉を咀嚼し恒に眞に新なる生活の趣味を嚙みだしてください

◉蘆花 德富健次郎著

（定價壹圓廿錢 郵稅拾貳錢）

小說

黒い眼と茶色の目

十一版

是れ『不如歸』の著者、『思ひ出の記』の著者。『みゝずのたはこと』の著者が、其二十七年以前同志社學生時代に於ける戀物語也、破れたる初戀の慘憺たる告白也、聽說、著者此告白を江湖に公にするに當り遲疑逡巡、稿を燒くこと實に再度に及べりと、其如何に眞摯にして謹嚴なる發表なるかを知るべきなり、此書によつて著者は其年來秘め置ける著者最奥の心事を語り世間は未だ曾て窺ひ知らざる著者の一生面に接見せん。

村井弦齋著

縮刷

食道樂

定價 壹圓五十錢 郵稅十二錢

村井先生の『食道樂』並に『食道樂續篇』は面白い小說であつて同時に實際的の料理書であります。小說として此の如く愛讀され、料理書として此の如く珍重された著書は明治、大正の出版界他に多く其類を見ません。學校にも家庭にも都會にも地方にも料理〳〵と料理趣味が勃興し普及したのは事實弦齋先生の此『食道樂』と『食道樂續篇』が鼓吹した結果であります。今や菜禽獸魚何れも季節に入つて食膳を賑はすの候江湖に向つて是非此の二書を推薦致します

縮刷

食道樂續篇

定價壹圓五十錢
特價 二月十五日限 壹圓二十錢
（郵稅二十錢）

發賣元 東京市銀座通新橋際 電話新橋一九九一番（振替東京二〇〇番） 新橋堂

大賣捌所 東京市神田區表神保町（振替東京二七〇番） 東京堂

（中付一の一）

著者苦心の大著＝尨然七百七十頁の大卷也

昇曙夢氏新著

露國現代の思潮及文學

特製上製●定價一圓八拾錢　郵稅拾二錢

西歐の文明に代る可き新文明は今や東歐スラブの國に其曙を開けり

吾人は先づ現代露國に就いて知らざる可からず

著者は我が文壇に於ける唯一の露西亞文學者也。露國文學が我が文壇に尊重せられ、其作品の移植せらるゝもの頗る多きも、未だ其の全般に亘りて、系統的組織的の研究を公にせるものなきを慨し、多年の蘊蓄を傾け、拮据一年にして始めて成る。著者曰く余がこれ迄の文壇的事業は、本書を完成せんが爲の準備のみと。

卷を前後の二に分ち前編にはチエホフを初めとして、アンドレエフ、クウプリン、以下最近に於ける新進作家の作風、思想等について詳論し、後編に於てメレジユコフスキイ以下の詩人につきて評論す。人を經とし、時代の背景を緯とし、或は作例を示し、或は梗概を揭ぐ。その說くところ頗る詳密的確也。

東京市牛込區矢來町中の丸　新潮社　電話番町二二三一番　振替東京一七四二二番



曾我の家五郎の旅日記

朝日新聞倫敦特派員　楚人冠

一、はしがき

曾我の家五郎事和田久一――「ヒサカヅ」と讀む。「キウイチ」と讀むと大におこる。母の名は久延、父の名も久雄、其間に出來た一番目の息子だから、此を以ての故に即ち「ヒサカヅ」であると、本人は威張る。僕の友人に田中鶴吉といふ人があつて、之を「タナカ、ツルキチ」と讀むと大におこつて、憚りながら之は「田中のタヅヨシ」と讀むのだと、一々辯解してまはつた。「山本のゴンビヤウヱ」が聞いて呆れる。わが「ヒサカヅ」君は其の類でない、正眞正銘の「ヒサカヅ」である。昔定家卿が息子の名を何とつけやうかと打案じてゐる時、近侍の者が差出口をきいて、父君の「定」を取つて「サダイヘ」では如何候なぞと申上げたといふことがある。又昔マセドンのフイリツプは、――

話頭が變にこんぐらがつて來たから、改めて今一度初から出直します。――

曾我の家五郎事和田久一君から、其の旅日記の一節を送つて來て呉れた。突然送つて來たのでない。僕が頼んだのである。前晩セサム倶樂部の講演會で行き會つた時、先生つか〳〵と僕の傍へ寄つて來て、『先生、

面白い事があります」と先生が言ふ。――斷つておくが最初の先生は彼であつて、次のは僕であつて、其次のは又彼である。先生と言はれるほどの馬鹿でなし、彼奴が僕を先生といふから、此方も忌々しいから彼奴を先生扱ひにしてやつたのである。宇治大納言の宇治拾遺物語の何處やらに泥坊をつかまへて、「わせんじやうは不覺の奴かな」といふ文句がある。「わ」は敬稱であつて「せんじやう」は「先生」の呉音だといふ。「先生」をなだらかな呉音でよんで之に敬稱を一つ加へてさへ、泥坊にしか通用せぬ位なら、「先生」きりで人を呼ぶのは、如何さま人を馬鹿にしてゐる。そもそも先生の稱たるや、其の由つて來る所遠く且つ、――

又少し變になつて來た。今一度やり直す。――

其のセサム倶樂部の講演會の時の話といふは、成程聞いて見ると、一寸面白かつた。實は過日來中央公論の正月號に例年の通り何か書かなければならぬとは思つてゐたが、朝日新聞の特派員で遠く倫敦に來てゐて して甚相すまぬ氣がしてならぬ。何したものだらうかと案してゐた折柄である。いつそ五郎に此の日記を書かせて、之で今年の間に合せては何だらうかと即座に思ひついた。乃ち夫とは明に言はずに頼んで見ると、わがヒサカヅ君は快く承知して呉れた。送つて來たのは、即ち夫である。

今此の日記を其まゝ借用して、左に掲げる。處々多少の筆は加へてあるが、大體は本人の書いたまゝに殘してある。(以上大正三年十一月初の土曜日レミントンに於て稿)

二の一　七月三十日

晴天九十度前後の暑さ。トロポール、ホテルの通辯の人露國二十年目の大暑と語る。日本へ出す百通餘の手紙をしたゝめ、午後一時四十五分莫斯科市クレスト停車場より乘車、獨逸伯林に向ふ。

其際、墺太利と塞爾比亞と戰端開始とは聞いたれども歐洲の地理は元より、外交上の事等は更に分らぬ自

停車する毎に數多の武裝した露國の軍隊が充滿してゐる。はてなと思つて考へたが分らない。

食堂車へ夕飯を喰ひに行つたが、ボーイが不器用で何を注文しても手眞似では通じない。折しも隣席に居合せた印度人がくす〳〵と笑つたので、小腹が立つて何一つ喰はず、つうと自分の室へ歸つた。起きて居ては腹がすくから、八時頃、寢臺を取らせて其儘寢てしまふ。

二の二　七月三十一日

昨夜早寢の加減か、五時頃に目が覺める。朝日は早や高く上つて、硝子窓に強く光をさしこんで入る。列車は奇麗に手入れしてある田舍道に沿うて走つて居る。今晩九時カリッシユで乘り替へ、明早朝は伯林に着くと思へば、嬉しくて堪らず。僅にパンを買つて空腹を忍んで居ると、午後一時頃、列車が或る小驛に停車したまゝ一時間餘も發車しない。不審に思つて居ると、あわたゞしく車掌がやつて來て、手眞似で降車し

長へることゝ自信してゐたから、盛に〳〵と連發して降車の命に應じない。車掌は眞青な顏色で、鐵拳を打つ形を示したり、兵隊の行進する風をしたり、手眞似身ぶりを色々と加へて、頻にべら〳〵と聲を震はして何やらいふが更に要領を得ず。しかし何でも之は只事ならずと思つて他の客室を見れば、早や澤山な旅客は何時の間に降車したやら一人の影も見えない。扨はカリッシユ乘換が此驛と變更したものと一人合點して兎も角も、降車する。——降車したものゝ、さて之からが大變であつた。

車掌も上せて居れば、自分も上せてゐる。豫て預けておいた乘車劵や寢臺車劵を請求するが何分手眞似ばかりでは急の用は辨じない。仕方がないから切符は預けぱなしにしたまゝで、停車場に下りると、人相のよからぬ大兵肥滿の露人が、自分等の荷物を引かたげて、遮二無二に自分を引張る。こは〳〵ついて行くと、馬車の傍へつれられた。偖は此の男が馬車屋であつたか

と、やゝ安心して、やみ雲に之へ乗る。

五哩ばかり走つたが、行けども／＼田舎道ばかりで、行先は全く分らぬ。何處へ連れて行かれるか知れたものでないと思ふと、矢も楯もたまらなくなつて、途中で馬車から飛び下りやうとしたことも一度や二度でなかつた。其内やつと町列の美しい町へ出た。之がワルソーだらうと思つたが、聞いて見る術もない。用意してゐた二十五錢の會話書をくり返して『日本領事館へ連れ行けよ』といふ文字を捜すが上せあがつた折とて、いくら探しても見當らぬ。今は度胸をすゑて、どうでも勝手にしろといふ氣になる。

最後に大きな停車場の前へ着いて、馬車は留つた。やれ／＼と安心の大息を吐く間もなく、今度は馬車屋がゆすりにかゝる。澤山の人が自分と馬車屋とを取巻く。馬車屋は十ルーブルと記して兩手を出す。自分は三ルーブル出して渡す。受取らずして何やら大聲でどなる。自分も馬鹿にされてはと、日本語で言ひ爭ふ。語不通にあきれて、引下つてしまふ。終に馬車屋は自分を引ずる様に便所の中へ引張つて行く。大變な大力であつた。惡くして斯な處でぶたれでもしてはと、今度は日本語で半泣きに憫みを乞ふ。見られたざまではなかつた。併しこの半泣に憫れみを乞うたのが、馬車屋を動かしたと見えて、馬車屋は笑顔を洩して五ルーブルにて物別れとなる。

馬車屋は斯して追ひ拂つたが、――いや追ひ拂はれていたゞいたが――今度は伯林行の汽車が何時出るのやら、何處から出るのやら、丸で分らぬ。時計を出して「ベルリン」／＼と人に聞いてまはつて、漸く六時發車とだけは分つたが其次は又切符を何して買ふのやら分らぬ。親切らしい西洋人が來て、切符を買つてやらうといふらしいので、之に五ルーブル渡すと、其儘何處へか行つて了つて歸つて來ない。其中時計は段々發車に迫るし、氣が氣でない。まゝよ何でもなれといふ氣になつて、伯林行の列車といふのへ、六時三分前に

乘り込むと、間もなく汽車は徐に動き出した。兎も角も斯して乘り出しはしたものゝ、言葉は通ぜず、知人はなし、土地の案內は皆目知らぬ。考へて見ると之から先は何なることやらと心配でならぬ。見れば女の身の流石に心細くなつたか、雪子は涙ぐんでゐる。自分とても泣いてすむものなら、泣き出したかつた。

所がこの手よりない二人の身に取つて、神とも佛ともいひやうのない人が一人、忽然として現はれた。——物語は此處から起る。

初はどぎまぎして何の氣もつかなかつたが、自分等の乘つた一等室には今一人乘合の客があつた。年の頃は二十七八、色の白い品のいゝ、一見して貴族の若様としか思はれぬやうな立派な人であつたが、二人が不案內の土地に困つてゐるのを察してか、親切にも手眞似で席を讓つて呉れたり、慰め顔に何かと尋ねて呉れる様子。自分は英和會話の小册子を取出して、『私は心配でなりません』と書いた所を示すと、先方はにつこと笑ひながら直ぐ其下にある『左ほど御心配なさるには及びません』といふ文字を指で示して呉れた。不思議な話だが、自分は此時こそ全く思はず嬉し涙を溢した。

やゝ三十分も走つたと思ふ頃、車掌が來て切符の鋏を入れてまはる。愈々事だと思つてゐる內、自分にも切符を見せよといふ。自分は是非なく手眞似で無切符の由を答へると、車掌は見る／＼面色を變へて急き込んでべら／＼と何やら言ふ。夫が全く分らぬと見て取つて、今度は二人を室內から引出さうとする。見るに見兼ねて右の貴公子は先づ車掌を叱り附けて、双方何やら爭論を始めた。伯林迄の一等乘車劵は慥に買つてゐたのだと辯解もしたけれども、夫れも叶はず、不甲斐なくもたゞ默然と手に汗を握つて、二人の爭論を聽いてゐたが、其中談判がどう纏まつたものか、車掌は列車長らしい人を呼んで來て、何やら合議してゐる。其間に紳士は再び例の小册子を繰返し／＼、頁をくつてゐたが、やつと『これは私のルームです』といふの文字を見つけて、之を見せて呉れた上、更に又繰返して

以前の『左程御心配なさるには及びません』の文字を幾度も〳〵見せて呉れる。何の縁で斯う程迄世話をかけることかと自分は又もやほろりとしたが、女を見れば彼もさめ〳〵泣いて居た。暫くすると車掌が又來て今度は言葉優しくこちらへ來いと招く。行て見れば列車長室である。此處で五ルーブルづゝ出せよとの意味らしいことを示すので、ほつと安心して金入れの儘金を渡せば其中十ルーブルだけ取り出して紙片を呉れた。(假切符らしい。)さうして便處の横の二尺幅位の室に兩人を案内して呉れた。たとへ眠れずとも喰はずとも、斯うして伯林迄は行ける事になつた時の嬉しさ。腹巻の御守を取出して拜んだ位である。夜になると以前の紳士は幾度となく様子を見に來て、水はこれ、湯はこれと敎へて呉れる。二人は小さい室に小さくなつて、今晩は無論、夜明しの覺悟であつた。

二の三　八月一日

午前一時頃、汽車はトルンとやらへ着いた。旅券、荷物等、武装した憲兵に取調べられたが、先づ無事に通過する。之からさきの各驛には篝火を焚いて無數の軍隊が屯してゐる。丸で戰爭の様だと思つて居た。午前二時頃に、又もや前の紳士が來て自分等をさし招く。招かるゝまゝに室の前迄行けば女を自分の部屋に入れて暫く寢させてやれといふらしい。折角の好意にそむくにも非らず、女は室内に入つて初めて手足を延す。自分と紳士とは其間の廊下の窓際に立つて外面を見てゐたが、停車する毎に澤山な軍隊が見える。其度毎に何やら頻に手眞似で話すが一向通じぬ。中にロシヤといつて、鐵砲をうつ手眞似を示す。自分は日露戰役に日本の强かつたことでもほめて呉れたのかと思つて、イエス〳〵を連發する。

兎角する中に事多かりし一夜は明けはなれた。停車する毎に麵麭麥酒の類を歩廊(プラットホーム)で賣り歩く。數多の乘客は空腹に堪へ兼てや、麵麭一個に小銀貨數個、麥酒一本に大銀貨數個を出して、左ながら奪ひ合ふやうに買ひとる。中には腕力で取つて行く人もある。文明國と聞いた歐洲にも斯なことがあるかと、自分は不思議

と思つた。例の紳士も飛降りて麵麭麥酒林檎等を買ひ求めて、自分等に勸めてくれる。麥酒を呑みかはしたり、室内に掲げた地圖を指して、伯林はこれと敎へられたりする内に、十二時五分に列車は無事伯林フリドリヒ街(ストラッセ)へ着いた。例の紳士に荷物迄手傳つて貰つて、漸く目ざした伯林に降車することが出來た。言ひたいことは色々あつたが、言葉の通ぜぬかなしさ、先方には分りもせぬのを承知で日本語で厚く禮を述べて別れる。

打電してある松下旅館の主人は迎に來て居らず、手帳にある、同旅館の處書を車掌に示して開けば、再び乘車して、十五分間程走つて、次の驛にて降車せよと、注意して呉れた。餘儀なく歩廊(プラットホーム)に立つて、途方に暮れて居る處へ、折よく和蘭から列車がついて、其中に日本人(後で芳我醫學士と分る)が居たので、委細を語つてやつと松下旅館へ連れて行つて貰ふ。此處で初めて獨露が開戰したことを聞き、あつと開いた口が塞がらなかつた。そんなことと知らねばこそ只困つた〳〵で通して來たものゝ、思へば恐ろしい旅であつた。能く命があつた、能く通過が出來たと、澤山な留學生諸氏の笑ひ話の種にされた。惜に自分は開戰後獨逸へ入つた最後の日本人であつた。

宿へ着いた後は何は兎も角空腹で堪らぬから、粥を煮て貰つて、其まゝぐつすりと同旅館の客室に前後も知らず寢て了つた。(以下八月二日より十二日迄伯林滯在中の日記を省く)

二の四　八月十二日

獨露の開戰から引續いて、日獨の開戰となり大使館より在留日本人總立退の命令が出たので、伯林の在留日本人は上を下へとひつくりかへるほどの大騷動で自分は荷物全部大使館の穴倉へ預けて、あわてふためいて、和蘭經由英國へ逃げ出すことになつた。幸に數多の留學生諸氏が一所になつたので、其後について午後十時三十分伯林レヤタバンホールより發車した。軍隊輸送用の列車とて、此場合旅客などは丸で眼中になく、室は全部將校の占有となり、一二等の切符を買つた我

々日本人は廊下に立つたまゝ呑まず喰はずにゐなければならなかつた。怒つたとてどうしたとて始まらぬ。自分はやつと軍隊に用ふる牛乳を貰つて一時の飢を凌いだ。

二の五　八月十三日

午前三時四十分に夜は明けたが、昨夜より、一睡もせぬことゝて非常に疲を覺えた。

此日の午後一時頃廊下に立つ澤山な日本人を押のけ〳〵一人の獨逸將校が、例の美々しき軍服でツカ〳〵自分の前へやつて來た。之が何と思つたか、滿面に笑を傾けながら、不意に自分に握手を求めたので、留學生諸氏はハッと驚き、自分も驚く。能く見れば之に又思ひもかけぬめぐり合かな。此將校こそ莫斯科以來幾多の世話になつた其の青年紳士であつた。餘りの奇遇に自分は驚喜した。何は兎もあれ、過日來の好意に對して厚く〳〵禮を述べ、先きも自分等の今日迄無事なりしを喜んで吳れる。今度は大丈夫、獨乙語の慥な留自由もなく思ふが儘に話が出來た。

偶然にも斯な時斯な處で再び邂逅するとは能く〳〵奇緣である。今度は言葉の自由なのに任せて、自分の身の上やら今回の旅行の趣意などを物語ると、先方では自分が喜劇の役者とは思ひがけなかつたとて大に笑ふ。初からどうも不思議な男女と思つて、隊に歸つて後同僚にも其次第を話した次第であつたといふ。斯う言つて後、一寸此處を出て行つて、今度は別に四五名の將校を伴ひ來り、豫て話した不思議の旅行者は此人々だとて、一々に自分を紹介して吳れる。さうか夫は奇遇だとて、皆々笑ひながら握手しに來る。一坐は此話に忽ち陽氣に開けて、笑ひさゝめき合つた。前回會つた時とは大變な相違である。此頃はまだ日本の態度が不明であつた爲、獨逸では、日本が前日の敵なりし露國を背後から打つてくれるだらうなどと信じてゐた時で、殊に日本人に對して好意を表した最中であつた。自分は只もう此の恩人に再會し得たのが、嬉しくて堪らな

斯くて其夜十二時五十分に列車はザルッベルゲンに着く。右の將校は此處で下車する筈だが、大分停車時間があるから、暫く酒でも酌んで別を惜まうと自分を誘ひ出す。願うてもないことと早速伴はれて停車場の酒場に行つて、麥酒を酌み交はして互の健康を祝し合つた。いよ／＼別れといふ段になつて、將校は名刺に行先を書き添へて自分に渡した上、若し折があつたら戰地へ端書でも吳れよといふ。自分は必ず差上ぐべしと約束する。其中時が來て、士官は別の列車に飛びのる。窓から帽子をふる。自分は其後を飽かず見送つて、盛に萬歲を唱へた。

後で名刺を讀んで貰ふと「野戰砲兵中尉ベッカース」とあつて、傍に「戰地參謀本部宛」と鉛筆で走り書きをしてある。察するに彼は間諜として露國に入り込み、戰開くるや、直に本國に走せ歸つたものと見える。前に會つた時は瀟洒な背廣服に髮を奇麗に分けてゐたが、今度は中尉服に頭を一分刈にしてゐたから、一寸初め見た時は其人とも氣がつかなかつた。只彼れの態度容止から察するに、背廣の時にも軍服の時にも、どう見ても然るべき貴族の若樣としか見えなかつた。

斯くて今晚我等の列車が發車せぬとのことに留學生諸氏と共に落人一同は停車場で毛布にくるまつたまゝ夜を明した。

二の六　八月十四日

午前八時三十分ザルッベルゲン發、十一時頃、國境のベンタイム着。旅劵荷物檢查も心配した程のことは無事通過したので、喜の餘り同驛の食堂にて三鞭をぬいて、一同無事を祝した。其時も話は又もや昨日の士官の噂となり、先きが望むこそ幸と片時も早く、禮狀を記念に認めて出せよと、皆々言つて下さる。それには併し日本文が却つて君の心が先方に通じてよからうと言ふので、お勸めのまゝに禮狀を認めた。急ぎの折とて原文の寫を此日記帳に記し置くことを忘れて殘念であるが、大要は先日來の厚意を深く謝し、神ならぬ身の同じ列車に乘り合せて一夜知らざりしこと、翌日拜顏せし時の嬉しかりしことと二度あることは三度ある

との諾、いつか日本へ御來遊あつて、再び會見する如きことあらば如何に嬉しからん、切に御武運と御健全を祈るとの意味の下に日本喜劇俳優本名和田久一、藝名曾我の家五郎と明記し、尙別に寫眞一葉舞臺面の畫繪書三葉に自分の姿へ印をつけて封入し、表記は金澤師範(?)須藤博士に書いて貰ひ、ペンタイム驛のポストへ投入した。

同驛發車、午後十一時和蘭海牙着、直ちに馬車にて何とやらいふホテルへ着。夕食を濟した後つかれたまゝ其まゝ臥床に入る。(終)

三、倫敦へ倫敦へ

五郎の日記は之で終つてゐるが、此日記には更に不思議な後日物語がある。

この後日物語に入る前に試に僕自身の日誌を繰つて見ると、誠に世間は廣いやうで狹い。遠く／＼かけ離れたものが、次第に思ひまうけぬ所から互に相近づいて行く具合は、左ながら、誰かゞあやつる糸に隨つて動いてゐる人形のやうな。先づ五郎が莫斯科を出たといふ七月の三十日には、僕は母と二人で下總の我孫子の湖畔に暑を避けてゐた。其翌三十一日五郎と雪子が國境で泣き出した日は、僕が一寸東京に出た日である。先月から常陸下總の間を母と二人で旅行して回つて、都戀しくて堪らぬから、此日は朝早くから東京に出て、大森の宅にも歸り、久しぶり朝日新聞社にも出た。丁度墺塞の戰開けて、今にも歐洲大亂にならうとする間際で、米田外報部長から、何時君を呼出しに行くかも知れんぞとおどかされたりなんかした。僕は外報部の遊擊隊といふ譯で、時々忙しい時は御用を仰せつかる。どうか夏休中はそんなことのないやうにして吳れと賴んでおいて又我孫子に歸る。八月一日は矢張り我孫子で母と靜に田園の閑寂を味つてゐたが、其翌二日には果然社から電報で召還に來た。それから、東京に行くやら大阪に行くやら色々ごた／＼した揚句、到頭八月六日に僕は倫敦特派と事定つて、五郎が伯林を逃げ出したといふ、八月十二日の午後三時には汽船サイベリアで橫濱を出發することゝなつた。彼は伯林、僕

は横濱といふ相違はあるが、同じ八月十二日に同じ倫敦指して出かけたのも誠に不思議な偶合である。

然るに奇遇はまだ其他にもある。

僕は横濱で船に乗つた後、三井物産から倫敦へ赴任する赤松覺次郎若林夘三郎の二君と會して、同行することゝなつた。其の關係から僕は桑港でも紐育でも、三井物産の厄介になつて、御馳走にもなれば、名處の案内も受けたが、其度毎に談戰爭の事に及ぶと、漢堡にゐた三井の連中の消息が必話題に上つて、誰は居殘つたとか、彼は引上げたとかといふ話がよく出た。其中で畑中といふ若い機械部の社員が捕虜になつてゐるといふ一事が不思議に僕の頭に殘つた。彼は年こそ若いが、前途頗る多望の秀才で、あんな男がむざ／＼殺されでもすれば、如何にも可愛さうなといふのであつた。

九月十三日に倫敦に着いて後も、畑中君の事は屢々三井の人々から聞いた。聞く毎に僕は見も知らぬ人ながら、無事なれかしと心私に祈つた。幾多の捕虜の中で僕が心から無事を祈つたのは、老川義信君と此の畑中君とであつた。畑中君は日獨開戰の噂が立つと、直ぐ出張先から一旦漢堡へ引き上げて、其處から更に國境に出やうとして捕へられたが、之は間もなく嫌疑が霽れて釋放された。然るに釋放されて後いよ／＼國境のペンタイムに着いたのは八月二十日の午後であつたが、此處で又もや捕へられて、今に其儘になつてゐるといふのである。

所が十月の二十日過になつて、突然其畑中君が無事倫敦に歸つて來てゐる由を人ぎゝに聞いた。一度逢つて色々話もきゝたいと思つて、三井の高橋敏太郎君に相談すると、或夜早速二人連で僕のホテルに來て吳れた。晩食を一所に喫めながら、きび／＼とした言葉使で畑中君が捕虜になつた顛末を巨細に話すのを聞いて見ると、君は八月二十日ペンタイムに抑留されて二十三日と二十五日と兩度の取調を受けた後、二十九日にハノーベルの捕虜收容所に送られ、夫から間もなくハノーベル市中の下宿住居を許されて、此處で暢氣なが

ら心元ない月日を送つてゐる中、此の十月に入つて、米國大使の盡力で釋放さるゝことになつたといふ。其間には、苦しい事恐ろしい事悲しい事、くやしい事など色々あつた。たゞ其中に一つ、恐ろしくもあり、可笑しくもあり、始は殆ど之が爲死を決する位でゐて、終にはあはや可笑しさに吹き出さうとしたやうな事件があると言つて、彼は其一部始終を話した。以下畑中君の物語である。

四、『重要書類』

八月二十五日の事、軍事裁判所へ呼び出された。二十三日に一應の取調がすんで二日目の事である。今度はいよ〳〵死刑の宣告でも受けることかと思つて出かけた。附ケ劍の兵士が前後に二人づゝついて、とぼとぼと之に挾まれて裁判所迄歩いて行く樣は隨分見すぼらしいもので、道行く人に顏を見らるゝのもいやであつた。

法廷に出ると、戶の外に二人、內に二人嚴重に兵士が警護して、一段高い處に裁判官が自分を見下してゐる。あんまり氣持のよいものでなかつた。やがて裁判官は『今日は一つお前に飜譯して貰ひたい重要な書類がある』とやり出した。自分ははつと胸を抱いた。重要な書類といへば、いづれ何か軍事上の秘密とか何とかいふものに相違ない。之を飜譯して日本の不利にでもなるものなら、國民の義務として正直な飜譯は出來ぬ、さりながら日本人の捕虜は自分の外に今一人ある。自分だけいゝ加減にごまかしても、後の一人と言葉が合はなかつたら、噓は忽ちにしてばれる。いづれにしても自分の立場はない。どちらにしても首になるは知れてゐる。幸にして自分には兩親も妻子もない。已むを得ずんば殺さるゝ迄と度胸を極めた。

裁判官は勿體らしく胸の衣嚢から疊紙に挾んだ書類を取り出した。見ると重要書類どころか、曾我の家五郎からベッカース中尉に宛てた禮狀である。外の時なら吹出す所であるが、流石に其時は一時決心の覺悟をした位の時とて、あんまり可笑しくはなかつた。同時に自分は之ならばと安心して、張りつめた氣の一時に

ゆるむを覺えた。

さて命のまゝに飜譯にかゝつて見ると、五郎が變に氣取つて丸で芝居の臺詞かなんかを其まゝ書いたやうなので、どう譯してよいか分らぬ所がある。「神ならぬ身の三たびまで御姿を拜し參らせんとは」などは全く困つた。「二度あることは三度ある習」どうやらして「ふしつけをかへりみず」何とか言ふのは、日本でこそ何の事もなく通じるが、飜譯となると、說明に說明が要る。やつと譯し了つて裁判官に見せると、裁判官は嘘だと思つて承知しない。今度は此處から此處まで譯しろと妙な所を少しづゝ區切つて譯させる。いよ〳〵以て分らなくなる。裁判官は益々變な顏になる。

やがて最後に書き添へた寫眞云々の言葉を見つけたので、この手紙には寫眞と端書とが附いてゐる筈だと言ふと、之で初めて、裁判官も合點が行つたと見えて、如何にも其寫眞は此處にあるとて、又もや衣嚢から取出して見せた。さうしてこの印のついたのが、差出人であつて、夫が喜劇の役者である旨を答ふるに及んで、裁判官はいよ〳〵疑を霽して、顏の色を和らげた。この以來裁判官の態度が急に打とけて來て、其寫眞を見せて吳れる、事件に關係のないことまで語り出しなどした。死ぬか生きるかの問題と心得てゐたものが、人もあらうに喜劇俳優の禮狀に過ぎなかつたさへ可笑しいに、この又手紙を大事さうに疊紙に挾んで、裁判所で重要書類とは話が大き過ぎる。と可笑しかつた。

五、倫敦の握手

畑中君の話に依れば、五郎が心を籠めて書いた書面は、まだ名宛の本人に屆いてゐない。氣の毒なは當のベッカース中尉で、折角の好意が仇となつて、一時は變な嫌疑を蒙つてゐたらしい。

畑中君は倫敦着後間もなく友人と生稻（倫敦の日本料理店）で食事を共にしたが、其時右の話をやり出すと、折よく五郎が隣室に來合せてゐるといふので、急に此處へ呼んで來て、二人は手を握つた。殺されかけた人と殺しかけた人と。（大正三年十一月初旬の月曜日ウヲリックに於てしたゝむ）

新佃島より

松崎天民

「探訪ロマンス」の後を續ける豫定でしたが、材料の都合で中止し、別に「新佃島より」の通信として、「肺病列傳」の一つに數えて居た亡友「山田桂華の死」を書きます。面白いとか、興味があるとか云ふ類のものてはありませんが、齢若うして窮死した亡友のために、「紙上の碑」を建たい——それが私の目的なのです。

山田桂華の死

一　獄裡の友加藤君

東京監獄で苦役して居る「何百何十番」かの加藤芳吉君——

亡友山田桂華の思ひ出を書くのに、何も獄中に居る君に宛て送らなくても宜い。桂華とは友人の間柄てあつた高尾楓蔭君も居るし、また井手蕉雨君も居る。東京には田村江東、小山内薫、結城禮一郎の諸君を初め、築地の待合花本の女將、河辰中に居た藝妓常磐など。數え來れば、此の中の何人に宛て書いても適い。

然るに僕が此の通信を、獄中に居る君に宛て送らうとするのは、如何にも奇を好む者の様に見える。そして世間に忘られて居る君の現在を、知らぬ人達にまで廣告する様て、心苦しい氣持がせぬても無い。けれども、死だ山田桂華のために、心から泣いて遣るべき人は、君位のものだらうと思つて、思ひ切つて君に宛て送る事にした。僕の友人加藤芳吉君も、今は柿色の囚衣肌寒く、兩襟に「何百何十番」の符號を附けられて居るかと思ふと、人知れず泣きたくなる。生れた儘の姓

名ては生きられず、「何百何十番」て生活して居る君の現在は、電話機にも劣つて居るよ。

山田桂華の短かつた一生は、隨分、數奇を極めたけれど、君の前半生も溫順な一本道てはなかつた。學問も修養も無いけれど、人並優れた世渡りの才能を有つて居ながら、君は何うして何時までも斯うなんだらう。たとへ君が殺人を犯しても、强盜、詐欺、窃盜罪を犯しても、一度、友人として交つた情誼は、そんなこと位て忘れられるものてはない。世間の多くの人達は、「加藤が入獄した、えッ、そんな奴とは知らなかつた」と云つて、身震ひして愛相を盡かすのが例だ。けれども僕は、「加藤が惡いのてはない、加藤の罪が惡いのだ。加藤は罪を犯して入獄したけれど、僕の友人加藤芳吉は、別に友人として存在して居る」と思うて居る。僕は金も無いし力も乏しいし、君の友人として、何一つ物質上の便宜を與へる事は出來ないが、唯この變らぬ友情だけは、心から受け入れて貰ひたく思ふ。

君が未決に居た去年の秋、一家一族の大災厄て妻と妹を失ひ、君が既決囚に入つてから、僕は朝日新聞社を退いた。斯うして初めて浪人の境涯になつて見れば、人知れぬ憂苦を語りもし聞いても貰ひ得る友人が、人一倍懐しく戀しくなる。君さへ此の娑婆に居て、正しい大道を濶歩して、正當な勞力て正當な金を儲けて居てくれたなら、僕は何んなに心强く思ふか知れない。生れた國を同じうし、艱難の經路を同じうしたのみて、君と僕とは殆ど凡ての場合に於て、「別な人」てあつたにも拘らず、親友として交つて居たのには、絕ち難い宿命の力があつたに違ひない。去年の冬、君が獄中からくれた悔みの手紙を讀だ時、僕は聲を放つて泣いたことが忘れられない。新聞社に居た頃は、其の日〱の周圍に刺戟されて、心靜に考へる暇もなかつたが、浪人の今となつては、何かに付けて人懷しい念が湧いて起る。斯うして亡友「山田桂華の死」を書くに就いても、思ひ起すのは君の身の上てある。好んて險道を歩いて、一界に成功し樣とする君の努力を、何も惡いと云ふのてはないか、險道は往々にして邪路に落ちる。願くは今

度の入獄を最善の機會として、口頭のみでなく、眞實の修養をして來て欲しい。

齡二十九歳で死だ山田桂華の名は、不幸にして我國の「新聞史」にも、また「演劇史」の一行すらも、埋め得る資格を有つて居ないが、我々友人の仲間だけには、何時までも其の姓名を刻み付けて置きたい。京都日出新聞の社會部長から、東京の國民新聞に轉じて、更に中央新聞記者となつた事、及び都新聞が懸賞募集した脚本に當選して、「醍醐の花見」を歌舞伎座に上演した事が、山田桂華の公的生涯であつた。永久性の價値を有たない小説や脚本は、此の他に十餘篇あらうが、それが山田桂華の一生に、何の力ある色彩となり、何の榮あるロマンスにならうぞ。

それにしても、「山田桂華の死」を僕が書いて、それを獄中に居る君へ宛て送らうとは、思ひ設けなんだ廻り合せである。君の死を書くべき者は、此の僕の他に無いにしても、抑も僕の死を書いてくれる者は、何處

二　金色夜叉の貫一

獄裡の友加藤君、青山の宅に居ては、子供が騷ぎ廻つたり、來客があつたりして、氣分が散漫になり勝て困る。それに少し書きたい物もあるので、三四日宿泊の豫定て、今夜この海水館に來て、洲崎に面した海邊の樓上に、たつた今、やつと落着いたところである。

同じ東京の市中とは云ひながら、渡船一つ渡つた新佃島東町界隈は、さながら遠い海岸にでも來た樣な氣持がする。今年は夏の初め頃、日光から中宮祠の方へ旅行したのみて、久しく旅心地に餓えて居たが、今夜は久し振に旅人らしい氣持を味ふことが出來やう。折柄の宵闇て、その上に霧が深いので、まだ眺望を盡すことは出來ないが、松青い青山から波靜な海邊に來た心地は、これが同じ東京市中かと驚かれる。僕の部屋は此の前まて、横山黒頭巾の居た隣室て、二階には新進文士和氣律次郎君、階下には法科大學の吉植庄亮君などの知己が宿泊して居る。

地點になつて居ると見え、以前には平田禿木、島崎藤村、小山内薫、吉井勇の諸家が居たさうな。宿の女中はお梅さんと云つて、二十五六の小柄な女だが、文士達の事は能く知つて居ると見え、「横山さんは此の部屋て、大將東郷を書かれました」とか、「島崎さんは今あの和氣さんの居らつしやる室で、春と云ふ小説を書かれました」と話して居た。それに最一つ不思議な事には、僕の居る室から廊下一つ隔てた西隣の十一番は、六疊と四疊の二室になつて居るが、亡友山田桂華夫妻は、四十一年五月から九月の中旬まで、この十一番の室で起臥(おきふし)して居たさうな。山田が本郷の下宿から、海水舘に轉宿した由は、其の當時承知して居たが、今その隣室に泊り合せたのは、何かの因緣と云へやう。況んや此所で桂華の短かつた一生を思ひ、悲痛を極めた涙の最期を悼まうとするに於てをや。

君と山田とは、餘程、前からの知合らしいが、僕が懇意な間柄になつたのは、三十九年の秋、大阪道頓堀の角座で、素人芝居を公演した頃からであつた。井手蕉雨、高尾楓蔭の兩君を初め、同志の面々十餘名の中で、桂華は立役、君は敵役の方に廻つて居た。藝題は時代物に露伴の「五重塔」と紅葉の「金色夜叉」であつたと記臆して居る。君は「五重塔」の惡い遊人と、「金色夜叉」の茶店の老婆に扮し、桂華は貫一、蕉雨君は荒尾讓介に扮した。外に齊藤紫軒、中尾鶯夢の兩君も居て、一座は相應に賑はしく、僕も彌治半分に、稽古の時から出入して居た。ところが二日目に貫一の出幕が迫つても、山田君は京都の新聞社の方が手引兼ねて、此の僕が俄に貫一の代役を勤める事になつた。新聞社の方へも内所なら、平土間で見て居た妻にも無斷で、僕は新俳優の何とか君に化粧して貰ひ、蒲田梅園と熱海海岸の二場を勤めた。いやもう散々の大味噌であつたが、それでも見物の片岡仁左衛門、熱海孤舟、關根默庵の諸君からは、お世辭的評判を受けた。これが山田と僕と親友になる動機て、京都へ遊びに行つた折などは、一二度、祇園のお茶屋で、御馳走になつた事などもあつた。

その頃から山田は、靜間小次郎一座の脚本を書いて、先斗町で馴染を重ねた藝妓を落籍して居た。その年の暮、僕は東上して國民新聞に入り、山田も東上したいとの志望を云つて寄越した。國民新聞の結城君に紹介して、四十年の夏の初には、國民新聞に於ける同僚としての山田を見る樣になつた。山田がいよいよ脚本家にならうと決心したのは、「醍醐の花見」が當選した頃からで、何か知ら落着かずに、常にソワソワとして居た。「醍醐の花見」が歌舞伎座に上演された時には、德富蘇峰先生を初め、國民新聞の幹部達一同が見物した。その時の山田の喜悦(よろこび)は有頂天に達し、劇界の事、總て掌中に在りと云つた風の、當るべからざる凄まじい氣焰であつた。

君も知つて居る通り、山田は背の高い痩せた色白で、少し猫背にはなつて居たが、先づ好い男の部類であつたらう。此の宿に居る和氣律次郎君を、少し痩せさせて背を高くしたら、何の事は無い山田桂華その儘の姿で此頃へず、先づ間違はなからう。

三　貫借馬車で豪遊

獄裡の友加藤君、山田は間もなく國民新聞を退社せねばならぬ事になつて、中央新聞社へ入つた。外濠線の電車の中で逢つた時、「新佃の海水館に轉(かは)つた、好い所だよ、一度遊びに來ないか」と云つたが、思へば其の時が、山田と僕との最後の遭逢であつた。

本郷森川町の下宿に居た頃から、落籍した藝妓の細君と同棲して居たが、夫婦仲は善かつたり惡かつたりした。國民新聞社に居た頃から、一種變な咳嗽(せき)をして居たが、其の時分から肺の方にも異狀があつたらしい。中央新聞に入社してからは、顧問とか主任とか云つて、文藝と社會方面の事は、自分の一存で何うにでもなるかの樣に、例の調子で言ひ觸らして居た。都新聞と歌舞伎座から、不時の收入があつた上に、「新小說」に書いた拙い脚本を、川上音二郎が上演しないのにも拘らず、百圓内外で買つたとかで、その當時の山田は、大分、贅澤を盡したらしい。

にも、山田の聲色は甚の常でなかつたから少し位の相場の高下があるのみで、押しなべて不見轉ならぬはない新橋藝妓も、河辰中と云へば「ははア」と默頭れる家の藝妓常磐を、得意然として僕に紹介した。そして「松崎君、そんぢよをそこ等の不見轉買は、モー宜い加減に止したら何うです。同じ何するのなら、せめて此の常磐くらゐをね……」と、如何にも僕を卑しむ様な態度であつた。「あんな妓に二三十圓も取られて、山田も隨分お大盡様になつたものだ。僕なら五圓位で何して見せる」と、心竊に笑つて居たが、山田には一所懸命の色沙汰であつた。「山田の様子が變だ」とか、「山田さん、異つて居ますね」とは、山田と交る人々や、山田の出入する花本や、木挽町の割烹店みどり屋の女中達が、異口同音に取沙汰する言葉であつたが、山田は相變らず、有頂天に遊んで居たらしい。

馬車に乗つて、花本やみどり屋や、遠く吉原へ繰込んだのも、其の頃の事であつた。吉原の若い幇間へ、夏の白い半靴を買つて與へ、その尖へ赤インキで、「醍

買ふ花見作者、山田桂華一と書いて、羽子業書かつの海老樓へ繰込んだりした。中米、河内、稲本、大文字と、その若い幇間を參謀にして、大分、脚本作家風を吹かせたさうで、中には「山田さん、桂華先生」と、戀こがれて居た女郎もあつたと云ふ。花本やみどり屋へ行つた時、女中が座蒲團を出し遅れたり、脇息を忘れたりすると、御機嫌極めて斜ならず、激怒することもあつたとか。中央新聞の田村江東君や、小山内薫君と知合になつたのは、もう山田の精神狀態に、異變が兆してからの事で、歌舞伎座の連中なども、變に思つて居たらしい。電車中で逢ふたのが最後で、それから後の山田に就いては、僅に巷説を根據とするのみであるが、山田の生命は其の頃から、日一日と縮められて居たのであつた。其の肺も其の頭腦も、毒菌に巣はれて居るとは知らず、金の有るに任せて、今日は新橋、明日は吉原と遊び廻つた山田の面目が、眼に浮かぶ様な心地がする。今から思ふと、此の海水館に移つて來た頃が、山田桂華一代の榮華、賃借馬車で豪遊して居

た最中であつたらしい。

其の頃の山田桂華と云へば、珍談の製造元かの樣に取沙汰されて、山田を知る者の間に話題となつた。馬車に乘廻して居た頃、突如として小山内薫君に電報を送り、「イマユクマテ」と驚かしたりした。山田は單り割烹店や待合ばかりでなく、知己友人の間を馬車で訪問したかつたが、其の友人の多くは生憎に、馬車を横着けすべき玄關を有つて居なかつたので、これだけは思ひ止つたとか。あゝ山田にして、今暫く生き長らへたらんには、朝から晩まで賃借自働車に乘廻つて、都大路を我は顔に睥睨したものを、悲しいかな其の頃は、自働車が未だ盛でなかつた。

「山田桂華は發狂した」！山田を知る人々の間に、かうした言葉が囁き交された頃には、もう立派な發揚性妄想狂に爲つて居たらしい。哀れ世の常の態なりせば、新聞記者としても、脚本作家としても、より多く成功して居たものを、三十になるやならずで死だ山田の生涯は、眞に慘鼻の極であつた。

四　海水館の十一番

獄裡の友加藤君、今夜この海水館に來て、山田の居た隣室に座し、原稿紙に向ひ萬年筆を走らせて居ると、樣々な感が後から〱と湧いて起る。瑠璃窓を照す月色蒼茫として、東京灣上一波起らず、四隣たゞ寂として、涙が止め度もなく双頰に流れ落ちる。

生々死々、無窮より無窮へ行く此の生の一角に立つて、獄裡の君を思ひ、幽明界を異にした亡友を悲しむ。殊に「旅館寒燈獨不眠、客心何事轉凄然」と云つた樣な、師走も茲に迫つた感が、何とはなしに哀思をそゝる。山田も今まで生きて居れば、松竹専屬の脚本作者位にはなつて、戀と名と金とに微笑めもしたものを。何事も宿命とは云ひながら、三十にとゞかぬ若い身そらを、冷たい墓石の底に埋めたのは、何う思つても不憫である。和氣律次郎君の顔を見て居ると、山田桂華こゝに在り、それが笑つたり食つたりして居る樣で、海水館の場所柄が、殊に山田を彷彿させる。

海水館に於ける山田夫妻の生活は、僅に五ヶ月内外

であつたが、桂華先生の狂態は、今でも此宿の話柄に殘つて居る。僕の給仕をする女中のお梅さんは、足掛七八年も此宿に居て、山田夫妻の平生は、何から何までも知り盡して居る。そのお梅さんの話に據ると、山田が海水館に移轉したのは、歌舞伎座で「醍醐の花見」を演つた翌日で、金廻りが大分好かつた時であつた。この宿から馬車で往來した事はないが、よく方々から電話が掛つて來た中にも、河辰中の常磐からは、二日に一度位の速度で、電話の口說があつたさうな。本人が訪ねて來たのは、僅に一度だけであつたが、「あの藝妓よりは奧樣の方が、小柄でしたけれど美人の樣に思ひます」と、お梅さんは女だけに、今でも細君の方に同情して居る。誰にでも機嫌の好い時と惡い時とあるが、山田のはそれが激しかつた樣で、何うも普通の樣子には見えなかつたさうである。

「毎日、新聞社の方へは出て居られましたが、夜分などは遲くなり勝でございまして、何時も大抵少しは醉つてお歸りでした。妾達が御部屋に入りました時は、何のお變りも見えませんが、始終夫婦喧嘩がありました樣で、奧樣も大分苦勞を爲さいました御樣子です。御機嫌の好い時ですと、今日は女房さんの衣服を誂へるのだと仰つて、能く白木屋邊へ電話をお掛けの樣でした。その代り御機嫌の惡い時は、隨分手荒な事をなさいました樣で、髮を振り亂した奧樣が、忍び音に泣いておいでになるのを、二三度お見受けした者がありました。能くあの新聞はさみでもつて、打擲なさいました樣で、細い木か竹の何ですけれど、お痛かつたことで御座いませう。山田さんは六疊の方へ、奧樣は四疊の方へ寢られまして、山田さんの蒲團へ、ちよいとでも奧樣の身體が障りますと、直ぐ火の樣にお怒りの樣子でした。それでも奧樣は辛抱して、洗濯物などもして居られましたが、小柄の瘦せた方ですから、單衣一枚を絞るだけの力も無いと仰つて、能く御手傳をして居ました。藝妓衆だつたさうですが、好い家のお生れかして、近所に居ました辻と云ふ車屋の夫婦に向つては、爺や婆やと呼捨にされ、爺や婆やも奧樣〳〵と深

切にお世話をして居た様子てす。」

山田が烈火の如くに赫怒して、新聞はさみを振り廻した時、細君の逃げ場所は、何時も其の車屋夫婦の許てあつた。其の細君は藝妓時代から、山田のためには隨分苦勞をして、痴話口説の限りを盡した戀仲てあつた。その細君のためには、女の子まで生ました他の女と別れて、いろ〳〵無理な算段をして、漸との思で落着したとも聞いて居る。さうして女は何處までも、山田のためには苦勞を厭ひはしなかつたに、山田の方から秋風吹かせて、出て行けがしに苛責んで居た。戀に苦勞の昔を思へば、どうして斯んな事が出來やう、山田は其の頃から、戀仲の愛妻に對してさへ、正氣の沙汰ては無いのてあつた。

それても宿の者に對しては、平生と少しも異らず、たゞ電話を掛ける時や、玄關を出入の時には、時々妙な事があつたと云ふ。若し其の頃、君が僕が遊びに行つて、變な樣子を看破したなら、何とか治療の方法も講じたものを、思へば可愛相な事をしてしまつた。

五　細君虐待の狂暴

獄裡の友加藤君、山田は名と金のために狂うて死し、君は女と金のために、一再ならず獄裡の人と爲つた。たゞこゝに平々凡々、何の爲す無き一人の僕あつて、旅に似た此の宿で、山田と君の上を思ふて嘆く。これが僕の生活で、これが僕の專業であらう。

海水館に居た四十一年は、山田が二十八歳で、細君も二十八歳の同い年てあつた。山田は脚本と金とに狂うて、魂魄有頂天外に浮かれて居たが、それても細君に對しては、人知れぬ苦勞があつたらしい。人目忍んて逢ふ瀬を樂しむだ戀仲は昔の夢、腸窒扶斯を二度も病んでからは、嬌艶を誇つて居て鴨西の一美妓も、氣抜けがした樣な女になつた。「京都へ歸らせやう、別れやう、手を切らう」と、山田の方では其の氣になつても、細君の方が承知しなかつたらしい。山田夫妻のいきさつは、僕よりも君の方が詳しい筈たが、何にしても氣の毒なは、細君の身の上であつた。

本郷の下宿に居た頃、僕も一度逢つた事があるが、

京都式の世話女房然として、左棲を取つて居た女には、何うしても見られなかつた。山田は能く口癖の様に「うちの女房は馬鹿で困る」と云つて居たが、海水館の女中に向つても「おかみさんは馬鹿なんだよ」を、繰返して居たさうな。山田自身の考へては、細君を京都へ歸らせた後、河辰中の常磐を何とかして、三人目の細君にしたかつたのかも知れない。可愛い女の子まで生ませながら、今の細君の藝妓時代に迷い込で、前の女に別れた程の山田だもの、二度目の細君を捨てゝ別れて、三人目の常磐に迷ふたのも、決して不思議な事ではない。細君を多く取換へた方では、山田よりも君が先輩らしいが、藝妓を藝妓として眺める事の出來ない君達の心が、僕は可笑しくて堪らない。古い疊を取換へる様に、新しい妻から妻へと移り行く君達の不眞面目を、僕は衷心から憤慨して居る。

山田の細君虐待は、海水館に於て最も其の慘酷を極めた。海邊は風通しが良くて、夏は水の様に涼しいが、蚊の出る事も一通りではなく、蚊帳が無くては一夜も過されまい。然るに、愚劣な脚本の常選に慢心し、また其の愚劣なる脚本の上場に增長した山田は、金廻りが少し良いので物狂はしくなり、淺間しくも天下の大脚本作家を以て信じ、其の細君に强要するに、天下の大家の妻たる資格を以てした。もとより正氣の沙汰ならねば、眞面目に憤慨するでもないが、山田は蚊の出る一夏を、唯我獨尊とたゞ一人、廣い蚊帳の中に納り返つて、細君は斷じて蚊帳の中に入るを許さなかつた。「お前は文豪の妻君たるべき資格がないから、京都へ歸りさへすれば宜いのだよ。お前は僕の女中なんだから、蚊帳の中なんかに入らなくても宜い」とばかり、狂人とは云ひながら、憎むべき我意を通じた。「お可愛相に奥様は、夜通し蚊を殺すので寢られはしません。朝起きて行つて見ると、半紙一二枚の上に蚊の死體が、眞黑になつて並んで居るのですもの、隨分だと思ひましたわ」と、今でもお梅さんは憤つて居る。それで居て機嫌の好い時には、白木屋松屋へ細君の衣服を注文したのだもの、何うしても正氣の沙汰ではなく、文豪桂華先生

の所爲であつた。

「築地の待合花本から、山田さんへ御病氣の見舞として、鷄卵を澤山持て來たことが御座いました。其の時山田さんは非常の御立腹で、こんな物を持て來て、勘定を拂はせ樣とするのは怪からん。すぐ持つて行つて歸して來いと仰るので、持つて行た事が御座いました。宿では別にお氣が變だとは氣付きませず、一風變つた妙な御方だ位に思うて居ましたが、後で小山内樣から承りまして、其の頃から少し狂つておいでになつた事が判りました。氣でも何うかしておいでにならねば、奥樣を蚊責めになどはねえ」と、お梅さんの同情は、今でも細君の方へ深い傾向が見える。

斯うして海水館に居た九月中旬までは、山田の肺と頭腦とがいよ〳〵險惡に陷る初期であつたらしい。それから本郷の下宿に轉じて、京都へ歸る其の日まで、中央新聞記者であつたさうで、此の間には我黨の好漢田村江東翁なども介在して、隨時隨所に諸種の珍談や奇談を演じたらしい形跡がある。

六　田村江東の電話

獄裡の友加藤君、東京に於ける山田桂華の狂態は、これで大團圓の幕を閉づべき時が來た。其の當時は山田が京都へ歸つた事も知らず、歸つてからも何うして暮して居る事やら、何事も知らずに過して居たが、東京を出發した後の山田の運命は、底知れぬ死の谷へ、非常な勢で急轉直下したのであつた。

山田が東京を出發した前後の事情は、田村江東翁が最も詳しく知つて居る筈である。僕は今その江東君に電話を掛けて、「山田桂華の死」書くために、山田の下宿して居た新佃島の海水館に來て居ると知らせた。そして東京出發當時の模樣を、詳しく話してくれと云ふと、江東翁は「それは好い思ひつきだ、亡友のため是非大に書いてて遣つてくれ」とて、詳しい事柄を電話してくれた。金と名と女のために狂ふた、小心な山田桂華の面目が、活躍して居ると共に、哀しい痛ましい人生の影が、色濃く漾ふて居るのではないか。以下は田村江東翁の電話の聽取書である。——

「俺はこんな呑氣な男だけれど、山田桂華の死に就いては、常に人知しれず萬斛の涙を灑いで居るよ。東京を發したのは、何年の何月であつたか、月日は確と覺へて居ないが、出發前後の模樣だけは、誰よりも俺が最も詳しく知つて居る筈だ。抑も國民を出た時に俺の所へ來て、中央新聞へ入れてくれと云ふから、俺も役に立つ男だと思つて、社會部で働いて貰ふことにした。今から思ふと其の時分から少々變だつたので、何うも平記者では困るから、何か好い名前をくれと云ふ山田の請求であつた。然らば社會部の主事と云ふことにしやう、それが宜からうと戯談半分に承知すると、山田先生大に恭悦して、中央新聞社會部主事と云ふ名刺を振り廻し、田村江東などは俺の部下に使つて居る、と云ふ樣な調子であつた。例の脚本一件で、少々金廻りの良かつた時だから、遊びもしたし浮かれもしたし、なかなか當るべからざる大景氣であつたよ。

　その内に山田は、友達仲間を大に驚かして遣りたいが、何んな事をしたら宜いだらう、と俺に相談した。さうだねえ、友人一同を招待して、一大宴會を開くのも面白いが、其奴は費用が嵩んで困るだらう。今ならば自働車と云ふ所だが、其の頃のことだから、何うだい一つ馬車に乘廻して見ては……、一日五六圓で濟むことだし、頗る妙だらうと答へると、山田先生手を拍つて喜んだ。二頭立の借馬車で、翌日いの一番に訪問したのが、斯く申す俺の宅さ。おい參謀長の所に來たつて、誰が驚くものか、それよりも他の友人の所へ行つて、大に威張つて遣り給へと云つて、其の日は無事に追返した。後で聞くと山田は俺の宅を出ると、直ぐ長谷川天溪君の宅を訪問して、これから博文館へ出勤しやうとする處へ座り込で、正午過ぎまで大氣焔を吐いたさうだ。二頭立の馬車で御入來なんだから、長谷川君の宅の者も驚いたらうし、天溪君も亦氣が變だとは知らないから、餘ほど面喰つたに違ひない。天民の宅へも行きたいし、蕉雨の所へも行きたいが、みんな馬車の通らぬ狹い通りに住で居るから、折角の名案も駄目だなど丶云つて居た。社の仕事も少しはして居た

が、何しろ正氣の沙汰でないのだから、俺も當り障らず、好い加減に遇つて居た。

さうかうして居る内に、山田は故郷の京都へ錦を飾つて歸りたいが、汽車賃を拂ふのは何だから、一等のパスは無いかと云ふ。恰度俺が持合した一等乘車券があつたので、何の氣もなく貸して遣ると、先生その晩は大得意で、みどり屋から花本に行つて泊り、翌夕馬車で新橋驛へ馳せ付けたものだ。一等の寢臺車に大家然と構へて、故郷へ錦は宜かつたけれども、同室の柳澤伯か柳原伯かを捉へて、盛に氣焔を吐くなど、大分亢奮の度が激しかつたらしい。馬車もパスも俺の入智慧なので、世間では俺が山田を發狂させたなどゝ、怪からんことを云ふ連中がある樣だが……」

田村江東翁の電話は、以上で終つたのではない。生れて初めて一等の寢臺車に納り返つた山田桂華は、其の夜から正眞正銘の精神病者になつて、樣々の悲喜劇を演じた。東京から京都へ、錦を飾るために歸つた山田の生涯にも、いよ〳〵大詰の涙の幕が開いた。

七　硯海翁へ十萬圓

獄裡の友加藤君、それから後の事は、人生慘鼻の極、何うして涙なくて語ることが出來やうぞ。田村江東翁の電話は例の調子て、自ら嘲ける樣な口つきで、其の後の發展を語つたが、其の短い電話の中にも、山田桂華の晩年が、映畫の樣に活躍して見えた。

「さう早く出發し樣とは思はなかつたが、恰度、山田が一等寢臺車に乘つた深夜、當時の中央新聞社長大岡育造翁から、俺の許へ二三度の急使があつた。萬籟寂たる深夜に何の急用かと聞くと、驚くではないか君、汽車中の山田桂華から大岡社長へ宛て、三通の至急電報が來て居るのだ。最初の一通は沼津邊からで、「ダイジケンアリ、キン一マンエン、スグオクレ」、次は濱松邊からで、「セイジジヨウユ、シキダイイジアリ、五マンエンスグデンカワセオクレ」、最後のは名古屋からで、「セイジモンダイオコル、キン一〇マンエン、スクオクン」と云ふ大騷ぎなんだ。

大岡社長は何の事か判らないから、俺の所へ問合さ

れたのだが、深夜に三度も至急電報で、然も一萬圓から五萬圓、五萬圓から十萬圓なんだから、大概の人は面喰つてしまう。東京でこんな騷ぎをして居た時、汽車中の山田は益々發展して、僕は斯う云ふ者ですとばかり、借物の一等乘車劵を、同室の人々に示したから堪らない。京都驛へ着くや否や、借用パスの一件が發覺して、七條驛頭一大狂亂の一幕が演ぜられた。その前から山田は、京都府廳と三條小橋の萬屋旅館へ、「ムカヒノバシヤダゼ」との電報を發してあるので、七條へ着けば、必ず出迎して居るものと極めて居た。然るに着いて見ると馬車はなくて、反つて改札の驛夫から、「このパスは貴君のではない、鐵道規則違反です」と極め付けられたので、忽ち怒氣心頭に發した。「天下の大家山田桂華を知らぬか」とばかり、初めて發揚性躁狂の本體を現はして暴れ廻つたのである。

馬車で出迎へよと云ふ電報を見て、京都府廳では不思議に思ふし、萬屋旅館は山田を知つて居るが、何かの戲談だらう位に思つて、番頭一人が出迎へたのみであつた。こゝに於てか山田たるもの、大に面目を損ねたとあつて、持合せた五圓紙幣十圓紙幣を、居合す赤帽や車夫へ撒いて與へる。巡査に向つては、京都府廳の不都合を憤る、萬屋の番頭に向つては、馬車が來て居ないので怒り出す、全く手の下し樣がなかつたと云ふ。兎に角、萬屋の番頭一人で始末を付けて、宿へ連れ込だのは宜かつたが、納らないのは山田である。先づ在京都の舊友へはがきを飛ばして、僕が歸つたのに何故伺候せぬかと責め、果は一人でノコノコと京都府廳へ出かけた。警察部の保安課長を捉へては、舊の日出新聞社會部長、今の脚本作家たる山田桂華が歸つたのに、何故、京都府はこれを歡迎せぬかと論判した。それでも宿に居た頃は、主人の岡本橘仙君に向つて、文藝壇の趨勢を是非したり、演劇改良論を上下した位で、大した狂暴の風はなかつたさうだ。それから後の事に就いては、俺に無關係だから知らないが、隨分いろいろ迷惑して居ても、不憫なものだとは思つて居る。一度、亡友山田のために、追悼の桂華會でも開いて遣ら

うてはないか、や、失敬、失敬!」

田村江東翁の電話は、これだけであつたが、京都に於ける山田桂華は、なか〳〵これだけては濟まなかつた。小橋隊の萬屋別荘に滯在した一ヶ月の間は、山田の肺病と腦病とが、同じ程度に猛進した時で、日一日と衰へ行く様が、眼にも頰にも著しかつたと云ふ。先妻の生だ女の子があるだけて、引取つて世話する程の親戚もなかつた爲め、哀れや文豪たるべかりし山田桂華は、行旅病人に等しい其筋の保護を受けて、先づ洛外の岩倉精神病院に收容された。思へば山田が故郷へ飾つた錦と云ふのは、鐘に櫻の物狂ひ、胸の血汐に彩つた二十九年の生命てあつた。

去年、十五年振の歸省の途次、大阪へ立寄つた時、舊友古田笠雨君かち、山田桂華の石碑を建てやうてはないかと相談された。そして岩倉病院から大學病院に轉じたことや、末期の水は高尾楓蔭君がとつた事や、臨終の模様などを聞いた。語る笠雨も、聞く僕も、その時はたゞ面白さうに、且つ笑ひ且つ興じつゝ。

八、二十九年の生涯

獄裡の友加藤君、山田の斷末魔が近づくと共に、僕の此の通信も、次第に終局に近づいて來た。山田が京都へ行つてからの詳しい事は、生憎と誰からも聞く機會がなくて、今日まで打過ぎて居たので、最期の幕は吉田笠雨君の談話に、根據を置くの他はあるまい。

岩倉病院に收容された山田は、發揚性躁狂の特色を發揮して、日々夜々暴れ狂つて居たさうな。一人一室の躁狂室に監禁されて、戸を叩き床を踏み、手を曲げ足を上げて狂ひ廻つた山田の様子が、眼に見ゑる様てはないか。大聲に怒鳴つたり、笑つたり泣いたりするかと思へば、自分の糞便を攫んで投げたりする躁狂者の姿を、山田その儘だと思へば宜からう。曾ては道頓堀角座の舞臺に、戀に悶ゑの間貫一に扮して、非技巧な藝風に喝采された山田桂華!。その成の果が狂人てあると思ふ時、誰か運命の惡戯の冷酷無慘なるに、驚嘆し戰慄し慟哭せざるものぞ。

精神病の方が次第に鎮靜して、岩倉病院の朝な夕、

な、山田の思ひ出が我に復つた時、肺の方は更に重症に陥つて居た。知己友人の世話に依つて、痩せ衰へた山田の體軀を、京都大學病院の一室に横へた時、既に死の色は濃く其の全身を襲うて居た。高尾楓蔭君が見舞に行つた時、「僕も馬鹿であつた、何うして氣が狂つたのやら、不思議で堪らない。肺の方が全快したら、大に眞面目な昔に復つて、勉强したいと思つて居る」と語つたさうな。命旦夕に迫つて居ながら、死の近きを自覺することが出來ず、死ぬるまで全快した後の樂しさを想ふて居るのは、肺病患者に見る稀有の實例である。國木田獨歩でも、平尾不孤でも、山下雨花でも、永井定太郎でも、田中稻月でも、渡邊亮輔でも、容易に其の死を信じて居なかつた。我が山田桂華も亦、瀕死の床に横りながら、全快した後を夢現に描いて、たゞ生の執着にのみ微笑むで居たらしい。

けれども明治四十二年、生を此の世に享けること二十九歳にして、山田桂華の一生は終焉の幕を閉ぢた。歷史の何れの部門に於ても、一行の存在さへ認められない平凡人の一生にしては、眞に多趣多樣でないか。山田が此の世に遺した事業は、たゞ一人の女の子であつても、それが何の恥辱にならうぞ。山田に虐待された細君の心にも、淺からぬ契を結んだ常磐の思ひ出にも、みどり屋の女中や花本の女將が昔語りにも、山田は生きて殘つて居やう。況んや山田と親交ありし君や僕や、多くの友人の心の底には、生きても云ふ山田の念が殘つて居る。廣い世間の多くの人々からは忘れ去られても、狹い仲間の少い友人に忘れられず、何か知ら常に一脈の哀思をそゝつて居るのが、「平凡人の死」である。殊に世の常ならぬ病を得て、行路に惱む漂泊人にも似た一生を、短命にして果た山田の如きは、極めて稀な「死の趣致」を傳へてくれた恩人である。山田自身にしても、普通の病氣で普通に死ぬるよりは、あゝした波瀾の一幕を演じて死だ方が、何の位戯曲的で宜いか知れないと思つて居るであらう。山田が世に遺した述作物には、何等の藝術味が無かつたにしても、其の「死」は天才的であり、藝術家的であり、また

韻文的であつた。

あゝ親友山田桂華逝いて六年、新聞はさみで打擲されて居た細君や、明けて九歳か十歳位になる忘れ形見は、何處に何うして居るであらう。何時か松本樓の宴會で、僕の前に座つた藝妓が、頻に山田の事を尋ねて居たが、それが河辰中の常磐だと氣付いた時には、もう何處かへ住み換へして居た。花本の女將は相變らず浮き名を謳はれて居るし、みどり屋で山田を知つて居たお鶴さんは、天賞堂の裏に待合を開業した。たゞ新佃島の海水舘にのみ、依然たる當年のお梅さんが居て、時折、山田夫妻の事を想ひ起しては、細君の安否や如何にと氣遣ふて居る。―

さらば、東京監獄で苦役して居る「何百何十番」かの加藤芳吉君、明くれば大正四年、亡友山田桂華の七周忌までには、君も出獄するであらう。もう好い加減に懺悔し改心して、桂華の石碑を建立する時には、君も是非その連名の中に加つて欲しい。それが何よりも、亡友山田桂華への適い手向であると思ふ。

―三年十二月五日夜―

亡友山田桂華の死に就いては、未だ事實を盡さゞる點あり、讀者にして新奇なる事實を御承知の向あらば、御通知を煩したし(天民附記)

選擧干渉物語

田中貢太郎

一、高知縣下の大干渉

來るべき三月二十五日の總選擧を控えて、大浦農相が内相に轉じたといふ事は、やゝもすれば彼の明治二十五年に於ける松方内閣の選擧大干渉を聯想せしめる。夫れには種々の原因もあるけれども、歸する所、當年の松方内閣が自由改進の兩黨よりなる民黨を抑壓せねばならなかつたやうに、今の大隈内閣も政友國民の兩黨からなる民黨を抑壓せねばならない場合に立ち

至つてゐるといふ事と、大浦内相の境遇と人格とが、當年の品川内相の境遇と人格に酷似してゐるやうに思はれるこの二つである。然し現内閣中首相の大隈よりも一層色彩の濃い大浦では、農相でゐやうと、文相でゐやうと、吾人が彼に對する感じは左程違ひはしないが、選擧間際になつて、堂々と内相の椅子に座るなどは、如何にも選擧干涉の宣戰のやうに思はれて、干涉の苦痛を嘗めてゐる吾人高知縣人には、新らしく當年の事が思ひ出される。

亂暴な選擧大干涉、我が憲政の歴史に汚點を印した當年の選擧干涉は、明治二十四年十二月二十五日の議會解散が原因となつてゐる。その日、自由改進の兩黨は、藩閥政府に肉薄して、豫算案に八百萬圓の削減を加へた。この削減は政府の堪え得る所でない。政府は直に議會を解散して、臨時總選擧を翌年の二月十五日に行ふことにしたが、その議會には、民黨の代議士を一掃するの計畫を立てゝ、その衝に當らしたのが内務大臣品川彌二郎と次官白根專一であつた。

其所で内相と次官とは、全國の地方官に向けて、民黨議員の當選を妨害するには、高壓手段を執るも妨げなしといふ内訓を發して、それ〳〵干涉に著手したが、わけて力瘤を入れたのは、高知縣と佐賀縣であつた。高知縣は自由民權論發祥の地として、亦自由黨の總理板垣の故郷である。佐賀縣は云ふまでもなく改進黨の總理大隈の故郷である。この二縣を征服する事は、やがて民黨の根據を覆す事になる。二縣の選擧干涉が猛烈を極めたのも無理はない。その中でも高知縣が第一に猛烈を極めた。

今、高知縣下の選擧干涉の眞相を書くに當つて、先づ云つて置きたいのは、その當時の選擧區と候補者の關係である。當時高知縣は三選擧區に別れてゐて、第一區が土佐・長岡の二郡、第二區が幡多・高岡・吾川の三郡、第三區が安藝・香美の二郡となつてゐた。代議士はその三區から四人出てゐた。その時民黨では、第一區に武市安哉、第三區に植木枝盛、第二區に片岡健吉・林有造の二人を候補者に立てたが、四人とも皆自由黨の

名士であつた。吏黨では、第一區に新階武雄、第三區に弘田正郎、第二區に片岡直溫・安岡雄吉の二人を候補者にしたが、皆中央の政黨とは關係のない國民黨といふ小朋黨の同人で、もと谷干城の率ゐてゐたものである。政府はこの國民黨を援助して、民黨を抑壓する事になつた。當時高知縣には調所廣丈が知事、古垣兼成が警察署長をしてゐた。政府はこの二人に內意を傳へる一方、もとの吉田東洋の子で當時遞信省參事官をしてゐた吉田元春が高知縣に緣古の多いといふ所から、瀨踏みとして高知縣に遣はした。

二、警官の有權者勸誘

選擧干涉の火の手はいよ〳〵擧つた。縣下一圓は鼎の沸くが如き紛擾を極めた。取りわけ第二區は紛擾の極に達した、民黨の方では、林有造が幡多を中心として立ち、片岡健吉が吾川・高岡を中心として立つたのに對して、國民黨の方では、安岡が幡多を中心として林に當り、片岡直溫が吾川・高岡を中心として片岡健吉に當つたが、林有造・片岡健吉の二人は、民黨の名士として人氣がある上に、既に前回總選擧に同地から代議士に當選してゐる强味を持つてゐた。

第二區の干涉、先づ吾川郡國民黨の本部が、吾川郡役所で、高岡郡國民黨の本部が、須崎警察分署であつたと云ふのを見ても、その干涉が如何なるものであつたかゞ伺はれる。又吾川郡では、干涉の始めに於いて、郡長三浦一竿が干涉を肯んじないと云ふ所から、之を休職にして、縣屬谷村淸隆を郡長心得にしてあつたなどは、驚くの外はない。そして縣屬も郡屬も收稅吏も、皆選擧場裏に狂奔した。

中でも警官は亂暴であつた。先づ平服で有權者の許に行つて、官職姓名を告げて、「天朝に御奉公の志があるか、」と尋ねるを前提として、「陛下の解散した民黨の議員を再選するのは、不忠不義の徒である。」と譴め、それでも吏黨の投票を肯じない者があると、「警官の言葉を用ゐない者は、以後亂暴者があつても强盜があつても、警察の方では關係しない。」と云つて嚇したり賺したり、あらゆる手段を用ゐたものだ。

高岡郡尾川村は、明治十四年以來自由黨の獨占してゐる村であつた。所が同村駐在の森岡といふ巡査が、窃に戸々に就いて、國民黨の候補者片岡直溫・安岡雄吉の二人に投票せん事を勸誘しはじめた。村民は之を知つて大に怒つた。早速駐在所に押しかけて行つて、その不都合を詰つた。森岡巡査は恐れて佐川に走つて、佐川分署長警部井上作郎に訴へた。井上警部は之を聞いて、「士民の分際で、駐在巡査を苦しめるとは、怪しからん奴等だ。」と云つて怒つた。そして森岡巡査と二人で平服になつて、四人の壯士を從へて尾川村に來た。

その日は、一月十九日の午後二時頃であつた。井上警部は先づ同地の有權者片岡民彌の家に行つて、例の筆法で、「國民黨の候補者に投票せんことを勸誘したが、民彌か即答しないので、「何日までに佐川分署若くは駐在所へ何分の返答を申出るが好い。」と嚴命した。夫れを傍に聞いてゐたのが同村の西村陽であつた。陽はその不法を怒つて、井上警部を叱りつけた。井上警部の一行は出て行つたが、陽も我家へ歸る積りで、片岡を出て村の通りを歩いてゐた。薄曇りのした日で、春先のやうに溫かつた。片岡猪之助の門の前まで來ると、井上警部の率ゐてゐた四人の壯士が不意に現はれた、「警察の命で、警察を侮辱したものを强責する。」と云つて、いきなり陽をその場に押し倒した。其所へ井上警部も森岡巡査も出て來て、壯士と共に陽を足蹴にしたり毆打したりした後に、佐川分署に拘引した。

之を知つた同村の者は、佐川分署に行つて、その不法拘禁を詰ると、警察の方では、陽には不敬罪があるから拘引したと云つた。陽は留置所に負傷の身を横へてゐた。翌日になると前日の壯士が這入つて來て、「若し志を改めて國民黨になるなら、保釋の周旋をしてやる。」と云つたが、陽は返辭をしなかつた。その翌二十一日の午前十時頃には、井上警部が平服で下駄を履いて留置所に來た。「オイ、國民黨になるなら赦して遣るが」と云つた。陽も仕方なくその言葉に從つたので、そのまゝ歸してくれた。

三、演說會場の慘劇

高岡郡須崎町は高岡郡役所のある所で、港灣に臨んだ小都會である。一月二十一日の夜、民黨側の政談演說會を催した事があつたが、由來同地は國民黨の多い所であるから、演說半になつて、忽ち暴徒が起つた。その時演壇に立つてゐたのは、竹中靖明であつた。暴徒の數は六七十名、手に手に白刄を打振り棍棒を舞はして、會場に亂入した。場内は混亂に陷つて　辯士は演壇に立ち縮んだなりである。其所へ白刄を手にした暴徒の一人が迫つて來て、辯士を刺した。辯士から迸つた血は、傍にゐた臨監の警官の洋袴にも滴つたが、警官は默つて見るのみであつた。

暴徒は勢に乘じて、警察署の門前にある田村茂實の宅を襲つた。石を飛ばし、棒を振つて、家屋器具の別なく、當るにまかせて破壞を遣つたが、警察からは何人も來ない。漸く暴徒の去つた後に、はじめて警官が遣つて來た。「今、何があつた。」

暴徒はそれから半町ばかり距つた池松太郎の家に亂て行くまで警察からは何人も來なかつた。

その時、池の隣家の喜太郎といふ者が、引きあげて行かうとする暴徒の一人を捕えた。暴徒の仲間の片岡實種といふ者が、それを取り返さうとして喜太郎に迫つて來た。其所へ折よく警官の姿が見えた。傍にゐた人々が、「片岡も逃がすな、」と云ふので、警察も仕方なく片岡を捕えて、喜太郎の捕えてゐる仲間と一所に引致して行つたが、片岡ばかりを裁判に致したのみで、他の一人は逃してあつた。

そんな有樣で、辯士を慘殺した犯人もあがらなかつた。唯、その夜、暴徒の集會してゐた恒產會といふ壯士の集會所から十一人の壯士を警察に呼んで、一應の取調をしたのみであつた。

四、警官暴徒を指揮す

一月二十日、高岡郡斗賀野村に四人の暴徒が現はれて、加茂村の村長大山千久馬、同村收入役片岡儀藏を要擊した。暴徒は尙ほ進んで斗賀野村役場へ闖入して、

て毆打した。

國民黨の兇焰は高まるばかりである。其所で高岡郡の民黨でも、一月二十三日、はじめて五十名の壯士を募つて、三十五名を佐川方面に送り、殘り十五名を斗賀野の民黨集會所へ送つた。

當時佐川に國民倶樂部といふ無頼の徒から出來た一團があつて、劍を帶び、棍棒を携へて、日々附近の諸村に現はれて、民黨側の者と見れば、脅迫したり傷害したりしてゐたが、二十八日の早朝には、その徒十餘人で、不意に斗賀野の集會所へ押寄せた。集會所の家主明神時長は、斯くと見て、用意の村田銃を一發空中に向けて放つた。暴徒の襲撃を知らする合圖である。村民は銃聲を聞き付けて集まつた。暴徒は避易して逃げ去つたが、その復讐を企て、須崎・戸波方面に散在してゐる同志に檄を飛ばして之を集め、二十九日の拂曉、再び斗賀野集會所を襲はうとした。その時佐川に集まつた暴徒は、百餘名もあつた。民黨側にも之を探知して、それ〳〵應戰の準備をした。

この時佐川警察の取つた手段はといふと、佐川分署長井上警部は、二十八日の正午、高知市に急行して、高知・江ノ口・伊野の三警察から多數の警官を同伴して來た、佐川分署で密議を凝らし、伊野分署長野本警部と二人で之を指揮して、翌曉、民吏同黨の爭鬪地と目されてゐる斗賀野の山中に行つて、埋伏してゐた。

その朝は霧が深かつた。その霧の中に二つ三つの旗を飜して、佐川の暴徒が押寄せて來た。民黨側も押寄せた。銃を持つた者、白刃を翳した者、竹槍を横たへた者、思々の武器を手にした兩軍は、既に間近くなつて來た。と、見て、井上野本の兩警部は、部下を率ゐて暴徒の陣頭に立ち交つた。兩警部の手には、小さな日章旗が閃いてゐた。兩警部はその日章旗を揮つて指揮した。

「拔刀して抵抗する者は、斬れ斬れッ、」暴徒は夫れに勢を得て、民黨軍に突入した。叫喚の聲に交つて銃の音が續けざまにした。自由黨の志士山崎兎子が之に倒れた。民黨では他にも三名の重輕傷者を出した。

五、秋山村の騷擾

當年の選擧競爭の激烈であつたと云ふ事は、民黨候補者の左右に、何時も反對黨の暗刄が閃いてゐたのでも分る。それは一月の末であつた。第一區候補者の武市安哉が、吏黨の襲撃を避けて、吾川郡秋山村の女婿土居勝郎の家に來てゐると、隣村仁西村の國民黨が知つて、七八十人ばかりで、不意に押寄せた。

夜の十時頃、暴徒の一團は森山村を迂廻して、秋山村に這つて來たが、途傳手に居る積りで、秋山村のとつ付にある土居源三郎の家に侵入したが、源三郎に短銃を向けられて逡巡した。源三郎の家より少し南に、種蒔寺といふ寺がある。四國八十八ヶ所の中の靈場の一つで、其所は小高い森になつてゐる。その寺の前には、篝火を燒いて、村の者が大勢で警戒してゐた。この人々が暴徒の侵入を知つて驅けつたので、暴徒はバラ／＼になつて逃げ去つた。

それでも村の者は、警戒に油斷をしなかつたが、もつて行つた。番人は村の鍛冶屋であつた。二人は叔父甥の間柄で、甥の方は名を菊と云つてゐた。二人は消えかゝつた篝火に薪を加へ加へして、宵の騷動を話してゐた。森の上の種蒔寺の堂塔は、暗い空の下に物凄く聳えてゐた。

しばらくすると二人は話しに飽いて來た。叔父は股引を履いた左の膝小法師を抱くやうにして、ウト／＼としてゐた。菊は背が寒いので、兩手を火にかざして、叔父の年老つた顎を見てゐた。と、不意に耳元で鬨の聲が起つた。宵に逃げた暴徒が又襲撃して來たのであつた。菊は狼狽しながらも、傍にあつた合圖用の銃に手をかけた。暴徒の白刄は、番人二人の眼前に閃いた。驚いて起き上らうとする叔父が先づ倒れた。續いて菊も刄を浴びて倒れたが、倒れる拍子に、引金が落ちた。非常を知らする銃聲は、既に睡に落ちかけてゐた秋山村民の耳に響いた。

人々は枕を蹴つて立つた。暴徒は一支もなく又散亂

横はつてゐた。

菊には母親があつた。何時も豆腐を賣り歩いてゐた。幾日立つても我子と弟を殺した犯人が露はれないので、村の有志の顔を見ると、「未だ分らないでせうか、私は早く仇がとりたい。」と云ひ云ひして泣いたことは、土居勝郎から聞いた話しである。

六、敵味方の憎惡

高知縣下の搔擾は、日一日と激しくなつた。二月九日には臨時保安條例が布かるゝと云ふ有樣。日として民吏兩黨の間に爭鬪の行はれない事はなかつた。當時の高知縣下は、最早代議士の選擧競爭場でなくて、戰亂の巷であつた。

奇怪な現象、憲法治下の人民として、生命財産を托してある警察は、恐ろしい敵であつた。一市七郡の民黨は、この不法な時代にあつて、頼む者は、唯だ同志の情誼と、己れの腕のみであつた。民黨の志士は、悲憤慷慨して、この惡政の賊を斃さねばやまじと盟つた。

を惡んだ。民黨は國憲を破壊する破壊黨である。民黨を迫害し排除することは、忠君愛國の行爲であるとした。恐ろしい誤解、板垣が岐阜の遭難もこの誤解であつた。當時吏黨の機關新聞「高知日報」に掲載された熊本國權黨の電文に徴しても分る。

激戰中と聞く、壯絶快絶、勇進奮鬪、賊をして遺孽なからしめよ、我黨不敏能く爲すなし。然れども眼中唯皇室あるのみ、國家なるのみ、國賊奸猾跋扈跳梁、上、國利を害し、下、民福を損するに至ては、數千決死の士、扼腕裂眦して起つなり(略)(二月二日)

破壊せよ、破壊黨を破壊せよ、志士國に報ずる斯の時に在り。汝の腕を揮け、汝の眦を裂き、決死奮前せよ。今や敵は粮に盡き、金に窮し、壯士の卑怯に苦しみ、大に名義の正しからざるに窮せり。敵の大將健吉や有造は、嘗て一期の議會に裏切せし不義表與の卑劣漢なるぞ(略)(二月三日)

憎惡と誤解、この感情は隣里郷黨の私交の上にも及んで行つた。高知市の國民黨に中山秀雄と云ふ者があつた。高知公園下で牧場をやつてゐたが、或日牧場が燒けた。牛は火に驚いて埒内に荒れ狂つた。附近の人

々は驅けつけたが、由來高知市は自由の人氣のある所である。「國民黨の火を消すな、」消すなと云つて何人も火を消さうとする者はなかつた。

民黨側の農夫と、吏黨側の農夫とは、田の畔で、鍬を振りまはした。漁師は漁具を振つて海岸で爭つた。村々の入口には、壯士が梶棒を橫たへて、往來の人を誰何した。「お前は、自由黨か國民黨か、」と云つて黨派を聞いた。八十八ヶ所を廻る遍路の巡禮が袋叩にせられたりした。行商や旅行は、とても出來なかつた。

黨派的の感情は、肉親の間にも及んで行つた。「あすこは、親子で言葉をかはさない。」と云ふやうな事は好く云つたものだ。緣付けてある娘を取り戻したり、甚しいのは、老人夫婦が離別したりなどした。

七、村の印象、高坂篇

私はその時十二三であつた。長岡郡の海岸にある私の村も、恐ろしい選擧の波をあびて、かなりに騷いだ。「自由は勝利よ、官權亡滅、」と云ふ言葉が人々の口から勝利よ、自由は勝利よ、」と云つて走つた。村の青年は、赤い手拭を鉢卷にして、鍬の柄でこさへた梶棒を肩にして、有權者の家を見廻つて步いた。

村は自由黨であつた。國民黨らしい者も二三人ないでもなかつたが、村の豪家の川島といふのが自由黨といふ所から、村の輿論は自由黨で固めてゐた。海岸に碎ける波の音も「自由」「自由」と云つて響くやうに思はれた。

選擧の競爭が激しくなるに從つて、川島へも國民黨が襲擊して來ると云ふので、村の入口の警備を增した。非常を知らする爲めに、蟲送りの太鼓も持ち出された。

所が或日の夕方、一方の太鼓が恐ろしい急劇な調子で鳴り出した。するとその響を傳へた他の一方の太鼓も鳴り出した。太鼓の音は村に滿ちて殺氣立つた。村の人々は騷ぎ出した。鍬を持つ者、竹槍を持つ者、天秤棒を持つ者、我も我もと家の外へ飛出した。私も隣家の人の行く跡に跟いて、一所に川島の手前まで行つ

落ちて、寒い風が吹いてゐた。入江の向うを見ると、夕榮が薄く殘つてゐた。その夕榮の下の山の端近く、二三羽の鳥が飛んでゐたのが、今に私の印象に殘つてゐる。

私の村で、川島について自由黨として勢望のあつたのは、高坂翁であつた。名は辜八と云つてゐた。自由黨の志士であつた。住居は私の家とは餘り離れてゐなかつた。庭に柿の樹が一本あつて、裏口が籔疊になつてゐた。高知市から移つて來た武士の家で、當時零落はして居たが、一家の人々は、さすがに品格を供へて居た。母堂は白髮の多い、痩せてゐたが骨格のがつしりした人懷い老母であつた。細君は小さな弱々しい身體をして、附近の娘達に裁縫を敎えてゐた。子供が二人あつて、兄の方の子供と私とは幼な朋友で、よく遊びに行つては、繪本太閤記を繰つて、坊子叩きといふのを遣つた。一家とも善人揃で、「皆佛樣のやうな人ばかりだ。」と隣家の人々は云つた。

高坂翁には一人の妹があつて縁付いて久しくなつてゐたが、妹婿が國民黨といふ所から、選擧の眞最中、それを取り戻して了つた。武人氣質の人としては、夫れより外に手段がなかつたであらうが、村の人は皆驚いた。母堂に似て大柄な、大な眼に炎のある、印象の深い顏の女であつたが、その爲に兄を怨むやうな事もなく、無論再嫁もせず、嫂をたすけて、貧しい一家を支へた。「あのお孃を見た。」と云つて、村の母親が女の子を誡める手本とせられた。

選擧干渉の眞最中、高坂翁は又一隊の壯士を率ゐて、幡多郡に於ける同志の應援に行つた。母堂は翁をはげました。「自由黨の爲に立派に死んでござんせ、」と云つたと傍で聞いてゐた人が噂した。

私の知つてゐる高坂翁は、胡麻鹽の髯を胸まで長く垂して、枠の大きな眼鏡をかけ、何時も新聞の論説を聲を出して讀んでゐた。後には村長になつた事がある。町内の寄合に若衆の組でダヽをこね出すと、「この辜八の首を取つてからにした。」と云つたものだ。懷かしい高坂翁、今も故郷の家で、日なたぼつこをして、新聞

を聲を出して讀んでゐるだらう。

八、一個人の資格

選擧干渉の兆候があらはれると、縣參事會員武市安哉・竹村太郎・吉良順吉などが、知事に申陳して、漸次に郡長及び諸警察署長會を開いて、選擧干渉の非を鳴らしたが、「今回の總選擧は、國家の興衰の別れる所であるから、官吏が一個人の資格を以て選擧に奔走するのは當然の事だ。」と云つてはねつけられた。

その時は一月の初であつた。二十八日になつて、縣下の各町村でも、委員を選んで、知事に具情したが、一個人の資格をふりまはして放ねつけ、荒々しく官房に這入つて行つた。一個人の資格、警官の中には、この一個人を一人の人と解して、一人で勸誘に行けば構はないと云つて、はじめは流石に世間を憚かつて平服に行つてゐたものが、正服でドシ〳〵行くやうになつた。

警官が公然暴徒を指揮するやうになつたので、前記の武市・竹村の外に、岡崎賢次等が、警察署の職務上に於ける失態の事實を具申して、取締をなすべき事を以てしたので、知事も仕方なく承諾はしたもの丶、何等の取締もしないので、騷動は益々大きくなるばかりである。中にも二月一日高岡郡戸波村の鐵砲の辻と稱する所へ押し寄せて來た暴徒は、五百名位もあつて、輜重兵杖、全く叛兵の色彩を帶びてゐた。その上吏黨の機關紙「高知日報」は、日々暴行煽動の記事を掲げたが、これ又取締る所がない。日々起る殺傷事件には、裁判所内にも、その不都合を鳴らすものが出て來た位であつた。

高知日報の煽動記事を引いてみる。

高陵國民派、連戰連勝、今や大擧進軍して淺井を侵略す。總勢四百餘、一日費す所の粮米實に二石八斗、盛なる哉我黨の景況、高岡近傍草鞋爲めに拂底、高靑破壞黨顏色なし。（二月三日）

九、憲兵來

憲兵來、知事が放任の結果、縣下の治安は紊亂して、殆んど無政府の狀態に陷つたので、さすがの内務省も驚いて、大阪から憲兵を派遣した。

一本の青筋の這入つた赤洋袴を履いて、ピストルと

長劍を左右に帶びた憲兵の姿は、警官の凌辱に泣てゐた縣民に神のやうに見えた。無法な警官を取り拉いだ憲兵の話が、日々私の村にも傳はつた。

高知市へ下肥料を取りに行つてゐた一人の農夫が、過つて糞桶を通りの上へ引つくりかへした。其所へ巡査が出て來て、散々に農夫を叱つた末に、「その糞汁を手で掴んで拾へ」と云つた。農夫は仕方なく拾はうとしてゐると、通りかゝつたのが憲兵である。憲兵はちらと巡査の言葉を聞いたので「それは貴様が無理だ。拾へるなら貴樣が拾へ、」と云つた。巡査は仕方なく、農夫に代つて、その糞汁を掴んで桶に入れた。

又、憲兵が公正であるといふ一例として、こんな話も傳へられた。それは或日の事、小供が凧をあげて、絲を途の上に垂らしてあると、憲兵が通りかゝて、その絲を足に引かけて切つた。無邪氣な小供が大に怒ると、憲兵は後戻りして、その絲を繋いで、子供に謝罪つて行つたといふのであつた。

憲兵は流石に公正であつた。「委細の容子は憲兵さんか知つちよる、」と云ふ一聯の歌の文句が人々の口に歌はれたのも此頃の事であつた。

十、第二區選擧場

憲兵の來縣と共に、紛亂した選擧場の秩序もやゝ回復して、二月十五日の法定期日には、曲りなりにも投票を終つた。然し開票が濟んで、愈々當選者が確定するまでは、未だなか／＼の騷ぎであつた。第一各村から投票函を選擧區に送るに、反對派に襲撃せられる恐れがあるので、棍棒を携へた壯士が、すくないのは二三十人、多いのは數百人で、之を守つて行つた。護衛の行列、長いのは二三町も續くのがあつた。

吾川郡秋山村の土居勝郎は、秋山村の選擧委員として、投票函と共に須崎の選擧場に行つた。高岡郡役所内に設けた選擧場は、國民黨の壯士が十重二十重に取卷いて、やゝもすれば民黨を襲撃せんとする氣勢を示して、形勢甚だ穩でなかつた。

やがて各村から集まつた選擧委員の中から、抽籤によつて、開票の立會人を七名選ぶ事になつたが、抽籤

室へは、既に國民黨の壯士が一杯になつてゐて、民黨側の委員に抽籤させまいとしてゐる。民黨側の委員は、皆逡巡して抽籤室に這入つて行くものはない。土居勝郎一人は平然として這入つて行つた。彼は嘗て藩閥大臣を暗殺せんとして爆裂彈製造中過つて右手の人指ゆびを無くしてゐる自由黨の志士であつた。壯士の脅迫位には恐れなかつた。彼が平然として這入つて行つたので、國民黨側の壯士は彼を同志と思つたものか、抽籤を渡してくれたが、あとで民黨と知つて、顏を見合はして如何にも殘念さうな顏をしてゐた。

そんな事で、民黨側の立會人は、土居勝郎一人であつたが、愈々開票になつてみると、文字が讀めなかつたり、老人で聲が通らなかつたりするものばかりなので、投票の讀上げは、彼一人の獨占のやうな形になつた。彼は片岡健吉・林有造の名を高々と讀んで、反對黨の片岡直溫・安岡雄吉の名は微かな聲で讀んだ。

十一、投票函の紛失と投票破棄

市安哉、第三區では植木枝盛が當選し、第二區では無論片岡健吉・林有造の二人が當選してゐたが、この二人は、國民黨の陰謀に陷つて、二十六年八月まで、當選を認められなかつた。

それは投票締切の日になつて、片岡直溫・安岡雄吉の形勢が惡いので、どうでもして二人を當選させたいと思つた國民黨の方では、惡辣な陰謀をめぐらした。その陰謀に第一に着手したのが、新階武雄の故鄕吾川郡東諸木村であつた。同村は主に國民黨の地盤である上に、村長の松野と云ふのが新階の甥と來てゐる關係から、新階としては、諸木村は自分の意の儘になると思つて、同志にも高言してゐた所であつた。それが投票締切の模樣によると、どうも民黨の方に投票が多いやうだ。新階としては面目玉のつぶれた譯だ。こんな事で、秋山村の投票函は、須崎の選擧區に行く途中で紛失して了つた。

投票函の紛失、護衛の壯士が前後左右を取圍んで行

が奇怪と云つても、これ程奇怪な事はあるまい。その他の村でも、途中で投票函を開けて、民黨候補者の名のある投票は、皆破棄して了つた所もある。

投票函の紛失と、投票破棄、これが第二區では七八ヶ所もあつた爲に、開票の結果は、片岡直温と安岡雄吉とが當選と云ふ事になつて、二人は次の議會に二年續けて出席したが、民黨から訴訟を起した爲に、その陰謀が破れて、二人は失格し、漸く片岡健吉・林有造の當選が認められた。

古今無類の干渉選擧の爲めに、全國を通じて四百餘の死傷者を出したが、夫れでも政府黨百二三十名に對じて、民黨は百六七十名の多數であつた。のみならず議會開會のはじめから選擧干渉の物論沸騰して、その年の七月三十日、あはれや松方內閣も倒壞したのであつた。

十二、選擧干渉の犧牲

選擧干渉には、吏黨も民黨も幾多の犧牲を拂つた。大妻景郎の事件は、吏黨の殘した犧牲の一つである。

景郎は高岡郡戸波村の人であつた。片岡直温の運動者として、多少の教育がある上に、撃劍が巧いと云ふ所から、高岡を横行した暴徒の中では、首領株の一人であつた。民黨側の爭鬪には、何時も白刃をかざして挺身奮鬪した。左利で、右か左かの眼中に星のあるのが彼の特徴になつてゐた。

彼は一月二十九日の斗賀野山中の爭鬪に於いて民黨側の壯士を三人斬つて、不幸にして殺人罪を犯した。いくら吏黨の方でも、明に殺人罪を犯した事が分つてゐては、囲護つてもらふ譯に行かないので、仕方なく北山越しに伊豫に逃げて潜伏してゐたが、どうも安心が出來ないので、九州に渡つて、其所此所にある炭鑛に、工夫として住込んだ。

ある時、景郎の雇はれてゐる鑛山が、紀念日か何かで、一日仕事を休んで、相撲や撃劍を催した事かあつた。撃劍にかけては三度の飯よりも好きな景郎は、仲間の工夫と一所になつて見てゐる內に、一本遣つて見たくて仕方がなくなつた。平生は、自分は撃劍家とし

て知られてゐたから、擊劍などを遣らうものなら、それこそ大變な事になると警戒してゐたが、何時の間にか、そんな事も忘れて了つて、遂に飛出して行つて竹刀を握つた。そんな場合であるから無論左利の特徴にも注意しなかつた。

彼は敵手を代へて數番戰つたが、もとより腕が冴えてゐるので、彼に及ぶ者はなかつた。一山の者は驚いて、眼に星の這入つた左利の工夫を見た。彼ははじめて氣がついて、我身を顧みて慄然とした。彼はその足で其所を逃げ出した。

景郎は甚だ聰明であつた。殺人犯大妻景郎の人相書は、九州一圓の警察署に廻つてゐた。彼が逃亡して數時間と經たない中に、同地の警察では、警官を派して彼を逮捕せうとしたが、既に逃げ去つた後であつた。

景郎は夫れから門司に出た。九州は不安になつて來たから、朝鮮に高飛する積りで、海岸通の旅館に身を潛めて、その準備をしてゐた。其所は下關に往來する船の發着所になつてゐた。

ある日の夕方旅館の二階から下の通を見てゐた景郎は、ふと女の旅人を見付けた。旅人は片手に女の子の手を率き、背には男の兒を負つてゐた。彼は一眼見て、眼を凝らした。旅窶に年も老けて見えるが、どうしても故郷に殘してあつた女房である。二人の子供の年頃も確にあつてゐる。彼は生死の分らない自分を尋ねて、何處をあて途もなく歩いてゐるだらうと思つてゐると、何かの拍子に旅人は顏を仰向けて、景郎の方を見た。

確に女房である。彼は我を忘れて、聲をかけやうとしたが、はつと自制して、出しかけた聲を殺してみてゐると、女は折柄の夕日をあびて、うしろ姿淋しく、とぼ〳〵と町の方へ歩いて行つた。彼の眼からは涙が滴れた。彼はその涙に霞んだ眼で、旅人のうしろ姿を何所までも何所までも見守つてゐたが、やがて町の角をまがつて見えなくなつた。彼は室の中を狂氣のやうにして歩いたが、ふと氣が付いて、こゝが大事だと思つて、我と我身を押沈めて立つた。

景郎はこんな悲劇や苦痛の中に十年餘を潜伏し後に自首して出たが、犯罪も既に時効にかゝつてゐたので、赦されて昔の苦痛を妻子と昔語りにするやうになつた。

梅花

黒頭巾

其一

◉梅花は「氣分の花」にして、花形、花彩の美を以て、百花に魁たる可き花には非ず。日本人が梅花を激賞するは、梅花の表現しつゝある氣分を激賞する所以ならずんばあらず。

◉梅花は百花に先立ち、霜雪を侵して開くといふは、梅花が人に愛せらるゝ所以なり。霜雪を侵して開くといふは凛々たる意氣を現はす。意氣の一語は梅花の性命なり。

◉此の如き、凛々たる意氣を現はすに、高潔、可憐なる、小さき梅花を以てす。故に、此の花に依つて表現せられつゝある意氣は、限り無く強烈なるものとして解釋せらるゝあり。

◉意氣は男性美にして、花は女性美なり。女性美の花を以てして、男性美の意氣を表現せしめつゝあるを以て、花の美と、意氣の美と、人の心目に交感して、梅花の表現しつゝある強烈なる意味を、時には男性的に、時には女性的に解せしむるを致す。

◉日本人は、國家的の犠牲に、梅花を聯想し、また切實なる戀にも、梅花を聯想せずんばあらず。

◉先憂後樂といふは犠牲なり。犠牲は意義なり。可憐なる梅花が雪を冒して、百花に先ちて春を報ずるは意義なり。切實なる戀の究極は情死となる。情死は日本人の特性なり。情死といふも意氣のみ。由來日本人は意氣を貴ぶ。意氣は日本の花なり。梅花が日本人に愛賞せらるゝ所以は、則ち此の花、能く日本の民族性を

表現するに由らずんばあらず。

其二

◉梅花の分布は、殆んど日本の全國に遍ねし。而して梅花が日本人に愛せらるゝの由來も亦た甚だ舊るし。「浪花津に咲くや、此の花」の歌は、儒教の傳來、則ち大陸文明の東漸に先だちて、梅花、早く既に日本の春を占領したるを見るに足らずんばあらず。

◉梅花は天下に遍ねしと雖も、北地の梅花は、其の意氣を發揮する所以の適處を得ざるものなり。梅花の意氣を激賞し、其の我が民族性の花たるを發見したる者は、近畿關西の人を以て始となす可く、而して日本の歷史は、早く近畿、關西より開けたるを以て、梅花が日本の花たるも亦た甚だ早し。

◉北地の花は、霜雪融くるの時、艶陽四月、或は五月、春風春水一時に來り、百花爛熳競ひ開いて後先ある事無し。北地に於ては、梅花は百花の魁に非るなり。

◉山の高きは地の北なると同じ。夏初、高き消火山の舊火坑に春風來る時は、地上、既に、新綠の節を過ぎて、蒼綠髒々たるに、舊火坑の春は、坑壁の屏風に、暖に、春風を護りて、さまざまの花咲き、天半、一箇の溫室を造り出すに似たり。溫室に於ては、梅花は百花の魁たる所以を失ふ。

◉地南して亞熱帶に入れば、花木、時を擇ばずして開落す。特に、梅花を推して百花の魁となすの所由あらず。また梅花の意氣を表現す可き霜雪の舞臺もあらず。の魁故に南方に於ては、淸寒なる梅花の適處に非ず。這般の舞臺には、専ら花彩の艶冶、强烈なるを貴ぶを以て、牡丹は花王の稱を恣まゝに誇るを得る。

◉吾儕を以て見れば、梅花が、其の意氣を發揮す可き適處は、溫帶の冬春、日本にては近畿、中國を中心として、東は關東に、西は北九州に及ぶべし。

◉日本の版圖は緯度に於て殆んど南北を縱貫する一大子午線を爲すに近し。其の極北に上れば梅花無く、極南に下るも亦た梅花無し。假令、是等の地に在りといへども、梅花たる所以を見せず。梅花たる所以を見ざれば、梅花無きに同じ。

◉三千年來、日本の歷史、文明の中心舞臺は、則ち梅花の舞臺として適處なりしを知るべし。則ち日本民族は梅花と共に、意氣を發揮して、國體を爲し、民族性を爲したりしなり。年々の新春に、梅花が松、竹と共に、日本人の家を飾りつゝあるは、我が民族性を誇りつゝあるものなり。此の意味に於て、梅花は、花に現

はれたる我が日本民族性の象徴たらずんばあらず。

其三

◉「春もや〻氣色と〻なふ月と梅」といふは、寒月の下に滿地冴えて花無き時、忽ち枝上、珠玉を綴りて、月光に映發す。此の句、此の時の氣分をいふ。月下の花形、花彩を吟味するに非ず。

◉「梅一輪一輪づ〻の暖かさ」に對するも、梅花一輪づ〻開きて、春色、半夜の曙光の如く、一歩々々、眼中に映じ來るの氣分を示す。此の氣分を象徴するものは、一輪一輪づ〻次第に開く梅花なり。

◉梅花は春の氣分を象徴す。則ち百花の魁たるの所以なり。古より詩人、梅花を詠ずる者無數なり。然れども細やかに花形、花彩を詠嘆するあらず、梅花を詠ずるは早春を詠ずる所以にして、梅花が「氣分の花」たるは、文學の上に現はれたるなり。

◉梅花と柳芽とは、古來、春の氣分を象徴するものとせらる。唐詩にも「梅柳度江春」の句あり。然れども柳に花無し。萬枝、珠玉を聯ねて、雪を貫ぬきて開くの詩的感興あるに若かず。

◉「梅柳、嫵ぞ若衆かな、女かな」の句、畫趣の妙味言ふ可らず。勿論、若衆を以て梅花に、女を以て柳に擬するなり。若衆の形態美を以て梅花に對照せしむるに非ず。梅花の意氣を以て、若衆の凛々しき意氣に對照せしむるなり。則ち梅花の意氣は、若衆の意氣ならずんばあらず。

◉近ごろ元田肇に、「唯有梅花笑床上清寒即是主人心の句ありと聞く。元田の風骨、未だ其の清を知らざれども寒は有り。彼をして此の句を爲さしむるは、また梅花の意氣の餘徳ならずんばあらざるべし。

◉梅花を標榜する力士の梅の花が少しも「意氣の梅花美」を帶びずして、惰氣慢々たるは梅花の名を辱しむるものたるを失はず。彼は、今に於て、標出す可きほどの男に非れども、一時、人氣力士たりし事あるを以て記す。梅ヶ谷も元と意氣の人に非ず、剰さへ近來、毎場所三日づ〻出場して、横綱の位に居るは、褒める梅花の、久く枝を離れざるに似たるものなるべし。

其四

◉梅の枝幹雄勁、にして、花に清香あるは、花中の武士に譬ふべし。古の端唄に、「梅は武士、櫻は公家衆、おいらんさんは山吹の、町人衆は桃の花、柳流しは世渡りの」といへるは、世情を穿ち得て興趣淺からず。「人は武士、花は櫻」といひて、櫻花を以て武士に擬す

るも善しと雖も、意氣の凜烈たるを以てすれば、梅花美は武士に歸せずんばあらず。

◉大宮人は櫻かざして今日も暮らしつといふ公家の姿の優にして絢爛たる櫻花美なり。山吹の八重に花咲けども實無きは傾城美を象徴し、桃花の俗なるは町人性を現はす。柳の風のまに〳〵吹くは渡世觀を示し、梅花の枝、上に向つて、鐵幹崢嶸たるは柳の垂れて嫋々たると對照の興味あり。古の武士は柳の如くに渡世せず、梅の枝のように眞直に伸びて、一徹に主義を堅守して、世の風に抗して立てるものなりし。

其五

◉梅花美の書趣、剛壯なものを求めば、日出の梅花に若くものあらず。大なる紅旭、萬珠の星を綴れる繁枝の梅花に、一杯に照映する時、天上、日出の美觀、落ちて地上に在り。

◉寒月照梅花は、淸高、悲壯の梅花美を現はす。而して梅花美の崇高雄偉なる半面は、紅旭の梅花に存せずんばあらず。

◉此の春、吾輩、小林文七の蓬樞閣に、光琳の團扇畫梅花を見る。對角線に團扇を二分して、右の下半面に、氷結せる池面を描く。結氷の面に、龜裂せる線を入れたるは、用意の愼密なるを見る。而して所々銀泥の剝脫せるもの、遠く望めば、宛として梅花の點落せるにも似たらずんばあらず。

◉勅題の寒月照梅花の新春に、塗盆に、油繪を以て、梅花と池氷とを描けるは、構圖、光琳と異なりと雖も、古今同趣たるを失はず。

其六

◉富士山を描く者前景を描くに松を以てするは、殆んど古來の常套に屬す。若し前景の梅花の參差、錯落たるに遠く低く、富士山を見せたらば如何。

◉富士山は八面玲瓏たれども、これを畫けば、其の線は直線に近し。これに配するに、多く垂直線を交ゆる梅花を以てする時、名畫を爲さんとするには、畫家の苦心經營を要するもの無くんばあらず。

◉梅花は屢茅屋、山村に配合せらる。梅花は野趣多ければなり。山村、春風、旭旗を描く處、つねに梅花あり。「意氣の梅花」は何となく民族性を象徴しつゝある旭旗の光彩と相映發するものあるを覺ゆるなり。

◉國旗と富士山と梅花とは、皆、我が國民性を象徴す。

ず。古來、梅花美を描く者、概ね清寒に偏す。清寒高潔なるは梅花の半面のみ。將來の書家は、宜しく「意氣の梅花」の剛壯なる半面に著眼して、畫趣の新生面を開く可き也。

其七

◉日本に於ては、梅花は天滿宮に依つて、雷と因緣を生ず。龜戶の天神に、除雷符を出す。除雷符は可なり火雷神の神符を出すに至つては、雷と天滿宮と梅と、因緣の纏綿するもの、また殆んど、密に過ぐるもの無くんばあらず。火雷神は、別に神あり、其の神話、頗る興味あり。火雷神を除雷符とするは、支那の字面に附會するものなるべし。

◉支那の稗史には、往々、雷神と梅花との奇因緣を記するものあり。奇想、天外より來る。今、其の近世に屬するもの二三を錄し、床上の梅花と相對して、一笑せんと欲するなり。

◉雷神、畫を能くし、殊に、尤も好んで梅花を描くといふ。姑蘇城外の度生橋下に、沿河の民家、夜、雷火に擊たれ、其の炊釜を地上に覆へせし事あり。明早朝、釜を引起して見れば、地上に梅花一枝あり。これ白土を以て描くところ、悅然として疎影橫斜の姿致、眞に逼る。觀る者、堵の如し。月餘を經て、其の跡漸く滅す。

◉雷神は、唯だ能く梅花を書くのみならず、また實に屢惡戲を爲す事あり。明の隆慶六年四月三十日、姑蘇城に暴雷震電ありて、天、氷雹を降らすに、大さ石子の如く、遠近十數里の間、街を塡め路を塞ぐこと積玉の如し。而して對門外、藏氷の室を啓いて視れば、室中の氷、皆空し。雷神、藏氷室の氷を奪つて、雹を降らしめたるなり。

◉同じく此の日の事なり。姑蘇城東、飮馬橋頭の官井、暴雷震電とともに、淸泉、忽ち一變して綠酒となる、居民爭ひ來りて飮み醉ひ、地上に枕藉し、糟漿の氣、人鼻を逆ふ。而して張芝麻が家の滿堂の泥罇、開けば、中に、一滴も在ること無し。雷神、酒庫の酒を奪へるなり。

◉萬歷年中、西洞庭の翠峯寺の比丘維心といふ者、初めて精盧三楹を構ふ。華美を究極し、壁に、新に白堊を塗り、方さに、好手腕の畫師を招いて、壁上に描かしめん事を思ふ。半夜、霹靂一聲、雷神下り來る。爲に、白堊の壁上に、山川、樹木、人物、屋宇を寫すに、具備せざるは無し。比丘、明晨起きて、視れば、壁上、

燦然たる光明、宛として是れ、梅道人四幅、水墨の圖を見るが如きなり。而して雷神既に在らず、只だ雲氣渦旋、空翠揺ふが如きを見るのみ。雷神、丹青の手の甚だ高妙なるが爲に、吳下の名流、善く繼ぎて描き得る者無し。

◉丹青の妙腕、殊に、巧みに梅花を描く雷神は何等の風采を有せるぞ。支那人の眼中に映ぜる雷神は甚だ奇惡ならずんばあらず。

◉嘗て、廣東に於て、人家、風雨晦冥の中、一雷神、地に落ちて去るを得ず、赤髮猛獰にして、狀は獸の如く、頭は猿に似たり、角肉翅青にして、手に綠玉斧を執れり。其の家に請ひ、亟やかに正一道士を延き來りて濟邪經を誦せしめ、讀經の間に、忽ち天に騰り去る、或はいふ、是れ上帝の使、則ち雷鬼なりと。

◉或は傳ふ、明の太祖、嘗て默坐す。偶、前殿に落雷あり、恍惚として見れば、殿角に人あり、長さ一尺、靑唇にして翅狀、猿に似て、兩目睒々として光あり、帝に向ひ、稽首一拜して空に騰り去る。乃ち詔を下して曰く、五雷、迹を殿庭に著く、其れ膳を減じて自省せんと。此の如きは明太祖が英雄欺人の手段を交ゆること多し。然れども雷神を形容するは、概ね唐人の説に據り、附會するに似たり。

◉雷神が手に綠玉斧を持するは、天誅を行ふ事を意味す。第一に陰惡を討ち、次に淫奔を討つ。霹靂一聲、靑天に玉斧の誅を下す、如何なる奸惡者も逃るゝに地無からしむ。誅伐嚴明にして、また極めて痛快なるものならずんばあらず。此の玉斧を持するの手をして、藝術を解せしめ、畫趣に耽らしめ、山川草木を描き、殊に可憐の梅花を畫くといふに至つては、支那人の想像力も亦た甚だ文學的なりといふ可し。

◉抑も人間、玉斧を持して公明なる批判を下すの手は藝術を解せずんばある可らず。而して雷神、梅花を畫くといふは、吾儕、一説あり。天滿宮にも「梅花似ニ照星ニ」の句あり。月下の梅花、眞に照星に似たり。雷神、天上に畫趣を樂んで天界の照星を描くに馴れたるの手、計らず地上に落ちて樂書するもの、實は照星を描けるものにして、期せずして、或は地上の梅花に似たるを致すに非ずとせんや。或は、天上の雷神も、かねて地上の梅花を鑑賞しつゝある乎。

其八

◉吾儕の家に、小さき八寸ばかりの稚梅の盆栽あり。去年の冬、吾が小女幼妹を顧みて、「來春、鶯來つて、

此の枝に啼く可さに」といつて敎ゆ。二人者、嬉々として樂めり。

◉梅に鶯といふは、吾が國に在つては、國民的傳說を爲せり。鶯宿梅の故事は、さまでの名歌にもあらざるに、極めて人口に膾炙するは、梅花を愛する吾が民族性に契合し、而して梅と鶯との盟契は、切實なる意氣を表現するものあればなるべし。

◉天滿宮は梅花を携へ、人丸は筆を持ち、而して日本の雷神は必らず太皷の撥を揮りつゝあり。梅花といへば必らず鶯を畫く。

◉千里の飛來梅といふは、梅花、知己に感激するの熱烈なる意氣を表現す。夫れ霜雪を貫きて百花の魁を爲す。而して衆鳥に先だちて、ひとり梅花を尋ねて、清香、淸聲を得て契る。また意氣を以て相投合するものに非ずや。

◉梅花は、未だ駘蕩の春姿、足らず、艶冶の花彩無し。鶯も亦た必ずしも美鳥に非ず。此の二者の契合を以て、男子の意氣に擬し、切實なる戀愛に擬するも、一に、其の二者の意氣に取るのみ。

◉近世の吾が端唄に。戀の意氣を歌ふものは、梅花を詠じ、及び梅と鶯とを詠ずるもの尤も多し。「春雨に、しつぼり濡るゝ鶯の、羽風にかをる梅が香の、花に戯むれ、しほらしや、小鳥でさへも一筋に、ねぐら定めん氣は一つ、わたしや鶯、ぬしは梅、やがて身儘氣儘になるならば、サア鶯宿梅ぢやないかいな、サッサどうでも能わいな」

◉支那の詩人は、疎影橫斜水淸淺と歌へるは、唯だ客觀的に見たるのみ。端唄は、疎影橫斜を主觀的に解していふ、「春は梅見て樂ましやんせ、色は紅白にしさに咲て、つぎぼ夫婦に枝かはす。好いたどうしとおもわんせエ、嬉しい花じやないかいな」

◉紅梅といへば頗る艶意あり、白梅は艶意少し。紅梅に寄する端唄にいふ、「紅梅に焦れて今朝は白妙の思ひの丈をふりつもる、ぞつと身もよもあらりやふものを、雪の膚に春を待つ、」辭氣、俗なりといへども、また能く雪中梅の情趣を描けるものといふべし。

◉戀を歌ふもの、梅を花木に對して、剖說する時は、梅を以て男性的とす、梅に對する鶯も、柳も共に女性なり。「意氣」は男性にして、梅は「意氣」の凛たるを象徵すればなり。「梅がぬしなら、柳がわたし、仲の好いのか、すねるのか、或夜ひそかに山の月、心無いぞへ小夜嵐」

其九

●梅花は淸寒の氣あり。古來、これを以て、つねに高士、寒儒に擬す。梅花には野趣あり。梅花の意氣は、浪人の意氣たらずんばあらず。

●寒の一字、浪人の本領なり、淸寒、高寒いろ〳〵の寒、皆、敢て妨げず。高靑邱が「雪滿山中高士臥、月明林下美人來」の句、能く梅花と浪人との畵趣を歌ひ得て、支那人梅花詩の壓卷となす。此の如くして寒心始めて。寒寂たらず。寒寂なれば、則ち枯木寒巖、心頭の火、盡く灰となるものあり。

●支那人は梅花の精を描いて、美人の羅浮女神と爲す。梅花は意氣美を象徵すれども、既に花たる上は、花精は、美人たらずんばある可らず。

●山中高士は則ち浪人なり。古來畵家、高士、寒儒を描くに梅花と互に背景を爲さしむるを常套となす。畵は巧なるも、枯淡と寒寂とに失するもの多きは見當違なるべし。永遠の傑作といふは、寒を描くも筆端、生意磅礴せずんばある可らず。寒寂なれば則ち浪人も無く梅花も無し。社會の覺醒を促がす者は浪人なり。天地寒了の中に、一道の陽氣の發動を象徵するものは則ち

●梅と櫻とは吾が國の春を占領す。而して櫻花の畵趣は小袖屛風に在り。花彩爛熳、豐麗、艶華を極む。梅花は春早く、此の如き駘蕩の氣、未だ熟せず。

●梅花圖の畵趣は、艶彩少く、瓢簞と毛氈とあり、枝に短冊あり、小袖屛風無し。而して梅花は樂燒の氣分あり。

●櫻花は、舞樂を點出して高尙ならしむれば公家を表現するに尤も適す。三味線を添へて、俗に陷る時は市人の趣味となる。梅花は、到底、野人浪人の趣味なり而して櫻花は春の滿潮時を表現し、盛氣發露す。梅花は四天倒瀾の意ありて、寒中に、不拔の生意閃く。

其十

●日本は梅花の國なりといふを得可し。而して梅花と地方粹との關係を象徵す可きもの少なからず。水戶の梅羊羹、越前の梅肉漬、山形の梅ひしほ、及び東京の紅梅燒の如きいづれも地方色を見る可きものあり。

●櫻花は漬物となす可く、梅花は、不可なり。梅は、花も實もありといへども、梅實は、梅花の精神を象徵せず。梅實の久しきに耐ゆるは、堅忍の精神を表現せざるに非ずと雖も、梅花の意氣霜雪を貫ぬくに比すべ

[illegible]實を描くもの、青梅の故事を畫くを常套とす。青梅の故事は智的なり。畢竟、梅實は智的なり、老成堅實の意あり、過ぐれば梅干の皺となる。鶯は梅花に來り啼けども、梅實の枝に鳴かず。

●櫻花漬は小湯に用ゆ可く、梅干は茶に用ゆべし。漬物となるとも、櫻花には艶意あり。梅實には艶意無し。若し小湯に配すれば餘りに淡泊に過ぐ。

其十一

●梅花の畫趣は、花よりも枝態に在り。雪の月明に、紙窓に映ずる梅花の枝態の影は則ち梅花の畫趣なり。梅花の枝態は宜しく墨畫を以て描く可し。

●古來、東洋の詩人、梅花に對する研究少し。單に横斜といふのみ。未だ其の横斜の直線美たる所以を想到せず。梅花の枝態美は、則ち直線美に存せずんばあらず。

●吾が國、「梅花の國」たり。梅花、吾が風景の一要素を爲す時は、梅花の風景美を爲す所以のもの、鮮明せざる可からず。

●賴山陽は月瀨の梅花を標出し、此香世界を見ずんば、未だ共に梅花の美を語る可らずとなせり。

●[illegible]古來、海内に喧傳すと稱す。而して山陽は其の理由を説明せず。吾輩を以て見れば、其の所由三あり。花の美なること第一。地の閑雅、幽邃にして自から梅花美を映發せしむるに適すること第二。其の第三に至つては、平凡の如くにして、其の實、尤も有力なる原因たらずんばあらず。則ち月瀨が梅林に非ずして梅谿なる事是なり。

●世間、梅林は少からず。其の大なるもの地方所々に在り。其の小なるもの、大都會に在れば、閑雅の中、自から世俗の氣を帶ぶ。『梅屋敷』といふもの則ち是なり。而して『梅屋敷』の一語は、自から都會染みたる香世界を象徴せずんばあらず。

●東京には「梅屋敷」もあり、「銀世界」もあり。梅屋敷は向島に於けるもの有名なり。銀世界といふは、淀橋十二社の隣に在り。今、巨大なるガス、タンクの在る處、是なり。銀世界の變遷は語る可きもの少からず。銀世界は畢竟、大規模の梅屋敷たるに過ぎざるなり。

●銀世界といふは、梅花の色彩に取るの名。山陽が「香世界」といふは、梅花の清香に取るの名のみ。而して銀世界といひ、香世界といふも、共に梅花の一面をいふ。

未だ風景美の一要素としての梅花美の大觀を盡すに足らず。

◉梅林といふは、未だ梅花美を發揮すべき、最善の舞臺には非ず。「梅谿」こそ風景美の一要素としての梅花の本然の資質を發揮せるものなれ。

◉山陽は、月瀬の梅花を賞揚して「香世界」の一語を以てせるは慊らず。宜しく其の「谿谷に於ける梅花美」を推稱す可りし也。然らずんば月瀬の梅花神、未だ容易に、知己の感を爲さゞる可きなり。

◉月瀬の名、何んぞ美なる。此の名、實に、梅花と宿緣あるもの如く然り。吾輩は未だ月瀬を見ずと雖も、古人の文章詩歌に由つて想像するに、月瀬の名、空しからざるべし。月あり、水あり、谿谷あり。眞に梅花美の舞臺ならずんばあらず。

◉聞く、月瀬の梅花、近年、稍、昔時に及ばずといふ。果して眞ならしめば、誠に惜む可し。或はいふ、月瀬の梅花、谿谷の滿村、悉く梅花ならざるは無し。而して梅花の盛衰は經濟的事情に伴ふ。蓋し古時、月瀬に梅花を培養するは、京都の最上紅の染料を得るに在り。近年、歐洲式の染料、專ら世に行はれ、高價を拂つて、瀬の梅花衰ふるなりといふ。

◉今、交通發達の世の中、地方、風景美の闡明せらるのもの、日に、多きを加ふ、而して風景美の趣味も亦た益、世間に普及しつゝあり。月瀬の人は、今より宜しく風景美の爲に梅花を保護して、隨つて、これを以て、天下の游客を招き、以て、地方の收入を計らん事を期せよ。風景美の提供に依つて得るの財は、また一の浮財たらずんばあらざるなり。

其十二

◉花の風景美は水を得ん事を欲す。「渡レ水又渡レ水、看レ花又看レ花。春風江上路、不レ覺到二君家一」の詩は、則ち這般の興趣を詠ずるものに非ずや。

◉あらゆる花、水を得て姿態美を生ず。花の水に映ずるのみならず、花木と水と相待つて風景美を爲す。水、平野を流るゝも岸に沿へるの花は風情あり。而して水は、地勢の傾斜を意味し、傾斜は則ち風景を爲す。水と花といふは、また傾斜と花とをも意味するものならずんばあらず。

◉國土は、幾何學上の平面圖に非るが故に、大なる地面には大なる凸凹あり、變化あり。傾斜は則ち凸凹變

しめて、風景美を爲す。此の風景美の地面に立ち、水に映ず。則ち花と水と相得て精彩を發するなり。

●櫻花の爛漫たる、水を得れば大に可し。然れども水に待つこと櫻花よりも多く、而して水に依つて、其の美を爲す所以の大なるものは梅花なり。

●「疎影横斜水清淺、暗香浮動月黄昏」の句は、梅花美を詠ずるものとして、古來、東洋の人口に膾炙す。詩人も畫家も、皆、此の句に捕はれ、此の句の範疇に入つて、殆んど脱出するを知らざる者少からず。然れども細かに審察し來れば、此の句の、梅花美に於ける、詠嘆の、尙ほ甚だ疎なるものあるを見る。

●此の詩、水清淺といへども、水の、谿流たり、河川たり、或は池井たるを言はざるときは、主意、清淺に在るものとして解せざる可らず。清淺は甚だ佳なり。清淺には、或は水聲の潺湲たるを聞くの思無くんばあらず。然れども梅花の風景美を言ふ時は、此の水に傾斜あるを言はざる可らず。

●此の詩、また月、黄昏をいふ。梅花の風景美、月を點出するは黄昏に限る可らず。月明の夜、太だ佳なり。然れども其の黄昏をいふは、尤も暗香浮動に興味を有するを見るなり。

●林和靖の、此の詩は、梅花の小景を取る。未だ其の大觀を盡くせるには非ず。謂はゞ此の詩は、梅花の畫趣の小スケッチの、頗る氣の利きたるものなるべし。

●吾輩は、水清淺、月昏黄の時、梅花の清香、此の刹那の風景を醇化して、一箇の新世界、夢幻堤を現出するを以て、梅花の風景美に對する、魅力の獨擅場と爲さずんばあらず。

●若し、風景をして「味」あるものとせば、梅花の清香といふは、一大有力なる「味の素」ならずんばあらず。東京の蕎麥は、田舍の蕎麥よりも、本來、美味ならざれども、東京の蕎麥の美味なりといふは、東京には煮汁の美なるものを有すればなり。淺草海苔が地方の海苔よりも上等なりといはるゝは、製法の精粗に依ることもあれども、專ら其の香氣に依る。梅花が、其の風景美を醇化するの力を有するは、清香といふ趣味の「味の素」を有すればなり。

●吾輩は、月瀨の風景を冥想する時は、神往に堪へざるものあり。谿谷、萬樹の梅花、參差として開く。寒月、中天に在り。岸上の梅花、清流に映じ、月と共に水に映じて、萬星の、燦として空に鏤めたるが如く、而して十里の間、清香、吹き滿ちて、月も香に醉ひつ

ゝあるならん。

其十三

◉吾輩、先きに趣味の梅屋敷を記して、都會染めたるものとなせり。佳話あり。以て證すべし。序を以て玆に記す。

◉明治十二年三月。新富座の狂言、新作淨瑠璃に、魁花春色音黄鳥といへるを上場し、團、菊、左は勿論の事、宗十郎、半四郎、家橘、小團次など、一代の名優、惣出にて演じたる事あり。三月といへば、梅花季節を當て込みたるものなるべし。

◉此の狂言は、今ならば笑劇といふものなるべし。舞臺は向島の梅屋敷なるに由つて、一段の興味あり、著想の妙を見るべし。一言、以て蔽へば、春風に、向島の梅屋敷に、「妾の糶市」を開くといふ筋書なり。

◉東京は由來、市に富めり。べつたら市に至つて極まる人間を取扱ふものには、「才藏市」あり。立坊も、亦た日々開業しつゝある「人間の市」なるべし。吉原も「女の市」なる可けれども、「妾の糶市」といふは破天荒の著想に屬せずんばならず。

◉此の筋書の大體を記せば、先づ、舞臺を開いて、幕外、沿頭二人あり。今日、梅屋敷て、新聞句[illegible]

噂す。花道より東西屋出で來り、梅屋敷の「妾の糶市」の廣告を依賴されたる事を語り合ひ、淨るりぶれを讀んで上手に入る。淺黄幕を振落せば、背景は向島の梅屋敷なり。

◉梅屋敷の下女、及び請宿等二三人、出で來りて、「モウお見えになりさうなものだ」と、旦那の來るを待つこと型の如し。かくて新聞記者植地論說、時計師胡野六次の二人、花道より出で、鳥渡、振を爲して舞臺に來る。是より買手の旦那、二人づゝ花道より出で、いづれも振事有りて舞臺に來る。買手、悉く揃ひ、始めて下手より女を呼出し、糶に掛け、漸く笑劇の佳興に入る。

◉此の笑劇の役者は、米商に左團次、銀行頭取に團十郎、新聞記者に宗十郎、士族に小團次、說教師に仲藏、其の外、馬車屋、代言人、時計師、牛肉屋など種々あり。女役には家橘の屋敷下りのお市、菊五郎の鳥のおかね、半四郎の權妻おたの等其の主なるものとす。

◉此の笑劇の大當りは、お酌赤襟お半が、代言人を見て、「此方が、わたしの旦那じやア嫌やだ」と啼き出す一刹那に在りし。而して左團次、團十郎、宗十郎の三人ヨ睨ッこつ[illegible]

名優を揃への笑劇なれば、今より其の可笑味を想像するに餘あり。定めて人をして、春風駘蕩、舞臺に湧くの感興に打たれしなるべし。

◉古來の詩人は、梅花を清寒、高雅ばかりのように思へども、『妾の糶市』を梅屋敷に開きて、また一の適處たるを失はず。梅花に、此の半面の俗趣味あるを知ると共に、梅屋敷が、此の俗趣味を包容するを得るは、其の都會染みたるを知る可く、梅屋敷と梅谿と、各、趣味の別世界を占領する所以なり。

◉梅谿は、大自然の中に放在されたる梅花美を表現す。梅屋敷は則ち都會趣味に浸染せる梅花美を象徴す。都會趣味は則ち俗趣味ならずんばあらず。

◉此の笑劇は世相の變遷を諷刺して得て甚だ可笑味あり。今の世の風潮を以て、推し進んで已まざらせば、『妾の糶市』の出現せんも強ち遠きに非るべし。此の笑劇は、則ち三十六年の春に、これを豫言するものなり。而して此の時、また今年と同じく卯の年なりしも面白し。

◉卯の年は、天滿宮の年、梅花の年なり。此の笑劇が、梅屋敷を背景に擇びたるも、其の理由の一は此に存せん。

◉團十郎は老來、新劇に手を著けざりしも、此の如く、明治の初年には、新劇を試み、自から銀行頭取に扮したり。此の笑劇は、其の新味に於て、近年の笑劇の先驅を爲せるものにして、梅花が百花の魁たると同じく、劇壇に、先づ春色を齎らしたるものといふを妨げず。

其十四

◉吾輩は、本題に返り、風景美の要素としての梅花を論ぜざる可らず。

◉先づ、一樹の梅花を見る。模樣としての梅花は、其の單花は、餘りに整齊にして幾何學的なり。紋としての梅鉢、及び梅鉢崩しに至つても、皆、圖を離れず。

◉梅花が畫趣を爲すは、其の姿態美に在り。小さく整齊なる花を綴るに、直線の細き枝を以てするに在り。則ち、梅の枝は梅花の畫趣を統一するものなり。

◉梅花、千百點、點々、珠玉を綴る。直線の枝、これを統一するありて、始めて畫趣を爲す。或は、千萬の珠玉を散亂せしむるに似たるものある時、槎牙、横斜なる直線の枝態ありて、これを統一するを見る。

◉梅花の畫に、屢、圓窓を描く。梅花の直線に富める枝態が、此の大なる圓窓の曲線と配合するなり。此の場合に於て、紅旭の梅花に於けると、線の構造、配合

に於ては相似たり。紅旭の圓線が、光彩煥發、梅花に照映し、而して圓窓に於ては、梅花が、光彩無き圓窓に映發するなり。

◉吾輩、水戶義公の西山莊を訪ひし時、義公の書齋、二疊ばかりの幽雅を極めたる小坐敷に、大なる圓窓ありて、窓に當りて、千萬狀の枝態槎牙たる老梅の一杯に、ひろがりたるを見、梅花の書趣、尙ほ歷々、眼中に在り。

◉蓋し「水戶の御隱居樣」、小机に倚りて冥想し玉ふ時、淸香、徐ろに薰じ來りて、英姿颯爽たる御隱居樣の一身を浮べて直ちに縹渺たる香世界に到らしむ。若し、月夜、光、淸明、窓に映出する時、乃ち圓ろき窓の輪廓の中に、墨畫の梅花の書趣を、眼前に描き出さずんばあらず。而して御隱居樣は、定めて微笑し玉ひしなるべし。

◉水戶義公は梅里と號す。梅里先生は流石に、梅花の書趣を默會し玉ひしなり。

◉梅花を床上の花瓶に活くるは、花瓶の圓扁ならん事を欲す。圓き柱に、圓ろき懸瓶ならしむるを妙とす。

其十五

◉風景美としての梅花が、水に伴ふを要し、而して梅谿を理想的なりとするは、這般の背景の、種々の傾斜ありて、凸凹變化、さま〲の線の輻輳、錯雜せるをば、直線に富める梅花を以て、之を統一するに依らずんばあらず。

◉梅花は山巓水涯に宜しく、尤も谿谷に妙なり。古來、梅花の名所と稱するもの、自から此の理趣に合せざるはあらず。則ち梅花の背景の、複雜なる線に富めるところほど、いよ〱梅花美を發揮するものあるを見るなり。

◉杉田の梅花、水あり。靑梅の梅花、谿谷に據る。規摸小なりといへども、梅花の好舞臺たり。此の如き谿谷、其の線を統一するに梅花の枝態の直線美を以てせざる可らず。

◉畢竟、南畫の皴法、其の山皴、石皴を畫きて、曲線、渦線の複雜せるもの、直線美に富める梅花一株を點出して、畫面、精彩を生ずるを見るべし。

◉月瀨の梅谿、理想的の香世界なりといふ所以のもの、其の谿谷を構成する地勢の線の變化に富めるを以てなり。

◉水戶の梅花は、近ごろ帝都附近の梅花の擅場となる。水戶といへば梅花、梅花といへば、水戶と聯想せし

は無く、而して水戸の歴史が、自から梅花が高雅美を象徴するものあるも、亦た人をして水戸の梅花に憧憬せしむる所以ならずんばあらず。

◉水戸の梅花は、仙波湖に臨める好文亭を以て第一とす。而して好文亭を圍める梅林よりも、湖畔に峙てる斜蜒の梅花を以て、風情ありとなす。

◉大局を以て論ずれば、好文亭の梅花は、梅花が日本の風景美の一要素たる所以を發揮せるものなり。亭は、高邱の平地に在るも、其の湖水に臨める蜒は、變化ありて自から谿谷の趣を爲す。而して亭より臨めば、遠く磯の松、縹緲として天際に連り、波打際の磯節も、恍として聞ゆる心地すべし。

◉近く、出沒、屈曲せる谿谷と、及び平地あり、而して天際を劃れる、壯大なる線あり。人の眼は、此の變化陸離たる種々の線に引かるゝ中に、直線美の梅花、此の風景美を統一すると見るなり。

其十六

◉直線の梅枝が、花の珠玉を綴れるは、柳條が柳花を著けたると、一花一條の、線の配合に於ては相似たり。然れども柳條は、線の感、軟にして豐、梅枝は硬にして瘠、梅花美は硬派の美あり。

◉梅枝は、單なる直線、若くは全體を以てすれば、平行線の輻輳なり。而して其れは曲線と平行線を交ふると雖も、直線の交叉、配合、太だ變化に富み、一株の枝態、自から極り無き直線配合の美を示す。

◉梅の本幹は、竹の如く、杉の如く直線ならず、老木となるに及んで、ます〳〵盤屈して、太さ、變化ある曲線を示す。而して幹線の所々、錯節を生ず。則ち梅花一株の大觀を以てすれば、太き曲線と、細き直線との輻輳配合にして、一株の老梅の枝態の大局に於ては、幹の、太さ、强き曲線は無數の枝條の直線を統一するものならずんばあらず。

其十七

◉梅花美を論ずるは、則ち花木及び風景に表現されたる直線の構成美を論ずる所以なり。今年、卯の年の春に於て、吾輩、始めて龜戸に初卯詣を爲し、また玆に、偶、梅花を說くを以て、梅花と宿緣の淺からざるものあるを覺ゆ。

◉天滿宮と卯と梅と、相因緣し、隨つて、吾輩をして、梅花と白兎との畫趣を想見せしむるものあり。「初卯がへりの梅屋敷」といふは古來、江戸兒の趣味なりし。今年は卯の年なれば、梅花の當り年なるべし。

●直線美に富める一株梅花の下に、白兎を描かしめば如何。兎は、徹頭徹尾、曲線美を發揮するものなり。梅枝の直線美に配合するに曲線美の白兎を以てせしめば、靴々たる白兎、面目、奕々として活躍するものあるべきなり。

●梅花白兎を描くは、須らく、萬珠、燦爛たる花を綴れる紅白の老梅花を以てし、白胡粉を以て、濃く、白兎を描かん事を要す。清寒なる梅花は、淡墨に非れば、則ち強烈の彩筆を用ゆべし。

其十八

●花を著けたる一條の梅枝を執つて見れば、其の花、其の色彩、多く婀娜、艶麗たるを見ず。梅花は、梅の枝條、直線の輻湊、交叉、配合するに由つて、始めて婀娜の嬌態を生ず。

●梅花は花なり。嬌態無くんばあらず。嬌態は、其の枝態に磅礴す。而して脉々たる淸香、花の意氣を表現す。梅花の枝態は、枝條「女」の字形に交叉すといへり。女の字は、直線の集合なれども、女字を構成するに於いて趣を爲すは、以て梅花の枝態美を象徴するに足るべきなり。而して此の花、此の淸香を有するは、佳人が淸聲美語するにも似たらずんばあらず。

●淨瑠璃に現はれたる梅川といふ女は、美しき女なりしなるべし。「人目を包む頰冠り、隱くせど色香、梅川が」の一句、梅の一字に由つて結び付けられたる梅川の婀娜艶冶たる姿態美は、婀娜たる一面の梅花美を煥發するもの無くんばあらず。

大角力七日目を見て歸り、盆栽の梅に鶯來り啼くべしと言へりし吾が小兒女が、痲疹を病める枕側に於て、夜半、此の稿を草す。

黑頭巾記

お角力から歸つて

田村俊子

丁度、角力見物に行つた日から風邪をひいて、その晩　から寝てしまつた。

その以前から少し風邪はひいてゐたのだけれ共、瀧田さんに誘はれてお角力を見に行つた日、兩國と大蛇潟との取組があつて、その取組に兩國が負けた時から急に身體がぞくぞくして來て變になつた。そうして歸途の車の上ではもう熱が浮いてきて苦しくつて堪らなかつた。兩國が負けたせいで急に熱が出たのかも知れないなぞと戯談を云つてゐたが、とう〳〵本物になつて、今日も（丁度その日から四日目）まだ床から出られないほどに熱と咳で苦んでゐる。

瀧田さんが私をお角力に誘ふについて約束があつた。それはこの雜錄へ男の肉體美に關することで何か書かなくてはいけないと云ふ事なのである。私もそれを引き受けてゐたから、お角力見物が濟むと直ぐに何か男性の肉體と云ふ題意で私は書かなくてはならない責めがある。何か書かなくつちやならないなと思ひながら、病氣になつてしまつて、床の中でうなつてゐるのだから書くことも出來ない。それにその翌日には、兩國は綠島をぶん廻したとかで、でも勝つたから少しは好かつたけれ共、その翌る日は又鳳に一と突きに突かれてしまつたし、何となく、こぢれつたく、うら淋しいし、熱のからんだ頭腦が一層しん〳〵と痛い。

殊に今日は雪催ひで、空が曇つてゐる。私は何か書くこととの約束に責められながら、兩國が綠島をぶん廻して自分も眼が廻つて、行司の控へ行つてお辭儀をしたと云ふ、昨日の時事の樂天の畫を床の中で、いつまでも眺めてゐるうちに、昨日はふき出した繪だけれども、今日はちつとも可笑しくなくて妙にうら悲しいやうな氣持が添つてきた。何が悲しいのか分らない。これはきつと風邪をひいて氣が滅入つてるせいなんだらう。それで、

兩國に紫の羽織着せて見ん
兩國と云ふ角力を戀ひて梅の花
兩國が負けた夜から病みにけり

などゝ、こんな句を書きつけたりしてゐると、自然と一種の情趣が伴つて來て、何だか急に創作でもしたいやうな氣持になつた。それから又、貴族的な氣分にも

なつてきた。風邪をひく度に夜着蒲團の不足さをしみ〴〵と感じると云ふ、貧しい哀れな生活も、この架の羽織の空想のおかげでちよいと忘れることができた。私はそこで少時いろ〳〵な空想に耽つてゐたけれども――そんな空想は書く要もない。

兩國が大蛇潟に負けた時は可哀想であつた。負けたのが可哀想と云ふよりは、兩國の苛ついた神經が可哀想で、見てゐられないやうな氣がした。あんなにも神經を使ふものかと云つて、私は望遠鏡で兩國の身體をぢつと見ながらびつくりしてゐた。其れは丁度、溜りにゐた間の兩國の樣子であつた。

どの力士でも、あすこへムツと往つた以上は、しつかりと腕を組んで鬚髮も動かしはしないのに、その時の兩國は、さもわく〳〵として居るやうに口許をゆがめたり、息を急しそうに吐いたり、そちこちと、組んだ腕などを動かしたりしてゐた。

「兩國が青くなつてくれれば勝つ。」

など、瀧田さんは他の人に云つてゐたが、兩國は落着きもなく、直ぐに負けてしまつた。その翌る日のある新聞で見たら、兩國と云ふお角力はその日は朝から何も食べないでゐたと書いてあつた。

その緊張した心持が、私にはほんとうにたつとく思はれた。然しそれは、兩國ばかりにはとゞまらないので、明日の土俵を思ふと夜つぴて眠られないで、酒などあほる力士もあるそうだけれども、目のあたりあの神經のふるえを見た私には、殊更兩國ばかりが土俵の上に自分の生命を印してくれるやうな氣がしてならなかつた。それだけに猶更あの時の兩國の負けが身慘めであつた。

大蛇潟と云ふお角力は、まるで鐵のやうな身體をしてゐるお角力である。皮膚が眞つ黒で、筋肉に少しもたるみがなくつて、まるで一と笞あてたらガーンと音がしそうである。神經などは忘れて生れて來たやうな男である。

兩國は薄手で、皮膚が蒼白で、肩から腕の付根の肉が立派に隆起してゐたのが眼に殘つてゐるけれども、

まだそんなに角力作つてゐないやうな身體をしてゐる。どことなく公達めいた優美さがある。その二人が土俵の上で取組んだ時は、熊谷に組み敷かれた敦盛と云ふあはれさがあつた。

皮膚の白いお角力はまだ他にも澤山ゐた。綾川と云ふお角力が美しくつて色が白い。兩國のやうな溫和しさはないけれども、どこか兩國に似た面影がある。(然しこのお角力はよく理屈を云ふ男と聞いて自分は嫌ひである)綾浪も色の白い優しげなお角力である。西の方には殊に色白の華奢なお角力が多い。中にも土州山と云ふ美しいお角力がゐる。美しいお角力は、みんな髮をたつぷりと、たぼを浮かせて好い恰好に髮を結つてゐる。あれが、顏の醜い鐵作りのお角力とくると、みんな變な髮にしてゐる。宇都の宮と云ふお角力の髮などはずいぶん捨鉢な髮だと思ふ。

男性的と云ふ上から考へると、色の白いお角力よりは、一層眞つ黑なお角力の方が男らしいし、きび〳〵してゐる。太刀山のやうなのは、まるでロダンの彫刻の中の人物のやうな氣がする。ほんとうに立派なものである。私は常陸山と云ふお角力を一度も見たことがないけれども、惜しいことをした。あの人の身體を一度見ておきたかつた。「同じ時代に生れ合はせて常陸山を知らないのは恥辱ですよ。」と去年正宗さんに云はれたことを思ひ出す。

私はまだ生れてから二度しきやお角力と云ふものを見てゐないのである。こんな事を云つてゐても、たつた二度しきや見たことがないのである。その一度は去年の五月、その一度は今年の一月。

去年の五月初めてお角力を見たのは、Y社の御馳走で秋聲さんや上司さんや正宗さん紅綠さんと御一所して見物した時なのである。私はその時、國技館のむう〳〵とする人いきれの中で、新聞の爲に短い感想文を書かなければならなかつた。他の人たちはせつせと鉛筆を動かして原稿紙に何か書いてゐる。私はそれを見ると一層わく〳〵しながら、その日の取組に秋津州と云ふ幕下の美しいお角力が負けた時非常に哀愁を感じ

て肉感的だつたと云ふことを書いた。後になると私のその短い感想が一番氣が利いてゐたと云つて正宗さんが賞めてゐられた。他の人たちも、それは實感だと云つて私のその感想を稱してゐたけれ共、今考へると、あれは間違つてゐた。

それは鐵作りの眞つ黑なお角力が勝つた時に感じる快味よりは、華奢なお角力が負けた時に感じる憫れ味の方が、女には同情を起す。だが、別にこの時に肉的の感じは受けはしない。どこまでも、ほつれた鬢に殘る哀愁と情趣ばかりの感じである。私はあの時どうしてそれを肉感的だと書いたのかわからない。肉の感じではなくつて詩の感じばかりなのである。あれほど美しい無限の、瞬間の詩的な感じを、肉感的だと書いたのは、少し自分ながら馬鹿らしい。

今度、よくお角力を見て、こんな事を感じた。お角力の肉體を一とつづゝ見てゐると、あの巨大な男性たちの肉そのものに、淫感的な感じを持つてゐるものが居る。この淫感的（いやな名だけれども仕方がない）な感じを持つてゐる肉の所有者で役者が一人ゐる。私の知つてる限りの役者のうちで、たつた一人ゐる。それは又五郎と云ふ役者である。私はこの役者は嫌ひな役者だけれども、其の舞臺の上で見るこの役者の肉の色を見る度にそれを感じる。ところがお角力の中にも一人ゐる。それは西方の土州山と云ふお角力である。

斯う云ふ感じのする肉體はもう美ぢやない。色が蒼白で頽廢的である。けれども土州山のやうな肉體は別物としても、私はあの多くのお角力たちの肉體から、ほんとうの肉體美と云ふものを感じたのは一人もない。

體格美とか、筋骨美とか云ふものは感じるけれ共、肉體を持つてゐる人は一人もないやうである。色が白いと云つたところで、其れは一方の黑いのに比べて白いと云ふまでゞ、どの肉體も、汚くつて醜いのである。大概は怪獸のやうな感じ、さもなければ不具者のやうに感じで、全身の筋肉の調和した、錦繪の中の力士のやうな立派な大錦でも、それは唯體格だけの美で肉體

の美はない。

肉體の美で思ひ出すのは、あの長田さん兄弟の懇意にしてゐられたルムプとか云ふ獨逸人の身體の美しかつたことである。

西洋人なんてものは人の前で無暗に裸體にならないものだそうだけれども、その時その人は多數の前で裸體になつた。それは去年の夏時分で、露國人のエリセーフと云ふ人の送別會が柳橋であつた時のことである。その獨逸人はそれが御得意なんださうだが裸體になつて座敷の眞中で一人角力を取つた。自分の兩手を叉に組んで其れを一方を自分の肩の上、一方は横腹あたりを摑して、後向きになつて取組の時の身振りをやるのである。後から見てゐると、まるで前方にもう一人人が居てこの人の身體につかまつてゐるやうに見えるのである。其れも巧者なものだつたけれども、その肉體の美しさに私はびつくりしてしまつた。同じ人間を包む外皮にもァんなに美しいのがあるのかと思つて私は驚いたことがあつた。

エリセーフと云ふ人の皮膚の美しかつた。西洋人は

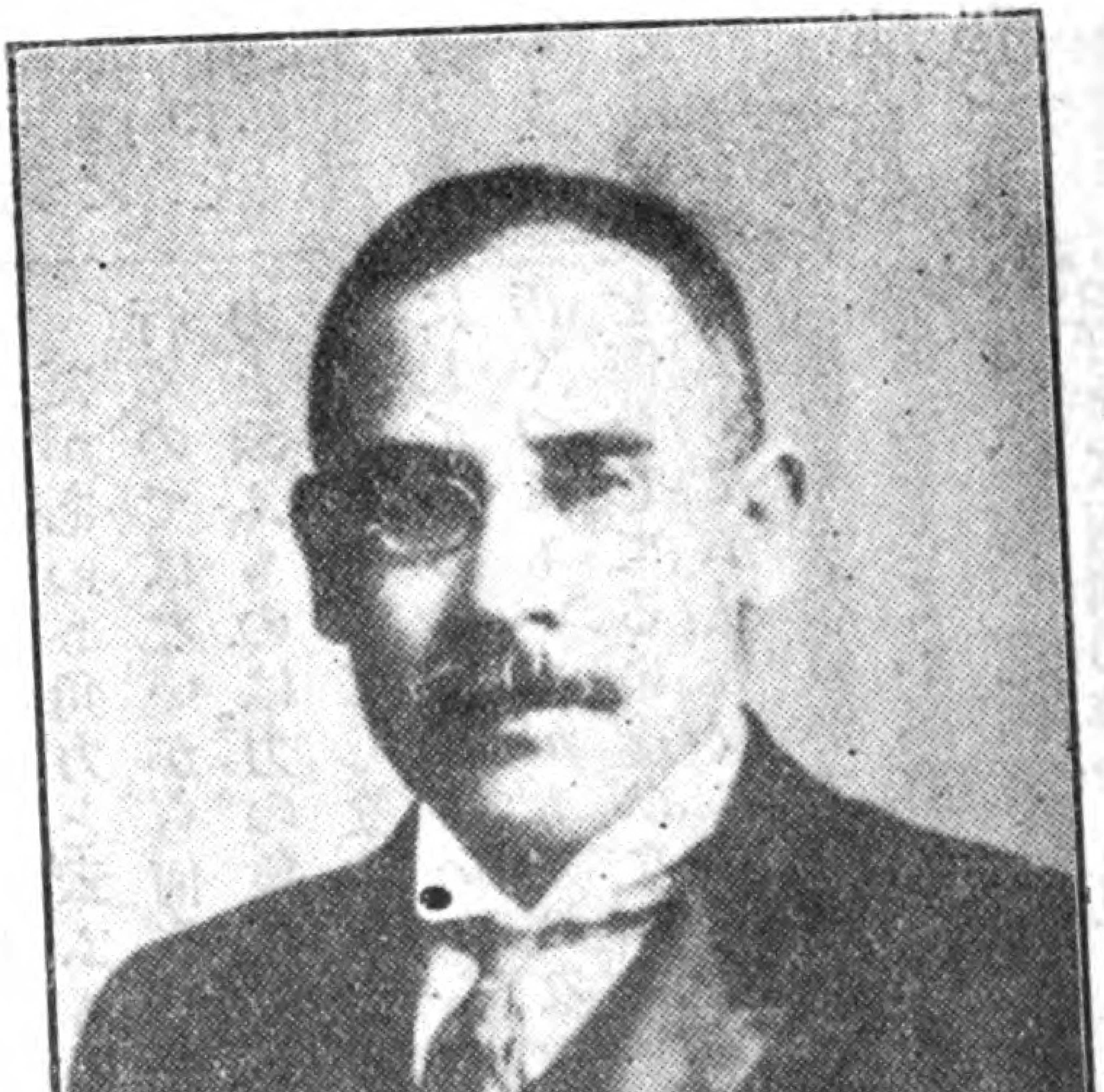
いつたいに其の皮膚が美しいと云ふ話は聞いてゐたけれ共、あゝして直接自分の眼に觸れて見なければわからない。あゝ云ふ美しい肉體を持つたお角力ばかりが土俵の上で花のやうに取り組んだら、嘸素晴らしいことだらう。それに房々した眞つ黒な頭髮を大たぶさにして、あの華麗な化粧廻しを着けたら、さぞ美事なことだらうなどゝ考へられる。

だがあのお角力と云ふものは、何も肉體の美を見に行くのではないから何うでもいゝかも知れない。お角力と云ふものは力の象徴である。力鬪の時に邪魔だから裸體になつてしまつたのだらう。見得に肉體を露骨にしてゐるのではないから、肉體なんぞは少しぐらゐ汚くつてもいゝかも知れない。國技の粹は肉體なんぞを侮蔑してるに違ひない。

なんだか私も疲れて來た。口から出任せに書きつけて來たやうな氣がする。お陰で「紫の羽織着せて見ん」の情趣もどこかへ消えて行つてしまつた。もうお止めにして、薄い蒲團にくるまつて、熟と咳に苦しみながら好きな角力の夢でも見ませう。

人物評論（五十六）

加藤外相論



△三段論法的人物

上

前田蓮山

◎加藤男は明治十四年に首席で大學を卒業した。新卒業生の中で男と鈴木充美君と誰れであつたか今一人と三人だけ、岩崎彌太郎翁から晩餐に招待されたが、鈴木君等は彌太郎翁が其の愛孃の配偶者を選ぶのだと云ふことを聞いて居たので、宴席に出て來た令孃の御意に召すやう、何んのかのと御機嫌を取つたものだ、然るに加藤男は开んな内情を少しも御存知ないものだから、平氣で生れ付きの無愛相を發揮したので、鈴木君は仕濟したりと喜んで歸つたところが、豈計らんや、加藤男は其の無愛相なところを見込まれて、中原の鹿を

讃たと云ふ話しがある。

◎右の話は事實であるか否か、再覽の保證する限りでは無いが、ヨシ作り話しとしても實に能く加藤男の人物を現はしたものである。全く此の無愛相と云ふ點が加藤男の長所であると共に短所だと言つて宜からう。

◎加藤男の人格は甚だ單調貧弱である。即ち智的要素のみ獨り發達して情的要素が不足である。例へば思ひやりなど云ふものは藥にしたくも無いと言つて宜い。近代の政治家で最も複雑豐富の人格者は故桂公故松田男などで、之れに次で原敬氏の如きも頗る豐富の人格を有して居るが、加藤男は此等諸人と殆んど比較にもならぬ程單調である。

◎男が同志會總理に就任した頃、容易に黨員とも面會せず、兩者の間柄が兎角面白く行かぬので、幹事等が男に向つて今少し黨人心理に通ぜねば不可ないと云つたやうなことを忠告した所が、男は何うすれば通ずるやうになるかと問ふので、幹事等が時折黨員と一所に飯でも食つて話し合つたが宜からうと答へると、男は『一所に飯を食ふと云ふのは交際をすることだね』と冷笑したまゝ相手にならなかつたと云ふことである。

◎如何にも、政黨は主義主張を以て團結すべきもので、交際をして結合すべき筋のものではない、併しながら、政治家も人間である以上、之れに對し全然感情を沒却せよと注文するは無理である。再覽が無愛相を以て加藤男の長所たると同時に短所だと言つたのは玆のことだ。

◎加藤男は『人が馬鹿に見へて仕方がない』と言つて、黨員などが訪問しても碌々取り合はぬさうである。是れ智ばかり發達して居て情が足らぬ結果である。他人の愚説を謹聽することは誰れでも苦痛であるに相違ない。併し人は誠意に出たるものならば、愚説と雖も之れを聽いてやるの同情心を有したいものである。

◎加藤男は大學卒業後、直ちに三菱に入つて横濱支店員となり、間もなく小樽の支店長に拔擢せられて赴任するや、會社の用紙で鼻汁をかんだと云ふ事務員を譴つたのを手始めに、大改革を遣つた。冷靜鐵の如き男の人物を見るべしである。

◎偶々社主彌太郎翁が巡視して來て大に男の功を賞し、自分の胸から金時計をはづして、之れを男に與へたところが、男は之れを辭退し、自分は未だ金時計などを持つ身でないから、暫く御手許に預つて置いて貰ひたいと言つた。

◎翁は愈々此青年の心懸けの殊勝なのに感心して、其れでは預つて置うと懐に收めやうとすると、男は其の凹眼を一閃して、願くば一札の預證文を頂きたいと申出たものだ。此の意外の要求には流石の彌太郎翁も舌を巻いて敬服したさうである。

◎それから英國に見學してピーオー會社の事務員となり、具さに海運事業を研究して歸朝したが、廿一年大隈伯が外務大臣となるに及び、其の秘書官となつた。其の頃も非常な議論家で、老外交官などはピシ〳〵やり込められたものだ。後年青木子爵が『加藤が大隈の秘書官をして居た頃は。散々自分共をいぢめたものだ、彼れは生意氣な小伜ではあつたけれども、頗る明晰な頭腦を持つて居て、「事務の才には長じて居る』と評

したこと、聞いた。

◎大隈伯の辭職後は大藏省に入り、銀行局長、監査局長、主税局長等に任じて、益々頭腦が數理的となり、打算的となつた。男は事を計畫するに必ず先づ其の結果如何を精算し、滿足すべき結果を得るの見込が立たなければ、決して指一本でも動かさないのである。

◎男が吝嗇と云ふ評を受けるも之れが爲めである。男は見す〳〵損をしたり、又は何の功にもならぬことに金を出す人を馬鹿だと思つて居る。何事にも出し惜みをすると云ふ位の吝嗇漢ではあるまい。

◎男は廿七年特命全權公使に任じ、三十三年迄英國に駐劄し、此の間に頗る英國人の感化を受けたのである。ボオトミイ氏の說に從へば『英國人は孤立的にして主觀的である』『英國人は保守の精神と活動の本能とを有する』『英國人は思慮に富み且つ殘酷である』

◎孤立的にして主觀的なるが故に、社交の方面に於て短所を有するけれども、獨立の精神に於て優つて居る。保守の精神と活動の本能とを有するが故に、規律を嚴守し事務に長じて居る。

◎又たボオトミイ氏は英國に於て宗教の盛なるは、國民の天性殘酷なるに因る。彼等の獨立心は人類以上の宗教の力に依るにあらざれば之れを服することが出來ないと論じて居る。されば英國人は宗教に依りて情を養はるゝのである。

◎宗教を度外視しては英國人を論ずることは出來ない、彼等の品性は宗教に依りて淘冶せられ、彼等の人格は宗教に依りて完成せらるゝからである。

◎而かも加藤男は宗教に對する信仰を有して居る人ではない。宗教を取り除きたる英國人は冷靜氷の如く強硬鐵の如き理智と意志との人であらねばならぬ。英國の感化を受けた加藤男の人物推して知るべきである。

◎男は三十五年の衆議院議員總選擧の際、横濱市で候補に立つたが、其の敵手たる島田三郎氏が草鞋(わらじ)がけで戶別訪問をしたのに反し、男は代議士たるものが有權者に叩頭して賴むなどは不見識極まると言つて傲然と構へて居たので市民の感情を害し、とう〳〵落選して了つた。

◎三十九年第一次西園寺內閣に入つて外相となつたが、鐵道國有に反對だと言ふので、幾くもなくして辭職した。外務大臣が鐵道國有反對のために辭職するには及ばぬ話ぢやないかと言ふものもあつたが、男は閣員の連帶責任を論據として行動したのであつた。

◎第三次桂內閣に入閣するに際しては、(一)軍人をして外交に容喙せしめないこと、(二)行政財政を整理して五千萬圓を節約すること、(三)憲政擁護運動に對し、首相は之れを切拔ける成算があるかと云ふとに就て桂公から充分の言質を取つた上で入閣を承諾した。

◎同志會に入るに際しては、(一)政黨を政權爭奪の具に供せざること(二)金錢上の負擔は之れを負ひ能はざることを堅く桂公と約束したと云ふことである。

◎斯の如く男が到る處に於て理屈を並べ、其れで今日まで押し通して來ることが出來たのは、寔に三菱の御蔭と言つても強ち過言でもあるまい。

役人になりたいと思へば、直ちに三菱の使用人から外務大臣秘書官に轉ずることが出來、大隈伯に離るれば伊藤公の援助を得て大藏省の局長となり、大藏省が厭きれば一變して全權公使になると云ふやうに、世の中が自由になつたのは三菱の後援が與つて力があつたのである。

◎其れから公使を勸むることタッタ五年で、三十三年には數多の先猎を出し抜いて伊藤内閣の外務大臣となり、西園寺内閣から出れば桂公の同情々得て又た英國に大使となり次で桂内閣に入閣すると云ふ調子。桂公の如きは全く男を利用して財界を操縦しやうと思つて居たらしい。

◎加藤男は斯の如くトン／＼拍子に進んで、殆んど苦勞と云ふものを知らないので、人格が益々單調となつて、智の一方に偏するやうになつたのであらう。されば男の短所も三菱が作り、男の長所も三菱が作つたとも言はれる、イヤ三菱が作つたとは言はれないまでも、確かに三菱が男の長所を保存したのである。若し三菱なかりしせば其の長所は失はれて俗惡な役人氣質になり了つたかも知れず、又た其の代りモット内容の豐富な人格になつたかも知れぬ。

下

◎加藤男は合理を以て人生の極致と思つて居るらしい。併しながら智力は單に人生の一面に過ぎない、人類の經驗は單なる智力より遙かに複雜である、從つて人生は到底智力許りでは解決することが出來ない。

◎早い話しが人間には智もあれば情もある。智許りが人間でも無ければ情許りが人間でもない。而して政治は人間の上に行ふべきものであつてみれば、合理と云ふ一點張りで政治をすると云ふことの出來ないのは論ずるまでもないことである。

◎而して合理論の眞理を獲得する方法は演繹法である。即ち斷定の眞偽を判斷する標準を以て、推理の過程形式の精確なりや否やに置くからして、若し其の大前提が正しき場合には眞理を獲得することが出來るけれども、然らざる場合には、假令推理の過程形式に誤りなしとするも、其の斷定は一文の價値なきものである。

◎寔に男は三段論法的の人物である。或る前提に依りて推論し行くには水をも漏らさないけれども、前の前提を創造するオリヂナリチーに至つては甚だ乏しいやうである。議論は如何やうにも立てられ得べきもので、男は鐵道國有案に反對して西園寺内閣を退いたけれども、曾て主張したる戰時税繼續反對と國債償還基金反對とに就ては、言責を無視して忘れたる如くであつた。

◎男が第三次桂内閣の外相就任に就て、又た同志會入會に就て、桂公の約束を要求したる如きも、三段論法的性格の然らしむる所である。實際から見るとあのやうな約束に何の價値があらう、桂公がハイハイと承諾したのは其價値なきを知つて居るからだ。

◎斯く言へば男は『其れは實に怪しからん、約束を粗略にするやうな惡德は東洋人の惡弊で、英國紳士などには有り得べからざる事だ』と言ふだらうが、約束など云ふことは眞の前提となり得べきものではない、獨帝が白耳義の中立條約を目して、一片の紙に過ぎないと言ひ、此の一片

の紙の爲めに多くの人間を殺すべき戰爭をすると云ふのは何の事だと英帝を冷笑したのは一理がある。

○再猴が曾て原敬氏に向ひ『如何なる考へで政友會に入つたか』と尋ねたところが、原氏は『理屈を言へば如何樣にも言はれやうけれども、要するに伊藤公が政友會をやるから來いと言はれたから、ヨシ來たと言つて參加したと云ふまでサ』と言つた。

○原氏ならば直ちに桂公其の人を觀察して、彼れと我れと如何なる點まで意見の一致を得ることが出來るか、又た何處まで一所に結合して行かれる人であるかと云ふことを見拔かんとすべく、紙の上や口の上の約束などで安心することはない。

○天才に非らざれば前提を作ることは出來ない。引力說が發見せられた後に地球の廻轉を知るは難事ではないけれども、引力說を發見することは大天才に待たねばならぬ。前提を作り出すと云ふことは議論ではない、盲目的に宇宙の大秘密裏に飛び込んで、探し廻はるより外はないのである。故に或學者は『天才は大冒險家なり』と言つて居る。

○男の外交振りが總括の兵法流で活機を捕ふることが出來ないと評せらるゝのは、此の三段論法的の結果である。男は現在の科學を尊重して議論の基礎を其の上に置き、敢て冒險的の新計畫をなさず、健實にして常識的の生活を爲す人である。

○男を演繹的人物とすれば、原氏は歸納的人物である。男は推理に長じ、原氏は前提を創造するオリヂナリチーを有する。男を常識的とすれば原氏は天才的である。故に乾坤一擲の大冒險は到底男に望むことは出來ないけれども、原氏は時として之れをやり兼ねない人である。

○一寸考へると、原氏は妥協などやつたりして、中々冒險事業などやれさうにないが、加藤男はハキ〳〵して居て大膽にやつ付け得るやうであるが、實は乾坤一擲の擧に出で得るのは原氏の方である。

○原氏は人格の內容が加藤男よりズツト複雜豐富で、智もあれば情もあり、酸ひも甘いも嚙み分けた所謂苦勞人である。故に一寸見ると至極穩健な人格であるが、其の臍下丹田に潛める勇氣は、遂に何事かを爲さねば止まぬ。

◎加藤男は人格の內容が單調貧弱であるが爲めに、意志活動が單調となつて、消極的には執拗となり積極的には傲慢となるのである。尙ほ詳しく言へば、意志活動と云ふものは人格を構成する諸々の要素を統一調和することに於て現はるゝものであるが、加藤男の人格の內容は智に偏して其の他の要素が微弱であるからして、意志活動は智に固着し、爲めに執拗傲慢となるので、眞の勇氣と稱せらるべきものでは無いのである。

◎政治は創作であつて說明では無い、事實であつて議論では無い。立憲政治は辯論の政治であるなどゝ言つて、演說の使ひ方などを稽古する書生があるけれども、其れは大なる心得違ひである。政治とは理想を國民と國土の上に描くことだ、然り描くことである、說明したり議論したりすることでは無い。

◎されば政治家は創作家であらねばならぬ。畫くところ[illegible]

して論理の過程を辿るやうなことをは、政治家の爲すべきことに非ずして屬僚輩の爲すべきことである。

◎加藤男は現内閣は同志會の内閣ではない、陛下の御信任によりて成立せる内閣であると言つたさうであるけれども、是れ一片の議論に過ぎない。説明に過ぎない。政治家として先づ三派の合同を創造しなければならなかつた、三派の合同を創造し得なかつた現内閣は、議論は如何やうに立てやうとも、早や立往生をして居ると云ふ形ちである。

◎黨首の業は國民を適ル發展の方向に指導するにありて存するのである。指導とは何ぞやと云ふに、指導とは隨伴しつゝ命令することである。單に隨伴するものは煽動政治家であつて、單に命令するものは專制政治家である。

◎而して隨伴するには複雜豐富なる包容力を要し、命令するには高邁なる識見と強大なる意志とを要する。然るに加藤男の如き單調貧弱なる内容を有する人格が、包容力の小なることは論を俟たない所である。

◎併し是れ現代の日本に於てのことで、今少し日本の政治界が進歩するか、或は英國の如き政治界に於ては、男の包容力は更に割増しがあるものと見なければならぬ。但だ英國人と雖も人間なる以上、男の如き單調貧弱の人格を以て包容するに自ら限りあるべきことは論を俟たない、英國に持つて行つても、男は恐らく第一流の政治家とはなれまい。

◎唯だ氏の品性は實に申分がない。人格の内容が複雜豐富なるを大なる人格とし、人格の内容の實質即ち品性が眞正純粹なるを高き人格と言ふを得ば、男の人格は小なれども高いと言はねばならぬ。

◎品性は主として學問修養に依りて陶冶せらるゝものであるが、氣質本能も亦た人格の品位に大なる關係を有するものである。氣質は之れを分つて多血質、膽汁質、憂欝質、粘液質の四種とすれども、此の分け方は餘りに漠然として實際に適用することは困難である。

◎甚だ不完全な分け方ではあるけれども、今試みに原、犬養、加藤三氏の氣質を比較して見やう。原氏は多血質に膽汁質を加味し、犬養氏は膽汁質に憂欝質を加味し、加藤男は粘液質に膽汁質を加味して居るやうである。

◎快活にして興奮し易く、興味の弱いのは多血質の特性であるけれども、原氏は強大判明の興味を有して居る、膽汁質を加味する所以である。原氏の興味は狹けれども強い。即ち政治や事務に對する興味は實に強いのである。

◎快活にして興奮し易く、興味の強きは膽汁質の特性であるけれども、犬養氏は快活と云ふ迄には至らない、又た反應も原氏ほどには速かでない。是れ憂欝質を加味する結果である。

◎氣質と云ふことは、理智的要素をも含まざるに非らざるも、主として情緒的であるからして、加藤男の如く先天的に感情に乏しき人物は此の氣質の特性を現はすことと頗る不明瞭であるが、男は辭令に巧みであるけれども快活ではない、又た容易に興奮しないけれども興味は狹くして頗る強く、且つ永續的である。即ち外交と理財に大なる興味を有し、且つ

事務の才あり、而して餘り熱心ならざる代りに永く繼續するは自然の數であらう。是れ即ち粘液質に膽汁質を加味した所以である。

◎原氏が羞恥の本能を有することは意外なる事實である。羞恥心なるものは必ず秘密性を有する。犬養には敵對心の本能が著大である。敵對心が極端に走る時は、憤怒、憎惡、嫉妬、羨望等となる。加藤男には取得性の本能が多量にあることは爭はれない、取得性に强き者は必ず敵對心に强きは心理上の一般現象である。

○以上說きたる所によりて略ぼ加藤男の如何なる人物なるかは知られるだらうと思ふ。併し之れは吾輩一個の見方であつて、本人に言はせると異議を挿む點が多々あるかも知れぬ。

△加藤男の將來

田川生

○加藤男は、說明の人である、齒切れのいゝ人である、齒に衣着せぬ人である、隨つてその言動には一點模稜の跡が無い、而して疑問の人と爲るとは、不思議の至りである。

○案ずるに、その疑問の人たる譯は、如何に將來に發達するかに在らう、若くは發達せぬかに在らう、左すれば、問題は將來に在る。將來は誰にも疑問がある、誰の將來にも疑問はある、加藤君にのみ疑問があるのではない、然らば加藤君の將來如何、一、うまく同志會を統率して往けるか、二、首尾克く首相と爲れるか、矢つ張これだこの疑問である、僕は、先づ以て加藤君の幸運を羨まざるを得ない、

◎そこで、以上の二點を問題として、加藤君の將來如何を測るには先決問題として、日本の政黨如何の問題を思はねばならぬ、去り乍ら、それは餘りに大問題である、政友會の將來如何の問題を思はねばならぬ、それも亦餘りに大問題である、去り乍ら、必要上こゝに一斷を下して置くと、僕は、政友會の將來は、將來更に小さくなるだらうと視て居る、そこに斯常り原君論が起る。而して加藤君論が相次いで起る。

◎原君の聲望、力量を、伊藤公に較べ、西園寺侯に較べて、著るしく劣ると謂ふではないが、僕は今日の政友會は、原君には過ぎて居ると思ふ、それには、犬養君と國民黨の現狀を較べ合はするが、一番早分りである。政友會の代議士約二百名、國民黨の代議士約三十名、犬養君の才幹が、それ程原君に劣つて居るかといへば然て無い、原君の才幹が、それ程犬養君に優つて居るかといへば、又然で無い、犬養君と原君の力量は、大抵伯仲の間に在る、ひいき〳〵から言へば、いろ〳〵の優劣長短もあらうが、先づ、兄たり難し、弟たり難し、大した長短は無きものと評して置いても、此場合には別に差支へは無いだらう、左すれば、一方の三十の代議士を率ひて居ることが、力相當の事業なら、一方の二百の代議士を率ひて居ることは、其の力に過ぎた位地である、一方の二百の代議士

と言ふ[illegible]

居ることは、その力に副はない不釣合の事業である、而して世人は、犬養君の三十の代議士を率ひて居ることを、犬養君の力に副はない不釣合の事業と思ふて居るか、或は思ふか知れん、犬養君の力は、以て二百の代議士を率ふべしと思ふて居るか。

◎僕は、近年の議會の趨勢から、代議士の位地、心象、政治的計畫等を、いくらか研究した積りで之を言ふが、今日の日本は、二百名以上の代議士を網羅する政黨は、ちと不似合である、去り乍ら、それは別今の問題として、犬養君も、原君も、二百の代議士を統率し、總御し、擒縱し往くには、失禮ながら、まだ〳〵力量不足である、兩君とも、そんな風な柄には出來て居ないと、僕は、犬養君が、三十の代議士を率ひゆくことを、必ずしも其の力相當の事と謂はないが、政友會の將來は、どうしても、二百は百五十と爲り、百五十は百二十となり、百二十は百と爲り、原君の力相當の程度にまで落下せらるべきものと思ふて居る、政友會の將來は、確に、段々削減せらるゝに相違ない。

◎そこで、同志會の總選擧の結果如何は別の問題として、加藤君も、加藤君の力相應の政黨首領には必らず爲れる、犬養君も、原君も、歴とした政黨の首領であり得る當世に、獨り加藤君のみが、政黨の首領であり得ない理由は無い、又その趨勢も無い、僕は、加藤君を聰明過ぎる、議論が勝ち過ぎる、器局が狹過ぎる、云々の理由を以て、加藤君のみの、政黨首領の資格を云々するを、不徹底千萬の意見だと思ふ、加藤君には、無論、此傾向の弊は有るであらう、然し乍ら、此傾向の弊は、決して加藤君一人に限りはしない、若し、此の弊あるが故に、加藤君は、即ち政黨の首領たる資格なしと謂ふなら、然らば他の二三子も、同じくその資格が無い譯である、他の二三子には、政黨の首領たる資格があるのに、加藤君にのみ、それ無しと謂ふのは、決して公平の説では無い、僕は前に述べたやうな意味に於て、加藤君にも、政黨首領たるの將來はあると視て居る。

◎但、加藤君が、外交の專門家たることは、政黨の首領たるに、極めて不適當である、去り乍ら、これも亦別の論である、別の場合に讓る。

◎昔は、英國の首相は、藏相を兼ぬることが普通であつた、たとへ普通で無くも、珍らしくは無かつた、首相にして外相を兼ねるは、獨りサリスベリーに始まつたと稱へて居る、日本では、首相にして藏相を兼ぬるよりも、首相にして外相を兼ねることが、幾分相當らしく思はれて居る、加藤男若し首相たるの日は、或は外相を兼ぬるか。

◎我國では、大臣は袖手無爲にして過すべき者と思はれて居る、此點に於て加藤君は最も不向きの大臣である、去り乍ら世俗の夢は少しづゝ醒めて來た、大臣も亦仕事の出來る者で無くてはならぬ、加藤君の將來は、世俗の此種夢の醒め工合に在る。

◎大臣猶然り、況や政黨の首領をや、政黨の首領は、一切世間の事を忘れ、悠々、どこに風が吹くかといふ風に、どつしり、腰を据へて、呑氣に世間の馬鹿話をし得る者で無くてはならぬ、これが、好き政黨の首領である、去り乍ら此種の夢も聊か醒めて來た、政黨の首領に、矢張、そ

の黨派一系の忙しく立ち廻る者で無くてはならぬ、加藤君は、こゝに、それが出來るか、出來ぬかの疑問を負ふて居る、而してそれの全く出來ぬことも有るまい、只、その前の　の資格は六かしい、即ち、加藤君の政黨の首領たり得る資格の有無も、政黨に對する世間の醒め工合如何に在りと思はれる。

△議會から觀た加藤男

小久保喜七

加藤男は所謂敵黨の人であつて、我黨の人ではない。從つて私交の上に於て吾輩とは何の關係もない。であるから玆に加藤男の人物月旦を試みるに當つても、恐らくは讀者を滿足せしむる事は出來ないであらう。それだけの材料といふものが吾輩の手許に備つてゐないからである。

そこで吾輩は全然私的關係から離れて、單に議會に顯れたる加藤男といふものをとつて極めて率直に論評を下して見ようと思ふ。勿論加藤男に就いて世間の風評を耳にせない譯ではなく、又外交上の手腕に就いても以前から知らない譯ではないが、今は假りにそれらのものを算用に入れずに、唯議會での質問應答及討論、又は其擧止動作等總て議會内に於てのみ觀らるゝ結果からして加藤男の月旦を試みようと思ふ。

いふことである。寧ろ政治に忠實なる人であるといへる。故に國家にとつては必要な人物であることは申すまでもない。男が現在行つてゐるところの外交は少くとも男が國家の爲めを思つて專心に行つてゐるところの外交である。であるからそれだけ男は自分の行つてゐることに對しては自ら省みて疚しくないといふのみでなく、自分の行つてゐることは極めて立派な、傍から非難を容るゝことの出來ない行爲であるといふ確たる信念を有つてをる。いゝくらゐに誤魔化したり、何とかよいやうにおつ附けておいたりするやうな人ではない。自分の仕事に對しては忠實な眞摯な人である。其點に於ては今の政治家中尊敬すべき人たるを疑はない。

それと同時に男の缺點と見るべきは其性質豪壯を缺いてをることである。其經歷が外務省の小吏から昇つた人で、爲る事が秩序的に失し、月並的に墮して、人目を聳動せしむるやうな破天荒な政策を行ふことの出來ぬ人である。是れ英雄的ならぬ天性に、辿つて來た經歷即境遇の因つて然らしむることであらうと思ふ。

現に支那に對する外交に觀ても、此千載一遇の時機を利用して、協商なり、又は同盟なりに依つて指導の實權を握り、支那の前途をして誤らしめないやうにするといふやうな根本的解決を與へることの出來ぬ人である。出來ぬ人であるのみならず、恐らく男自身にはさういふことをするのは好くないとで、行ふべからざることと考へてゐるらしく思はれる。

であるから其行ふところ姑息的彌縫的であるのは亦已むを得ない。顧

とすれば、好くないことだと云ふ。それらの事は別に男が惡い量見で爲るのではないことは解つてゐる。唯男自身がさう信じてゐるのである。

そこでぐず〳〵して瞞したり賺したり一時的に解決さへしておけば、時を經るに從つて何うにかなるであらう。英國や米國の機嫌を損してまで、そんなことを行ふべきではない、斯う男は信じてゐるに違ひない、さうでなければ議會の質問に對しても、あんな返事が出來る譯ではない。此間の議會に我黨の小川君が放つた支那問題の質問に、支那問題を根本的に解決する氣が無いかと訊いた時に、根本的解決とは何を意味するか、そんなことを此場で明言すべきではないと言つて體好く逃げたのを、翌十二月九日吾輩が、一歩進んで根本的解決とは指導の實權を握る事であると言つたら、支那は立派な獨立國であつて我國が指導の實權などを握るべきではない。我國は日英條約の規約に據り之を保護するより外はないと言つたので見ても瞭然たるものがあらうと思ふ。

今一ツの缺點は同じく性質並びに境遇から來るものであるが、何事をも國民の前にさらけ出すといふことをしない事である、國民と共に國民の同情に依つて問題を解決しようとする氣が無い。一人でも餘計に知らせることは好くないことだと思つてゐる。出來るだけ之を知らせまいとしてかゝつてゐる。夫の日露戰爭の時には桂内閣が十日間の議會を開いて、外交文書をさらけ出し、外交の顛末を悉く報告に及んだ。乃ち國民は其意義を明に諒得して、玆に擧國一致の行動に出で戰捷の効果を收め得たのである、小村侯は已むを得ないものゝ外は出來るだけ國民に知らせるつもりであつた。然るに加藤男は已むを得ないものは之を知らせるが、さうでないものは出來るだけ知らせない方針を採つてゐるやうに見える。元老に對してもさうである。然しながら是れ決して男が惡い氣でしてゐるのではない。さういふ性質に作られたが爲めである。

次に男は自分を信ずる事深くして、世間に慣れず、我儘に生立つて世の苦勞を知らない爲めに、議會の質問應答に際しても直ぐ怒る事である。其態度は一國の大臣宰相として人を敬服せしむる道ではない。徒らに器局の小なるを示すのみである。同志會の總理として不人望なのも一に玆に繫つてゐる處が少くない。

之は話に聞いたのであつて、眞僞の程は知らないが、或代議士が洋行する時に、幾分の旅費を加藤男の許へ相談に及んだ事があるといふ事である。すると男は自分が同志會の總理となるに當つて黨費の幾分は負擔する相談を受けた覺えはあるが、代議士の洋行費まで負擔する相談には與らないと言つて斷つたといふ話である。果して事實か何うか。只不幸にして此一場の話が事實らしく想像せしめるやうに加藤男が出來てゐるといふ事だけは事實である。

要するに、男は國家に對して忠實なる政治家である。其點に於て吾輩は現在我國の政治家中有數な人として尊敬を拂ふを惜まないものである。但不幸にして其性質其經歷は竟に大外交家として世界に其手腕を揮ひ、今後大に世界の外交に雄飛せんとする人でないことを併せ知るものである。

△好運に累はされた人 加藤男

早川鐵冶

同志會院內總理の一人たる吾輩をして、同志會の總理たる加藤君を評せしむるのは不適當である。通り一偏の御挨拶より外出來ない。例へば外交問題に就いて非難すべき點ありとすれば素より之を非難せねばならぬのであるが、現在の吾輩の地位からして之を公に非難するといふことは不穩當である。之をするは一度び黨を脫して後、正式に非難もし反對もしなければならぬ。今日の吾輩には悲しい哉それだけの勇氣がない。

然しながら、それは現內閣の仕事振りに就いて彼是れ批評がましいことが言へぬだけで、加藤君の眼は凹んでゐるとか、鼻は高いとか、始終苦蟲を噛みつぶしたやうな顏をしてゐるとかいふやうなことは言つても差支はない。個人としての加藤君ならば何時でも批評してよい譯である。

然らば茲に更めて吾輩が加藤君を批評する要があるかと言へば、無い。加藤君たるや、世既に定評ありで、また今更何をか言はんやである。然しながら強いて之を言へば、君は好運兒である。今日まで五十五年間の君が生活は極めて順境に處して、未た嘗て逆境に立つたことがないと言つてもよい。強いて之を求むれば、夫の鐵道國有に反對して、西園寺に離れ、野に下つて日々新聞を經營した時を以て君の逆境時代と觀るべきだが、それとても無い金を工面して四苦八苦の經營をしたといふではなし、有る金を使ふのにさして六ケ敷い譯でも無かつただらうと思ふ。而も二年も辛棒したかせぬかに投出して了つた。それから加藤君は自分の地位の方面變換を行ふために特命全權大使として英吉利へ行つたのであるが、それは自分の後輩たる小村に推されて行つたので、何れの點から觀ても自分より劣れる小村如きが當時大外交家として時めき、自分は未だ男爵であるにも拘らず當時已に侯爵であつた其小村に推されて大使になつたといふことは、君としては不快でもあつたらうし、また不滿でもあつたらう、がそれは君が逆境に處したといふ譯ではない。今日同志會の總裁となつて、此早川輩の如き、所謂非幹部派二三十名の抗議に會うて黨則を變更せねばならなかつたり、廢減稅問題が思ふやうにゆかなかつたりするのも、君にとつては亦固より不平でもあり不快でもあらうと思ふが、これとても決して逆境に處してゐる譯ではない。吾々の如く粒々辛苦して貯めた金を總選擧に撒き散らして、乾坤一擲の大事業を遣つて出て來るのとは譯が違ふ。自ら山野を跋渉したり、或はピョコ〱頭を下げだりする苦を知らない。岩崎の婿として納つてゐればそれでよいのである。總裁としても、親しく黨員と接して黨情を知るでもなく、唯僅かに總務に顏を覗けて行くに過ぎないといふやうなことでは吾々野人の意志を解すること出來ないのも無理はない。吾々野武士の境遇が君に解らう筈が無いのである。吾輩の如き十四五年も役人生活をしたのであるが、野に下つてからは野武士と一緒に仕事をしたり、金を拵へた

り、色々辛苦艱難をして來た者とはどうしても較べものにならない。君は必ずしも運命の寵兒とは謂はぬ。が少くとも好運兒であるだけは事實である。身代にしたところが自ら築き上げたのでないから、金の無い境遇に對して些の思遣りといふものが無い。此の君が好運の人であるといふことが即ち野黨の領袖として最も不適當たらしめる最大原因である。我々の如き時と場合に因つては水火の中にも飛込んで働かうと欲する者も君の下に在つては快く働くことが出來ない。桂は金を人に出させて、夜晝なしに働かせて、何の酬ゆるところもなく死んで了つたのであるが、それが今日も尙桂が居たらと思はせるといふのは桂の德である。

君が現在月々黨費を出して居らるゝ相であり、特に本來の御氣質を曲げさせられて、腹の立つことも我慢し、不愉快をも忍ばれて、吾々野人禮に嫺はざる野武士どもをも引見してをらるゝ相であるが、それでゐて人から快く思はれぬといふのは君の損な處である。然しながら今度から初めて野武士などにも接近する機會が多くなつたのであるから、その初め原敬なども君と同型の人であつたのが、次第に角が除れて、今では立派な大政黨の領袖となつた如く、一年に二度や三度は吾々野武士に背められて、せい／＼角を除ることに努めて辛棒することが出來たならば大政黨の領袖として大適任者とまではゆかなくても及第する程度にまでは行くだらうと思ふ。凡そ大政黨の首領たる以上は胸懷を廣く、よしや氣に入らぬ者に對してもさう矢鱈に愛憎の情を交へてはならぬ。もの言ひなどもいくらか氣を附けてかゝらねばならぬ。今度の議會に於いて見ても、加藤君の答辯はキビ／＼して上出來であつたと言はれてゐるし、君自身にしてもさう信じてゐるらしいが、假令駄問の續出にもせよ、之を頭から叱り附ける必要はない。寧ろ先方の言ふ處を聽いてやつて、駄問は駄問なりに褒めて、然る後徐ろに說いて聞かせるやうにすべきである。無暗に反感を起させる必要はない。成るべくならば快く納得させる必要がある。吾輩などは隨分不遠慮な惡口も利くが、吾輩の惡口には愛嬌があると見えて、反對黨でもさう感情を惡くするやうなこともなく、寧ろ同情して呉れるやうである。野武士との交渉に就いても此度の呼吸が極めて肝要なのである。此點は吾輩などよりズット後輩であるから宜く敎を受けられるがよい。君の性質としては恐らく未だ曾て人から叱られたといふことがなからう。學校に居る時分は常に一番であつたし、學校を出てからは日本で一番金持の一番惣領娘の婿となつたのであるから誰しもが遠慮して一歩を讓つてゐる、大隈も遠慮をしてゐれば伊藤も遠慮をしてゐた。だから君自身では餘程豪いと思つてゐるに違ひない。がイソップ物語か何かにあるやうに、狐が行く處猛獸が皆慴伏して了ふので大に威張つて歩いてゐたら何ぞ知らん、猛獸どもは狐の後から虎の來るのを見て恐れてゐたのを狐先生氣が附かなかつたなどの話もあるのたから、加藤君自身に於いても氣を附けられるがよい。また吾々も君を指南して追々大政黨の領袖として愧ぢざる人物を作り上げたいと思ふのである。

△加藤男の長所短所

松山忠二郎

加藤男爵は政治家として立派な政治家に違ひない。あれ位頭脳の明晰にして知識の該博なる政治家は外には多くはないと思ふ。就中財政と外交は其得意とする所であるが、此二つは政治家として最も必要な知識である。此二つに於て加藤男が秀でゝゐると云ふ事は政治家として最も強味であると信ずる。殊に今回の事件について加藤男が英國の外務大臣サー・エドワード・グレーと懇意すいと云ふ事は日英の外交上に於て最も好都合の事に違ひない。もとより今度の戦争は日獨の戦争であるけれども外交は寧ろ日英間に纏まるものと思ふ。只世人も云ふ如く加藤男の外交は英國贔屓に過ぎると云ふ事は多分事實であらう。私の見る所では加藤男は英國が好きなと同時に獨逸が嫌ひなやうである。然し日本の外交の樞軸が今日の如く日英同盟に外ならざる間は之は大して缺點とも思はれない。日英同盟の續く限り日英兩國が提携して東洋の平和を保つ必要がある以上は、我國の外務大臣は英國贔屓の人が當ると云ふ事は寧ろ相當の事だと考へる。只日英同盟が何時まで續くかは疑問である。日英同盟が無くなつた後でも飽くまで英國贔屓と云ふ事になれば困るかも知れないが、今日では外務大臣の英國贔屓は少しも差支ないと思ふ。

以上は只加藤男を國務大臣として許したのである。國務大臣としては申分ないと思ふ。立派な大臣である。が然し國務大臣以上の大政治家として、政黨の首領として、將來の內閣總理大臣としては、加藤男について一層批評の餘地がある。そして私の見る所では加藤男自らが一層修養する必要があると思ふ。加藤男の缺點を擧ぐれば第一にどうも胸襟が狹いやうである。第二に、之は缺點であるか長所であるか知らぬが、政治家として少し正直過ぎるやうである。第三に政治家としては客を五月蠅さがる嫌がある。第四は陰でよく人の悪口を云ふ。あの人は人を褒めることが少くして陰で悪口を云ふ事が多い。第五に世人の云ふ如く矢張り官僚風な所がある。ザッと見た所で此五つが加藤男の缺點ぢやあるまいかと思ふ。加藤男は胸襟が狹いが爲めに詰らぬ事で直ぐ怒る癖がある。同時に相手方の人を怒らす嫌もある。加藤男は正直過ぎるが故に政黨の首領としては少し略が無さ過ぎる。勿論之は必ずしもわるいとはいへない。却て加藤男の云ふ事に間違がないと云ふので世間の信用を增す事になるかも知れない、從て加藤男の長所として褒むべき所であるかも知れぬが、今日の政界に於て成功するのには今少し略があつてもよくはないかと思ふ。加藤男は客を五月蠅さがるが故に其黨員とか或は乾兒とかに對してどうも温か味が少いやうに思ふ。乾分を手懷ける事が少いやうに思ふ。又加藤男は陰で人の悪口を云ふ癖がある。之が何時とはなしに本人の耳に入るのである。そして本人を怒らすと云ふ嫌がある。それから加藤男は官僚風であるが故に、黨議を尊重して行くと云ふ意味でなくて、黨員を指揮命令して行くと云ふ顔があるやうに見える。實際で黨の首領

をリーダーと云ふ。加藤男は此言葉を文字通りに解釋して黨の首領は黨員をリードするものである、黨員の爲めにレツドされるものでないと考へてゐる模樣である。如何にも政治家として理想を行ふについては無暗に黨員の云ふ事に媚びるのはよろしくない。黨員を指導して行く丈けの理想が無ければならぬ、が然し一から十まで悉く黨員に對して指揮命令をすると云ふ考では多くの黨員が皆くつついて行くものでない、多數黨員を纒める上に於ては黨議も尊重し、旨く黨員を指導して行くと云ふ事が必要であらうと思ふ。此點が政黨の首領として加藤男については最も缺點であるまいかと思ふ。要するに加藤男の長所と短所は犬養君の長所と短所と似たる所が多い、犬養君と同型の人であると言ひ得るかとも思ふ。勿論犬養と加藤と同じ程度の人と云ふ事には加藤男の方に於て不足はあるであらうが型は同じ事でないかと思ふ。犬養君はあれ丈けの技量を持つて多年政界にゐながらトンと政治上に志を得ない。而して其黨員は段々減る一方である。之は政黨の首領として犬養君に大いなる缺點のある所以である。之に鑑みて加藤男も今後大いに修養する必要があると思ふ。勿論人は誰でも多少の缺點は免れないのである。少しも缺點のない人であるなれば非常な大人物である。さういふ人が無い限りに於ては比較的長所の多い人を以て政黨の首領として立てゝ行かなくてはならぬのである。從つて加藤男に以上の缺點があるからというて、同志會で首領として加藤男を罷めさせれば同志會は纒まらないのである。缺點があるとはいひながら同志會では矢張り第一等の人物である。同志會中で何人も加藤の足元へも及ばぬのである。それで同志會中には加藤男に對して不平が多いと云ふが、夫れ以上の黨首が無いとすれば矢張り加藤男を黨首として纒めて行く外ないのである。殊に加藤男も近年は段々修養をされてゐる模樣が見えるのである。以上の缺點が段々少くなるやうに見えるのである。そして同時に漸々其長所を發揮するやうに見える。現に昨冬の議會に於ては大いに其長所を發揮して力量を認められたのである。夫れ故に今日では同志會に多少の不平があるにしろ、又私が忌憚なく右に述べたやうな缺點があるにしろ、今後矢張り政界の大立物として一方の首領たる人たる事は無論の話と思ふ。

以上の如く加藤男は政界の一方の大立物たる事は明かであつて、今後其修養が出來るに從うて益々重きをなすのであらうと思ふ。それに對して一方の敵は原敬である。將來は多分原君と加藤男とが對峙する事だらうと思ふ。今日でもさう云ふ傾が已に備つてゐるが、原君が一方に於て政友會の總裁として勢力を揮ふ、之に對して同志會の黨首として加藤男が其力量を振ふ。兩々相對して今後我政界に爭ふぢやないかと思はれる。處で此二人は、どちらが勝つかと云ふ事は今の所で未定である。そして其勝負は大隈伯の元氣が何時まで續くか、生命が何時まで續くかと云ふ事に大關係があると思ふ。否、寧ろ今後の政界は大隈伯の元氣と生命によつて決しはしないかとも思ふ。今度の內閣は多分此五月の臨時議會で辭職するであらうと思ふが、大隈伯の元氣が尙旺盛であつて更に再び內閣を組織する丈けの勇氣があれば今後原君は加藤男に負けるかと思

ふ。將來永い間には兎に角、當分加藤男の方が勝つと思ふ。之はどうしても長い經歷なり、其間に朝野に扶植した大隈伯の勢力が加藤男に加勢する結果である。大隈伯にも無論いろ〳〵缺點もあるが、今日の處で原敬の天下にするか、大隈伯の天下にするかと云へば、どうしても大隈伯に同情者が多い。從つて加藤男が大隈伯を擔いで居る間は、又大隈伯が擔がれ得る元氣の繼續する間は加藤男の方に勝味があると思ふ。然し私の豫想する如く今度の總選擧の結果、矢張り非政府黨が多くて大隈内閣が辭職し、それから井上大隈伯の元氣が更に第二回の大隈内閣を組織することを許さぬとすれば多分原君の方が勝つであらうと思ふ。即ち今後大隈伯が加藤男に加勢すると云ふ事が無いものとして單に原君と加藤男をして相爭はしめたならばどうも原君の方が勝つであらうと思ふ。と云ふものは原君の方が政黨の首領として黨員を纒める上に於て加藤男に優つてゐるからである。

但し原君が勝つというて、其勝つ理由は必ずしも感心すべきものでない。加藤男が負けるというて、其負ける理由は決して恥辱とするに足らぬと思ふ。加藤男は猥らに理想を實行しようと希望する。黨員の意嚮如何に拘らず、世間の人氣如何に拘らず直ちに理想を實行しようと思ふ。急激に理想を實行しようと思ふ。それで原君に負けるんだと思ふ。原君の方は之に反して大政治家として理想を實行しようとする誠意が少ない。成るべく多くの黨員の氣に入るやう、成るべく人氣に投ずるやうである。而して此點に於て加藤男に勝つのである。さうすればかゝる理由によつて勝つのは必ずしも勝つた者の名譽といへない。勿論加藤男が理想を實行するについて其遣り方に下手な所もある。もう少し旨くやれば黨員を滿足さして理想を實行さする事も出來るんぢやないかと思ふ。此點が加藤男の修養を要する點だと思ふが、加藤男の同志會に於ける人望が原君の政友會に於ける人望程ないと云ふのは畢竟加藤男が猥らに理想に馳する結果である。私の見る所では原君より加藤男の方が高い理想を持つてゐるやうに見える。さうすれば今後假令加藤男が敗れても其敗れるのは決して恥辱ぢやないと思ふ。原君が勝つた所で必ずしも名譽と云へないと思ふ。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

侯爵徳川頼倫閣下題辭
一木文部大臣閣下序文
文學博士井上哲次郎先生序文

日本大學・國學院大學講師
文學士 岩橋遵成先生編著

二月十日發賣

((最新刊))

大日本倫理思想發達史

菊判上下全二冊　總クロース製函入　紙數二千頁　挿畫六十一個　定價金五圓五拾錢　郵税金貳拾錢

西洋倫理學史の刊行は汗牛充棟も啻ならざるに反し上下三千載萬國無比の精華を醞釀したる我國倫理思想發達史の完備せるものなきは豈學界の一大缺陥と謂はざるべけんや著者夙に玆に慨する所あり乃ち多年大學院に於て研鑽せる所の結果を編著して本書を公にせらる、收むる所汎く我邦各學派の學者を網羅しその學説より兼て政治論・經濟論をも紹介し且附錄として先哲著書目錄及び生卒年表を添へられたれば實に首尾一貫せる日本倫理學史といふべし蓋し現代思想界の一大變革が幾微の間に施轉しつゝある時東西思想の調和をはかり世界文明の光輝を發揚すべき任務を負へる我國民は須く先づ自家の立脚地を自覺し本邦特有の倫理に就て了解し置くにあらずんば焉ぞ其天職を全うするを得んや本邦斯く國民の一大自覺を要する際に完成を告げたるもの眞に偶然にあらざるなり即ち本書は唯一の國民道徳指導者にして且我學界に於ける無二の良師友たるのみならず國粹の典章として各家の書棚を飾るに足る者何物か之に加ふるあらんや希くは大方諸彥御愛讀の榮を賜はらんことを。

本書目次及内容見本御申越次第進呈

發行所　東京市京橋區南傳馬町二丁目　振替口座(東京)第二八〇九番　目黑書店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

一日一言

新渡戸博士著

博士曰く!!その日その日の教訓になる格言を聞いて一日の精神的食料に供することは何人にも望ましいことである。

世に行はれてゐる此類の書は多くは基督教的の性質を帯びてゐて其教理を知らぬ人には解し難い句がある。

この本に收録ハ句は務めて短いのを選んだ。之は諸君が朝食してそれ〳〵業務につく前に膳を離るゝ間際に或は單獨に或は家族と共に讀むことを期したからである。

飛ぶが如く忽四版

△博士昨秋負傷して溫泉に遊ぶ、時に一青年あり、博士を訪ひ其痛ましき平生の經歴を告白し、心中の悶々を訴ふ。

△博士聞いて瞑目、沈思、やゝ久しうして慨然として曰く、斯くの如きは豈一青年に止まらんや。我之を救はざる可からずと。

△斯くの如くして成れるもの卽ち本書なり。全文是れ血、是れ淚、博士の熱誠は千古不磨の金言となり、警句となり、惻々人に迫る。

△載する所一年三百六十五日に當嵌めたる一日一頁の修養處世訓、添ふるに古今の金言名歌及道歌の粹を以てす。眞に是れ萬人必讀の名著

△三五版美本
△總クロース
△ポケット型

定價 六拾五錢
郵稅六錢

東京市京橋區南紺屋町十二
實業之日本社
出版部
振替口座東京三二六番

(中付二の三)

最新刊

■河東碧梧桐氏著 反響叢書（第三編）

新傾向句集

▲中村不折氏挿畫四葉

■四六版美本
■定價壹圓
■送料八錢

麒麟の如き句集出づ

碧梧桐氏が新傾向派の大勢を率ゐ句界最高のオーソリテイたることは世既に許せり本書は氏が新傾向派を唱導せられしより以來の句作數千を收めて一巻となせるもの附錄「俳句に關することども」は句作に最も必要なる藝術的信條を宣明し又氏が許せる新進作家數人を傳せり自序には正岡子規居士に對する愛敬の情流露して纏綿たるものあり宜なる哉本集の成るや書伯不折氏は好んで春夏秋冬に亙る四大彩筆を寄せられたり今最も鮮明なるコロタイプ版を用ゐて原書に髣髴たらしめたり完膚完膚現今の句抄にしてかく句作者に忠實なる書のありや新傾向派の眞姿に參ぜんとするの士競ふて本書を繙け

反響叢書

第一編　小宮豐隆氏著　**演劇評論**

▲四六版四百頁
▲定價金壹圓

第二編　平塚明　**現代と婦人の生活**

▲四六版三百餘頁

東京市本郷區元町　日月社　振替東京二八九一一

（中付二の四）

評論

文藝時評

中澤臨川

病的個人主義

「早稲田文學」て島村抱月氏の「藝術の弱小」と題する論文を見た。

氏は先づ現代の思想が個人中心に傾いてゐることを述べて、之を是認し、更に藝術の目的に說き及ぼして、『藝術は昔から唯一つの目的に向かつて生きて來た、それは即ち個體中心の生活慾を耀かすといふことである』といつてゐる。既に、藝術が個體の生活慾光耀を目的とするからには、之に妨害を與へるすべての生活形式は咒咀される。現代の我等は、我れみづからの個體の內容が複雜になつたのと、それに應ずる外面の社會生活の形式が凝結して來たのとで、自個の生きてゐる感じを鈍らされてゐる。生活本能の接觸面が麻痺して了つた。壓迫されて了つた。その麻痺を破り壓迫を破らうとする所に現代の煩悶が生ずる。そこでかやうな形式生活を呪咀し、生活刺戟を强度にするか新奇にするかに由て、過去と周圍との囹圄から脫しようとするのが近代藝術の生命である。破壞はむしろその本來である。かやうな破壞に伴ふ存亡の機關から生ずる一種の變態生活が藝術である。藝術は實事件を避けて一種の假構事件の上に其の要求を被らせたものである。されば、藝術は一面に於ては廣い人生の要求の上に立つてゐるものであるが、その一面には假的遊戲的臭味を帶びてゐる。『藝術はかうして尙そこに一つの煩悶を含んでゐる、それは假構事件から實事件に移らんとす

る煩悶である』。或る境遇の人に取つてはもう其の假構といふことの空虛なるに堪へない。『之を棄てるか然らざれば直ちに之を實行の上に移すかの外はない、それと共に之を實行に移せば、其の瞬間、多くは其の個體は滅亡する、周圍及過去との妥協を破るが故に滅亡する、斯の如くにしても尙亡びるか、存するか、之が人生最後の煩悶である』といふのが氏の說の大略である。言短かくして意は仲々に深長である。氏は最後に今日の藝術の弱小を嘆じて其の一文を結んでゐる。

果して然るか。人は眞に生きる爲めに自個を滅亡に終らせなければならないのか。破壞が人生の本來であるのか。我等の偉大な藝術はこの滅亡の眼を暗ましたための一種の虛僞的假構に過ぎないと言ふか。眞に然らば之は實に人生の根本に橫はる一大矛盾である。いかなる方便も癒すことの能きない本然の矛盾と謂ふべきである。我等の生活慾の究極には破滅のほか他の一路がないとしたら、其の世界はショーペンハウエルの導くそれと同じやうに目的も自由も攝理もない世界にほかならない。これが眞實であらうか。

先づ私は島村氏の據て立つ根本態度に疑を挾む者である。氏は極端な個人主義から出立してゐる。而も十九世紀歐洲の病的個人主義に惱まされてゐるのである。氏はルナンと同型のダイレッタントである。氏が人爲的社會を相手としての個人中心說を是認するのは可いが、廣く生命乃至は自然を相手としての個人の位置に考へ及ばない所に氏の思想の缺陷がある。近代の歐洲人は科學の影響を受けて、自然を征服しそこに人間の權力を確立することを以て唯一の誇と考へてゐた。彼等は自然を敵視し奴隸視しながら、みづからの周圍に人爲的の障壁を構へた。で、どれだけ社會中心の生活を說かうとも、彼等は先づ斯の點に於て根本の個人主義者である。それが今一步轉じて、社會を相手としての個人中心說に傾いた時、彼等は二重的の個人主義者である。彼等の生活は落莫として孤立でなければならない。之が十九世紀末の歐洲人の罹つた思想上の病である。島村氏の思想は、意識的にか無意識的に

か、矢張この泰西思想の流を汲んでゐる。氏は自個の對者としての社會をば强く感ずるが、もつと廣い自然と自個との關係をば無視して、自分といふものの存在の周圍を狹く限つてゐる。そして人爲的の社會が自分の相手とすべき唯一の强大な敵で、そのほかには自分の歸り住むべき天地がないかのやうに考へてゐるらしい。かやうな考は矢張人間と自然との間に故意に障壁を造つて隔離生活を營まうとした近代歐洲思想の餘沫にほかならない。かやうな根本的個人主義の誤つてゐることの一端を說いて、私は嘗て『生命(或は自然)に對しては利他的であれ、社會に對しては自我的であれ』といふことを論述したことがある(「社會と感激」)。

これは餘談であるが、近來の論壇で切りに國民性を力說する聲の聞かれる中に、之等の論者が何れも近代歐洲の個人主義を根據として其說を構へてゐることが眼に附く。彼等は旣に根本の態度に於て借物をしてゐる。そして外來の型に箝めて無理に自國の國民性を强いようにとするのである。なぜなら、かやうな對自然の個人主義が決して東洋の產物でないことは明らかであるからである。それに就て想ひ合はされるのは現代印度の詩人タゴーレの思想である。彼は實に東洋思想の新開拓者である。彼の說に由れば、希臘に發した歐洲文明は自然から隔離した都城の文明である。然るに東洋文明は森の文明である、自然と親み自然の中まで自個を實現させようとする自我忘却即自我擴大の文明である。人間の精神と宇宙精神との間に一大調和を實現しようとするのが其の特徵である。西洋文明は自然を敵視し、權力を目的とするが、東洋文明は自然と親和し、一致(ユニオン)を目的とする。かやうな一大調和、『無限』の實現に於て、人は眞の自由と喜悅とに達する、と彼は說いてゐる。

自覺した自我が狹い社會のみを相手として其固囿に苦しむ時には、島村氏の說くやうに、其行く手は破滅の外にあるまい。然し我等の自我の歸るべき眞の故鄕は別にほかにある。我等が忘我即擴我の謙遜な道から進んで、偉きな生命の流に溶け、大自然に抱擁される

とき、そこでは破壞は建設と甦る。宇宙生命と「我」と一體たる平和と喜悦と自由と愛との誇りが其處に產れる。島村氏の說くやうな「我」と社會との爭ひは、この平和鄕に這入る前提ではあるまいか。我等が必ずしも斯の第一戰に破れて滅亡せなければならないやうに見る氏の見解は、人生を餘りに狹く厭世的に見過ぎた結果ではあるまいか。

從てこの見地からいへば、氏の藝術觀にも誤謬がある。氏の所謂藝術とは自我と社會との鬪爭から產れ出るそれで、所謂社會藝術即ち小說や戲曲のみを指したものである。前にも述べた通りの近代歐洲の病的個人主義は、人間精神の活動範圍を狹めた爲めに、即ち人間が對自然の活動、自己の擴大實現を無視してひたすら自分で造つた障壁の中で社會といふ物ばかりを相手とした爲めに、破壞的要素に充ちた社會藝術が唯一の藝術のやうに思ひ做されて來た。彼の絕對と自由に憧がれる純粹藝術が墮落しながら亡びかけた。然るにそれが最近に至つて漸く復活の曙光に向ひつゝあることは今日の形像美術界の傾向を見たゞけでわかる。所謂眞の藝術は島村氏の說くやうな假構的虛僞的のものでなく、更に一段高い建設的境地に住むものであることを茲に言明したい。

かの論文は島村氏自身の最近の心事を最もよく談るものであると言ふ人がある。果して然らば私は氏の誠實な告白に對して敬意を表する。そして氏の苦しい煩悶の結果が、氏の期待する單なる滅亡以外に、一段の進境と光明に到達する時期の早からんことを祈つてゐる。

藝術の弱小

その論文の最後で島村氏が述べられた藝術の弱小嘆には最も同感である。今日の藝術は自分で自分を卑下しながら、次第にその領域を狹ばめて來た。藝術は宗敎と同じ位置に位しながら共に相助くべき性質のものである。因習と迷信のために宗敎が倒れたならば、當然その後をつぐべきものは藝術であるべき筈だ。然るに近代の藝術はみづから賤めながら常識に阿り、社會に仕へ、そして科學にさへ附和雷同しようとしてゐ

る。昔は藝術と宗教が手を取つて道德を作り、道德が社會を支配した。然るに今日は社會の慣習が道德となり、その道德が藝術を支配してやる。生命の使者たるべき藝術が社會の隷僕たることを甘んじてゐる。今日の藝術は疲れた、そして敗けた。何處に新生命の力を體現した文字があるか。何處に精神の復活を叫ぶ偉きな聲があるか。何處に勇氣の刺戟があるか。何處に我等の魂に翼を與へる調があるか。何處に生活の存亡の危機をそゝる詞があるか。今日の藝術は餘りに自らを卑下して社會に叩頭した。今日の藝術は餘りに平俗的、『道德的』である。

私は藝術が社會を超越して、一段高い見地から社會を導くやうになることを望む。私は生活に即した藝術を望まない。

美と用

「太陽」誌上で木下杢太郎氏が藝術批評の意義を述べられた中で、美と用との合致說に說き及んだ一段が最も私の意を得た。私も朧氣ながら以前から同樣な意見を抱いてゐた。然し之に對する明瞭な解說を得ないで今日に到つた。偶ま木下氏のやうな美術鑑賞眼の高い人から同じ說を聞くことを喜ばしく思つてゐる。然し氏の之に對する解說には深く同情することが能きない。私は美と用との合致を氏の說かれる以上、もつと意識の深い奧所で行はれる神祕的な働きと考へたい。その所謂『用』をば、氏が水甕の說で說かれた實用以上の意味に解したい。私の謂ふ『用』とは必然(ネセシチー)の意である。美の絕對自由と用の絕對必然とが融和した境地に於ける美用合致說を私は說きたい。アンリー、ポアンカレイが「數學的發見」と題する論文の中で、潜在自我の行ふ選擇が必然のハーモニーであり、美と用とが其處で一致することを說いた一節は最も私の意を得てゐる。

私は近日「潜在意識の說」を立てて、この事をも併せ論じようと思ふから、玆には唯だ木下氏に感謝の意を表し、尙氏の詳しい意見を聞きたいといふ希望だけを洩して置く。

浦振氏の詩

最近に私の手にした詩集のうちで、最も私を感動させたものが二つある。それは印度の詩人ダコーレのそれと、鳴海浦振氏のローマ字詩集 TUTI NI KAERE の一篇である。この二人は共に東洋趣味の情緒を新しい詞に盛ることを知つてゐる詩人で、淋しい中の溫か味、感謝の中の哀愁を素樸な調で歌つてゐる。閑雅な憂愁と淨ひ主觀的咏嘆とが彼等の特色である。その詩は彼等に取つては、直に信仰であり、生命その物である。詩に生きる純一生活に於てもこの二人はよく似てゐる。

私は浦振氏の名を聞いてゐることは久しいが、其詩を見るのは初めててある。田山花袋氏の「トコヨゴヨミ」の主人公は氏であるといふことだ。茲に氏の詩風を忍ぶために二三の短歌を引いて見よう。凡てが人生逆旅の寂涼を歌つた物である。(ローマ字から普通文字に書き直した罪を作家に詫びて置く)。

あきらめの旅ではあつた、磯のさきの白い燈臺に日がさしてゐた。

うす赤い愁を山のくま〴〵に歌ひとよもす明方のとり。

かたくなな性根に生れ、野原來て、きぢの尾のふにねはんをば見る。

半島は潮の音ばかりか、ぽつ〳〵の村みな此の世の淋しさを談る。

暗がりに家を逃げたら田のくろに鳥四五羽が見送つてゐた。

牛番に水一杯は乞ひはすれ、自分は彼に何等得させる。

頑な固い胸にもそと摘んで抱けば憂增す濱茄子の花、

瀨戸の山わらびも太く山ばとは『てて、ぼう〳〵てて、ぼう〳〵』。

眼の前に義理人情のうずも卷き、見も泣く中に山奥を思ふ。

廣原は草は短かく浮雲は低くころ〳〵たゞよつてゐた。

『どこへ行く、これから君は？』——世のならひ、泣き顔同士逢ふ時知らず。

秋であつた、夕日さしてる浦かげに漂つてみたが何もなかつた。

雁は來た、かねを鳴らして雁は來た、馬の骨さめろ、草も萌え出ろ。

時局の人・裏面の人

鐵拳禪

▼大正新政も三人目の首相で、其の政局が何うやら展開しさうだ。桂太郎公の『前非の痛悔』から新政黨が生れ、山本權兵衞伯の『誠意』から海軍問題が爆發し、大隈重信伯の『高遠の理想』から解散が叩き出された。帝國議會の解散は喜ぶべきことではないが、妥協政治、苟合政治、朋黨政治で腐敗しきつた政界を刷新するには、解散に依つて政局面の展開を圖るべく、腐臭紛々たる代議士を排斥し去るより策は無いのだ。桂公は憲政擁護の氣焰の揚つた當時、既に議會を解散すべきであつた。夫れを斷行し得なかつた爲めに、內閣の瓦解したのは可かつたが、無意味な苟合內閣が出來上つて了つた。さうして展開すべき政局が一時阻止された。薩閥の埋葬と共に出來上つた內閣も要するに過渡內閣に過ぎないが、今次の解散に依つて幾分でも壽命を延べたと同時に、政界にも新運動が起りさうだ。大正政界の春光は、是れから輝くであらう。

▼けれども、今次の總選擧が、大隈伯の所謂高遠の理想通りに行はれようとは信じられない。眞に大隈伯の理想を實現し、政界の廓淸を試みようとするには。普通選擧でなければ駄目だ。唯選擧の取締を勵行するとか、辛辣に選擧違犯者を檢擧するとか、公平無私の態度を以て選擧界に臨むとか、徒らに法の末に拘泥して、選擧の眞精神を發揮し得ないやうでは、政界の面目も一新するものでない。夫れに一方では大隈黨だの、隈伯後援派だのと云つて、まるで私黨騷ぎをやつて居る。政治思想に乏しい者なら格別、比較的譯の分つた實業家や、新しい敎育を受けた青年までが雷同附和してゐる。口に政黨政治を呼びながら、目に朋黨の樹立を見んとするのは、奇怪なる現象ではないか。夫れでも大隈伯は、立憲治下の當然の事として、之を驩び迎へてるだらうか。

▼大隈伯は、『同志會は世間の氣受も惡く、且官僚黨と見做されてゐるので政友會の地盤を破壞して、黨勢を擴張するのは容易でない。如何に乃公が遊說するも、急激に膨脹することは不可能である。夫れよりは中立黨を多くするが可い。中立と云ふ灰色の者ならば、早稻田の出身者にも馳せ參ずる。改進黨以來の關係で、國民黨の地盤も人物も或度までは吸收することが出來る。若し出來得べくんば、總選擧後に乃公を中心とした政府黨を組織しよう。先づ同志會、中正會、夫れに中立黨を加ふれば、議會に過半數以上の頭數を得ることが出來るのだ』と云ふ腹で居るに相違ない。解散後尾崎行雄君や、島田三郎君等の胸にも斯様な新政黨の組織が描かれたのだが、總選擧の結果を見てからにしようでは無いかと云ふ事になつて居るらしい。して見ると、大隈黨だの、隈伯後援派だの云ふのは、此の新政黨を組織するまでの策略である。天下は既に朋黨の樹立に倦いて居るから、確固たる政策を有する政黨を作りあげて貰ひたいものだ。

▼大隈伯は執念深くない人だが、何う云ふものか非常に政友會を憎んで

ゐる。極力政友會を打破しようとしてゐる。彼れの『黨閥打破』とは、即ち政友會を打ち潰すの謂で、當初から之を叩き潰す積りで、政局の活舞臺に起つやうなものだ。で、彼れが尨大なる政友會を打破し、妥協苟合の弊を芟除し得れは、彼れが念願の大半は達せられる譯だ。元老は大隈伯の内閣を歡迎はしないが、黨閥打破は大隈伯以外には何人も出來ない仕事だから、彼れに遂行させようと、蔭では舌を出しながら、表面は手を拍つて見てるのだ。大隈伯は彼等に難局を負はされ、利用されつゝあるのだと云ふ事を知つて居ても、執念晴しをするのだから寢覺が好からう。

▼大隈伯は臨機應變の政治家で、場當りがうまい。「自個の經綸抱負や、主義政策で進むよりも、其處にぶツ突かつて何事か適當な政策を發見する人だ。日常の座談に於ても、多くの來客から受取つた話を、自分の熔爐に溶解して而して自分の意見を鑄造するのだが、政策も亦其の通りである。で、彼れの政見は常に流動的である。流動的であるから、固形としては全く存在してゐない。難局に當つても然う行き詰らないさ、渦卷を作つたり、激湍を作つたりはするが、何うにか切り拔けて流れて行く。其處に彼れの長所もあれば、短所もある。既に彼れは臨機應變で、場當りがうまいのだから、人氣取をやるを免れない。財政に於ても從來の積極方針を一變して非募債主義を採り、世の中が不景氣になつたと思ふと、やれ米價調節だ、やれ蠶糸業救濟だと、農商家の喜びさうな事をやる。議會の方では八千數百萬圓の新鐵道敷設費を要求し、地方民を釣るの好餌としたりする。政友會ほど黨利黨略に驅られては居ないが、人氣取をする點に於ては毫も劣らない。之を流動的政治家の人氣取政策と云ふのだ。

▼さうした人氣取をやるから、彼れの周圍には、實業家の澁澤榮一男や、中野武營君や、豐川良平君や、お歴々の方が集まる。而して解散前には、此の人々が飛び出して、首相の大隈伯と政友會總裁原敬君との間を往復し、何とかして解散を避けんものと仲裁の勞を取つた。尤も澁澤男や、中野君等は國家の前途を憂へたには相違ないが、大隈伯の所謂最高政治に對して、市井の紛議と思違へて仲裁とか調停とか云つて金力者の口を開くのは怪しからぬ事だ。近時如何に金力者が政治上に勢力を得て來たとは云へ、彼等が身分をも顧みず立憲治下にあつて干渉がましき態度を採るのは僭越である。妥協苟合に依つて腐敗した政治は、彼等に依りて更に腐敗堕爛するのであつた。然るに彼等の仲裁や調停に、兩者とも耳を傾けなかつたのは、政界の爲めに賀すべきであつた。實業家がそれほど政治に容喙したければ、彼等は進んで代議士になるべきだ。さうして日比谷に出て鳴いたら、蛙なれば蛙だけの功果はあらう。

▼原敬君は『政府黨でなければ、黨勢擴張は困難である。吾黨今日の尨大を致したのは妥協又は情意投合のお蔭で内閣に接近し、でない時は黨の總裁が政權を握つて居た。さうして二回までも、西園寺内閣の下で總選擧を行つたからである。何うしても早く政權に有りつかねば仕方がない。』と云ふ腹があるので、現内閣を破壞せんとしたのだが、反對に解散を食つた。解散を食はなければ、今時分は又鍋組内閣を拵へて居たから

知れぬ。で、彼れは始め二個將師で衝突するを避け、『此の問題に對しては政友會は白紙だ』とか何とか、無意見の所に妥協の餘地を存して置いて、外交問題で突撃を試みたが、一向手答がなかつた。そこで彼れは遂に好まざる二個將師で衝突を敢行し、さうして夫れを敢行する迄にも、陸軍閥の巨頭山縣有朋公や、井上馨侯などを訪問して申譯をして居た。政黨總裁の行動としては、甚だ見憎かつた。夫れに二個將師も一年だけの延期と云ふのでは、根本に於ては贊成だが今日は反對だと云ふ弱音に過ぎざるのみならず、戰後に於ける兵器の改良と將師とを混同して考へてるなどは、全く苦しい立場であつた。夫れだけ總選擧に於ても不利である。多年横暴を逞しうした結果、尠からず民心も離反してゐる。だから、彼れは是れ迄のやうに、政權を握りさへすれば可いと云ふやうな淺薄な考で、無意見無主義無定見で誤魔化さうとすれば、政友會は信を失ふ一方である。原君たるもの、今後須らく妥協の甘い夢から醒めて、政界の新氣運を促進すべく努めねばならぬ。

▼政友會の官僚化は、近年人の口の端に上つて居たが、今次の總選擧には夫れが事實として現はれさうだ、新人材とか、新智識とか稱せられる候補者の面々を見ると、曾て黨人の指彈して居た官僚が多い。曰く床次竹二郎、水野錬太郎、森正隆、犬塚勝太郎、大島久滿次……と數へ來れば、曾て次官となり、局長となり、知事となつた人々である、而して選擧委員長には高橋是清男が帷幄を擁して居るかと思へば、同委員の中には選擧には何等經驗のない山本達雄君が控へて居る。官僚候補者は内閣組織の際に須要の人物だが、常務委員長及び委員は運動費の調達に便宜だからなさうだ。斯うなつて從來の黨人は何時も陣笠で、官位に頭があがらず、金力家は金を絞る爲めに適否を問はず最高の地位を與ふることになれば、政黨は腐敗するばかりだ、大隈黨でも實業家を候補者に押立てるのは、運動費を供給しなくても可いからだと云ふが、金力に重きを置いてるやうでは、理想選擧も、選擧界の廓清も怪しいものだ。

▲聞く所に據ると、政友會は公認候補者に對しては五百圓乃至千圓の運動費を供給し、同志會でも今度は大に張り込まうと力んで居るさうだ。隈伯後援派の候補者には、當選確實な者ならば、二千圓位を補助しようと云つてるさうだが、事實はどんなものであらう。政友會は親分子分の關係で結び付いて居るだけ、黨からの供給以外に、急電を發すれば原君なり、元田肇君なり、夫れ〳〵補助をするさうだ。中には奥繁三郎君のやうに、京畿の候補者を一手に引受ける人もあるさうだ。が、今回は非政府黨だから、夫れほど運動費が滑かに出るか何うかは疑問だ。

▲農相大浦兼武子が内相となり、河野廣中君が農相に新任されたが、其の餘波が同志會に及んで、大石正巳が野狐禪式に政界退隱と云ふ事になつた。一體内相專任問題は、加藤高明男と大石君との睨合――換言すれば、舊國民系と中央系の勢力爭ひで決しなかつたのだ。國民系は大浦子の内相になるを喜ばず、加藤男は大石君の内相になるを拒んで居た。大石君は農相なれば直ぐなれるのだが、農相には曾てなつた事があり、勢力扶植の上から云つても其の椅子に兌るを不利益と思つて居た。で、内

相は愈よ大浦子ときまつたから、農相に河野君を推し、不平を抱いた儘に去つたのである。此處は一つ政見の衝突と男らしく出て貰ひたいのだが、情實の板挾となれて斃れるなどは、洵に腑甲斐のない話だ。夫れに其の退隱の『時』を得なかつたから、更にまづい。古い頭の者は、みんな斯うして亡んで行くのだ。

▲河野君の農相振は、別に目ざましからう筈はなく、株式界の空氣も靜穩であつた。大隈内閣成立の際は不景氣續きの株式界が急に活氣を呈し、諸株何れも異常の昂騰を示したが、其の裏面には伯の縁戚なる三枝守富君などが居て、景氣づけたせゐもあつた。河野君にはそんな者は、取引所の重役になつて居ないから、景氣を煽る便宜もないのであらう。併し出身地の福島縣では『始めて大臣を出した』と、非常な人氣で、黨勢擴張には頗る有利なさうだ。彼れが三度まで細君を換へて、家庭の冷えきつて居るのが瑕瑾ではあるが、『自由』に活きて來た名物男だけに、大した非難のないのは處世上の役德と云ふものだらう。

▲大浦子の内相就任後、間もなく政友系知事なる川村竹治(香川)秦豐助(德島)二君の首が飛んだ。さうして其の後釜に佐賀縣知事の若林賚藏、臺灣の警視總長龜山理平太の兩君が据えられ、東京府内務部長の石橋和君が佐賀に拔擢された。若林君は大浦系の四天王格の乾兒で、龜山君は朝鮮の警視から叩きあげた暗黒行政家、石橋君はやつと羽が伸びただけで、何れに巢食ふかは分らぬが、前内閣時代には不平滿々であつたから、今後は大浦子を親分として水盃の交換位はするだらう。内務書記官の元田敏夫君は東京府理事官に逐はれたが、前遞相を親爺としてるので呪まれた譯さ。

▲前代議士福井三郎君は政友會屈指の演說家で、其の講釋師然たる所が大向うから受けて居た。が、甲州のさる諷刺畫家から聞けば、彼れは久しい以前のこと、山名鑑劍と云つて、甲州邊まで千金丹を賣りに來たものなさうだ。當時彼れは金巾の蝙蝠傘を被つて、『本家は大阪……』などと、銅鑼聲を張り上げて步いたさうだが、夫れで聲がかれて、輕妙な洒れも云へるだらうとの事だ、一つお手前物の樂天パックで、物にしたら何うか。

新刊批評と紹介

△新譯榮華物語(中卷)　與謝野晶子著　金尾文淵堂發行

晶子女史の、前著『源氏』の方は隨分ゾンザイな節が多かつたが、此『榮華』の方はなか〳〵よく出來て居るやうだ、挿畫、裝幀は例によつて美し。(定價金一圓)

△印度哲學宗教史　高楠、木村共著　丙午出版社發行

高楠博士及び木村學士の共著にして斯學に興味ある人にとつて利益する所多かるべし。(定價金二圓)

△訂正增補國民經濟學原論(上下)　津村秀松著　寶文館發行

國民經濟學を論じて一般的通俗的なるを期せり。國民經濟學の完璧といふべく、餘りに平易を貴び、讀者の了解を完かしめんとて稍くだ〳〵しきの煩さへある位にて、恐く何人の積過をも妨げさるべく、特に經

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

早稻田大學講師 金子筑水序

稻毛詛風著

オイケンの哲學

袖珍上製 金七十錢 郵稅八錢

改訂增補 縮刷八版

哲學雜誌評 して曰く本書はオイケン哲學の努力と方向と主張とを極めて鮮爲に力強く叙述せる快著なりオイケンを研究せんとする者は先づかういふ著述を讀みて然る後根本著作の研究に取りかゝる可きだと思ふと。

■現代思想界の權威■

●東京第一高等師範學校教授 三並良先生譯

オイケン人生の意義と價値

オイケン最近肖像入

再版 ▲菊判上製美本全壹册 正價金壹圓五拾錢 郵稅金十二錢▼

蓋世界觀は倒れたりと雖も新世界觀は未た確立せす思想界は紛亂し人間はその歸趣に迷はんとす是れ實に現代の煩悶にして精神界一切の病源なりオイケン博士が其の獨特の見地より此の大問題の解決を試みたるものな本書とす由來博士の所説は難解なりとの評ありと雖も本書の如きは決して然らず譯筆又平明流暢なりオイケン哲學の眞髓を知り人生問題を解かんとする者は之れを繙かざるを得ず

文學博士波多野精一序 文學士内ケ崎作三郎序 野村隈畔新著

ベルグソンと現代思潮

ベルグソン肖像入

三版 菊判最上製美本 全壹册 正價金壹圓參拾五錢 郵稅金八錢

本書は專らベルグソンの思想を中心として現代の哲學及生活の梗概を述べたものであるだけに獨りベルグソン哲學の特色と價値とを學び得るのみならず廣く哲學的思想を解する上にに於ても亦尠なからざる價値がある我々は此書を廣く江湖に薦めることに躊躇しない。……新人評……

東京市神田區表神保町七 大同館發行 振替貯金口座東京八七二二番

好評嘖々

東京高等師範學校教授 文學士 西澤富則著

歐洲文藝界の逸話

壹圓貳拾錢 郵稅金八錢

東京朝日新聞評 本書は歐洲文豪の側面觀とも云ふべきものにして文章は平易に且つ趣味と教訓に富める好逸話多く一讀興趣を感ずること少なしとせず。 日本及日本人評 （上略）讀みて趣味を得ると共に人格の修養に資すべき記事多く文藝愛好家に推薦すべき佳書である云々——

現代哲學

早稻田大學教授
ドクトル、デル、フィロソフィー
金子馬治譯

ニイチエ 悲劇の出生・善惡の彼岸

春皮上製全一冊
正價金貳圓廿錢
三千部限り特價
金壹圓八十錢
郵稅金十二錢

新刊―第三編

ニイチエ思想理解の秘鍵!!

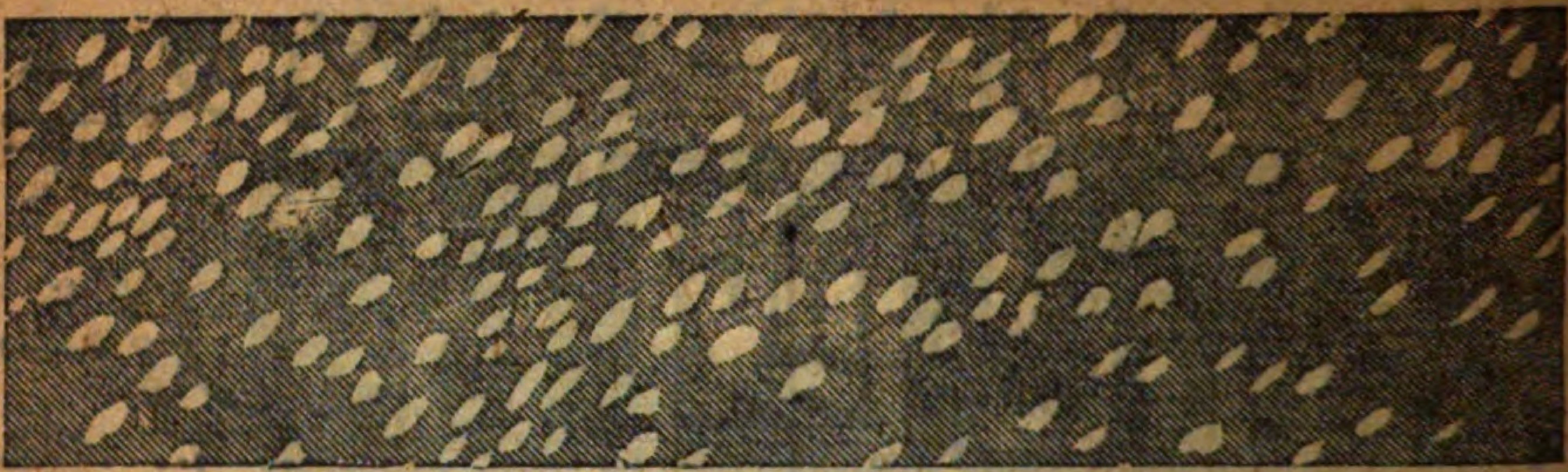
世界的思想家フリードリヒ、ニイチエの誤解せられたるや久し。彼は果してトライチユケやベルンハルデイの徒と共に狹隘なる國家論者、若くは主戰論者なりしか。ニイチエと斯く解する者は未だ彼が超世界的大思想を解せざる者也。今日まで徒にニイチエの名のみ傳へられて眞精神の理解せられざりしは主として適當なる譯書を缺きしが爲也。本書は彼が根本思想の理解の爲には最便宜にして且つ最著名なる二著を忠實に譯出せる者、深刻なる思想精神を練磨するの急、愈切なる今日、讀者は本書に因りて親しく偉大なる思想家の根本精神を會得すべき也。

現代哲學第壹編
創造的進化
ベルグソン原著 金子馬治、桂井當之助共譯（再版）
正價二圓廿錢
特價一圓八十錢
郵稅十二錢

現代哲學第二編
藝術之起源
ヒルン原著 本間久雄譯
正價壹圓八十錢
特價一圓五十錢
郵稅十二錢

東京牛込早稻田

（中付三の二）



「雪の夜」の卷

小杉天外作

彼は自己の境遇を了解して居た、戀人の邸前をば、面を裹んで驅けて通らねばならぬ關係をも心得て居た。彼は最後の手段を執つた、名を僞り姿を變へて、戀人の眼前に現はれた。斯くして彼は其の戀を斷念せんとしたのである、此の世の思出にせんとしたのである。然るに其の結果は反對であつた、火は油を注いで更に燃えた、彼は一切の思念、一切の慾望を投棄し斷離して、將に戀の惡鬼と化せんとしつゝある。雪の降る夜半、いたましき達夫のふるまひよ！

右は『婦人世界』に連載して大喝采を博しつゝある小杉天外の長篇小說『銀笛』の雪の夜の卷の悲劇なり

婦人世界

定價一冊十五錢半年七冊一圓五錢
郵稅一錢五厘一年十四冊二圓五錢

發行所　東京市京橋區南紺屋町　**實業之日本社**　振替口座三二六番



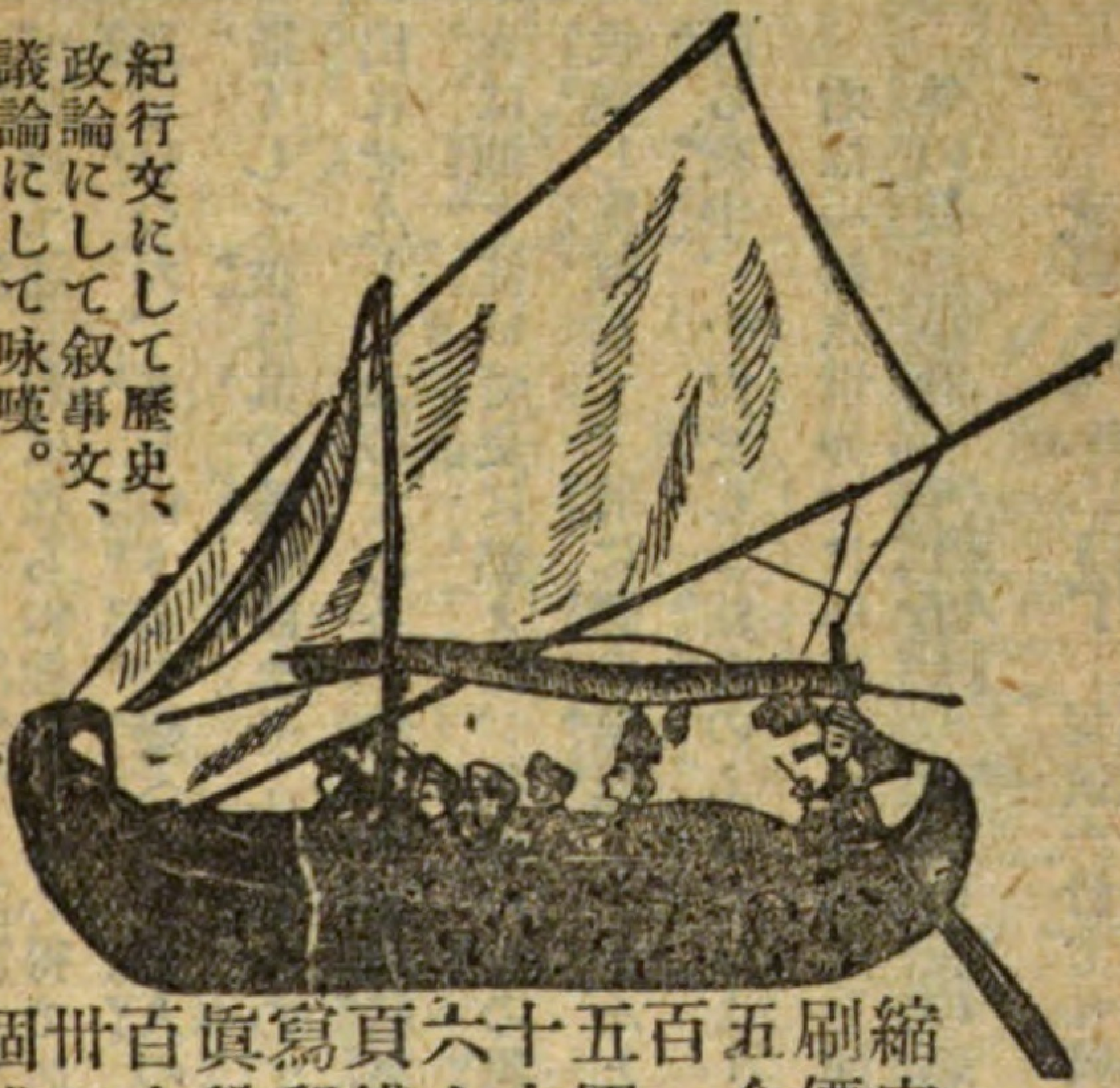
三叉竹越與三郎先生の名著

南國記

一世の思想を變じて南方に向はしめたる大著述

紀行文にして歷史、政論にして叙事文、議論にして詠嘆。文學上の大產物！

今や增補縮刷して出づ、極樂島の彩色寫眞を始め珍奇なる寫眞多數を增加し恰も南洋のパノラマに入りたるが如し。加ふるに帝國艦隊が占領せるヤルート島を始め太平洋の各島嶼を餘さず網羅したり。



縮刷五百五十六頁寫眞百卅個
定價金一圓六十錢郵稅十二錢

●三千部限り特價金一圓廿五錢

三叉書翰

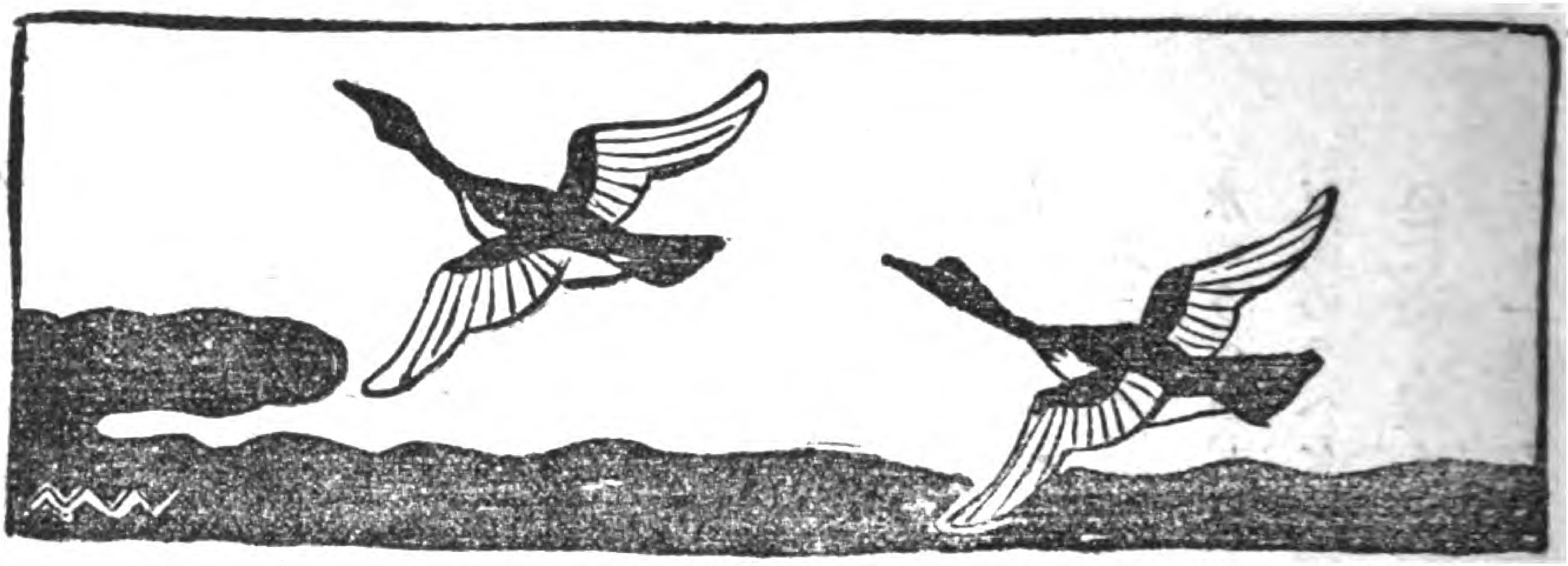
江湖より三叉書翰を求めらるゝもの頻りなるより玆に此書を再刊するに當り附錄に續三叉書翰を添へたり。

三叉先生の書翰文今や靈妙の極致に達す。その文の爲に思想を作らず思想のために文を作らず、所用に應じて書かれたる自然の妙味、恰も雲の無心にして岫を出づるが如し。而も寓意に富み、警句に富み、感慨に富み、同情に富み、有益にして趣味多し。文質彬彬とは眞に本書の如きを言ふなり。

▲定價金六拾五錢●郵稅八錢▼

發行所 東京牛込揚方町 振替四七一〇番 二酉社

（中付三の四）



蕩兒

長田幹彦

露氣をふくんだ大空には、その時十三日ばかりの大月が磨ぎ澄ました刄金のやうに照り輝いてゐた。人通りの途絶えた街路には物音もたてぬ秋の夜風がひそひそと吹きみちて、濃い黒影を地に印した家並の陰を時折煙のやうな塵柱があてもなく彼方此方へ蠢いてゆく。二筋に長く列つた軒燈の光も今は冷たく影薄れて、しんと更けた靜けさの底からは何處かの店裏で十二時を打つ時計の音がしみ入るやうにひつそりと響いてきた。

　松之助は棒のやうになつた脚を引摺りながら自分の影とたつた二人でその街路をとぼ〳〵と歩いて來た。この三日間といふもの久振りで酒と女の巷に耽湎し續けてゐたので、頭はどん底から痲痺してしまつたやうに輕い。醉ひざめの割りにははつきりした氣持ちなので、自分では確かな歩調(あしどり)で大地を踏んでゐる心算でゐ

ながら運ぶ足は一歩一歩まるで宙に浮いてゐるやうだつた。ともすると空すきつ腹は底の方からしくしく痛みだして、それでゐながら酒臭い噯びが出てくる度に胃のなかで饐えてゐる液體が今にもぐつと突き上げて來さうにむかむかと嘔氣むつけが催してくる。

濱町の通を行き盡くしてやつとのことで川口橋まで來かゝると、彼はもうとても我慢がしきれなくなつて、いきなり露に濡れた橋の欄干へ縋り寄りながらそのうへゝ胸を壓しつけるやうに體を凭せかけた。と、一緒に頭が急にくらくらつとして今まで抑へに抑へてゐた胸苦しさが一時に込上げてきたかと思ふと、彼は多愛もなくがくりと首を折つて、その儘滿々と湛えた滿潮の河面へ苦い液體をしたゝか吐き落とした。一度もどすとまた次々と胸の吃逆がはげしくなつて、到頭しまひには氣持ちははつきりとしてゐながら、げえげえ喉を鳴らす度に今にも心臓の鼓動がとまるかと思はれるやうな苦悶が頭の頂邊てつぺんから足の爪先まで襲ひかゝつてきた。十分間もさうやつてゐるうちに體はぐつたりと心から疲れ果てゝ、いくら身を悶えても胸を絞つてももうその時には胃からは何も出て來ないやうになつた。唯自分の喉から出るとは思はれないやうな凄じい呻聲だけが靜まり返つた橋下の薄闇がりへ谺して行つた。

ふと顔を擡げると眼の前には四つ行逢つた河筋の眞向ふに大川の河面がひろびろと展がつてみえる。水のうへ五尺ばかりの處には層をなした河霧がぼんやり浮んで、斜に射しかゝる月光は油の如くに澱んだ河のうへを一帶にぼうつと明るませてゐる。地獄の坩堝のやうにそゝり立つセメント會社の煙突も灰色に淡く霞んで、夢みるやうな對岸の小さな灯影も、中洲から箱崎河岸へかけてちろちろと瞬く窓々の灯も一様にその河面へゆらりゆらりと蕩めいて、櫓聲や汽笛のかしましい晝の賑はしさに引換へ、無言

の冷たい夜があらゆる物の陰に深沈と浸潤し盡してゐるのである。

松之助は、始終見馴れてゐながら今夜に限つて何處となく樣子の變つてみえる四邊の光景を見渡してゐるうちに、何とも知れぬ冷たい戰慄が脊筋からぶるぶると細かく湧きあがつて來るのを覺えた。過ぎ去つた三日間の狼籍な記憶がその時卒然と心に歸つて來て、今やつと初めて惡夢から覺醒したやうな氣になつた。

「あゝ俺はこの三日の間何をして暮らしてゐたのだらう。」さう心の中で呟くと、彼は忽ち眼の前を黑い面紗で押包まれたやうな恐怖を覺えて、更に强い戰慄に襲はれずにはゐられなかつた。…

彼は一昨々日の夕方丁度四箇月振りで日本橋の仲通りにある生みの親の店へ尋ねていつたのであつた。親の家は仲通りでも二流と下らぬ山形屋といふ骨董店で、彼は長男で、しかも三人きりしかない兄妹のなかのたつた獨り息子だつた。我がまゝ一杯に育てられた身の報ゐで、中學校を卒業するとすぐから習ひ覺えた惡遊びが到頭骨まで食ひ入つて、彼はこの三四年の間、箸にも棒にもかゝらぬほど放蕩をした。根が富裕な家なので、初めのうちはいろいろに企んで面白いやうに金も廻はした。さういふ時にはきまつて惡い取卷きがつくもので、カツフエまわりや、球突場まわりをして歩くやうな若者が彼の周圍には幾人となく附き纒つてゐた。今でこそ唾も吐きかけないが、通二丁目の紙屋の息子、請負師の息子、それにまた碌なものも書けぬ癖に文士顏をしてゐるやうな吳服屋の息子などもみんなその頃は彼の無二の親友だつた。さういふ手眤が今日は葭町、明日は柳ばしと散々に彼を引廻はして、それでなくて

さへ益々募らうとしてゐる彼の遊惰な心を一層深みへ追ひ落とした。

そのうちに道樂の段々は兩親にも知れ渡る、鐚一文彼の自由にはならなくなる、日々の行動も兩親の嚴しい監視の下に置かれるやうになると、取卷きの連中は又彼をそゝのかしてさまざまの惡事を敎へた。店のものは片つ端から持ち出させる。番頭や小僧の懷はいびり倒す。しまひには父親の實印を盜み出させて高歩の金まで借りさせるやうなことになつたので、さすがの兩親も持て餘して、山の手で堅い酒屋をしてゐる親類先へ預けたり、押込め同樣に家へ監禁してみたりした揚句、到頭ほんとに愛想を盡かして今年の夏のさなかに愈々勘當を喰はせてしまつたのであつた。父親は全く絕望して世間體ばかりではなく、癈嫡の手續をしたうへ七生までの勘當をすると云つていきりたつたのを、母親は淚ながらにやつと思ひ止まらせ、ひよつとして生れ落ちからの浮浪の徒の仲間入りでもしてはといふ懸念から二十圓づゝの宛がひ扶持だけは月々呉れることにして、到頭生みの家を追ひ出されてしまつたのであつた。

松之助も勘當と聞いてはさすがに手も足も出なかつたが、自分をちやほや持てなして呉れる女達や友達のあることを思ふとそれでも幾らか氣が强くなつて、却つて兩親達の前で、

「勝手にしなくつてさ。僕だつてもう一人前の男だ。いつまでもお父さんの脛を嚙つてゐるもんか。外國へでも飛んでいつて、豪い人間になつて歸つて來るから、その時になつて見損つたのを悔んで貰ひ度くないもんだ。」

などゝ不貞腐れな毒口を叩いて、母親や、妹達の淚を後に見捨てゝぷいと家を飛び出してしまつた。

初めのうちはその頃深間になつてゐた小いくと云ふ葭町の妓の家へ轉げ込んで何不自由のない幾日か

を送つてゐたが、そのうちにいつかその妓とも面白くなくなつて、彼は葭町の土地にふつりと足を絶つてしまつた。譬へ自前の妓であつても心底から松之助に惚れてはゐなかつたものと見えて、別れ際などは實に綺麗なものだつた。殆んど着のみ着のまゝの風で、幾らも入つてゐない小さな財布を懐手をした掌のなかへ固く握りしめながら華やかな色町を追はれてゆく時にはさすがの松之助も腹立たしいやうな情ないやうな果敢ない心持ちにならずにはゐられなかつた。

それからは頼りない流浪の日が續いた。友達の家や、少しでも引懸りのあるやうな家を方々と泊り歩いて、或晩なぞは淺草の奥にある勞働者相手の木賃宿へ泊つたりした。薄情なのはこの世間のならひで、そのうちにはかうなり果てた松之助の身の上に同情を寄せるものも漸次と減つて、たとへ訪ねていつても友達たちは向ふから遁げ隠れをする、或ものなぞは自業自得だなぞと云つて彼を眼の前に引据ゑて腹立たしげに面罵するやうなものも出來てきた。松之助はその時になつて漸う苦い涙と悔ゐとを知つた。

長年店へ勤めてゐた銀次といふ番頭の世話で、箱崎町の裏露路の中にある年老つた賣卜者の家の二階を借りて移つたのはつい十日ばかり前のことであつた。最後に訪ねられたその銀次は人形町のさる小間物屋に勤めてゐて、自分の身のまわりにも事を缺くやうな身分ではあつたが、もう袷羽織の欲しい今の寒空に、浴衣の上へ襟垢の光つた棒縞の單衣をたつた一枚かさねて、髮も鬚も穢ろしく延びた青い顔をしながら、松之助がふらりと訪ねて來た姿を見た時にはさすがにしみじみ可哀さうになつて、いくら道樂の果とは云ひながら仲通で十間々口を踏まへた山形屋の若旦那がと思ふと律氣な彼はどうしてもひと肌ぬがずにはゐられなかつた。朋輩や主人から少しづゝ金を融通して貰つて早速近間にその穢らしい

安貸間を探し、ひとまづそこへ松之助を落着かせて、先方では賄ひはして呉れぬと云ふので取敢へず自炊の出來るやうに小さな七輪や土釜や瀬戸ひきの小鍋などを間に合はせにとゝのへてやつた。そして自分の外出着にしてゐたまがひ結城の袷や、綿入り獨鈷の角帶のやうなものまで持つて來て、脂汗の匂ひのしみ込んだ單衣をぬぎかへさせたのであつた。

松之助はその親切が嬉れしくて、生れて初めて人の情といふものを心の底の底まで味はつたやうな氣がした。それでもまだ矢張り育ちがさせる我儘が殘つてゐて、心で思ふ十分の一も口へ出しては禮が云へないのであつた。

銀次は寸の合はぬ自分の着物を著て、黄紙張りの破壁の前へ薄寒さうにつくねんと坐つた松之助の格好をみると、急に涙ぐんだやうな眼つきになつて、

「ねえ若旦那。それでやつとお眼が覺めましたらう。私がまだお店へ御厄介にゐた時分には、あなたはよく夜よなかに自働車かなんかで歸つていらしちつや小僧達の戶の開けやうが遲いと突如打つたり叩いたりなすつたもんです。私なんぞゃ幾度あなたの拳固を頂いたか知れやしません。今こんなことにおなりなさるのも全くあの時分の報ゐなんです。旦那は氣丈な方ですから兎に角、お內儀さんがこんなりをして被居るあなたを御覽なすつたら何と云つてお泣きなさるでせう。あのお優しいお心を察しますと、私ゃ自分ながら涙が零れて來ます。……私もお店の方のお暇を頂いてからは自分の事にばかりかまけて居りまして、つい一二度しきゃお伺ひもしませんのですから、今更らお內儀さんにお眼にかゝつてあなたのお詫びをするやうな事も一寸出來兼ねますが、まあ併しそのうちに何うにかなりませうから、どう

かもう暫らく御辛抱なすつて、あなたも笑つてお店へお歸りになれる、私もせめて自分の顏が立つといふやうなことになすつて下さいまし。御辛抱さへ續けばなにも旦那だつてさういつまであなたを御勘當なすつてお置きにもなりますまいから。……」

と、鼻聲になつて途絶れとぎれに云つた。

松之助は人の情に縋らなければもうどうしても生きて行けない今の境涯を思ふと、思はずぽろぽろと涙を零した。そして若し店の近處へでも行つた折には一寸寄つて、今月分の仕送りの二十圓を貰つて來てくれと云つて、强ゐて銀次の手前だけでも取繕はうとしたのであつた。

一昨々日の夕方になつて松之助は突然店からの使者を受けた。丁度その時彼は風呂へ行つてゐたので、使ひのものには逢はなかつたが、それが置きのこして行つた一封の書面をみると、彼は薄々豫期してゐた時節が到來したのを覺つて、まだ封も切らぬ先から雀躍りして喜んだ。それは妹のお君からの書面で、別れてから後のことが二尋ほどもこまごまと書きしるしてあつたが、要するに母が一度逢つてよく存念を聞き糺し度いと云ふからこの書面を見次第に店へ來て吳れと云ふのであつた。松之助はたどたどしい文言を辿つてゆくうちに、年頃になつた可愛いゝ妹の橫顏や、色の蒼い苦勞性な母親の顏などがくつきりと眼に映つて來て、もうそろそろ薄暗くなりかゝつた穢ろしい部屋のなかで思はず淚にくれながら嗚咽にむせんだのであつた。

日がとつぷりと暮れると彼は思ひ切つて仕度をして家を出た。燈影のかゞやかしい水天宮前から電車通を歩いて茅場町へ出たか、漸次と親の家の方へ近づいてゆくに從つて彼の胸は異樣にふるへてきた。

勘當されてから三度ほどこつそり店の前を通つてみたことはあるが、いざ通ひ馴れたあの母家の裏硯戸をくゞるのかと思ふと彼はさすがに氣臆れがしない譯にはいかなかつた。で到頭腹を据ゑて裏通にある軒のひくい一軒の蕎麥屋へ飛び込んで、餘分な金の使へない懐なので冷たいもりを肴につんと鼻へ來るやうな酒を二本だけ呷つた。

貧しい酒に勢をつけられて絶えて久しい我家の前へ立つた頃には、もう四邊はすつかり夜になつて老舗の多いそこら町は妙にしんと靜まりかへつてゐた。山形屋勝手口と書いた軒燈はなつかしい光を灰汁で洗ひ込んだ硯戸の外面にほのめかしてゐたが、彼は長い間躊躇した末、やつとその把手へ指を入れて恐るをそるその戶を開けた。なかは小暗い石舗道になつてゐて、片側は店の方の臺所口、片側は土藏で、その突當りが籠燈籠のほんのり點つた裏玄關の小格子になつてゐた。足音をひそめてこつそりその小格子の前まで歩いてゆくと、その時突然上框の障子がすうつと開いて、なかゝらは妹のお君が白い顔を半分だして、恥かしさうな嬉しさうな慄へ聲で、

「兄いさん？」と、呟いた。

松之助はそれを聞くとかつとして、我れにもなく態と横柄に構へながらつかつか上框へあがつた。

「あら、兄いさん。そつちぢやなくつてよ。母樣は二階にゐらつしやるのよ。」お君は自分には構はずその儘奥の方へ入つて行かうとする彼の袂を後から摑んで、そつと階段の方へ引いていつた。

松之助は四箇月振に上りなれた我家の階段をあがりながら胸がわくわくして思はず足を踏み滑らせやうとした。

「まあ、危い。」お君ははつとしたやうに口のなかで叫んで、柔い胸で兄の肩を後から支へるやうにした。松之助の眼にはその突差云ひ甲斐もない涙が滲んで來た。

二階の八疊は勘當されない前は松之助の居間になつてゐたので、絨氈をしいた間内には机も本棚もその他さまざまな裝飾品のやうなものまで昔のまゝに置いてあつた。天井には自分の好みで取りつけた電燈の絹笠が昔ながらの贅澤な薄桃色の光を透かして、その下に据ゑた桐胴の火鉢の周圍には誰れと誰が坐るのか三枚の絹座布團が人待ち顏に敷かれてあつた。

松之助は明るい光のなかで妹と顏を見合はせるのが恥かしさに態と顏を背けながらそのひとつへそつと坐つた。そして箱崎町の佗び住居や、今迄方々と流浪して歩いてゐた間の宿りとは似てもつかぬなつかしい間内のさまをそれとなく偸みゝながら今更のやうに生唾を呑んでゐると、妹もさすがに氣臆れがしたと見えて、正面をきつて挨拶をしやうともせず、いつともなくこつそり階下へ降りて行つてしまつた。

暫らくすると又足音が聞えて來て、やがて伯父に當る氣むづかしやの老人と母親とが前後して入つて來た。そして對向ひに坐へつくとちよつと挨拶を交はしたゞけで、三人の間には少時の間異樣な沈默が流れた。松之助は顏を伏せたきりぶるぶる慄へる唇をじつと噛みしめてゐた。

伯父はしばらくすると腰から自慢の珊瑚珠の根付けのついた煙草入をとつて、煙管さしの鞘をぽんと引き拔きながらはじめて口をきつた。

「どうぢや、松。お前も大分長らく家を出てゐるが、今度こそちつとは眼がさめたらうな。それとも矢張りさうしてぐれぐれしてゐる方が面白いか。」その壓しつけるやうな聲は或る反感をもつて松之助の胸

に強く響いた。
松之助は身動きもしずに默つてゐた。
伯父は煙管に火をつけながら、
「どうぢや、さうして家を出てみたら世間といふものが少しは分つたらう。親の家へ厄介になつてゐた時分と違つて、その日の飯もろくに食へんやうな今のざまでは餘り面白いこともあるまい。」
松之助は上手を越すやうなその言葉を聞くと、持ちまへの不貞腐れな氣がむらむらと湧いてきて、一度はじつと押し耐えてみたが、頭の薄禿げのした皮肉らしい伯父の顔がちらりと眼に映ると到頭我慢がしきれなくなつて、
「いや、面白くないことゝありません。家にゐて窮屈な思ひをするよりも、かうしてたつたひとりでやつてゐると體が自由で却つて面白いこともあります。」と、つい心にもないことを我れにもなく口走つてしまつた。
伯父は煙を吐きながらきつと松之助の顔を見据ゑたが、その眸光(まなざし)は異様に輝いてゐた。それでも態と薄笑ひをみせるやうに唇を斜にひきゆがめて、
「お前は酒を飲んでゐるんだな。ふむ、勘當されてゐながら酒の飲めるやうな度胸ならさぞ面白いことも多からう。」と、彼は針を含んだ鋭い調子で云つた。
三人はそれつきり又飽氣なく口を噤んでしまつたが、松之助には伯父の言葉よりも何よりも母の眸光が一番辛かつた。彼は低く首垂れてゐながら、壺のやうに落ち凹んだその母の瞳が涙に濡れ輝きながら

きつと自分の上に注がれてゐるのを痛いほど明らかに感じてゐた。そしてその注視は皮膚を透し、骨を徹し、心の奥底までもぢりぢりと疼くやうに滲み徹つてゆくのであつた。

伯父はしばらくするとやけに煙管をはたきながら靜かな聲で、

「實は今日お前を呼んだのは別のことでもない。今朝銀次がやつて來ての話に、お前も此頃では大分性根も入換つたやうだから、どうか旦那のお取做しで又もとのやうに家へ入れるやうにして呉れとたつて云ふもんだから、私もついその氣になつて、一應お前に逢つたうへその相談もしてみやうと思つて實はわざ〳〵呼んだんだ。お前とてもいつまでそんな苦しい思ひをしてゐたくはなからうし、それにお父さんもお母さんもお前の事ぢや隨分心配もしてゐられるのだから、此際私が仲へ入つてもしうまく事が纒まるやうならまことに結構だと思つてその腹もきめてみたが、しかし私は、今のお前の樣子を見てもうすつかり愛想が盡きてしまつた。勘當された親の家へ久振りで歸つて來てゐながらお父さんは如何ですとひと言訊くぢやなし、私達にまでつけつけ亂暴な口をきくばかりか酒をひつかけて來るなぞは呆れて物が云へん。そんな性根ぢやもうとても行末見込はないに極つてゐる。見込みのないものに骨を折る必要はない。なまじ私が仲へ入つてみた時に却つて山形屋の看板へ泥を塗るやうなことを仕出來すに極つてゐるんだから、私はもうこれつきりふつつりと手を引きます。……」

その時、母親は傍から何か云はうとしてひと膝のり出したが、伯父は「もう諦めなさい。」と云ふやうに眼顏でそれを制しながら、又煙管に火をつけて、

「それにお前とてもそんなに外にゐるのが面白けりやもう今更ら家へ入れて貰ふ必要もあるまい。泥水

に染んだものは一生泥水のなかで終るがいゝさ。親もなけりや家もないと思へばどんな事だつて出來る。……」

松之助はそこまで聞くと耳ががあんとして體ぢうの血が一時に頭へのぼるやうな氣がした。

「えゝ、さうですとも。私にやもう親もない。家もない。もう野倒死をしたつて一生家へなんか歸つて來やしません。私もゝう何も伺ふことはありませんから此れで御免蒙ります。」と、泣き聲で云ひ放つと彼は自分でも耐らなくなつていきなり氣狂ひのやうにふらふらと起ち上つた。そして呆氣にとられた伯父や母親の方へぎろりとひとめ流眸をくれて、その儘ばたばたと階段を驅け降りてしまつた。

上框の處で下駄を突懸けやうとしてゐると二階の方からは、

「松之助、松之助。」と呼ぶ母親の鋭い聲が聞えて、細めに開いた正面の紙襖の隙間からは二人の妹が怯えたやうな眼だけ出して此方を見てゐる。松之助はたゞ夢中で土藏の前を驅けぬけて一散に表通へ飛び出してしまつた。

それから何處をどう歩いたか自分でもまるつきり覺えてゐない。やつと心が靜まつて、物事がはつきり考へられるやうになつた頃には、彼はもう小網河岸の暗い通から蠣殼町の方へ向つて歩いてゐた。大波のやうな興奮が消えてしまうと跡には燃え崩れた灰のやうな果敢ない心持ちが殘つて、母親の眸光を思ひ出したゞけでも彼の頰には熱い涙があとからあとから留めどもなく流れて來た。自分の不孝な振舞ひは兎に角、些細な言葉の行違ひから、折角家へ歸れる大事な機會を逸してしまつたことや、年老つた

つた。

水天宮の角まで來懸かると、彼は人込みのなかゝら、突然「若旦那、若旦那。」と呼ぶ聲を聞いた。

驚いて振顧へると、それは鳥打帽を眼深かにかぶつた銀次だつた。商ひ歸りと見えて荷を入れた大きな風呂敷包みを脊負つてゐる。

「若旦那。今日はお宅から何かいゝお便りが參りましたらう。今お歸りですか？」と、にやにや嬉れしさうに笑ひながら云ひかけた。

松之助は態と眞顏になつて、

「いゝ便りつて何だい、金でも來たのかい？」と、しらじらしい聲であべこべに聞き返した。

「いゝえ、そんなことよりまだぐつとお目出度い話なんです。今日お店からお迎ひが來やしませんでしたか？」

「いゝえ。何故さ。」松之助はこんな律氣な親切な男に嘘をついては濟まないと思ひながらも、その場合どうしても今夜のいちまきを話すに忍びなかつたので、到頭心にもないことを云つてしまつた。

銀次は怪訝な顏をしてじつと松之助の方を見てゐたが、

「可笑しう御坐んすな、ぢや何かお差支へでも出來て明日にお延ばしになつたのかしら。いや、實はね。」と、彼はその儘松之助の方へ寄り添つて耳打ちでもするやうに、「私、今朝ちよつと通四丁目まで參りましたもんですからその序にお店へ寄つて、お內儀さんにお眼にかゝりまして、此間からのいちまきをす

つかりお話し申しあげたんで御坐んすよ。と、お内儀さんも大層お喜びになりましてね、さうなつたのも皆お前のおかげだなんて私まで大變な頂戴物をしちまいましてね、今夜早速あなたを家へ呼ぶからつてえ仰せでしたから、私も實は朝つから大喜びでゐたんで御坐んす。今お得意まわりをして歸りに一寸箱崎町へ寄つてみましたらあなたは夕方からお出懸けだと云ふんで御坐んせう、こりやてつきりお宅へお出でなすつたに相違ないと思ひまして、實は又今晩遲くにでももう一度伺つて見やうかと思つてゐたところなんで御坐います。」

「さうかい。そりやまあいろいろ骨を折つて呉れて有難う。」松之助はちよつと頭をさげて、「そんなことなら明日にでも何んとか云つて來るかも知れないが、しかし……私は家からの使ひよりも今夜は金の方が欲しいんだ。少しばかりないと全く困るんだからねえ。」何のあてもなく唯心に浮んだまゝを彼は嘆息のやうに口へ出して呟いた。

銀次はそれを聞くと俄かに思ひついたやうに、

「あゝ、さう、さう。私や嬉しさに取紛れてすつかり忘れて居りました。今朝お内儀さんからお手當を預りして來ましたんですが、あれを差上げなけりやならなかつた。」

「えッ手當?」松之助は何んだか銀次の言葉かひどく意外に聞えたので、前後の考へもなく大きな聲を出してしまつた。

「あの、それ間代の前金や、貸布團の前拂ひやら私の手にお へねえものは皆後へ廻してありますので、それを申上げて、實はお金を頂いて參りましたんです。若し何んなら店に置いて御坐んすから一寸お立

寄りを。」

松之助は云はれるまゝにそれから銀次の店へ寄つて一封の紙包みを受取つた。そのあとで明日を約して彼は又たつた一人になつた。水天宮の角まで歸つて來ると、彼は道の小陰に立止つて、懷のなかでそつとその紙包みを開けてみた。なかには忘れもしない母親の手蹟で「銀次どの、山形屋内」と書いてあつて、觸つたら切れさうな五圓紙幣が六枚入つてゐた。松之助はそれを見ると急に眼を輝やかして、この四箇月の間碌に觸つたこともない滑らかな紙幣の手觸りをいつまでもいつまでも味はつてゐた。

金を見ると急に氣が變つて、久しぶりに旨い飯でも食はうと思つてつい葭町の細路次のなかにある鳥屋の暖簾をくゞつたのが過ちで、彼は酒の醉ひと抑へされぬ自暴自棄が手傳つてその晩到頭もとの色女の小いくに逢ふやうなことになつてしまつた。女のまへで彼は口ではもう勘當がゆりたやうなことを云ひ續けてゐながら、泥醉した彼の頰には始終涙が流れてゐた。

「醉つてもお母さんの管を巻くぃらゐになりやあなたも立派な山形屋の若旦那だわ。ほんとに賴もしいわねえ。」と云つた小いくはそれで薄情のしかへしをされたやうなものだつた。

その晩は小いくの顏で昔馴染みの待合へいつて、大盡をきめてゐた時分の女の移香を身にしめながらぐつすり寐た。その翌日も一日そこで飮み明かして、夜遲くなつてから

「又燒木杭だわねえ。」などゝ甘え寄る女の言葉を醉つた耳に聞き捨てゝ、やつと車でその家を出た。待合の勘定は女に引受けさせたものゝ、何やかやの拂ひが嵩んで、その時には三十圓の金がもう半分も殘つてはゐなかつた。

その晩到底それから箱崎町の陋屋へ歸る氣にはなれなくて、彼は昔豪奢な遊びをしてゐた時分の夢に浸りながら吉原へ送られて行つた。自働車の警笛や、妓達の笑ひ聲や絃歌のざわめきを聞くにつけても幻影は心のなかで美しく凝つて、仲之町を歩いてゆく時には銀次から借りたまがひ結城の袷が昔着馴れたお召の襲ねのやうにしつとりと肌に吸ひつくやうにさへ覺えたのであつた。

その晩、彼は格子先へ來て悲しげな鐘を叩きながら和讃を誦する娘巡禮の聲や、流しの三味線に徒らな涙を誘はれながらとある穢ろしい河岸店の二階に寐た。白粉の斑らにはげた安女郎の寐顏をみても、そこから二里と距たらぬ處に、自分の不孝を案じ煩ひながらこのひと夜をまんじりともせずに泣きあかしてゐる母親のあることばかりが思ひ出されて、どうしても眠らうと云ふ氣にはなれなかつた。

その翌日の今日はもう全くの自暴自棄で、朝から方々の飲み屋をのみ歩いた揚句、最後の一錢がなくなつた今やつと寐どころを求めて詮方なしに箱崎町の宿をさしてさまよひ歸つて來たのであつた。……

殆んど一時間ばかりも寒い風の吹きあげる橋の欄干へ突俯してゐるうちに胸苦しさもだんだんと癒つて來たので、彼は又そろそろ月影を踏んで歩きだした。紅い交番の灯だけが見える土州橋を渡つて、三丁目の角を左へ折れると彼の借りてゐる賣卜者の家はそこから二筋目の細露路のなかにあつた。片側は棟割りになつた穢らしい二階長家だつたが、それでも他の片側には粋なつくりの仕舞た家などもまじつてゐて、彼の家はさうした家と家との庇間のやうになつた處にあつた。四邊は深い眠りに包まれてゐて、溝板や板羽目に射す月の光だけが眞晝をあざむくやうに明るく、すぐ眞向ふの家では赤兒の夜泣きする

聲がきれぎれに洩れ聞えてゐた。

　彼は人を憚るやうにこつそりわが宿の戸口へ忍び寄つた。そしてはぎ板をした雨戸を二度ほどことことと叩いたが、眼敏い老人夫婦なので、なかではすぐさま人の起き上る氣勢がして、やがて上端の障子を開ける音がしたかと思ふと婆さんの聲が

「誰方ですい？　誰方ですい？」と、二聲ばかりひつそりと聞えた。常々から喘息の持病をもつてゐるので、その聲は咳がからむやうにひどくしや嗄れてゐた。

「私です、松です。」松之助は哀願するやうに答へたが、それと一緒になかでは樞を落す音が聞えてがたがた軋む雨戸がそのまゝずつと開いた。

　松之助がぬうつと入つてゆくのをみると縞目も分らなくなつたやうな布子の寐衣をきた婆さんは呆れたやうにその顏をみまもつて、

「まあ、あんた、何處へ行つてゐたゞねえ。一昨日から毎日二度づゝも銀さんがみえるだけんど、いつもお留守で、もうえらく心配してゞしたが、ほんとにまあ呑氣な、……」と、四邊をもぞくさしながら後向きになつて、「ほんとに何處へ行つてゐなすつたゞね？」

「いや、一寸急用があつて、その、横濱の方へ行つてたもんですから。」松之助はどぎまぎしながら答へた。

「それならそれで一寸葉書でもお呉んなさりやえゝのに、何の音沙汰もしずにぷいと出ておいでなすつてその儘歸つて來なさらねえもんで、家の爺さんまでがえらく心配してましたゞ。」

「どうも濟みせまん。」松之助はさう云ひ捨てゝその儘爺さんが商賣に出る時の疊み臺や、提灯などの上げてある棚の傍から鼻のつかへさうな階段をぎしぎしのぼつて行つた。

「もう火種もありませんから、お湯が入るやうだつたら階下の鐵瓶のを使つて下さい。」と、婆さんはぶつぶつ口小言を云ひながら後始末をしてほの暗い豆ランプのともつた奥の間の寐床の方へ歸つて行つた。

二階へあがつて手さぐりにやつと電燈をつけると、松之助は喪心したやうに部屋の眞中へがくりと腰を落としてしまつた。天井の低い、ゆがみかゝつたやうな汚らしい間内の樣子をみると全く精も根も盡きはてゝ、破れ障子に映る自分の黑影を眺めたゞけでももう聲をあげて泣き度くなつてしまつた。昨日に變る境涯がつくづく恨めしかつたが、しかしかうした處でもせめて寐起きの出來る屋根のあるのがまだしもだとその時には心の底でしみじみ思つたのであつた。

坐つてみると俄かに眼のまわるやうな空腹が迫つて來たので、彼は部屋の隅の方にある七輪の上の土釜を開けてみた。なかには家を出るときその儘にして行つた飯が底の方へこびりついた儘殘つてゐるので、もう堪へ性もなく茶椀によそつてぼろぼろした冷たいその一塊をさもうまさうに貪り食つた。そしてひと粒殘さず食べてしまうと、彼は綿のよれよれになつた固い貸布團を引出して來てそのなかへもぐり込んでしまつた。初めのうちは階下から聞えてくる婆さんの咳き聲が耳について、一昨々日からの出來事や、明日から先はどうして暮らさうなどゝいふさまざまな悔恨やら、心細さやら、悲しさやらが胸

ら內女や、出來事のうへを多愛もなく彼方此方へ飛んでまわつた。

その翌朝、もう日が高くなつてから彼はやつと眼を醒ました。今朝こそ銀次が寐込みに踏んで來るに相違ないと思つたので、彼は其儘離れ憎い寐床からすぽつと飛び起きて、すぐさま顏を洗ひに行つた。そして三四日來の汚がれた垢をすつかり洗ひ清めたやうな氣になつて二階へ歸つて來ると、階下からは婆さんがぶすぶすいぶる火種をもつて上つて來た。それと一緒に俄かに激しい空腹を覺えて來たので、彼はやがていつになくいそいそした樣子で朝飯をつくる支度をしはじめた。

押入れのなかのビールの空箱をあけてみると殘りの米ももう少くなつてゐる。彼はそれをぢかに土釜へ入れて、階下の流しで磨いで來るとやがて肱懸になつた北向の窓へ七輪を持ち出して、ばたばたと氣永に火口を煽ぎだした。

その朝は晩秋にしては珍らしい霜でも置きさうな寒さが吹く風の底に流れて、蒼々と澄み渡つた空には蜘蛛手に張られた電線の上を二三羽の鴉が啼きつれながらうす寒さうに大きな輪を描いてゐた。先隣りの地境ひにある無花果ももうすつかり葉をふるひ落として、大川の方で鳴る汽笛が庇間を眞直につきぬけてすぐ間近にひゞいてくる。露路内では飴屋の鐘の音に纏れて時折小供達の喚き立てる聲が騷々しく聞えて來た。

松之助は昨夜よりはずつと輕い氣持ちで四邊をみまはしながら何を思ふともなくぼんやりしてゐたが、そのうちに彼は六間と距たらぬすぐ眞向ふの二階にふと常とは變つた或事實を見出してそれとなく

そつちへ視線を惹かれた。その二階は小體ながら粋に作られた普請で、六疊に四疊半ぐらゐな間取りになつてゐるのであらう、此方向きには蒲鉾形のこまをいれた華奢な欄干をもつた椽側がつゞいて、まだ張り替へてから間もないらしい障子が眞白に朝の光を輝かしてゐる。松之助が此處へ引移つてからこのかた毎日毎日雨戸が閉まつたまゝになつてゐたのが、今日は珍らしく隅から隅まで繰り明けられて、しかも雨戸の鴨居には手綱染めに絞りを置いた艶めかしい女の長襦袢がふらふら風にゆられながら掛けてある。そして戸袋際には行李の上に大形の旅行鞄が積んであるのも仔細ありげで、今迄誰れの住家とも氣にとめてゐなかつたゞけに、松之助の好奇心は妙にその二階へ引きつけられて行つたのであつた。

彼は飯の炊げるのを待ちながら時々そつちへ眼を配つてゐた。と、暫らく經つて障子のなかでかすかな嗽き拂ひの聲が聞えた途端に左手の座敷の障子がすつと開いて、そこからは銀杏返に結つた二十四五の年増が格子縞の寐衣に伊達卷をぐるぐる卷きにした儘のしどけない姿で楊子を啣へながらついと出て來た。そして暫らくの間欄干の處へ突立つて齒を磨きながら恥しげもなく此方を眺めてゐたが、松之助の姿をみつけるとその女はひどく吃驚したやうに眠むさうな眼をきよとりと据ゑて、いきなり齒磨だらけの唇をにつこり綻ばせた。

「若旦那。若旦那ぢやなくつて?」その女の聲ははつきりさう云つた。

松之助は悸乎としてこつちからも瞳を据ゑた。なるほど若旦那と呼びかけるのもその筈で、その女は彼が盛んに葭町で遊んでゐた時分によく一座した奴と云ふ藝者だつた。

「あら、矢張し若旦那だよ。まあ、あなた一體どうしたのつて云ふのさ。」奴も呆れたやうに笑つてゐたが、「兎に角あとでお邪魔に伺ふわ。鳥渡待つて頂戴。」と、云ひ捨てゝ彼女はその儘ばたばたと緣側の突當りの階段口へ姿を隱してしまつた。

松之助は夢ではないかと思ひながらまだぼんやりしてゐた。奴といへばお俠な氣性と長唄で賣つてゐた妓で、生れは吉原の寮屋の娘、雛妓の時から仲之町で仕込んで、葭町へ出てからも一流で通つた賣妓だつた。去年の春時分盛んに招んだ時のことを思ふと、今こんな身の上に零落れ果てゝ破れ團扇で七輪の下を煽いでゐるみすぼらしい姿を見られたのが穴にも入り度いほど恥かしくなつて、飯が焦れかゝつたのを幸ひに彼は耳の附根まで眞紅になりながら七輪を窓から降ろして障子をぴつたりしめてしまつた。そして奴が來る前にせめてそこらを片附けて置かうと思つて、折角こしらへかけた味噌汁ゝ共儘にして、銀次がいつぞや持つて來て呉れた佃煮を菜に、半熟の飯をふうふう吹きながら貧しい朝飯をやりかけてゐると、その時、階下の入口の格子戸がからりと開いて、

「若旦那はお歸りになりましたか?」と云ふ銀次の勢込んだ聲が聞えて來た。彼はそのまゝ上框へあがり込んでしばらくの間婆さんと何事かごとごと話しあつてゐるらしかつたが、やがて階段をあがつて來て、松之助の顔をみるといきなり、皮肉に、

「お早う御座います。一體まああなたは何處を歩いて被居つたんです。」と叫んだ。

松之助は慌てゝ茶椀を置きながら

「いや、一寸用があつて、……」あとは口のなかにある飯と一緒にぐつと呑み込んでしまつた。

「御用ですつて？　嘘を仰有い。私はちやんと知つて居ります。此間の晩お渡しゝたあのお金で遊び廻つて被居つたんでせう。」銀次はいつにない引緊つた顔をしてきつと松之助の顔を見据えた。

かう圖星を指されてみると、さすがに松之助ももう一言もなかつた。昨夜までのことに就いてはすつかり後悔しきつてゐるので自ら氣も小さくなつてゐた。いくら云ひくろめやうと思つても、そんなら此間の金を出してみせろと云はれゝばそれ迄なので、彼はもう默つてゐるよりほかはないと思つた。

銀次は彼の顔を凝視したまゝ少時の間何から云ひだしていゝか分らないやうに眼ばかりぱちぱちさせてゐたが、やがて、

「ほんとに若旦那にも困るぢや御坐んせんか。……」と、云ふのをきつかけに、この幾日の間胸のなかに鬱してゐた憤懣やら、訓戒やら、愚痴やらを一時にまくしたてはじめた。人間が律氣に出來てゐるだけに云ふことは人一倍くどかつた。

その云ふ處に依ると、彼は松之助に出逢つた翌朝早く前後の様子をもう一度確めるために仲通の店へ訪ねて行つたのであつた。そこで松之助の母に逢つて聞くと、前夜聞いたのとはまるで反對に、もう家の方の首尾は散々になつてゐる始末なので、彼は今更らのやうに仰天して、その足ですぐさま箱崎町の宿へ驅けつけてみた。案の定宿にはゐない。さうなると前夜何の考へもなく金を渡したことなどがひどく後悔され、それに又松之助の母親が

「あんなかつとする子だから、ひよつとかして取返しのつかないやうなことでもして呉れなければいゝが。……」

と、云つた言葉も思ひ出されて、急に居ても立つても耐らないほど氣懸りになり出したので、彼はその日店の方の用もそこそこにしてそれとなく心當りを方々と尋ねて廻つた。

その日はそれで暮れて、その翌日になつても何の手懸りもない。思ひ餘つて店の朋輩にまで相談をかけてみると、年老つた番頭は

「なあに、何處かふらふら遊び歩いてゐなさるのさ。懐が空になりや歸つて來なさるにきまつてらあね。」

と、事もなげに云つて呉れたので、やつとそれに力を得て、今朝まで實は首を長くして待つてゐたのだと云ふ。

「ねえ、若旦那。」銀次はすつかり筋道を喋舌つてしまうと、やがて思ひ入つた調子になつて、「今更云ふんぢや御坐んせんが、あなたも餘りな方ぢや御坐んせんか。どうにかしてあなたのお爲めになるやうに、私がこれまで骨を折つて働いてゐるのに、あなたは私の腹を少しも買つちや下さらねえんです。折角お宅へ歸れる橋渡しをして上げりやすぐぶち毀しておしまひなさる、あんな御親切の籠つたお金を使つてそれで遊んでお歩きになるなんて私にやどうしてもあなたのお考へが分らねえんです。これで私の顔もすつかり潰れてしめえました。もう私だつていつまであなたのいゝやうになつちやゐません。……ねえ、若旦那。今こんなことを申上げたつてお分りにもなりますまいが、ちつとは親御様方のお心にもなつて御覧なさいまし。昨日仲通へ伺つた時にもお内儀さんは態々お臺所まで出て被來て、私がこれこれでまだ若旦那にお眼にかゝれませんて申上げると、默つて聞いて被居つた口からたつたひと言、「私達もこんなに年を老つてしまつて、何時どんなことがあらうも知れないのにねえ。」と仰有られた時にや私やもう

耐らなくなつて、……」

正直な銀次はそこまで云ふと雀斑の出來た肉の薄い頬にぼろぼろと涙をこぼして、言葉が出なくなつたやうに口をもぐもぐさせながら俛首れてしまつた。そして忙しく瞬きをしながら聲をふるはして、

「亡つた慰母のことを思ふと、私やもう勿體なくつて、……」と、呟いたつきり到頭くすくす聲を絞つて泣き出だした。

松之助も胸が一杯になつて、恥しげもなくはふり落ちる涙を頻りに手の甲で押拭つてゐた。家からは追はれる、世の中からは疎外される、三界に頼る人はたつた一人もなくなつてしまつたやうな心細さが犇々と心に迫つて來て、今までに覺えぬ悔恨の念が眼の前を暗くしてしまつた。

二人は俯向いたつきり無言のまゝで長いこと對坐してゐた。

階下のぼんぼん時計がとぼけたやうな聲で思ひ懸けない十時を打つ途端に、また格子戸ががらがらと開いて、

「あら、小母さん、こんちは。」と云ひながら入つて來たのは奴の聲だつた。

「私ね、旦那と一緒に湯治へ行つてたもんだからすつかり御無沙汰しちやつて、しばらくだつたわねえ。」

と云ふその聲は人もなげに二階までりんりん響きあがつて來る。

なにか手土産でも持つて來たものと見えて婆さんのしや嗄れたねつい聲が頻りにくどくど禮を云つてゐたが、

「私、ちつとも知らなかつたのよ。……さうですか。……ほゝゝゝ、世の中つてものは廣いやうで狹い

もんですわねえ。」などゝ云ふ聲が聞えたかと思ふと、やがて階段がぎしぎし鳴つて、
「若旦那、ちよいと入つてもよくつて？」と、いひながら返事もしないうちに奴はもう障子を開けて、部屋の入口の處へすらりとした半身を現はした。朝湯を使つて、もう身じまひも濟まして來たものとみえ、常から白粉嫌ひな顔の地肌が薄紅くぼうつと匂つて、襟のついた地味な吉野お召の袷に、黒繻子の晝夜帶を無雜作にひつかけたその姿が、貧乏臭い部屋のかゝりには寧ろ慘ましいほど艶だつた。
折が惡いので松之助は銀次に氣を兼ねてはらはらしたが、と云つて當人がもうそこへ顔を出してゐるのではどうすることも出來なくなつて、そつと涙顔を押隱しながらわざと元氣づいた聲で、
「や、先程は、隨分しばらくだつたねえ。」と、懷かしさうに云つた。
「こんちは。あらお客樣だわねえ。お邪魔ぢやなくつて。」と云ひながら、奴は銀次の方を怪訝さうにみいみい間内へ入つて來たが、彼等から四尺ほど離れて坐をしめると、二人の樣子をそれとさとつてか、慇と叮嚀に兩手をつきながら、
「どうも若旦那、ほんとにしばらくで御坐んした。御變りも被居いませんで。又むかうに居ります時分にはいろいろ御最負になりまして。」と、すつかり改まつた挨拶をした。
松之助の方では却つて面喰ひながら、
「いや、……」と、云つたぎりてれてしまつたが、あんまり機穗がないので、そぐはぬ笑ひかたをしながら、「ほんとに暫らくだつた。さつきちらりと顔をみた時にやほんとのお前さんとはどうしても思へなかつたもの。」

「私もですよ。あんまり御様子が變つてゐらつしやるんで、……」と、云ひかけたが、ふつと氣づいて氣の毒さうに笑ひながら、「でもこんな處でお隣り同志になるなんて、隨分御緣てえものは不思議なもんで御坐んさあねえ。私もあの土地をひいてからはもう御連中にはどなたにもお眼にかゝりませんもんですから、ほんとにまさかと思ひましてねえ。」

二人はお互に變り果てた境遇を怪しむやうにそつと眼を見合せながら押默つてしまつた。

銀次は時々探るやうな眼つきをしながら奴と、松之助の橫顏をかわるがわるに偸みゝてゐたが、漸次と、もう愈々匙を投げてしまつたと云ふやうな白けた顏つきになつて、その眼には抑へきれぬ反感を現してきた。そして話が途切れるとそれをきつかけに、慌たゞしく立ち支度をして、

「ぢや、若旦那。私はこれでお暇いたします。どうかあなたもう一度ようくお考へになつて下さいまし。」

と、云つて、ぷいと立ちあがつた。

「まあ、いゝぢやないか。實は私ももう少し話し度いことがあるんだが、……。」松之助もそれをみると急に情けないやうな、賴りないやうな顏色になつてそれとなく引留めやうとしたが、銀次はいこぢな冷たい調子で、

「店の方が忙がしう御坐んすから又いづれ。」と、云ひ捨てて、階段の方へづかづか歩いていつた。

奴はさすがに氣の毒さうな顏になつて

「折角御用がおありのところを、私のやうなものが伺つてほんとにお邪魔を致しましたわねえ。」と云ひながら一緒に階段口のところまで送つて行つたが、松之助は火鉢の端で一段一段拾つて下りてゆく足音

を追つてゐるうちに、又今朝のこのいちまきが銀次の口を通してすつかり母親の耳へ入るのかと思ふと、氣がいらいらするほど情なくなつてきた。

銀次の足音が戸外へ消えると奴はすぐさま又坐に歸つて來た。今度は七輪の殘火を移したそのみすぼらしいブリッキをとしの箱火鉢の前へぴたりと摺り寄つて、松之助の顏をじつと見入りながら、

「ほんとに若旦那、一體どうなすつたつて云ふの？」さう云ふ言葉つきは銀次のゐた時と違つて、すつかり思ひ遣りのある打ち融けた調子になつてゐた。

松之助は改まつてさう聞かれると急にしみじみ情けなくなつて、態と顏を背けながらひどく悄れ返つてしまつたが、やがて、駄々つ兒のやうな聲で、

「どうもかうもありやしないさ、私や家から勘當をくつちやつたんだもの。」

「そりや私だつて知つてるわ。いつだつけか芝居で小いくさんに逢つたら、あなたがお家の方を不首尾になすつたつて話をしてゐたんで私や初めて知つたんですけど、それでなくたつて、勘當でもされなきやこんな處でこんなことをしてゐるあなたぢやないぢやないの。」奴はそこらに取散らかした土釜や、食ひかけの茶椀や、佃煮の小皿などをさも傷ましさうに眺めながら云つたが、「でも、それにしたつて、あなたもあんまり意氣地がなさすぎるぢやありませんか。勘當されたら勘當されたでもうちつとどうにかしやうがありさうなものぢやないの。」

さう云はれると松之助はもう一言も返す言葉がなかつた。意氣地がないと云へばこれほど意氣地のない境涯が又とあらうか。人の情に賴り、人次第でやつとその日の飯のたべていける今の生活はまるで果

敢ない浮草のやうなものだつた。といつてそれが厭さに自分といふものを立て通さうとすれば、自分のやうな何にひとつ腕に覺えのないものは忽ち明日が日から餓死しなければならない。それを思ふと今更らのやうに親の情がしみじみ有難くなつて、もう恥も外聞も忘れてしまつたやうに、

「私なんざもう駄目さ。こんな腑甲斐のない人間はありやしない。」と、呟いて、又ほろほろ涙をこぼした。

「ほゝゝゝ。厭だよ、もうそんな愚痴なんか零すのはおよしなさいつてば。道樂のひとつもした男がそんな度胸のないことでどうして?」と、云つて、奴はとつてつけたやうに笑ひ出したが、口ではさう云つても、彼女の眼には松之助が可哀さうで可哀さうで耐らなさうな色が浮んでゐた。

そこへ階下から婆さんがよぼよぼしながらちぐはぐな湯呑みに番茶を注いで、塗りのはげた角盆に載せて持つて來た。手土産の禮心でか、駄菓子のひねりおこしが申譯ばかり添へてあつた。

奴はともすると婆さんがそこへ腰を据ゑて話し込みさうなので、

「ほんとに小母さん、これから毎日のやうに伺ふんだから、そんなに構つて呉れちや困るわ。お茶が頂きたけりや若旦那の七輪を拜借して、自分で沸かして呑むわよ。」

「へゝゝゝ。いつも姐さんは氣さくなことばかり云つてなさるだあねえ。構ふと云ふんぢやないですけんど、お寂しからうと思つてね。」

婆さんは火鉢の傍へ盆を置くと二言みこと無駄口をきいたあとで、もう何本も殘つてゐない眞黄いろなそつ歯を突出してぜいぜい云ひながら又階下へ降りて行つてしまつた。

奴は松之助が鼻を啜りながら押默つてゐるのをみると話題をそらさうとして、

「今こゝへ來てゐたあの男の方は誰方?」と、靜かに問ひかけた。

「ありや長年家へ奉公してゐた番頭さ。今は人形町の小間物屋にゐるんだか、此處の家も實は彼の男の周旋で借りたのさ。」

「へえ、おやよく芝居で出て來るお家の忠臣て格なんだわねえ。道理で氣の利かない顏をしてるよ。私も大方そんな事だらうと感づいたから、さつきは態と切口上かなんかであなたに挨拶してやつたの。ほゝゝゝ。それでなんでしよ、何んか意見でも申上げにやつて來たんでせう?」

松之助は昔に變らぬ奴のお侠な口調を聞くと強ゐて微笑みながら、

「まあそんなとこさ。」と、答へて、素直に指の先でそつと涙を拭いてゐたが、餘り口をきかないのも先の思惑にかゝると思つて、先日來のことを少しづゝ順を追つて話しだした。家へ呼びつけられたこと、伯父の言葉が癪に障つて坐をたつたこと、人形町で金を貰つてその金で小いくに逢つたこと、それから到頭珠數を切つて吉原が振り出しで、無一文になるまで下等な飲み屋から飲み屋を歩き廻つたことまで包まず隱さず話して聞かせた。そして母親のことを云ひ出すと、さすがに奴もほろりとして、

「ほんとにねえ、親御さん方の身になつたらどんなに苦勞して被居ることでせう。でも、あなたがそれだけでもお母さんの事なんぞ思ひ出すやうにおなんなすつたのは、全く勘當の藥が利いたんだわ。若旦那で何不自由なく暮らして被居りやとても世間のことなんぞ分りつこないもの。」と、しんみり云つて暫らくの間じつと眼を伏せて考へ込んでゐたが、やがて急に氣を變へて何事か思ひ出したやうに、「だけど、

親のことなんぞ考へてゐた日にや馬鹿々々しくつて何も出來やしないわ。親なんてものは身勝手なもので、やつぱし子供が自分の思ふ通りにならないと、他人よりも薄情な眞似をするもんなんですもの。吉原の華魁なんぞの中にや隨分親のために難義をしてる人がありますが、現にさう云ふ私なんぞも極道な親父を持つたゝめに今ぢやこんな體になつてしまつたんだけど。……まあ、いゝわ、今更そんな事を云つたつてしやうがない。だけどあなたも一度こんな深みへ落ちると、これから先は道樂の味がほんとにしみじみ分るやうになるわ。一體、私なんぞにつきあつて被居つた時分にや道樂がほんの初手だつたわ。唯派手に泳いでお廻んなさるばかしで、ちつとも味なんかありやしなかつたもの。あれぢやまるでお紙幣が遊んでゐるやうなものだわ。さう云やあ此節小いくさんの方はどうなつてるの?」

「彼奴とは切れたでもなし、切れないでもなしさ。」松之助はやつと平常の聲になりながら云つた。

「だつて家をお出なすつた當座にやあそこの家で轉々してらしつたつてえぢやありませんか。さては金のきれめが緣の切れめですかね。尤も小いくさんはもともと餘り薄情でない方の人間でもなかつたからね。」

「彼奴ばかしぢやないさ。女つてものは皆薄情なんだ。座敷で逢つてる時分にや氣味の惡いほどへいつくしてゐた奴が、此節人形町あたりでひよつくら出逢はすと、此方からは肩身が狹からうと思つて、態と見てみぬ振りをしてゐてやるのに、むかうぢやいけ圖々しい、橫柄な顏をして、車のうへから見下ろしていきやがる。」松之助は駄々羅なことをしてゐた若旦那時代の口振りに歸りながらさも忌々しさうに云つた。

「そりや全くのことだわねえ。恐らく薄情なことから云つたら、あの社會ぐらゐ薄情なところはありやしますまいよ。また泥水にそまつてみると、それでなきあ勤まりやしませんもの。」奴は恐ろしく悟りきつたやうな口をきいた。

それから話題はだんだんと奴の旦那のことへ落ちて行つた。旦那といふのは兜町でも相當に名の通つた相場師で、今から思ひ出すと松之助が葭町へ入りびたつてゐた時分には、よく料理屋や待合の門口などで出逢はしたこともあるし、また隣り座敷に行きあはせて、その人の十八番の長唄を洩れ聞いたことなどもあつた、不思議な縁は彼と旦那の間にも繋がつてゐた。

奴はこの春、葭町からひかされるとすぐ此處へ圍はれて、それからはずうつとなにひとつ事をかゝぬその日、その日を送つてゐたのであつた。吉原の方の實家とは何かの事情でまるつきり音信不通のやうになつてゐると云ふし、他には寄り懸つて來るやうな係累も誰ひとりないので、彼女は十四ばかりの小婢を相手に、妾宅にはお誂への猫と食道樂で苦勞しながら、旦那の來ない晩などには却つて寂し過ぎるくらゐ氣儘な暮らしをしてゐるのであつた。そして湯治にでも出たい時には、旦那の體に都合がつくかぎりいつでもねだつて連れて行つて貰ふ。今度も月初めから箱根へ行つて、丁度二週間滯在して、昨夜遲くやつと歸つて來たのだと云ふ。

奴は自分でもひどく滿足してゐるらしい今の生活狀態をすつかり話してしまうと、又松之助の話に歸つて

「ほんとに何遍云つてもおんなじことだけど、今頃こんな處であなたとお隣り同志になるなんてまつた

く妙なもんですわねえ。それも、お互に身性がすつかり變つちやつてるんだから猶ほ不思議ぢやありませんか。私もたつた獨りで寂しくつて仕樣がありませんから、あなたも勘當されてゐることなんかくよくよ思はずに、どうかこれから先は力になつたりなられたりして下さいな。そのかわり、昔は藝者とお客のつきあひだつたけど、これからは家持ちと家もちとのつきあひにして呉れなくちや厭ですよ。」奴はしんみりした調子で云つたが、やがて急に何かいゝことでも思ひついたやうに、「今日は折角だからこれから大黑屋へでも行つて、おいしい御膳をたべて來やうぢやないの。さうだ、それがいゝ。さうしてそらいつぞや大一座で水神へ行つたあの時の話でもしませうよ。」奴は氣さくについと立ち上つて、しよんぼりしてゐる松之助を笑顏で促した。

セメント會社の正午の汽笛が、その時、大川を渡つて長々と聞えて來た。

それからは奴は暇さへあるともう毎日のやうに遊びにやつて來た。旦那は場が退けてからきて、また朝は早くから歸つてゆくので、奴は晝間のうちは松之助の二階へ來て無駄話に時を過ごすやうな日が多かつた。朝起きると、彼方は椽端の欄干から、此方は肱懸け窓から、景氣のいゝ「お早う」を取交はして、松之助がもう見得も構はずに七輪の下を煽ぐのを、

「よう、妹脊山の飯炊き、ほいゝゝ。そんな奴はないわねえ。」などと云つては冷評かしたりした。そして來る度に必ず、烏賊の雲丹燒だとか、公平牛蒡だとかいふやうな松之助の口に合ひさうな食物を蓋物に入れて持つて來て呉れたり、又或時などよ

「たまにや床屋へでも行つて、さつぱりして來るもんだわ。あなたなんざ男前がいゝんだから、世帶くづすと猶のこと貧相に見えるわ。……ええ、お錢(あし)がないの？　厭だよ、床屋ぐらゐならいつだつて達引くわよ。」などゝ云つて懷から一圓紙幣をぽんと抛り出したりなぞした。

　餘り開け放しに振舞ふので、松之助の方が却つて氣を狹くして、或時なぞは、

「御親切は有難いけど、あんまりあけすけなことをして、旦那の氣でも惡くすると可けないから。」

と、云つて忠告がましいことをいひだすと、奴は皮肉にくすりと噴き笑(だ)して、

「およしなさいよ。勘當された分際で色男がるのは氣障だわ。それよりも伊左衛門もどきに昔の情婦(いろ)の燒餅でもやいてる方がいくら素直でいゝか知れやしない。うちの旦那は腹の大きな人だから、私達が何をしたつて笑つてみてるわ。」

「そりやさうだらうけど、無論そんな風にや威ぐるまいけど。……」

「ほゝゝゝ。それぢやどう、あんたの方が若くもあるし男もずつといゝんだから、此處でひとつ乙な濡場を書いて、旦那に妬かせてみませうか。」

　松之助は今更自分の出過ぎた言葉が氣恥かしくなつて、顏を赧くしながら默り込んでしまつた。

　銀次はそれから暫らくの間ばつたり足踏みをしなくなつてしまつた。仲通りの家の方の樣子もそれと一緒にかいくれ聞き出す術がなくなつたので、松之助はこれから先の事を思ふと眼先が眞暗になつてゆくやうで時折りは無上に心細い氣もしたが、それでも、米がなくなれば奴から借りた金で桝買ひをする、炭がきれゝば階下の婆さんに賴んで借りてくる、日に幾錢(いくら)でもない金でその日その日の飯だけはどうや

ら食つていけるので、心細いとは思ひながらも引摺られるやうに少しづゝその憐れな境涯に順致されてゆくのであつた。ひとつには奴が傍にゐてくれるので氣強いせいもあつたらうが、併しもうその頃にはさすがの彼も末はどうにかなるだらうと云ふやうな投げやりな果敢ない斷念も少しは出來てきたのであつた。そしてそんな手薄な懷ではうつかり外へも出られないので、せうことなしに日がな一日家のなかに燻ぶつてゐたが、その退屈さに耐えきれなくなつて、此頃では奴の家へ出入りする貸本屋の擔函をひつくりかへして、たつたひとりの時には寢そべつて小說ばかり讀み耽つてゐた。數多い小說のなかに彼は數多い自分の姿を發見した。

十一月へ入ると滅切り寒さが募つて、下に單衣の襲ね着をしてももうさすがに袷ではゐられなくなつた。殊に夜になると建附けの惡い戶の隙洩る風に襟垢の染みた襟が薄氣味惡く冷やついて、そゞろに勘當を受けたやくざな身のうら悲しさが襟もとから心の底の底まで滲んでいつた。暗い電燈の灯影で小說なぞを讀みながら徒然な宵を過してゐる時、心にかゝるのはこの冬を越す着物の算段だつた。

十一月に入つて間もない或日のことであつた。

その日、彼は朝から何んだかひどく氣がくさくさして耐らないので、奴にすゝめられて久振りに午後から氣晴らしに戶外へ出てみた。蒼々と晴れ渡つた空には明るい日射しが漲つて、吹く風は寒くても、何處か生々とした快さが體ぢうの皮膚にしみわたつてゆくやうな日和だつた。うつかり其處らをうろついてゐて知人にでも逢ふと氣恥かしいので、彼は奴の云つたやうに淺草や上野のやうな人の出盛る場所

[illegible]た。

格子戸を開けてなかへ入ると、眞闇な水口で俎の音をたてゝゐた婆さんはいきなり飛びだして來て、お歸りとも云はずに、

「あの今日はあんたのお妹御さんだとか云つて、別嬪さんの娘さんが訪ねて見えましたよ。私やもうへえ吃驚してねえ。………」

「え、妹が？」松之助は肚胸を衝かれずにはゐられなかつた。

「はあ、そんで今しがたまで二階で待つてらつしやつたですけれど、あんたのお歸りが餘り遲いんで、到頭歸つておしまひなすつたですよ。」

「さうでしたか。そりや惜しいことをした。」松之助は態と落着いた聲で云つたが、妹と云ふ名を聞くと無上に懷かしくなつて、後を追ひ驅けて行つてでも逢ひたくなつた。

「ほんとに惜しいことでしたね。もう一時間も早えとねえ。」婆さんはわがことのやうに云つて、「だけんどあんたもほんとにえゝ妹御さんを持つてゐらつしやるだあね。別嬪さんで、悧巧さうで、私やあんなえゝ娘御をみたことがねえちつて、今迄爺さんに話してましたゞあ。」

と、みると、毎日水天宮の横町に出てゐる賣卜の爺さんもいつの間にか歸つてゐて、西向き小窓の下で大眼鏡をかけながら薄れてゆく入陽をたよりに古ぼけた漢籍のやうなものを讀み耽つてゐたが、偏屈な老爺なので、こんな話しをしてゐても見向きもせず、後向きになつた頭の白髮だけが薄暗がりにくつ

きりとみえてゐた。

「それから又私共まで澤山お金を頂きましたゞが、あんたへも宜しうお禮申上げます。」婆さんはさう云ひながら低く腰を折つた。

松之助はそれを聞き捨てゝすぐさま二階へ上つてみた。妹が長いこと來て待つてゐたと聞くと、どうやら火の氣の消えた間内には化粧品の匂ひがまだうつすら殘つてゐるやうな心持ちがして、何とも云へぬほど懐かしかつたが、とみると、隅の處には妹が持つて來たものと見えて、鷹の羽の定紋のついた萠黄の風呂敷に何が包んであるのか、堆く盛りあがつたのがたつた一つ殘されてあつた。

松之助はそれを窓際へ持つて來て、すぐさま結びめを解いてみた。と、なかゝらは欝金木綿の風呂敷包みが出て來て、それには彼が着馴れた縞大島と、結城の綿入がふた襲ね、しかもすつかり仕立直したものと見え躾絲も新らしく、それに角帶から襦袢から胴着から羽織の紐、足袋の類まですつかりひと纏めにして包んであつた。その下には大袋に何やらざらざらしたものがぎつしり詰めてあつたが、よく觸つてみるとそれは三升ほどの白米だつた。そしてそれと衣類の包みとの間には一封の手紙が夾つてゐて、上の包みを傍へずらせやうとするとき、此處にも籠められた熱い情があるぞと云はぬばかりに、「兄上様御許、しづより」と書かれた表書がちらりと現れてきた。

松之助は慄へる手先で封を切つてみた。歸り際に此の家の卷紙を借りて取急いで書置いていつたものと見えて、ロール紙の面には罫襞のついた禿筆で拙い字が走書きにしてある。

その後は打絶えて御めもじも致しませんがおかわりもあらせられぬ由まことに御よろこび申上げま

す　今日一寸おがりましたけど生憎御留守にてこんな口惜しいことは御座いません　もう何事も御せうちのうへと存じます故いまさらしづからはなにも申上げません　どうかおからだを大切に遊ばして一日も早く御歸宅遊ばすやう明け暮れ神佛に念じて居ります　母上様にもそれのみ御心配にてこのごろは夜もろくにおよらず　いくら御すゝめ致しても御食事のすゝまぬのが何よりも心配にてたまりません　兄上様もあんまりなとゝしといつしよに毎日御恨み申して居ります　どうか早く父上様の御機嫌のなほるやうになすつて御歸宅遊ばすやう待上げて居ります

今日はしづの一存でそつと冬の御支度をもつて參りました　胴着はしづとゝしとで縫ひましたのですからその御つもりで御召し遊ばして下さい　それからこのなかに封じました御金は今月の御こづかひて御座います　今日伊勢から御米がはいりましたからついてに少しばかり持つてまゐりました

まづはあら〳〵かしこ

しづより

兄上様御もと

巻紙の末には縦に折つた五圓紙幣が四枚紙包みのまゝ巻き込んであつた。もともと山形屋は伊勢の出なので毎年新米があがると持田から必ず五俵なり六俵なり東京へ送り上すのが慣例になつてゐるので、今年ももうその米が着く時節になつたのである。それをかうしてわざわざ持たして寄越した處をみると、いくら妹のおしづが「一存て」と隠しても、その指金はたしかに母親でなければならぬと氣付くと、松

之助はそれでなくてさへ突詰めた心持ちになつてゐたのがまるで胸を壓し狹まめられるやうにせぐりあげて來た。そしてさうした嬉れしい使に立つた妹は餘程松之助の歸りを待ちあぐねたものと見えて、炭殻ばかりになつた火鉢はまるで灰篩ひでふるひとつたやうに火箸の尖できれいに掻き均らされてゐる。それをみると、松之助は到頭我慢がしきれなくなつて、きつと下唇を嚙みしめながら、その灰のうへゝぼろりぼろりと涙を落とした。

肱懸け窓の障子へきて薄黄いろくしみついてゐた黄昏の名殘も刻一刻に影薄れて、先隣りの物干の影がぼんやり映つたかと思ふと、四邊はその儘息をひくやうに小暗くなつて、やがて日はとつぷりと暮れてしまつた。露路口から吹きあげてくる風はことことと障子を鳴らして、隣町をゆく豆腐屋の喇叭が遠くなつたり近くなつたりしながら寂しい夕暮れの心持ゝ響かせて來る。松之助は妹の手紙と彼等の手で縫はれた胴着とを膝のうへゝ載せた儘その薄闇のなかでいつまでもしくもしく鼻を啜つてゐた。……

「あら、眞闇だ。ちよいとあなた。明りもつけないで何をしてゐるのよ。」と、云ひながらついと入つた來たのは奴だつた。

「誰れだい、奴さんかい？」松之助は慌てゝ居坐ひをなほしながらその場のてれ隱しに分りきつたことを云ふ。

「またこの人は奴つて云ふ。私やもう奴ぢやないつてば。お志摩つてちやんとした名があるんだから、それを呼んで下さいつてあれほど賴んでゐるのに、忘れつぽい人たわねえ。」といひながら奴はつかつか

明り[illegible]

ると、眉を顰めて、
「また泣いてるの。おめそちやんだわねえ。どうしてさう意氣地がないんだらう。何んか泣くやうなことで、持ち上つたの？」
松之助は默つて返事をしなかつた。
奴はすぐ彼の鼻先へ行つてぺたりと坐つて、その膝を兩手で壓し縮めるやうにしながら、
「ねえ、あなた。何うしたつて云ふのさ。何んかまた面倒な事でも持ち上つたんなら私にも聞かして下さいよう。力にならうぢやないの。」と云つてそつと下から松之助の顏を覗き込んだが、その時、ふつと思ひ出したやうに、「さう、さう、さつきあんたんとこへ誰れだか馬鹿にいゝ女が訪ねて來てたわねえ。あの人のことで鬱いてゐるんでせう？　お安くないわねえ。」
松之助はそれを聞くとやつと顏をあげて、
「笑談いつちやいけないよ。ありや私の妹ぢやないか。」
「へん、どうだか。妹は妹でも、血筋のつながつてゐない方の妹で御坐んせう。あんたは油斷が出來ないからねえ。」奴のお志摩は微笑みながら狡さうな上眼づかひをする。
「あんなことを云つてらあ。ほんとの妹だか、妹でないか、ひと眼みりやぢきに分るぢやないか。」と云つて、松之助は膝のうへの手紙を取上げて奴の前へ突付けた。
奴はそれをとつてずつと眼をとほしたが、
「成程、さう云やあ鳥渡通りすがりにお眼に懸つたゞけだけど、何處かあんたに似てちらつしやるところ

もあつたやうだわねえ。私や丁度お詣りに行つて歸りに露路口のとこでお見懸けしたんだけど、車から下りてすうつとこの家の格子へ入つて被來つた樣子なんざさすが山形屋のお孃さんだけあつて品があつたわ。」と、云ひながらそこに廣げてある衣類の包みを引き寄せて、「これが冬のお支度？ まあ、こりやいゝ結城だ。勘當者にや勿體なさ過ぎるぢやないの。」と云つて、さも氣に入つたやうに打返してみてゐたが、ふと米袋が眼につくと手で觸つてみて、

「綿入れにお米か、なるほどさすがは大家の親御さんですねえ。なさることがちやんと坪に嵌つてる。」

と、云つて頻りに感に入つたが、やがて何を思ひ出したのか急に聲を落として、

「こんないゝ親御さんや、お姉さんが被居るのに勘當までされるなんてあんたも隨分罰當りだわねえ。」

と、呟いて自分からほろりとした。

松之助もそれを聞くと又首を低く垂れて針の目もたどたどしい胴着の躾絲を爪のさきで弄くつてゐたが、兩方とも一言も口をきかないので底寒い間内は障子へ來て當る風の音ばかりになつた。

少時たつと奴はふつと我れに返つたやうに、

「あゝ、私やすつかり饒舌り込んぢやつて大事な用を忘れてゐたわ。實はね、今日內輪の話だけどよそから鳥安の鳥肉を貰つたんでね、旦那が鍋にでもして一杯飲み度いつて云ふのよ。それでね、あの人も此間からあんたと是非一度お話がしてみたいつて口癖のやうに云つてますから今日こそいゝしほだと思つてね、ほかにや何も御馳走はないけど、私お迎ひに來たの。遠慮なんざちつとも入らない人ですからどうか是非來て下さいよ。」と、浮々した調子になりながら云つた。

松之助は最も實意なので變な氣がしたが、强つてと云はれるので其頭行くことに心をきめた。

「ちやうちで待つてると可けないから私ひと足お先へ歸ります。きつと直ぐに被來つて下さいよ。」と云ひ捨てゝ、奴はそゝくさ家の方へ歸つて行つた。

松之助はたつたひとりになると又ぼんやり思ひに沈んでしまつたが、暫らくたつて、

「若旦那、早く被來いよ。」と云ふ奴の聲が向ふ二階から屋根越しに聞えて來ると、はつと我れに返つて急いで着換へをしはじめた。そして久振りで結城の藍の匂ひとしつとりした眞綿の肌觸りに生き返つたやうな歡ひを覺えながら隣りへ出て行つた。

案内されたのは二階の六疊だつた。別にこれと云つて取立てゝ云ふほどの裝飾もしてなかつたが、中床に懸けた俳書じみた幅や、床柱の一輪挿しや、衣桁などのかゝりがどうみてもじみな待合を思ひ出させるやうな座敷だつた。眞中には炬燵がしてあつて、その傍に据ゑた餉臺へ兩方から差向ひに坐れるやうに鐵色緞子の坐布團が敷いてあつた。餉臺の上には店屋ものらしい刺身やら、お椀やら、くさぐさの酒の肴が小さな入物に入れ分けられて、水昆爐や杯洗などゝ一緒に體裁よく置き並べてあつた。

旦那といふのはかうしてみると思つたよりも若く、きりゝと引緊まつた淺黑い瘦形の顏で、相場師にしては堅氣な風だつた。松之助は以前逢つたことはあつてもしみじみ顏を合はせたことは一度もないので、そんな思ひ懸けない人柄なのが却つてひどく懷かしかつた。

旦那は松之助が遠慮がちに坐につくのをみると、捌けた調子で笑ひかけながら、

「やあ、ようこそ。私やあなたを知つてゐると云つちや變な御挨拶ですが、ちよくちよく妙な處でお眼

に懸りましたな。はゝゝゝ。どうぞまあこれを御緣にお心安くお願ひ申します。」

「私こそどうぞ。」松之助は堅くなつて頭をさげたが、何だかしほがないやうな氣がしたので、「私もよくあなたが結構な喉でお唄ひなさるのをお隣りから拜聽したことなぞもありましたが、……。」

「はゝゝゝ。こりや參つた。こいつが紋にも撥にもかゝらない人惱ませな藝でね。はゝゝゝ。ですか、私や今だから白狀しやすが、あの時分はあなた方のやうな若手の綺麗さがりな御連中を向ふへ廻して遊んでゐたんで、女の子を片つ端からさらつていかれつちまひさうな氣がしましてね、腹んなかぢや恐ろしく苦勞をしたゝんですよ。はゝゝゝ。なあ、お志摩。お前だつてもう少しと云ふ處をやつと食ひ止めたんぢやないか、なあ。」

「又初まつた。えゝ、さうですとも、どうせ私やあの人方に岡惚れしてたのよ。」奴は水昆爐で鳥肉を煮ながらしなやかに受け流す。

「かう、氣を注けて吳れ、お客樣の前で痴話喧嘩なんざ犬も喰はねえ。はゝゝゝ。へ、御免下さい。」などゝ笑談を云つては盃をさす樣子なぞは道樂をしぬいた一分も透さぬ男振りだつた。

盃をさしつ、おさへつしてゐるうちに漸次と一坐は打融けて來て、酒の醉ひと一緒に葭町時代のいろんな失策話やら、色懺悔やらが面白可笑しく物語られた。そしてふとしたきつかけで勘當のことに話が逸れると、旦那はしんみりした眼色になつて、

「あなたも今度はどうも飛んだ御難義で。しかしまあお若いうちはようがあさ。お宅のやうな御大家ぢやまさか若旦那を日乾しにもなさるまいし、宛人扶持がついて武者修業に出てゐると思やあ何のことも

ありやしませんや。私なんぞも若い時分に矢張り二度ばかり痛い眼に逢はされましたが、その當座は化かした女よりも親の方が恨めしくつてねえ、しかし今から考へてみりやあのお庇護ですつかり世間が分つたやうなもんでさあ。全く勘當を喰はせる位な親でなけりや子の可愛さは分りやしませんや。」

それから旦那は階下から三味線を持つて來させて長唄を二段ほど唄つて聞かせた。殊に奴は大はしやぎで、座敷へ出てゐた時分のやうに旦那の箸で刺身を夾んで貰つて食べたりしながら浮いた都々逸などを頻りに唄つた。

松之助は涙の出るほど嬉れしくなつて、さゝれた盃はひとつ殘さず干して返した。

その年もだんだんと押し詰まつて、相變らず不景氣の聲は高くても、大晦日を眼の前に控へた世間は何處となく幸多い春を急ぐやうに賑々しくざわめいて來た。人形町の通りにも賣出しの繪有板や、店口を飾る彩旗球燈の數が日毎に增して、砂塵を吹き卷く師走風のなかを忙がしさうな眼つきをした人々が織るやうに往來する時節になつた。

松之助は家へ復歸する話が出だしてからもう彼れこれ二月の餘にもなるのに、家の方からは月々の手當てや米、炭の類はきちんきちんと屆けて寄越しても、その後音沙汰がさつぱり絶えてしまつたので、今日此頃では、一體この俺をどうして呉れるのだらうと云ふやうな、じりじりした焦躁しい氣持ちが胸を惱ませずにはゐなかつた。こんな事をしてじりじりさせて置いて此方から詫びを入れてゆくのを待つてゐるのではあるまいかと思ふと、彼はもう氣が氣ではなかつた。母親だけのことならどんな風にでも

詫びのしやうもあるが、今更あの剛腹な父や伯父の面前へ出て、以後はきつと身持ちを謹しみますからなど〻云つて頭を疊へ摺りつける氣にはどうしてもなれなかつた。若し彼等の前へ詫びて出たとしたら、彼等は必ず頭ごなしに自分をいたしめるであらう、さうしたら自分はまたかつとするにきまつてゐる。家を出る時のきびきびした捨白の手前を考へても、彼はそれほどにして家へ入れて貰はうと云ふ氣はまだ出なかつた。どんなに苦しくてもかうしてその日の飯の食つていける間は辛抱してゐなければならぬと思つた。そして時々は妙な空元氣から、以前父親の實印などを盗み出した折の氣持ちを思ひだして、何かひとつ家の迷惑になるやうなことを仕出來し平地に波瀾を卷き起して、それであはよくば勝誇的に大きな顏をして家へ歸れるきつかけを作つてやらうかなど〻も空想したりした。

滅切り日が短かくなつたので、此頃では自炊する獨身者にはその日その日が恐ろしく慌たゞしく暮れてゆくやうに思はれた。晝近くにやつと朝飯を濟まして、そのあとの洗ひものもまだ片附かないうちにもう夕飯の支度にかゝらなければならないやうな始末だつた。此頃は自分で物を煮たきして食ふ味も知つてきたので、おちおち小說などを讀んでゐる隙もなく、自分では朝から晩まで食ひもの〻事で苦勞してゐると思ふやうな日が續いた。

奴のお志廉は相變らず毎日のやうに遊びにやつて來た。もう話の種も盡きさうなものだのに、それでも毎日何かしら出來事があつて、逢ふ度に矢張り笑つたり、悲しんだりしながら新らしい話題を追つた。毎日顏を合はせてゐるせいか、奴も以前ほどの懷かしさを湧かせなかつたが、それでもひよつとして來ない日などには何となく物足りない氣がされた。それに反して旦那に對する懷かしさは日に日に募つて、

晩餐などに招ばれることが度重るにつれ、その捌けた取りなしが嬉しくて、彼は漸次と親身の兄貴にでも逢つてゐるやうな感情を持つやうになつた。そして時々、

「どうです、今夜あたりは何處かへお伴しやせうかね。あんまり久しく女の子の顔を見ねえと味を忘れつちまひますぜ。」などゝ笑談を云ひながら、葭町、柳ばし邊では昔の顔に當て付けがましいので、態と赤阪、或はまだぐつと山の手の方などへ連れて行つて吳れることがあると、彼はもう我を忘れて

「兄いさん、兄いさん。」と、あらはに云ひながら一心になつて座持ちを勤めた。昔知つてゐた幇間の眞似などをやつて、得意の蛸を踊つたりしては坐にゐる妓達の腹を抱へさせた。

さうした晩には旦那もひどく喜んで、粋の利いた取計ひて、

「お若いのにあんまり色氣のねえのも却つて氣障だから、好いた妓があつたら、私が引受けますからどれても引つこ拔いて抱いて寢て被來い。たけどまた落つこちは可けやせんぜ。」などゝ彼へ耳打ちをして、自分は座敷の隙をみてこつそり車でぬけて歸るのが常であつた。松之助は久しぶりに待合のほの暗い小座敷でひと夜を明かしながら、そんな晩にはいつそあの旦那に縋つて、家の方には見切りをつけ、この儘今日を知つて明日を知らぬ男らしい株屋商賣に身を沈めてしまはうかなどゝも考へるのであつた。一場で當る一攫千金の夢は、醉つた彼の頭で考へると父親へ對する唯一の復讐のやうにも思はれた。

その日は朝から恐ろしい空ッ風が吹きしきつて、いつになく息塞まつたやうな汽笛の聲や、電線の呻る音がしつきりなしに聞えて來る、今にも出火を報らせる半鐘の響が何處からか聞えて來さうな不安な

氣のされる空模樣であつた。

松之助はつい此間やつと工面して買つた行火へ火を入れて、いつものやうに障子の破れめを毆る風の音を聞きながら小說を讀み耽つてゐると、そこへ珍らしくひよつくら銀次が訪ねて來た。大分しばらく無沙汰をしたそのせいか、

「どうも長いことお眼にかゝりませんで。」と、挨拶して坐る時、風に吹き曝らされて眞紅になつた彼の鼻のあたりには極まりの惡るさうな、そぐはぬ表情が動いてゐた。

松之助はそれをみると、いそいそ行火を傍へ押しやりながら、

「いや、どうもすつかり見限られちやつたね。」などゝいつて、すぐさま茶を入れる支度をした。

「どうぞもうお構ひなさらないで。今日は店の用の出先でちよつとお邪魔に伺ひましたんですから、もうすぐにお暇をいたします。」銀次は壁をぬるやうな手つきで、それを押し留めながら、「あの、實は昨夜鳥渡仲通へ伺ひましたところが、お內儀さんから、その、お言傳が御坐んしてな、……。」と、氣がせくやうな樣子をしながら用向の方から先へ云ひ出した。銀次は矢張り銀次で、馬鹿律氣な熱心さが、その一言でわざわざ此處までやつて來た用向を松之助の胸へそれと感付かせた。

その用向きと云ふのは松之助の感づいたとほり家へ復歸しろと云ふ母の意志をそれとなく傳へに來たものであつた。あらはには云はなくても、母は松之助と同じやうな思ひで彼の歸宅を待つてゐた。そんなことをして自分で自分の體を責め苛み、好きこのんで苦勞から苦勞の淵へ沈んでゆかなくても、父や伯父に然るべき詫びを入れて、一日も早く歸宅をして見てろと銀次の言葉の裏に潛んだ母親の心が云つ

たゞ銀次の口ぶりはいつもながらに酷も云つてはゐたがその底に響く母君の言葉は慈愛の涙に溢れて、松之助の肺腑をつくやうに響いて來た。

松之助には母の言葉が分り過ぎるほどよく分つてゐた。歸宅したさの思ひは常にもなく熱つこい力で彼の胸を責めてきたが、さて父や伯父に詫びを入れる手段はと思ふと、彼ははたと行詰まらない譯にはいかなかつた。彼はそのことを打案じながらいつまでも返事をし兼ねて默つてゐた。

そこへまた奴がやつて來た。今日はいつになく打悄れて、隈の出來たやうな眼だけを神經的に輝やかしながら、

「こんちは。」と云ふと、そのまゝ窓際へ行つてぐつたり腰を据ゑてしまつた。

松之助はうつちやつても置けないので、

「どうかしたのかい？　馬鹿に顏色が惡いぢやないか。」と、氣のない聲で云ふと、彼女は力なげにこつちへ顏を向けて、蜂谷のところを指で抑へながら、

「頭痛がしてしやうがないの。少し心配ごとがあるもんだから。」と、吐き出すやうに云つた。

「心配ごと？　柄にないことを云ふのはおよしよ。」

「ふむ。……」奴はさう云はれてもいつものやうに浮々した調子で受答へはせず、そこにあつた松之助の讀みさしの小説を取上げて、綴り絲をせゝりながら默り込んでしまつた。

銀次は挨拶さへしない奴の樣子が癪に障つたのか、反感の燃えた眼できつと彼女の方を見つめてゐたが、やがて袂からバットの箱を出して、

「ねえ、若旦那。兎に角お内儀さんの思召しは今申上げた通りなんで御坐んすから、どうかあなたもよくお考へになつて、ひとつ今度こそ晴れてお店へお歸りになれるやうになすつちや下さいますまいか。私もさうなりやどんなに安心するか知れませんのですから。」と云ひながら不器用な手つきで紙卷を吸口へさして火鉢の火で煙を吐き出した。

松之助は又俛首れて、返事をしない。

奴は上眼で二人の樣子をじろじろ偸みみてゐたが、餘り皆が堅くなつて默つてゐるので急に氣を變へて、

「ねえ、あんた。何かまたお家へ歸れるいゝ手蔓が出來たの。」と訊きかけた。

松之助は子供のやうに默つて合點いてみせた。

「そりや結構だわねえ。ほんとにあんたもいつまでこんな事をしてゐたつて仕樣がないんだから、いゝ手蔓が出來たら早く家へお歸んなさいよ。お宅なんざお家柄はいゝし、家へさへお歸んなさりや、こんなことをして七輪の下を煽いだりなんかして苦勞しなくつたつて、樂に若旦那でおさまつてゐられるんぢやありませんか。ほんとに惡いことは云はないから出來るならさうなさいよ。」と、姐さんらしい物の分つた調子で云つた。

松之助はしんみり聞いてゐたが、やがて訴へるやうな眼で奴の方をみながら、

「だけど、歸るにしても私や親父や伯父に改めて詫びを入れなきやならないんだからなあ。私はそれが厭で厭で耐らないんだ。―

「そんな馬鹿なことを云つたつて駄目だわ。勘當されたものがお詫びも入れずに歸らうなんて、そりやあんまり蟲がよすぎる。そりやあんたの我儘よ。一旦喧嘩して强いことを云つて出て來たのに、今更頭も下げられないてのは人情だけど、そこが全くの若氣だわ。それよりも早く然る可き人にお詫びを入れて貰つて、もう一度家へお歸んなさい。その方がいくら身の爲めだか知れやしないわ。」

「だけど私やあんな親父や伯父の前へ出て詫びなんかするのは死んでも厭だ。それ位ならかうしてゐて餓死しつちまう方がいくらいゝか知れやしない。」松之助は駄々つ兒のやうにいこぢな顏をして云つた。

奴はその樣子を傷ましさうに見てゐたが、

「あんたも隨分分らない人だねえ。そんなこと云つてゐて、ほんとにお宅から見離されてその日の御膳も食べられないやうになつたらどうして？　世の中にやいくらもそんな人がゐるのよ。」と、いつになく淚を浮べながら相手の胸へ滲み入るやうな聲で云つた。

銀次はそれを聞くと耐らなくなつたやうに口を入れて、

「そりやしかし山形屋の若旦那だあ、いくら勘當はなすつても、若旦那が乞食をなさるのを見捨てゝ置くやうなそんな身代たあ身代が違ひまさあ。」と、いきりたつて、奴の方へ當てつけがましく云ひながら、

「實はお內儀さんの仰有るなあ別のことなんです。そりやあなたが苦勞なさる分にやいくら苦勞なすつても構はねえけど、こんな見ず知らずの人間ばかり住んでゐる處にたつた一人で被居つて、世間馴れねえ若旦那のことですから、ひよつとして惡い人間が喰ひつきでもしたらそれこそ取返しがつかないつて、そればつかし心配して被居るんです。」

松之助の心にはその言葉と一緒に奴のことがふつと浮んだ。銀次の來た時はもとより、妹が訪ねて來た時にも生憎この奴の姿が彼女の眼の前に或謎になつて現はれたに相違ないので、彼等は奴に對してどんな考へを抱いてゐるか分らない。それがまたどんな意味の言葉で母親に告げ口されたか猶更分らない。それに箱崎町へ居を占めてからは唯の一度も不自由らしい泣き言を訴へてやつたこともなく、いつも誰れかの世話にでもなつてゐるやうに外見からは割りに悠々として見えたので、或は家の方では奴のことを飛んでもない風に疑ぐつてゐるかも知れぬ。銀次の口占をみてもどうもさうらしいので、若しさうだとすればこれほど厄介になつてゐながら奴に對してもも濟まないよ思つて、ひどく腹立たしい心持ちになりながら、松之助はそのまゝ銀次を眼の前に引据ゑて置いて奴の前で充分に云ひ解かうと思つてそつと奴の方をみると、奴はその時どうしたものか、額際まで眞蒼になつて、唇をぶるぶる慄はしながら燃えるやうな眸光できつと銀次の方を睨みつけてゐた。

「あの、ちよいと伺ひませう。」彼女は松之助の先を越して鋭く口を切つた。「今お前さんの云つた言葉んなかで私や氣に喰はない言葉があるんですが、一體その惡い人間てのは誰れのことをさして仰有るんですい?」

銀次もさすがに突拍子もない奴の權幕に驚いてきよとりとしてゐたが、やがて日頃に似氣ない頑固な冷笑を浮べて、

「誰をさして云つたつて宜しいぢや御座んせんか。なにもあなたの事をいざこざ云つた譯ぢやあるまいし、唯若旦那を惡い方へ唆かす人間があると可けないからと申したまでなんです。」

一嚇かす？　人を馬鹿におしでない。私やその言葉が聞き捨てにならないのさ。誰れと人を指しては云はなくつても、私にやお前さんの腹はようく分つてます。さうぢやないの、お前さんが若旦那のとこで逢つたのは後にも先にも私ひとりぢやありませんか。」奴は蒼い顏が今度は血ばんで來て、「そりやお前さん達の眼にや私がどんな惡黨に見えるか知れないけど、これでも私や決して自分ぢや惡いことをした覺えは毛頭ありません。恩に着せる譯ぢやないが、もとを云やあ若旦那にや隨分御贔負にもなつてるし、それにこんなことをしてらつしやるのをみるとお可哀相で、私の氣象としてどうしても默つてうつちやつとく譯にはいかなかつたもんだから、私共としちや全く出來悟いお世話もして上げました。そりや若旦那だつてようく知つてゐて下さる筈です。それにお前さん達みたいな端の者から、唆かすの、惡ものだのつて出過ぎた口をきかれりや私だつて腹が立ちます。」

息をもつかずまくしたてるのを銀次はやつと手で制して、

「だからさ、何も私はあなたの事を云つてるんぢやないんでさあ。それにあなたもあなただあ、妙に感繰つて私にばかし突懸つておいでなさる。そりや若し若旦那がほんとに御厄介になつたとすりや、お店へさう云つて、お禮をする處はお禮をしますが……」

「ふむ、見損つて貰ひますまいよ。憚んながら私はね、お禮なんぞ欲しくつてお世話をするやうなそんな人間ぢやありませんや。お前さんみたいな唐變木たあ話が出來ないから、もし若旦那の事が御心配なら、いつでもよう御座んす、山形屋のお内儀さんからぢかに一寸一言さう云つて頂けば、私や早速お詫びが叶ふやうに若旦那をお店まで送り屆けて上げまさあ。お店へ行つたらどうぞさう云つてお吳んな

さい。私がどんな人間だかその時になつたらお分りになるでせう。‥‥唆かすの惡足だのつて、人を面白くもない。そりや皆お前さんがお店へ忠義立てをする氣かなんかで云ひ觸らして歩いた言葉なんだらう。あれほど物の分つたお內儀さんがそんな分らないことを仰有る筈がないさ。」

「何んですと！」銀次はくわつと青筋をたてゝまるで狗犬のやうな顏をしながら腰を浮かした。

松之助は手のつけやうがなくなつて、

「おい、銀次、靜かにしろ。俺の前で手でもあげたら承知しないぞッ」と、腹立しげに怒鳴つて、銀次の方から先づ制しやうとした。と、銀次はその言葉をどうとつたか、突如むつくと立ち上つて、

「私にやもうとてもこのお話は出來ません。これからすぐにお店へ行つて、今日のことをすつかりお內儀さんに申上げて、その上でお內儀さんからぢかに處分して頂きます。」と、ぷんぷんしながら怒鳴り散らして、そのまゝ挨拶もしずにぷいと階下へ降りて行つてしまつた。

あとにはたつた二人、お互ひに妙に張り詰めた心持ちで無言のまゝ薄日の射す底寒い部屋のなかに取殘された。奴は激しい興奮が通りすぎてしまうと急に何を思ひ出したのか、顏もあげたなりでヒステリックにしくしく泣き出した。松之助は奴かこんな風に取亂した樣子を今迄に一度も見たことがないので吃驚しながら頻りに譯を糺したが、奴は唯、

「早く家へお歸んなさい、家へお歸んなさい。」と呟くばかりで、そのほかのことは一言も云はなかつた。

松之助は詮方なしに涙の湧き出る彼女の眼のところを眺めながらぼんやり口を噤んでしまつた。

やゝ少時すると、突然階段の軋む音がして、銀次が開け放しにして行つた入口の障子の處から奴の家

の小婢がそつと顔をだした。と、間うちの様子が變だつたので極まりが惡かつたのか頬を染めながらそうつと又首を引込めたが、やがて今度は思ひ切つたといふ風につかつか部屋のなかへ入つて來て、松之助に叮嚀に挨拶をするとそのまゝ奴の傍へ摺り寄つて、彼女の耳へ何事かひそひそ耳打ちをした。

　奴はびくりとして顔色を變へながら、

「又來たのかい。何故留守だつて云はないんだい。」と、突慳るやうに云つた。

「いゝえ、申上げたには申上げたんですけれど、此方でお聲が聞えたもんですから、隣りへ行つて呼んで來いと仰有つてどうしてもお動きにならないんです。」小婢は途方に暮れたやうな聲で訴へた。

「ブツ仕樣がないねえ。……ぢや私すぐ歸るからお前先へ歸つといで。さうして決して奥の方へ上げるんぢやないよ。」奴は厭々云つて、何事か含めるやうに眼顔できつと諜し合はせた。

　小婢はそれでやつと安心したやうに素直に辭儀をしながら歸つて行つた。

　松之助は何事が起つたとも當てがつかないので怪訝な眼を瞬つてゐると、それを見た奴は涙の溢れた眼をじつと据ゑて、深い嘆息をつきながら、

「ねえ、若旦那。私やあなたにやまだ隱してゐたけれど、實は二三日うちに鐵砲洲の方へ引越して行かなけりやならないことになつたのよ。餘りだしぬけなんであんたは噓のやうにお思ひなさるかも知れないけど、これには深い譯があつてねえ。……」と、云ひながら彼女は突然移轉しなければならぬ思ひ懸けない事實を掻い撮んで話した。

　その事實といふのは今奴の家の玄關へ來て坐り込んでゐる彼女の父親から起つたものだつた。父親と

さい。私がどんな人間だかその時になつたらお分りになるでせう。……唆かすの惡足だのつて、人を面白くもない。そりや皆お前さんがお店へ忠義立てをする氣かなんかで云ひ觸らして歩いた言葉なんだらう。あれほど物の分つたお內儀さんがそんな分らないことを仰有る筈がないさ。」

「何んですと！」銀次はくわつと青筋をたてゝまるで狗犬のやうな顏をしながら腰を浮かした。

松之助は手のつけやうがなくなつて、

「おい、銀次、靜かにしろ。俺の前で手でもあげたら承知しないぞッ」と、腹立しげに怒鳴つて、銀次の方から先づ制しやうとした。と、銀次はその言葉をどうとつたか、突如むつくと立ち上つて、

「私にやもうとてもこのお話は出來ません。これからすぐにお店へ行つて、今日のことをすつかりお內儀さんに申上げて、その上でお內儀さんからぢかに處分して頂きます。」と、ぷんぷんしながら怒鳴り散らして、そのまゝ挨拶もしずにぷいと階下へ降りて行つてしまつた。

あとにはたつた二人、お互ひに妙に張り詰めた心持ちで無言のまゝ薄日の射す底寒い部屋のなかに取殘された。奴は激しい興奮が通りすぎてしまうと急に何を思ひ出したのか、顏もあげたなりでヒステリックにしくしく泣き出した。松之助は奴かこんな風に取亂した樣子を今迄に一度も見たことがないので吃驚しながら頻りに譯を糺したが、奴は唯、

「早く家へお歸んなさい、家へお歸んなさい。」と呟くばかりで、そのほかのことは一言も云はなかつた。

松之助は詮方なしに淚の湧き出る彼女の眼のところを眺めながらぼんやり口を噤んでしまつた。

やゝ少時すると、突然階段の軋む音がして、銀次が開け放しにして行つた入口の障子の處から奴の家

の小婢がそつと顏をだした。」と、間うちの樣子が變だつたので極まりが惡かつたのか頬を染めながらそうつと又首を引込めたが、やがて今度は思ひ切つたといふ風につかつか部屋のなかへ入つて來て、松之助に叮嚀に挨拶をするとそのまゝ奴の傍へ摺り寄つて、彼女の耳へ何事かひそひそ耳打ちをした。

奴はびくりとして顏色を變へながら、

「又來たのかい。何故留守だつて云はないんだい。」と、突懸るやうに云つた。

「いゝえ、申上げたには申上げたんですけれど、此方でお聲が聞えたもんですから、隣りへ行つて呼んで來いと仰有つてどうしてもお動きにならないんです。」小婢は途方に暮れたやうな聲で訴へた。

「つッ仕樣がないねえ。……ぢや私すぐ歸るからお前先へ歸つといで。さうして決して奧の方へ上げるんぢやないよ。」奴は脈々云つて、何事か含めるやうに眼顏できつと諜し合はせた。

小婢はそれでやつと安心したやうに素直に辭儀をしながら歸つて行つた。

松之助は何事が起つたとも當てがつかないので怪訝な眼を瞬つてゐると、それを見た奴は涙の溢れた眼をじつと据ゑて、深い嘆息をつきながら、

「ねえ、若旦那。私やあなたにやまだ隱してゐたけれど、實は二三日うちに鐵砲洲の方へ引越して行かなけりやならないことになつたのよ。餘りだしぬけなんであんたは嘘のやうにお思ひなさるかも知れないけど、これには深い譯があつてねえ。……」と、云ひながら彼女は突然移轉しなければならぬ思ひ懸けない事實を掻い摘んで話した。

その事實といふのは今奴の家の玄關へ來て坐り込んでゐる彼女の父親から起つたものだつた。父親と

いふのは人も知る惡黨で、もとは奴の實家の擔ぎをしてゐた男だつたが、先の主人が死ぬとすぐに奴の母を口說落としてのめのめとその跡釜に坐り、到頭吉原で何軒といふ臺屋の株を滅茶々々に奕ち潰してしまつた揚句、今では千束町邊に巢を構へ、表は羅宇屋渡世をしてゐながら裏では警察の朱書きにのるやうなよからぬことばかり働いてゐるのであつた。廓で生れ、廓の子で育ち、一生廓で果てる筈だつた魚新の娘お志摩もその父親のためにまだ莟の花の身を賣られて、仲之町から度町へ渡つて來るまでさんざしなくてい丶苦勞までさせられ、殆んど身の皮を剝がれるやうな目にも幾度となく、逢はせられたのであつた。旦那にひかされてからも彼女はつき纏はれるのを恐れて、丁度七八箇月の間この箱崎町で世を忍ぶやうに身を隱してゐたが、何處をどう尋ねて來たものかつい四五日前に到頭尋ねあて丶、今度こそい丶種にしやうと思ふのかもう毎日々々煩く强請りに來るのであつた。

「そんなやうな譯ですから私やもう旦那の手前實に面目なくつてねえ、今度こそどうにかして見付からないやうに當分鐵砲洲邊で宿屋住ひをしてみやうと思つてるの。……だから私や此間もあんたの處へお母さんから冬の着物とお米を送つて來たのを見た時にやしみじみ身につまされてねえ、同じ親と名がついてもかうまで違ふものかと全く泣かずにやゐられなかつたわ。あんなやくざな親父を持つたのが因果で、私やかうして一生苦勞しなきやならない。」奴は淚聲で云ひながら漸う立ち上つて、「又晩に來て詳しい話をしますわ。」と、云つて、その儘すごすご家の方へ歸つて行つた。

歸ると間もなく奴の家では親子で云爭ひでも始めたものと見えて、かすかな怒罵の聲が風に追はれながらきれぎれに聞えて來た。度町にゐた時分にはがらで通つてゐたあの俠な奴にもかうした暗い淚の反

面があつたのかと思ふと松之助はつくづく物の哀れを覺えて、夕飯の支度も打忘れて、自分でも頻りに親といふことを思ひ耽つてゐた。

その晩、十時過ぎまで寢ずに待つてゐたけれども奴は到頭姿をみせなかつた。

その翌日の夕暮であつた。朝からうす暗く曇つてゐた大空にぱつたり風が吹き絶えると、寒氣は俄かに加つて來て、やがていつとも知れぬ間に切斑ほどな大きな雪がちらりちらりと降り出して來た。松之助は階下の婆さんに賴んで蛤のいゝのを買つて置いて貰つたので、夕飯には蛤鍋でもして溫たまらうと思ひながら七輪に火を熾しかけてゐると、その時、何處からかしや嗄れた聲で耳馴れぬ唄をうたつてゐるのがふつと聞えて來た。

娘お志摩は緋縮緬の寢衣(ねまき)
　親は襤褸きて羅宇屋させえる。……

わざと悲しげな節をつけて唄ひながらその聲はすぐ近邊を行つたり、きたりしてゐるのである。

娘お志摩と云ふ文句にふつと心を惹かれて肱懸け窓を細めに開けてのぞいてみると、丁度斜めに見える露路の中には奴の家の前と思ふあたりに一荷のみすぼらしい羅宇屋の荷が置き捨てゝあつて、その傍には七つぐらゐな小娘と、その弟ともみえる男の子が見る影もない襤褸をさげて寒さうに兩手を腋あけのなかへ突込んだまゝ奴の家の二階を見あげながらしよんぼり降る雪のなかに突立つてゐる。丁度その時庇間から姿を現した唄の主は五十格好の穢らしい親爺で、むくむくした布子のうへゝ繼ぎはぎだらけ

な黒羅紗の鯉口を着て、古帽子の鍔の陰にみえるその顏は酒さびの紅く出たしよぼしよぼ鬚の生へたいかにもひと癖ありげな面魂だつた。

松之助はこれが昨夜聞いた奴の父親と妹弟達だなと氣づくと、何の關係もない自分までがなんだか恐くなつて、そのまゝそつと障子をしめてしまつた。そしてどうなることかと戶外の樣子に聞き耳を立てながらこつそり味の分らぬ夕飯を濟ましてしまつた。

唄聲は夜に入つてからまで執念深く續いてゐたが、奴の家では誰れもゐないのか閉めきつた雨戶の隙洩るゝ火影も見えず、まるで空家のやうにひつそりしてゐた。唄聲がやつと止んだあとでもう一度障子を開けて覗いてみると、軒燈の光のほのかな露路の薄闇には人影も絕えて、もう溝板のうへには雪が眞白に積もつてゐた。奴のところへ訪ねていかうにも何となく憚りがあるやうなので、到頭その晩は早く臥床をとつて寢てしまつた。

その晩、松之助は寒さに慴えて夜つぴて鳴きしきる子猫の聲を聞きながらもう二三日うちには家を引越してもとの他人になつてしまはうとする奴の一家を思ひ、又自分の身の行末を思つてみた。と、譯もなく無上に心細くなつて來て、勘當されてから五月に餘る日數の間漸次と鬱積して來た孤獨の寂しさが犇々と胸を責め、それと一緒に浮世といふもの〻姿が初めて手にとるやうにはつきりと心に映つて來た。彼はその夜、奴の家に貸家札が張られぬ先に今度はこつちから銀次を訪ねていつて兩親の家へ復歸する手段を講じやうと決心したのであつた。

（をわり）

現代の二大文學書



文明は顚覆されんとす、杜翁は戰爭に就て何をか語れる？此文明に就て如何なる批評を下せる？

復活は杜翁一代の思想の結晶一言一句が翁の髓腦の滴たり也、現下の戰爭の眞因の宿する處、墺の野望に非ず、カイゼルの覇心に非ず、將た佛の復仇に非ず、露の貪慾に非ず、一言すれば現下の戰爭は文明の缺陷が產出したる必然の破裂にして杜翁は夙に必ず此大爆發あるべきを豫言したり復活を讀め、翁の一大炬光が如何に文明の暗黑にある魔界を照らすかを見よ。

復活

トルストイ翁第一の傑作

內田魯庵氏譯

前編正價金一圓五十錢
後編正價金一圓八十錢
郵稅各金十二錢



ドストエフスキー氏
內田魯庵氏譯

罪と罰

前編四六判ポイント刷
紙數五五〇餘頁
正價金一圓四十錢
郵稅金十二錢

現在を支配するものはトルストイ也、將來を支配するものはドストエフスキー也とは英國批評家モーリス・ベアリングの言也、ドストエフスキー今や漸く日本の讀書界をも動搖しつゝある時其代表作たる本書を讀まざれば氏を語る能はざる也

(中付四の一)

丸善株式會社

東京日本橋通　大阪東區博勞町　京都三條通麩屋町　福岡市博多上西町

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新刊

西太后待嬪 德菱女史原著

大阪毎日新聞記者 佐藤雪巢譯補

支那革命 迷宮記

中版二百五十頁 全一冊
寫眞版數葉入 上製美本

定價金八拾錢 □送料金八錢□

(中付四の四)

本書の英譯は世界の奇書とし歡迎の讀書界に嘖々の好評を博

二十世紀の**不可思議國**なる支那は**世界の謎**として連環の解くべからざるが如く愈出でゝ愈々奇なる現象を見る此書は清朝の**怪傑西太后**を中心として宮中府中の裏面に付き當時の待嬪たりし妙齡花の如き著者が艶麗なる才筆を揮ひ見聞感興のまゝを些の虚飾なく私錄せしものにして近く革命以前の**大帝國の末路**を語り又何人も殆んど想像にも及ばざりし不可思議の事實は讀者の眼前に展開せられ**駭心驚目**せしめずんば止まず、本書は曩きに大阪毎日新聞に連載せられ江湖の大喝采を博し次で大阪の角座に於て支那俳優一派によりて上演せられ絶大の好評を以て迎へられしもの、以て本書の如何に天下の奇書たるかを知るべき也、世の讀書家諸賢の愛讀を乞ふ

■内容摘錄■

■宮中出仕の回顧■西太后の宮中生活■官女部屋の半日■西太后の排外思想■宮中の懲罰■宮城内の雨乞■おん人よしの西太后■八ッ當りの西太后■女油畫師ミス、ジャイルス■光緒帝の眞面目■西太后の畫像問題■瓢簞と菊と曲馬(以下數十頁)

發行所 東京市本郷區本郷一丁目大通 電話下谷三六二 振替東京一二五五八 **日東社**

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

何處までも

正宗白鳥

（十六）

翌朝川島は爺さんが出掛けた後で茶の間へ下りて、叔母さんのお給仕で朝餐を食べた。おふくの事を氣に掛けてゐながら、此方から進んで訊かうとはしないで、叔母さんの言出すのを待設けてゐたが、叔母さんもわざと話を避けてゐるのか、おふくの名をさへ口にしなかつた。

川島は物足らぬ思ひをして二階へ戻つて、机の前に座つた。所在なさに目の前にあつた實業雜誌や怪傑□□傳を取上げてところ〲讀んで見たが、その中に書いてある人々の所行は、川島自身のこれまでの所行とは似ても似つかぬものだつた。…勤儉で成功した話などは兎に角、加波山事件などに關係して牢獄に入れられてゐる間にも、一つの主義に安んじて泰然としてゐる人の心持は、とても理解し得られなかつた。

「おれもこんな英雄になつて、命懸けの事業をやつて見たいな」と、邪氣なくその人々を崇拜して心を興奮させてゐたが、すると、其處へ叔母さんが茶と菓子とを持つて來て、

「お退屈でせう。今日は何處かへお出掛けなさいますか」と訊いた。

「いゝえ。今日も暑くなりさうだから外へ出たくはありませんね」

「何處へも入らつしやらないのなら、お留守番をお願ひ申したいのですが。……何なら階下の雨戸を締めて置きますから、お氣が向いたら遠慮なくお出掛けなすつて下さい」

「えゝ。別に遊びに出たかありませんから一日でも留守居をしてゐますよ」と云つて、川島は親しげに相手の顏を見上げて、「僕は部屋代も食料も充分に拂ひますから當分此處へ置いて下さい。何だか叔母さんの傍にゐたくなつたから」と懷つこさうに云つた。

「こんな汚い所でよろしければ何時まででも」と、叔母さんはお世辭笑ひをした。そして、川島の懷つこさうな素振に心を惹かれたのか一度立ちかけた腰をまた卸した。

「あなたにも御厄介になりましたが、事が片付いたら纏めてお禮をしますよ。あのお袋にはいくら遣つたらいゝんですかね。私はこの後は自分の腕一本で生きて行くことにして、今度きり故郷の世話にならうと思つて居ります」

「私はお禮なんぞ頂かなくつてよ御座んすよ。ですけれど、あなたはどうあつてもふうちやんと手を切りたいと仰有るんですね」

念を押されたので、川島は「さうですとも」と力強く言切つたが、叔母さんは昨日の樣子とは打つて

變つて、白ばくれて、

「私は戯談に云つてらつしやるのだとばかり思つてゐましたのに。心からさう思つて入らつしやるのですかね。それだと、私は一人で氣を揉んであなたをお連れ申して來ながら、却つてあの女に怨まれなきやなりませんね」

「あなたを怨む筈はないさ」

「いゝえ。私が憎まれるのです。私の所爲にされますさ。昨夕あの女が出て行く時にも、あなたは私がちやんと預かつて置くから安心しといでと、堅く受合つたくらゐですもの。……お袋の病氣がいゝやうだつたら、今にも歸つて來るかも知れませんよ」

「困るなあ。ぢやこの家にゐちやいけないか知ら。叔母さんが旨い事を云ふから、浮かり隨いて來たのに、叔母さんが彼奴の味方になるのなら全で騙されたやうなものだ。僕はどうしていゝのだか、自分に分らないから、叔母さんの智慧を借らうと思つてゐるのに」

「でも、私などが餘計なおせつかいをしちや、後で馬鹿を見なきやなりませんからね。ふうちやんがゐないからそんな事を云つて居らつしやるけれど、あの女が側にゐさへすりや私などに御用はないのでせう。好いた同士が氣儘に云つてる事を眞に受ける人間は餘程の馬鹿でさあね」

川島は言爭へなくつて、默つて首垂れてゐた。矢張誰れが目にも、自分がおふくに迷つてゐるやうに見えるのか知らんと忌々しかつた。

「あの女の家ぢや今度といふ今度は、どうしても極りを付けなければ承知しないつて、昨日訪ねて行つ

た時に大變力んでゐましたよ。母親はそれほど悪い人ぢやないのですけれど、兄は無頼漢ですから。不斷は滅多に家へ寄付かないのに、この頃は少し工面がよくないと見えて、家にごろ〳〵してお袋をいたぶつてゐるらしいんです。」と、叔母さんは意味ありげに云つて、「でも、あなたに對して無法な事を云はせはしませんから御安心なさいまし。私の家にお泊め申しといた以上、あの男に指一本差させはしませんです。ふうちやんとまた世帯をお持ちなさらうとも、分れ〳〵におなりなさらうとも、穏かに取極めたいと思つてゐますよ」

「どうも有難う」川島は打切棒に云つて輕く頭を下げた。

やがて叔母さんが階下へ下りて着物を着替えて粉飾をして出て行くと、川島は直ぐに茶の間へ入つて、我物顔に手足を伸して、側にあつた長煙管で煙草を吸ひながら、流れ込む風に心地よく吹かれて、暫らくうつとりとしてゐた。が、次第に退屈になつて、留守居をしてゐるのが馬鹿々々しく思はれ出した。「今おれの荷物だけ持つて出れば何處へでも自由に行けるのだ。人頼みをしなくつてもおふくに離れることも出來るし、不品行な此處の主婦なんぞに口先で操られてゐるにも及ばないのに」と、自分で自分を説付けたが、おふくの執念深い目が此方を睨らんでゐるやうで、思切つて逃げ出されなかつた。……そして、「おれは今些とも未練があるのぢやない。只あんな女とは後目たいところのないやうに奇麗に別れたいのだ。不快な記臆を名殘なく拭つてしまひたいためにかうして愚圖々々してゐるのだ」と自分で自分の齒痒い所爲の言譯をしたりしてゐたが、そんな言譯では最早誤魔化し切れなかつた

四五日下宿屋にゐた時と同じやうに、一人ぼつちで何かと考へてゐると、次第に命の根が磨耗らされるやうな氣がして、彼れは悠長にごろ〳〵してはゐられなかつた。叔母さんは容易に歸つて來ないし、一日に一度は樣子を見に來ると云つたおふくろも顏を見せないし、永坂と云ふ男さへやつて來ない。……すると、自分一人を置てけ堀にして外の者等がてんでに好きな事をしてゐるやうにも思はれ出した。「おれも遊びに出てやれ」と、彼れは的もないのに反抗心を起して、二階や階下の雨戸を手荒く締めて浴衣のまゝ勝手口から出て行つた。

昨夕のカッフエーへ入つて洋酒を二三杯煽つて、それからふと物好きに思立つて、爺さんが勤めてゐる本所の罐詰會社を搜しに行つたが、町名を聞違へたのか、容易に搜し當てられなかつた。それに家を空けて出たのが氣になつたので、午餐時分を見計らつて急いで歸つて來たが、叔母さんはまだ歸つてゐなかつた。雨戸を開けて家の中を見廻はして、留守中何の異狀もなかつたのに安心して、流し元で汗を拭つた。それから瓦斯で湯を沸して番茶を焙じて、香ばしい茶を幾杯も飲んだ。腹も減つてゐたので、鼠入らずを搜して喰餘しの罐詰を出して茶漬を食べやうとしてゐるところへ、郵便の聲がした。「はい」と大聲で返事だけして座を動かなかつたが、「川島市□といふ人が此方に居りますか」と問質されると、箸を置くが早いか駈けて出た。配達が手渡しゝた嵩張つた手紙は故鄉の父からので、下宿屋から廻送されたのだつた。

立ちながら封を切つて讀下したが、豫期したやうな甘い文句は見當らなくて、嚴しい譴責の文句に滿ちてゐた。これまでのやうに隱立てしたり、都合のいゝやうに空言を書並べたりしないで、正直に自分

とは、父の怒りを招いたばかりで何の効もなかつた。……父の怒りは鬼に角、從姉の奴が餘計な事を故郷の所行をさらけ出した――感傷的口調でむしろ自分の所行を惡く誇張して――懺悔の手紙をやつたこと

へ報知してゐるらしいことが推察されて、川島はむか〳〵と癇癪を起した。

「至急歸省せよ。旅費すら調達出來ぬのなら、電報を打てば直ぐに送つてやる。しかし餘分の金は一錢たりとも送る譯に行かぬ。……その女との關係で面倒な事があらうとも、萬事を從姉に任かせて、この手紙の着次第歸省の決心をせよ」と、長い手紙の結着はつまりこれだけだつた。

誰れが從姉の奴なんかに賴むものか。歸省してもいゝが、極り切つた意見を聞かされに歸省するのは厭だと、川島は手紙をぐちや〳〵に揉んで、膳に向つて箸を執つたが、飯は砂を嚙むやうだつた。何はともあれ、當てにした金が來なければ、動きが取れなかつた。この家へも早く幾らかやつて置かなければ肩身が狹いのに、差當つての自分の小使錢さへ殘り少くなつてゐた。

直ぐに歸省すると欺いて、せめて旅費だけでも電報で取寄せる外に、いゝ方法は思ひつかなかつた。で、立入つた考へ事は後廻しにして、表の戸だけ締めて直ぐに駈出して、郵便局へ行つた。

汗みどろになつて歸つて來ると、叔母さんは不斷着に着替えて、臺所に蹲んで何かしてゐた。

「おやお歸んなさい」と、先ぐりして聲を掛けられたので、川島はどぎまぎしながら、

「私は急用が出來て電報を打つて來たんです」と、家を空けた言譯をして、「退屈だつたから先つきに午御飯を食べましたよ」

「おやさうですか。遲くなつたお詫びに今大急ぎで天井を誂へときましたのに」

「僕はもう何も欲しかありませんよ」

「川島は充分の宿料を收められさうではないのに、頻りに歡待されるのが心苦しく思はれたので、逃げるやうに二階へ上つた。其處には怪傑傳が風に翻つてゐた。川島は破れ疊の上に腹匍ひになつて、今慌たゞしく打つて來た電報の言葉を繰返したり、返電の來る時間を概算したりした。

（十七）

夕方までには、叔母さんが一度茶を入れ替えに來たゞけだつた。その折「お袋の病氣がよくないんでせうよ。今夜でも私が一寸樣子を見てまゐりませう」と云つたから、「なに、打やつてお置きなさい」と、事もなげに答へたが、叔母さんに世話を燒かれるのが面羞ゆかつた。手切れ金はいくらでも出すなんて、大束を極込んだ手前貧乏臭い内幕を見られるのが苦しかつた。そして、今まで念頭に置いてゐなかつたおふくの貯金帳が妙に氣になり出した。「おれの生血を吸つて、おれを世間に信用のない人間にして置きながら、おれに秘密で貯金をして、自分一人の安全を計るつて云ふ法はない」と、今度會つたら剝出しに詰つてやらなければ腹が癒えぬやうに思つたりした。

晩餐は爺さんの歸るのを待つて、皆なと一緒に食べることになつた。川島は二三杯爺さんの晩酌のお相手をしながらも、默り込んでゐて、偶に話掛けられても屢々トンチンカンな返事をした。

夫婦は客に構はないで、賑かにいろんな話をして、笑つたり眉を顰めたりしてゐた。

「川島さん、どうなすつた？。一つ頂きませう」と、爺さんに云はれて、川島は慌てゝ猪口を呑干して

無言で差した。

「あなたは何だか陰氣臭いね。昨夕飲み歩いた時にもさう思つたが、どうも身體に活氣がないね。今の若さでそんなことぢや仕方がありませんぜ」爺さんは昨夕のやうに齒に衣着せぬ口調だつた。

「お前さんは自分に活氣がないものだから、誰れを見てもそんなことを云つて……」叔母さんは川島の顏をしげ〱と見守りながら、「育ちのいゝ方は顏立だつて品があるから、些つと見ちや沈んでゐるやうに見えるのさ。……初めて目白でお目に掛つて來た時にや。隨分活潑な方だつてお前さんに話したぢやないかね」

「さうかなあ。昔の事は俺等は覺えてゐないが、若い人が活氣のないのを見ると氣の毒でならない。俺等はもう老人仲間だから、今日が送れさへすれば大した望みはないんだが、川島さんぐらゐな人が詰らない事に屈托をして、浮々今日を送つてゐるのを見ると勿體ないやうな氣がするんでね」

「人樣の事まで心配する間には自分の事をもつて考へたらいゝだらうよ。明日は晦日ぢやないかね。……日雇稼ぎをしてゐるお前さんに此方のやうな方のお腹の中は讀めやしないよ。誰れでもその日暮しの貧乏人のやうに思つてるから大笑ひだ」

「何を云つてやがる。馬鹿ッ」爺さんは怖さうな顏をして女房を睨みつけて、「俺等のやうな實直な働き手があればこそ、會社も成立つて行くんぢやないか。俺等のすることにや陰日向がないからな。それだけは誰れの前へ出ても威張つたものだ」

「フン。大變な元氣ね」叔母さんは、爺さんがもつと欲しさうに、飲干した猪口を見詰めてゐるのを知

らぬ風して、川島に向つて、近所の寄席の話など仕掛けた。氣晴らしに聞きに行つて來いと勸められたが、川島は生返事をして二階へ上つた。その後では爺さんは酒をせびつては女房に叱りつけられてゐた。

待つてゐても〳〵電報は來なかつた。

涼しい風と蟲の音とは、先日目白の家で眞夜中に目醒めて、頻りに田舍の秋を慕つた時のことを思出させた。「あの時に折角家を出ながら、何故思切つて田舍へは行かないで、東京の中をうろついて、こんな家へまで藻繰込んだのだらう」

窓に寄つて何時までも月の夜を眺めてゐると、叔母さんは早くも寢床を延べにやつて來た。

「まだ宵の內ぢやありませんか。僕は今夜は眠られさうぢやないんですよ」川島は長い間使ひ古した連想の多い夜具を見下してゐた。

「ぢや、少し散歩してらつしやいまし」

「叔母さん用事がなければ此處で少し話して丶下さい」

「お邪魔してもよう御座いますか。……たまにお一人でゐらしやるとお淋しいでせう」と、叔母さんが云ふのを、川島は冷かされたかのやうに、むきになつて打消してから、

「僕は金が出來なくつて、東京にもゐられさうでないから、直ぐに田舍へ行くかも知れませんよ。實はあなた方にも默つて逃げ出さうかと、先つきから考へてゐるのです」と、さも思詰めてゐるやうに力强く云つた。

「何故です？」叔母さんは呆氣に取られて目を見張つた。
「この手紙を見て御覧なさい」
川島は揉丸めて机の側に抛り出されてあつた父の手紙を引寄せて、拔きのばして見せやうとしたが、叔母さんが手に取らうともしなかつたので、手紙の文意を掻抓んで話して聞かせて、
「こんな譯だから、僕は電報の來るのばかり待つてゐるのです。田舍へ行つちまへば誰れだつて追驅けて行けないでせう」
「行けますとも、汽車もあるし俥もあるんですもの。此間はふうちやんさへさう云つてゐましたよ。……お金のことなんか、あなたのやうな方が苦になさるものぢやありませんよ。先きから何を心配してゐらつしやるのかと思つてましたら」意外にも叔母さんは些とも動じないで、目顏を和らげた。
「別に苦にはしてゐませんさ。僕のやうな知慧も決心も鈍い人間は、こんな風に誰れかから動きの取れないやうに攻めつけられなければ、思切つて何も出來ないんだから、今がいゝ機會ですよ。この手紙が却つて有難いやうな氣もするんです」
「さうですかね。……でも、お手紙の文言はあんまり酷過ぎるやうぢやありませんか。お國の方の御機嫌の惡いところへ慌てゝお歸りなさらなくつても、詳しい譯を書いておやんなすつたらよかないでせうか」
「だけど、先日初めて眞實の事を書いてやつたゝめにこんなに怒つて來たのだから、今更仕方がなしさ。あれは嘘だつて取消しの手紙を出す譯には行かないでせう。叔母さんに何かいゝ分別はありますか」

「どうですかね。…私の方ぢや、あの女の家へ私の申譯が立つやうにあなたがして行つて下されば、明日お立ちにならうとお引留め申しやしませんです」

叔母さんはちらと意地惡げな目をきらめかせたが、相手がしほ〳〵とするのを見ると、直ぐに元の優しい叔母さんになつて、

「私の家には一月二月ゐらしつても、些とも御迷惑を掛けは致しませんよ。こんな汚い部屋で室代を頂かうなんて、慾張つた量見は持つてゐませんですから。」

「有難う。僕だつて旅費の電報爲替を受取つて直ぐ此處を立つかどうだか極つてやしないのです。旅費でお爺さんと酒でも飲みに行くかも知れない」

「眞面目で承はつてれば何云つてらしやるんだか…」

「おふくの奴への申譯なんかどうでもいゝから、故郷への申譯を叔母さんもよく考へて見て下さい。僕は外に相談相手がないのですから」

「だから迷はないで當分此處へ落着いてゐらつやいまし」

川島は何もかも打明けたゝめに味方を得たやうで心丈夫になつた。そして、輿に乘つて叔母さんに向つて喋舌つて、早くから寢床に就いた。

電報に叩き起された夢などを見ながら淺い睡りに落ちてゐたが、ふと、喉を締められるやうに感じて吃驚して目を開けると、燈火が點いてゐて、おふくが枕許に座つてゐた。目に力を入れて見定めたが、矢張それに違ひなかつた。笑ひを忍んでゐるやうな目付で此方を見下してゐた。

「よく眠つてたわね」

「何時來たのだい」川島は女の手の觸れるのをも恐れてゐるやうに、跳起きて夜具の外に座つて、ランプを明るくした。

「今夜は遲くなつても是非來ようと思つてたところへ、叔母さんがもう二三日家にゐろつて止めに來たから、癪だと思つて、意地になつて急いで來たのよ。……あなたはよく辛抱して、一日此處にじつとしてたわね」

「お母さんの病氣はどんなのだい」

「病氣つてほどぢやないの。だけど、直ぐ歸つて來る譯には行かないでせう。私、もう二度と家へは行かないつもりで、お母さんを大事にして上げたのよ」

おふくはさも安心してゐるやうな顔をして、撿束なく膝を崩した。

「今幾時頃だらう?」川島は耳を澄ましたが、階下ではまだ人の聲がしてゐた。

「あの人が來てるのよ、永坂さんが」おふくは聲を潛めて、「先つき十時が打つてよ。もう燈火を消して寢た風をしてゐませう。さうしないと、階下から誰れか來るかも知れないから。……」

さう云つて、男が止めるのも聞かないで、女は弱い息を二度も三度もランプに吹掛けて、やう〳〵部屋の中を闇にした。

「私ね、昨日持つて行つた荷物は他所の家へ預けといたの。まさかの時には直ぐにでも此處を出て行かれるやうにと思つて。……あなたも大切な物だけ一纏めにして置くといゝわ。私が内所で持つてとくか

ら。電報の事を叔母さんが云つてたけど、あの人は吃度勝手な事を考へてるんですよ。……だから、お金が來たら、あの人達にはいゝ加減な事を云つといて出て行きませう。私に任かせてお置きなさい、甘く叔母さんや永坂さんを出拔いてやるから」

女が面白さうに調子づいて云ふのに川島は氣のない返事をしてゐたがやがて、

「二人で何處へ行つたつて同じことぢやないか。果しがないからね。おれはそれよりも當分此處に置いて貰うつもりだ。わざ〳〵おれを引張つて來たのだから、大威張りでゐたつて差支えないさ」と、わざと逆らつて、寢ながら、雨戸の隙間に微かに差してゐる月の光を見入つてゐた。

「あなたは何にも知らないから、氣樂さうにそんな事を云つてゐるけど、私は怖いよ。叔母さんはお母さんと共謀になつて私をどうかしやうと企んでるのだから」

「へえ。お前を賣物にしやうと云ふのかい」川島は一寸嘲りたい氣分になつたが、「しかしお前も外に道はないから、破れかぶれで傍でしたいやうにさせといたらいゝぢやないか。おれも頻りに考へて見たけれど、いゝ智慧は出ないし、親身におれを引立てゝ呉れる人もないのだから、叔母さんに任せとかうかと思ふよ。その方がお互ひに樂でいゝぜ」

川島は便所へ行くつもりで、ふと寢床を脱け出て、階下へ下りると、茶の間では爺さんが餅を搔いて眠つてゐる側で、永坂と叔母さんとが差向ひで話をしてゐた。川島は目を外して通らうとしたが、叔母さんは呼留めて茶を入れて、改まつて永坂を紹介した。

「この人と懇意におなりなさると、直きに高い物を賣付けられますよ」と、笑ひ〳〵云つた。

「しかし、あなたは田舍廻りをなさるんださうだから、いろんな面白い經驗があるんでせうね」川島は顔に腫物のある肌質の粗いこの男に對しても自分を卑下するやうな氣持になつた。

「この頃は私達の商賣は全でお話にも何にもなりませんや。自棄糞で暫く遊んでゐましたが、さうしてばかりもゐられないでね、明日あたりまた出掛けやうと思つてゐるんですよ」

「これから田舍は秋景色がいゝですね」

爺さんはむや〳〵寢言を云ひながら夜具からずり出てゐた。

（十八）

日が差してゐるのに二人は不樣な朝寢をしてゐるところへ、叔母さんは上つて來て、そつと呼起して、「從姉さんが入らしつたんですよ」と囁いて不安な目付をした。

「何しに來たのか知ら。僕は會ひたかありませんよ」と、川島はこんな所を見られるのが厭さに、從姉を怒らせても構はないから斷じて會はないと云張つたが、叔母さんは、「是非一寸でもお會ひにならなければ私が困りますから」と叱るやうに云つて說伏せた。

「ぢや、階下へ下りて會ひませう」

「でも、それでは變に思はれていけないのですよ。」

「叔母さんは、手早く夜具や寢卷を片付けて、どきまぎしてゐるおふくを片隅へ呼んで、「お前さんは少しの間、窮屈だけど、押入にでも身體を隱しといてお呉れな。お前さんが此處にゐちや、一寸都合が惡

いのだから。・・私に任かせとけば決してお前さんのためにならんやうな事はしないから安心しといでよ。先日もよく云つといたし分るてるだらう」と小聲で云ひながら、頻りに意味ありげな目付をして壓付けた。そして、おふくが何時までも相手の意を呑込みかねて、厭な顏して突立つてゐるのを齒痒ゆがつて、肩先を掴まへてぐい／＼押入の中へ押込んだ。

「人を馬鹿にしてるよ」おふくは忌々しさうに云つて、夜具の上に首伏して小さくなつてゐた。

叔母さんは皮肉な笑ひを浮べながら、後をよく締めた。

「ぢや、此方へお連れ申しますよ。・・・昨夕のやうなお話もあつたのですから、私にお任かせ下さいましな。あなたの仰有ることゝ私の言分とがちぐはぐになつては、あの方の前で私が耻を掻かねばなりませんから。よ御座んすか」と、川嶋に向つて念を押した。

「えゝ」

川嶋は譯も分らずに承知した。そして、齒を磨きながら手拭を持つて、叔母さんの後に随いて階下へ下りた。臺所へ出ながら、ちらと顧みると、從姉の奴、大きな丸髷に結つて、縮緬の羽織なんか着て、手土産らしい大きな菓子折を前に置いて澄まして座つてゐた。

ゆつくり顏を洗つて二階へ上らうとすると、客を案内した後で茶を入れてゐる叔母は、傍へ寄つて來て、先つきと同じことを繰返した。

「あの從姉なんかに僕は重きを置いてゐないのだから、どうでもいゝんです」と、川嶋は氣に留めなかつた。

「從姉さんは吃度金を持つて入らしつたのですよ。……私がふうちやんの母親の代理になつて受取りますから。よ御座んすか。あの女の身體は私が引受けることになつてゐて印形も預かつてゐるのですよ。その代りこの後はどうならうと、あなたの御隨意になすつても、彼家の者に苦情は云はせませんです」

「しかし從姉なんかに差圖されるのは厭ですね。僕は些とも知らなかつたが、何時の間にそんな事になつたのです？」

「それは後で緩くりお話いたしますがね。兎に角私を信用して下さらなくちや困りますよ。」と、叔母さんはちらと剛い目を向けて、「あの女の兄は警察へ持出すだの腕力沙汰にするだのと、無茶を云つてゐるのですもの」

川嶋には叔母さんに逆ふ力がなかつた。この婆さんの指差す方へ足を向けるより外に道はないやうに思はれてゐた。で、素直に命を奉じて二階へ上ると、從姉は座り心地の惡いほどに部屋の汚ないのに眉を顰めて、

「市さんも氣紛れね。下宿へ移つたかと思ふと、またこんな所へ移つたりして。全で人質になつてるやうなものだわね。……此處で何してゐるの。早く故郷へ歸つたらいゝだらうにね。故郷から手紙が來たでせう」

「えゝ。何だか知ら長たらしく云つて來ましたよ」

「だから直ぐにでもお立ちなさい。後の事は構はないから。」從姉は川嶋の父から寄越した手紙を川嶋に渡したが、川嶋は披いて見やうとはしなかつた。

「此處の主婦さんからいろ／＼の事を聞きましたよ。聞いて見ると打やつてもゐられないから、一寸お父さんに知らせて上げると、田舍の人だから大變に心配して、一切私に任せるから、いゝやうに仕末して吳れつて賴んで來たのですよ。此處の主婦さんの話で荒まし結着はつきさうなのだけれど、一度あなたに會つて、よく確めた上でなければ、いくら條理が立つてゐても、素性の知れない主婦さんの云ふことを迂濶に信用してばかりはゐられませんからね。……下宿屋へお訪ねした時にも あなたはさう云つてたけど、あの女とは本當に別れるつもりなのですね。旅費さへ出來れば、故鄕から云つて來てる通りに、直ぐに歸るつもりなのね」

「えゝ。……一體此處の主婦は何をあなたに云つたのです?。度々會つたのですか」

「此間から二三度訪ねて來たのよ。あの女の親戚だといふ男も來たしね」

川嶋は訝しがつて、詳しく訊糺さうとしてゐるところへ、叔母さんは着物を着替えて上つて來た。お愛相を云ひながら、愛嬌を含んだ優しい顏付をしてゐるのを見ると、川嶋はよく面相の變る女だと不思議に感じた。

「あの女は私の考へで身を堅めさすことに致しまして、昨日人を附けて、千葉の親戚の家へ預けにやりました。川嶋さんには永々御厄介になりましたけれど、どうせ何時までもこのまゝで面倒を見て頂く譯には參りませんですから。あの女にはかね／＼私がよく云つて聞かせて置きましてすが、今度はよくよく得心して、奇麗にお別れをして出て行つたので御座いますよ。それは、三月四月と一緒にゐた者がいよ／＼別れ／＼になると極ると、一寸變なものですけど、この方は中々思切りがよくつてゐらつしやる

んですよ。私もつく〴〵感心いたしました」

「ぢや、故郷へもさう云つてやつて安心させませう。…市さんは今日にも私の家へ入らつしやい。そして私の家から立つことにおしなさいな」

「えゝ」

川嶋は苦笑した。そして、押入の方が氣になつて、一刻も早く從姉を歸らすやうにといら〴〵して、落着いた口は利かれなかつた。此處で秘密が破れたつて、自分のためには何の損害になるのではないと思ひながら、押入の中で咳拂ひをしないか泣聲を立てはしないか、身動きをしないかと、絶えず案ぜられてゐた。が、叔母さんの方では糞落着きに落着いて、女の家の者の代表者氣取りで、つべこべと喋舌つてゐる。金の話をさへ持出してゐる。

川嶋は座に堪へなくなつて、中途で茶の間へ下りて寢ころんでゐた。…「おれやおふくが聞いてゐるのも憚らないで、よくあんな事が云へたものだ。」と。呆れたが、叔母さんの太々しい態度が憎めなかつた。

（十九）

間もなく從姉を送り出してから、叔母さんはニコ〳〵して茶の間へ入つて息を吐いたが、おふくが下りて來ないので、再び二階へ上つて連れて下りた。

おふくは佛頂面をして、少し逆上せたやうな色をしてゐた。

「何だな。あれつぱかりのことで。……だから、私がもう一日家へ泊つといでつて云つたのぢやないの」と、叔母さんは笑ひ〳〵叱つて、土産の菓子折を開けて、皆んなに勸めてお茶を注いだ。

二人は默つてゐた。

「私ね、これからふうちやんの家へ行つて來なきやならない。お前さんも一緒にお出でゞないかい」

おふくは只首を振つた。

「ぢや、お二人で仲よくお留守番してゝ下さいな」

叔母さんは二人の思惑に氣を留めないで、「何でも好きな物を取つてお上りな」とおふくに云つて出て行つた。

「あなたも氣が利かないわね。あれだけお錢があれば、二人で三月も四月も遊んで暮らされるのに」おふくは腹立たしげに云つた。

「それは仕方がないさ」川嶋もあの金が惜しいことは惜しいが、しかし、あのお蔭で煩い汚い關係が切れるやうに思ふと、多少の心遣りとなつた。「お前も家へ行つて、あの金の中のいくらかを分けて貰つて來たらどうだい」と、揶揄氣味で云ふと、女は眞面目でそれを受けて、

「それもさうだわね。皆んなあの人達にやつてしまうのは詰らないわね。あなたも從姉の家へ寄つて、郷里へ歸る旅費を貰つて來るといゝわ。そして、二人で何處へか姿を隱しませう。こんな所にゐちや私のためにもいゝ事はないのだから」

「それは今少し待つてお出れ」

男が悠長に構へてゐるほど、おふくは急立つて、「あなたは何故氣がつかないのだらう。此處はあなたのやうな方のゐる所ぢやないのよ。あの叔母さんの忌らしい怖い根性があなたには分らなくつて？」

「だつて、元々お前があの人に賴んでおれを無理やりに此處へ連れて來たのぢやないか。」

「それはあなたが……」と、おふくは男を責めやうとしたが、ふと言淀んで心を變へて、涙ぐんで、「私が惡かつたのだから堪忍して頂戴ね。」

しほ〳〵してさう云つて、男の甘い抱擁を待設けてゐたが、川嶋はついに身動きもしなかつた。

「私、叔母さんも怖いし、永坂さんも怖いよ」

「おれは怖いよりもあの人達のやうになりたいね。此度僕達の知らない面白い目をしてゐるのだよ」

「いやなこと。私、一晩お留守番して二階で一人で寢てたら、何時の間にか永坂さんが枕許に立つてるんだもの。私ぞつとしたよ」

「その時口説かれたのだね」川嶋は戯談のつもりで、「叔母さんが何だかそんな事を云つてたよ」

「えッ、叔母さんが……」おふくは驚いたやうに顏を震はせて、「噓だわ、あの人の云ふことなんか。」

「だつて、おれが來た時からお前はあの人達の前ではきよと〳〵して恐れてるぢやないか。何だか譯があると思つてた。お前は男でさへあれば誰れでもいゝのだらう」

川嶋の口調も目色も不斷に似げなく剛かつた。

「そんなこと云つて、私に難癖つけやうと思つて。……だけど私が惡かつたのならどんなにしてゞも謝まつてよ」

「口ばかりで謝まつてたつて何にもならないね」

「ぢや、かう」

女は身を起して匐ひつくばつた。そして涙をはら〳〵と疊へ落した。その無樣な格好は、男の心に憐れみを起させるよりも、醜怪なる連想を呼起させた。

「これでもあなたの氣が濟まなければ、打つなり蹴るなり、好きなやうにするといゝわ」

が、川嶋は目を伏せてゐた。自分に對して貞操を立てゝゐると言張つてゐるこの女の態度はます〳〵自分を侮辱するの鞭のやうに胸に轟いた。

「あなたまだ疑ぐつてゐるの―

「初めからお前が心配してこるほど疑ぐつてやしないさ」

「ぢや、早く此處を出て行きませう」

「それにしても、荷物の仕末をしなきやならんし、從姉の家へも一度行かなきやならないよ」

「從姉のお家へは此處を出てからにしたらどう？」

「そんなに急いで行きたがるほどいゝ所があるのかね。お前には心當てがあるのかい」

「えゝ。あつてよ。護國寺の近所のひつそりした所に、二階の貸間があるのよ。老人夫婦きりで住んでるのだから氣が置けなくつていゝわ」

「ぢや、一寸この家に似寄つてるね」

「でも、二人とも人がいゝのよ。それに六十近い本當の老人ですもの」

おふくは其處へ移つて、目白へ移つた當座のやうに、知人との往來を絶つた生活を悦しさうに話して、男の心を唆かし出した。が、川嶋には新しい淸々した空氣が其處に漂つてゐやうとは思はれなかつた。そして、叔母さんがこれから自分をどう取扱ふかと竊かに待設けなどしてゐた。

（二十）

檢束のない生活が續いた。川嶋は心が醒めて起きやうと努めたが、手足が自分の思ふ通りに動かなかつた。表通りの喧嘩騷ぎにやうやく目を醒まして起上ると、頭がふら〳〵した。何氣なく大切な物を一纏めにして風呂敷に包んで置いたが、おふくはそれを持つて外へ出てゐるらしかつた。

爺さんは風邪心地で頭痛がすると云つて、早目に會社から歸つて來て、寢床に就いてゐた。叔母さんは賣藥を需めに行つてゐた。

川島は頭に水を沃いだり、濃い茶を飲んだりして元氣をつけて、爺さんの側で話相手になつてゐた。

「此間の晩少し飲過ぎたのが祟つて、どうもあれから氣分がよくないのでね。私の身體も少し箍が弛んだのかも知れませんわい。あれつぱかりで凹垂れるやうな甲斐性なしぢやなかつたのですがな」

爺さんはさう云ひながら、頻りに咳をしたり、洟を啜つたりした。

「ぢや、私が誘つたのが惡かつたんですね。私も飲むといけないのですよ」

「なあに、あなたはまだお若いから大丈夫だ。私などは自分の家で毎晩お極りだけで滿足してるといふんですがね」

爺さんは弱い音を吐いてゐたが、ふと思出したやうに、「あの女はどうしましたッ。昨夕は此家へ來てゐたやうだが……」と、頭を上げて部屋の中を見廻して、「あの女には一度よく云つて聞かせたいことがあるんですが、私が氣六ヶ敷ことを云ふと思つてゐるのか、どうも私の傍へ寄付きませんよ」

「お爺さんも意見役で中々世話が燒けますね。しかし、若い者も自分の量見があつて、老人の云ふことを聞きませんよ」

「私もさうは思つてるが、兎に角云ひたいことは一應云つとかなければ氣が濟まないのでね。これも私の病さね」

川嶋に對して、先日のやうな意見をまたくど／＼云つてゐるところへ、叔母さんは歸つて來た。風邪藥の外にいろ／＼な買物をして來た。葡萄酒が一瓶その中に加はつてゐた。

爺さんは目を欹てゝ、「葡萄酒かい。馬鹿に氣張るぢやないか」と、蒲團から乘出して、手に取つて見やうとした。

「まあ待つといでな。……皆んなで一杯づゝ頂きませうよ」

叔母さんは栓拔きを捜して來て、口を開けて、コップへ注いだ。川嶋もそれを飲みながら、何のための祝杯かと妙な氣がした。爺さんは今一杯欲しさうな風だつたが、女房に拒まれたので、諦めて殊勝に枕に就いて唇を嘗めずつた。

そこへおふくの青醒めた顏が現はれた。

「お前さんも一杯お飲みなさいな」

叔母さんの差したコップを受けて、おふくは、「私も頂くわ。心祝ひがあるのだから」と云つて、快く呑干した。

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町 東京堂
仝 神田區裏神保町 上田屋
仝 京橋區尾張町 東海堂
仝 京橋區元數寄屋町 北隆館
仝 京橋區西紺屋町 良明堂
仝 日本橋區本石町 至誠堂
大阪市北區梅田町 盛文館
仝 東區京町堀 太華堂
仝 東區瓦町 東枝支店
京都市七條停車場前 三共社

○定價 金貳拾五錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵税共		

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御註文の方は內國は金四圓二拾五錢外國は金五圓九拾五錢の割となる

廣告取次店

博報堂、弘報堂、正路喜社、一星社
金蘭社、万年社、秀逸堂、信賴社

送金注意

一誌代郵税は一切前金とす、金切の場合は發送を止むべし
一郵便爲替にて御送金の場合は指定を本郷西片町十番地中央公論社とし拂渡局を東片町局と指定あれば途中盗取さるゝ虞なし
一振替貯金 口座は東京三十四番なり
一郵券代用 必ず一割增の事
一集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱手續をなすべし
　一金一圓迄 金六錢
　一金五圓迄 金七錢
　（集金委託料及送達料共）
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正四年一月廿九日印刷納本
大正四年二月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 高木酉三

發行所 東京市本郷區駒込西片町十番地 中央公論社
電話長下谷九一九
振替東京三十四番
電信略號コウロン

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

二月十日より
雛人形陳列會
帶側陳列會

二月廿日より
懸賞寫眞「美人」陳列

二月廿日より廿六日まで
流行會主催
劇に關する展覽會

東京駿河町
三越呉服店

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す